

TOSHIBA

Generalist[®]
インストール手順書

T0100000016225

-
-
1. 本書の内容の一部または全部を無断で転載することは禁止されています。
 2. 本書の内容については将来予告なしに変更することがあります。
 3. 本書は内容について万全を期しておりますが、万一不可解な点や誤り、お気づきのことがございましたら、ご一報くださいますようお願いいたします。
 4. 運用した結果の影響については、第3項にかかわらず責任を負いかねますのでご了承ください。
-
-

- Microsoft、Windows、Windows Server 2012 R2、Windows Server 2016、Windows Server 2019、Windows Server 2022、Windows 10、Windows 11 は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。
- Java、Oracle、Oracle Database、Oracle WebLogic Server は Oracle Corporation の登録商標です。
- Microsoft、Windows、Microsoft Access、Microsoft Excel、Microsoft Internet Explorer、Microsoft Edge は米国およびその他の国における米国 Microsoft Corporation の登録商標です。
- Google Chrome ブラウザは、Google LLC の登録商標です。
- Adobe は、アドビシステムズ社の登録商標です。
- その他記載されている会社名、製品名は各社の商標または登録商標です。

かならずお読みください



<重要>

- 本システムの使用または、使用不能によって生ずる付随的な損害(事業利益の損失、事業の中断、事業情報の損失、またはその他の金銭的損害を含むがこれらに限定されないもの)に関して、弊社は一切の責任を負いません。
- 天災、火災、第三者の行為、その他の事故、お客様の故意または過失、その他の異常な条件下での使用により生じた損害に関して、弊社は一切の責任を負いません。
- お客様が取扱説明書で説明された以外の変更、改造、使い方、誤操作をなされた場合、それによって生じた損害に関して、弊社は一切の責任を負いません。
- 弊社以外の者が製造または販売した製品、ソフトウェアとの組み合わせによる誤動作から生じた損害に関して、弊社は一切の責任を負いません。
- 保証に関するその他の事項については、日本国の法律に準拠するものとします。



<禁止事項>

- ハードディスクなどの動作ランプが点灯しているときは、装置のプッシュボタンに触れたり、電源プラグを抜いたりしないでください。データ消失の原因になります。
- ハードディスクに保存しているデータは、万一の故障、変化、消失に備えて必ず他の媒体に定期的に保存してください。ハードディスクに保存した記録内容の損害について、弊社は一切の責任を負いません。
- システム動作中は電源を切らないでください。作成中のデータが破壊されたり、消失したりすることがあります。
- システム稼働後に再インストールしないでください。それまでに作成したデータの消失の原因になります。

はじめに

このたびは『Generalist 人財管理ソリューション』をお使いいただき、まことにありがとうございます。
本書は、『Generalist 人財管理ソリューション』の導入手順説明書です。
OS や Generalist のバージョンの違いにより、本書の画面イメージと実際の画面に若干の差異が生じる場合があります。あらかじめご了承ください。

『Generalist 人財管理ソリューション』は、データベースに Oracle Database を採用しています。
また、アプリケーションサーバに Oracle WebLogic Server および WebCube Application Server を採用しております。このため、『Generalist 人財管理ソリューション』は、Oracle Database や Oracle WebLogic Server の環境設定や運用体系に従う部分があります。必要に応じて Oracle Database、Oracle WebLogic Server および WebCube Application Server のマニュアルも併せて参照してください。

本書の表記規則

本書では、次のような表記の約束を使っています。

一般の表記

表記	説明
<OK>、<取消し>	コマンドボタン名は< >で囲んで表記します。
<印刷> ()	ツール名は< >で囲んで表記します。またツール名の後に、画面に表示されるツールのアイコンを示します。
①、②、③、…	丸数字の連続する番号は、連続した操作を示します。
	マウスを使って操作することを示します。
	キーボードを使って操作することを示します。
 (35.18 役職マスタ)	このマニュアルの他の章にも関連事項が記載されていることを示します。 この例では、関連する記事が『第 35 章 システム管理』の「35.18 役職マスタ」にあることを表しています。
 (インストール手順書 「1.1 マシン構成」)	他のマニュアルにも関連事項が記載されていることを示します。 この例では、関連する記事が『インストール手順書』の「1.1 マシン構成」にあることを表しています。
 <概要>	機能の概要を説明しています。
 <運用>	操作および運用に依存する事項を説明しています。
 <重要>	操作を行う上で、特に重要な事項を説明しています。
 <ポイント>	運用および操作上のポイントを説明しています。
 <セキュリティ>	セキュリティに関連する事項を説明しています。
 <禁止事項>	操作および運用で、行ってはいけない事項を説明しています。
 <画面説明>	画面に関する説明をしています。
 <設定>	設定に関する説明をしています。
	出力される帳票に関する説明をしています。
	世代管理に関連する事項を説明しています。

[バージョン以降]	括弧内に記載されている Generalist のバージョン以降のものをインストールされているお客様が使用できる機能です。
-----------	--

マウス操作の用語説明

用語	説明
ポイント	マウスを移動して、マウスポインタ(画面に表示されている矢印形など)を選択対象(画面上のコマンドボタンなど)の上に重ねることです。
クリック	マウスの左ボタンを押して、すぐはなすことです。
ダブルクリック	マウスの左ボタンをすばやく、続けて2回クリックすることです。
ドラッグ	マウスの左ボタンを押したままマウスを移動させることです。
ドロップ	ドラッグの後、押している左ボタンをはなすことです。

キー操作の表記

表記	説明
Shift	キーは四角形(□)で囲んで表記します。
メニュー 、 F 、 O	キーが読点(,)で区切られているときはそれぞれのキーを順に押すことを示します。この例では、 メニュー 、 F 、 O キーを順に押すことを示します。
Ctrl + A	2つのキーの間にプラス記号(+)があるときは、最初のキーを押しながら2つ目のキーを押すことを示します。この例では Ctrl キーを押しながら A キーを押すことを示します。
矢印キー	→ キー、 ← キー、 ↑ キー、 ↓ キーの総称です。

画面説明内の表記

表記	説明
桁数	本書に記載されている桁数は画面で入力できるバイト数を表します。 文字項目に対し、全角で入力した場合には、1文字につき、2バイト(2桁)必要となります。
必須	“○”が記載されている項目は、画面での入力が必須となります。 必ず、画面より値の入力を行ってください。

操作説明について

操作説明では、マウスを使った操作を基本として記述しています。

も く じ

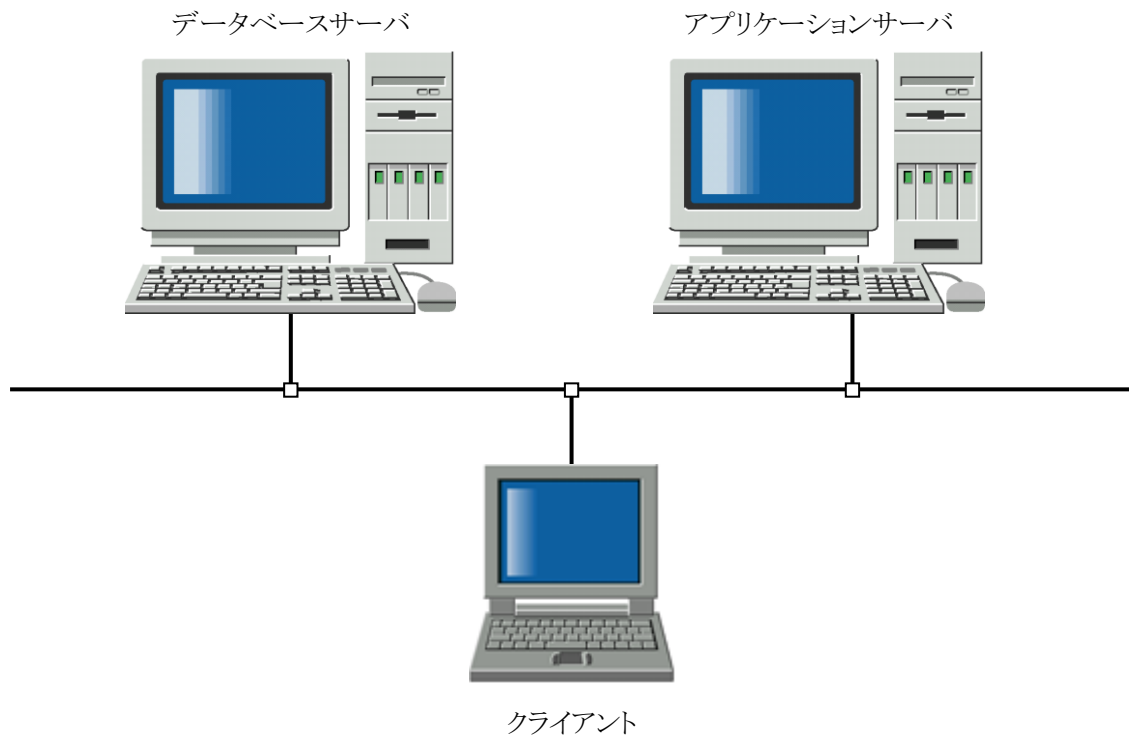
かならずお読みください.....	1
はじめに.....	2
本書の表記規則.....	3
第 1 章 インストールを始める前に.....	1
1.1 マシン構成.....	1
1.2 システム要件.....	3
1.3 インストールの手順.....	7
1.4 セットアップの種類.....	8
第 2 章 Oracle Database のセットアップ.....	9
2.1 概要.....	9
2.2 セットアップの手順.....	10
2.3 Oracle Database のインストール.....	11
2.4 Oracle の設定.....	24
第 3 章 アプリケーションサーバのセットアップ(Oracle WebLogic Server).....	27
3.1 概要.....	27
3.2 セットアップの手順.....	28
3.3 Oracle WebLogic Server のインストール.....	29
3.4 アプリケーションサーバモジュールのインストール.....	49
3.5 Oracle WebLogic Server の設定.....	80
3.6 アプリケーションサーバのアンインストール.....	84
第 4 章 アプリケーションサーバのセットアップ(WebCube Application Server).....	87
4.1 概要.....	87
4.2 セットアップの手順.....	88
4.3 WebCube Application Server のインストール.....	89
4.4 WebCube Application Server の設定.....	99
4.5 アプリケーションサーバモジュールのインストール.....	102
4.6 アプリケーションサーバのアンインストール.....	159
第 5 章 データベースサーバのセットアップ.....	160
5.1 概要.....	160
5.2 セットアップの手順.....	161
5.3 計算処理のセットアップ.....	173
第 6 章 クライアントのセットアップ.....	179
6.1 クライアントマシン設定.....	179
6.2 Access 帳票出力セットアップ手順.....	182
6.3 帳票初回印刷時の設定.....	189
6.4 クライアントのアンインストール.....	193
第 7 章 マイナンバーシステムの設定.....	195

7.1	概要.....	195
7.2	セットアップの手順.....	196
7.3	マイナンバーシステムの設定.....	199
	付録.....	233
	付録 A ハードディスクの必要容量.....	233
	付録 B シングルサインオンの設定について.....	234
	付録 C 帳票 Web 配信の設定について.....	238
	付録 D 非同期処理実行サービスの設定.....	246
	付録 E マルチ AP サーバ環境の設定.....	248
	付録 F 社員検索ダイアログの設定について.....	255
	付録 G OracleDatabase12c について.....	257
	付録 H Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用するための設定.....	258
	トラブルシューティング.....	263

第1章 インストールを始める前に

1.1 マシン構成

Generalist の標準的な環境には以下のマシンがあります。



マシン	マシンの役割	インストール内容
データベースサーバ	Generalist のデータと Generalist データベースサーバモジュールを格納するマシンです。	<ul style="list-style-type: none">• Oracle Database• Generalist データベースサーバ モジュール
アプリケーションサーバ	Generalist アプリケーションサーバ モジュールを配置するマシンです。	<ul style="list-style-type: none">• Oracle WebLogic Server または WebCube Application Server• Generalist アプリケーションサーバ モジュール
クライアント	Generalist を利用するマシンです。	<ul style="list-style-type: none">• Microsoft Internet Explorer• Microsoft Edge• Google Chrome• Microsoft Office



<重要>

- インストールに際しては、必ず事前に内容を確認の上、インストール作業を行ってください。
- オペレーティングシステム、Oracle Database、Oracle WebLogic Server のトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。
- Oracle 社製品のインストール方法や使用方法に関しては Oracle 社が提供するマニュアルを参照してください。
- 『Oracle 管理者ガイド』マニュアルをご参照の上、データベースサーバのバックアップを定期的に実施されることをお勧めいたします。
- 文中に『アプリケーションサーバ』と『Oracle WebLogic Server』、『WebCube Application Server』の異なる表記がありますが、以下の意味合いを持っています。

アプリケーションサーバ … Oracle WebLogic Server または WebCube Application Server
がインストールされているマシン

Oracle WebLogic Server … Oracle WebLogic Server というソフトウェア

WebCube Application Server … WebCube Application Server というソフトウェア

1.2 システム要件

1.2.1 データベースサーバ

(1) ミドルウェア	Oracle Database 12c Release 2(12.2.0.1.0) Standard Edition 2 または Enterprise Edition Oracle Database 19c (19.x) Standard Edition 2 または Enterprise Edition
(2) オペレーティングシステム(※1)	Windows Server 2012 R2
	Windows Server 2016
	Windows Server 2019
	Windows Server 2022(※2)

※1 言語について日本語版 OS のみをサポートします。英語版 OS はサポート対象外となります。

※2 Oracle Database 19c のみサポートします。

1.2.2 アプリケーションサーバ

【Oracle WebLogic Server】

(1) ミドルウェア	Oracle WebLogic Server 12c R2 (12.2.1.3.0) Oracle WebLogic Server 14c (14.1.1.0.0) (※1)
(2) オペレーティングシステム(※2)	Windows Server 2012 R2
	Windows Server 2016
	Windows Server 2019
	Windows Server 2022(※3)

※1 Windows Server 2019、Windows Server 2022 のみサポートします。

※2 言語について日本語版 OS のみをサポートします。英語版 OS はサポート対象外となります。

※3 Oracle WebLogic Server 14c (14.1.1.0.0)のみサポートします。

【WebCube Application Server】

(3) ミドルウェア	WebCube Application Server V11.1 Standard WebCube Application Server V11.2 Standard WebCube Application Server V11.4 Standard
(4) オペレーティングシステム(※1)	Windows Server 2019
	Windows Server 2022(※1)

※1 WebCube Application Server V11.4 のみサポートします。

※2 言語について日本語版 OS のみをサポートします。英語版 OS はサポート対象外となります。



<重要>

- ミドルウェアのインストールに必要なオペレーティングシステムの詳細な要件に関しては各ミドルウェアのマニュアルを参照してください。

1.2.3 クライアント

(1) オペレーティングシステム	Windows 10 Pro (※1)(※2)(※9) Windows 11 Pro (※1)(※9)
(2) ミドルウェア	Oracle Database 12c Release 2 Client (12.2.0.1.0) (32bit 版) (※3) Oracle Database 19c Release 3 Client (19.3) (32bit 版) (※3)
(3) データベース／ツール等	Microsoft Internet Explorer 11 (※6) (※7) (※10) (※12)
	Google Chrome (64bit 版) (※8)(※13)
	Microsoft Edge (64bit 版)(※14)
	Microsoft 365 (32bit 版、64bit 版) (※4) (※11) Microsoft Office Excel 2024(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Office LTSC 2021、2024(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Office Excel 2021(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Office Excel 2019(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Office Excel 2016(32bit 版、64bit 版) (※4) Excel 帳票で利用
	Microsoft 365 (32bit 版、64bit 版) (※4) (※11) Microsoft Office Access 2024(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Office LTSC 2021、2024(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Office Access 2021(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Office Access 2019(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Office Access 2016(32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft 365 Access Runtime (32bit 版、64bit 版) (※4) Microsoft Access 2016 Runtime(32bit 版、64bit 版) (※4) Access 帳票で利用
	Adobe Acrobat Reader 帳票 WEB 配信機能で利用
	Adobe Acrobat Pro 2020(32bit 版)／Adobe Acrobat Pro(32bit 版) (※5) PDF テンプレートの編集で利用

※1 Generalist のサイトがローカルイントラネットもしくは信頼済みサイトのゾーンに入るようにブラウザの設定を変更していただく必要があります。

※2 64bit 版 OS をご利用になる場合でも、Microsoft Internet Explorer は 32bit 版のみサポートします。32bit 版をご利用ください。

※3 データベースサーバに対してアップデート・レビジョンアップを行うために必要です。

※4 Microsoft Access の代わりに「Microsoft Access 2016 Runtime」、「Microsoft 365 Access Runtime」を利用することができます。ただし Access 帳票の編集はできません。また一台のマシンに複数のバージョンの Microsoft Access(「Microsoft Access 2016 Runtime」、「Microsoft 365 Access Runtime」含む)をインストールしないでください。一台のマシンで異なるバージョン(ビットバージョン含む)の Microsoft Office と Microsoft Access Runtime を組み合わせての

利用はサポート対象外です。同じバージョン(ビットバージョン含む)の Microsoft Office と Microsoft Access Runtime をインストールしてください。ただし、Microsoft Office 2019、2021 (LTSC 含む)または 2024 (LTSC 含む)をご利用の場合は、インストールしているビットと同じ Microsoft 365 Access Runtime をご利用ください。

※5 PDF テンプレートを編集する場合に必要です。編集せずにそのまま出力する場合には不要です。

※6 拡張保護モードをオフに設定してください。

Windows 10 Pro において、IE11 を利用し、拡張保護モードがオンに設定されている場合、設定画面などの子画面において設定ボタンが利用できません。また、SSO でのログインができません。

【設定方法】

- IE11 の場合

- ① ブラウザを起動後、メニューの[ツール]—[インターネットオプション]を選択し、インターネットオプションを開きます。
- ② [インターネットオプション]の「詳細設定」タブをクリックします。
- ③ 「設定」欄の「拡張保護モードを有効にする」のチェックをオフにします。
- ④ 「OK」をクリックして[インターネットオプション]を閉じてください。

※7 Internet Explorer 11 を利用する場合に、以下の問題があります。

- 入力項目に値が設定されている場合、該当項目にカーソルを置くと、×マークが表示され、×マークをクリックすると入力項目の値が削除されます。×マークをクリックしないでください。
- Generalist 画面にあるボタンの中で、ショートカットキー「Alt+D」が動作しません。

※8 Google Chrome を利用する場合に、以下の問題があります。

- Generalist 画面にあるボタンの中で、ショートカットキー「Alt+D」、「Alt+E」、「Alt+F」が動作しません。

※9 言語について日本語版 OS のみをサポートします。英語版 OS はサポート対象外となります。Windows10 は 2025 年 10 月 14 日にサポートを終了します。

※10 Internet Explorer を利用する場合、Google Chrome を利用する場合に比べ画面の表示に時間がかかります。(1.5~5 倍程度)

特にポータルおよびプロファイル機能において、複数の情報を一度に表示すると、表示に時間がかかります。クライアントのスペックと表示時間の目安は以下です。

CPU: Corei7(Skylake) 3.4GHz、メモリ: 16GB

プロファイル 10 種類の情報の表示

- Chrome 10 秒程度
- IE 30 秒程度

※11 Web サービスの検証は行っておりません。

※12 Internet Explorer は 2022 年 6 月 15 日にサポートを終了します。

※13 Google Chrome の自動アップデートを有効にし、Chrome がアップデートされた場合、Generalist の対応パッチがリリースされるまでの間、画面レイアウトの崩れなどが発生する可能性があります。

※14 Microsoft Edge がアップデートされた場合、Generalist の対応パッチがリリースされるまでの

間、画面レイアウトの崩れなどが発生する可能性があります。



<重要>

- クライアントマシンの OS、ブラウザ、Office のバージョンによりそれぞれ必要な設定および制限事項があります。本インストール手順書の「第 6 章 クライアントのセットアップ」および、リリースノートの制限事項に記載されている内容を必ず確認してください。
- クライアントの DPI 設定は「通常サイズ(96 DPI)」としてください。「通常サイズ」以外でご利用になる場合にはレイアウトが正常に表示されません。
- Internet Explorer のポップアップブロックの機能は必ずオフにしてください。
- Internet Explorer のゾーン設定で Generalist の URL がローカルイントラネットもしくは信頼済みサイトとなるように設定してください。
- 利用されているプリンタの機種によっては、帳票表示時および印刷時に余白設定等の違いによりレイアウトが崩れる場合があります。ご利用のプリンタで正常に帳票が出力できるかあらかじめ確認頂き、余白の調整をしてください。



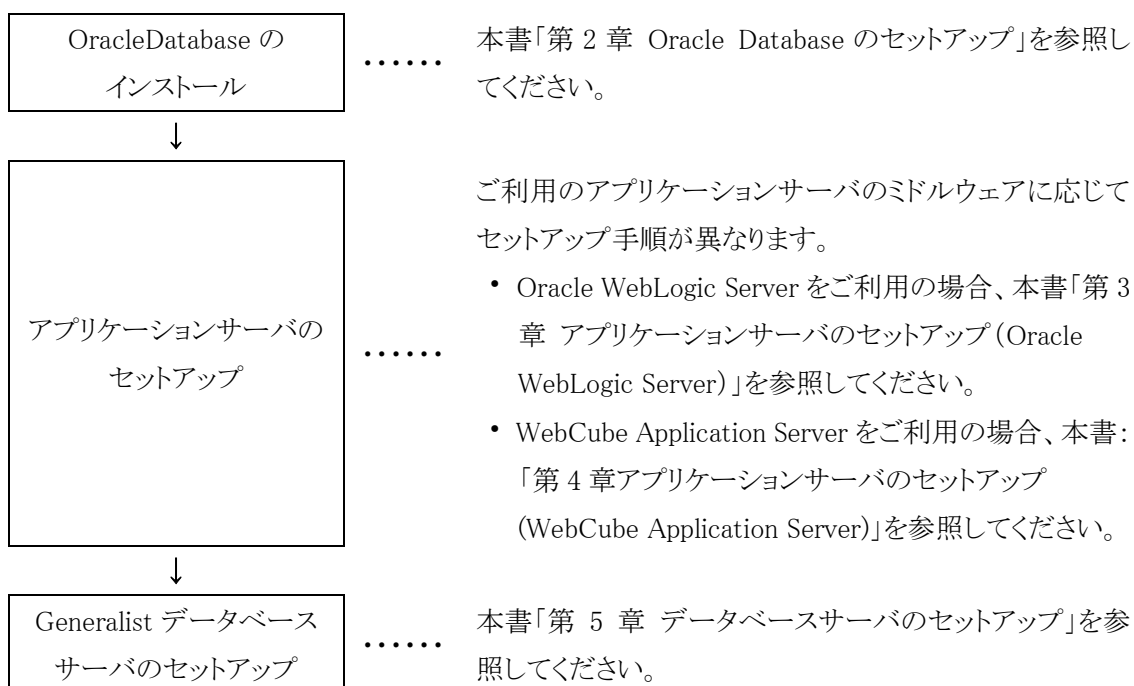
<ポイント>

- Generalist で使用する標準のポートの番号は、デフォルト値では下記のとおりです。

通信	種類	Port 番号
クライアント ⇄ AP サーバ	http	80
	https	443
AP サーバ ⇄ DB サーバ	Oracle Net	1521



1.3 インストールの手順

セットアップを行う手順を記載します。



1.4 セットアップの種類

Generalist のセットアップには、下記の種類があります。

セットアップ	内容	参照する手順書
初期インストール	システム導入時に 1 回だけ行う作業です。 最新版にするにはバージョンアップ/レビジョンアップを行う必要があります。	インストール手順書
レビジョンアップ	法改正版・機能改善版・不具合修正版を現在運用している環境に適用します。提供形態は、CD-ROM と保守サイトページからのダウンロードの2種類があります。 (例: V06.13R01 → V06.13R02)  <注意> <ul style="list-style-type: none">本書は、CD-ROM 提供の場合を想定して記述してあります。 ダウンロード提供の場合は、任意のフォルダに読み替えてください。	レビジョンアップ手順書
バージョンアップ	機能強化や大きな法改正への対応版を現在運用している環境に適用します。提供形態は、CD-ROM と保守サイトページからのダウンロードの2種類があります。 (例: V06.12R00 → V06.13R00)	レビジョンアップ手順書
アップデート	新プラットフォームへの対応や大きな機能強化を行った新しいバージョンへ更新を行います。 最新版にするにはアップデート後に、バージョンアップ/レビジョンアップが必要になることがあります。 (例: V06.13R06 → V07.02R00)  <重要> V6 から V7 にアップデートする場合、アプリケーションサーバを新規でインストールします。既存のアプリケーションサーバのバックアップは必ずとってください。	アップデート手順書

Generalist では、レビジョンアップ、バージョンアップを総称して、「レビジョンアップ」としています。

第2章 Oracle Database のセットアップ

2.1 概要

システム導入時に1回だけ行う作業です。オペレーティングシステム上の Oracle Database をセットアップします。

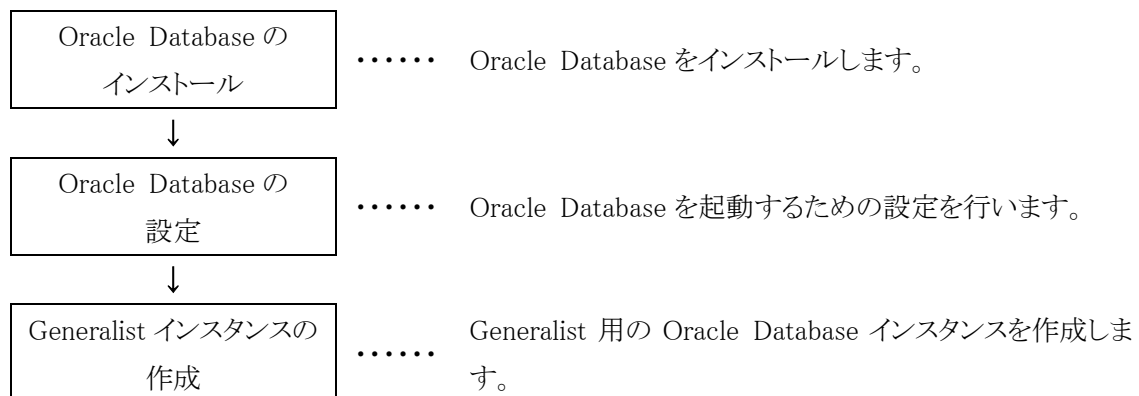


<重要>

- オペレーティングシステム、Oracle のトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。

2.2 セットアップの手順

データベースサーバのセットアップを行う手順を記載します。



次に事前に設定しておくべき事項を示します。

項目	例	お客様ご記入欄
OS ユーザ名/パスワード	Oracle/Oracle	

2.3 Oracle Database のインストール

Oracle のデータベースを下記手順にて、インストールします。Oracle のバージョンにより画面や手順が異なる場合があります。

Oracle のバージョン	手順の参照先
Oracle Database 12cR2 をご利用になる場合	「2.3.1 Oracle Database 12c Release 2 の場合」を参照ください。
Oracle Database 19c をご利用になる場合	「2.3.2 Oracle Database 19c の場合」を参照ください。

2.3.1 Oracle Database 12c Release 2 の場合

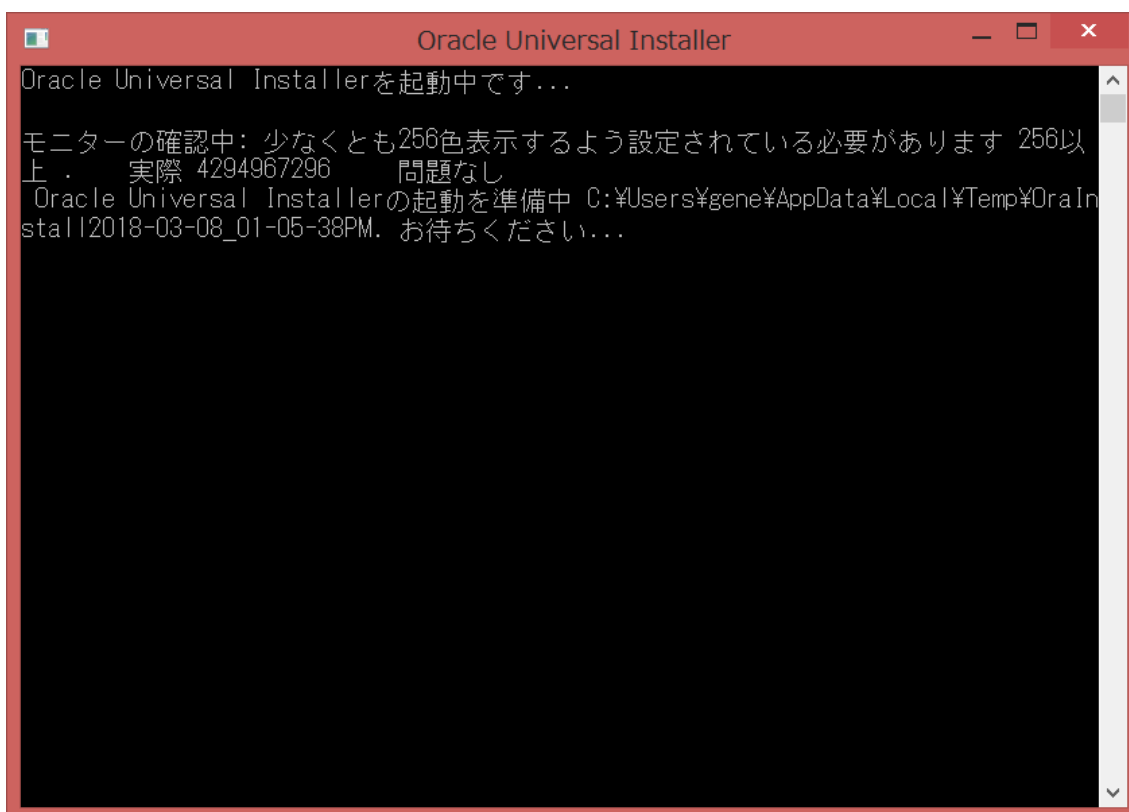
(1) ドライブに「Oracle Database 12c Release 2 (12.2.0.1.0)」のダウンロードしたファイル(またはDVD)をセットし、下記の手順でインストーラを起動します。

- ① エクスプローラにて、Cドライブを開きます。
- ② メニューバーより「ファイル」>「コマンド プロンプトを開く」から、「コマンド プロンプトを管理者として開く」をクリックします。
- ③ コマンドプロンプトより下記のコマンドを入力します。

<Oracle Database 12c Release 2 (12.2.0.1.0)の保存先>%database%setup.exe

例:保存先を「C:%TEMP」にした場合

C:%TEMP%database%setup.exe

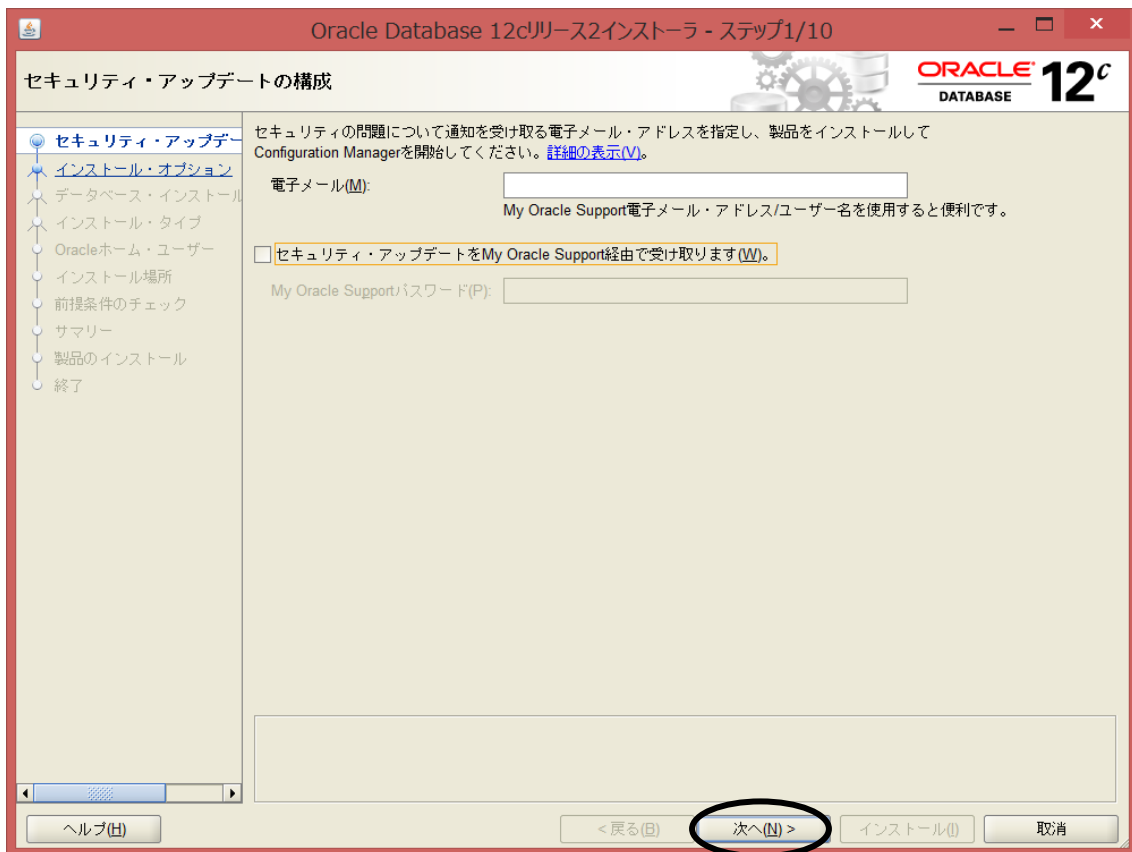


<重要>

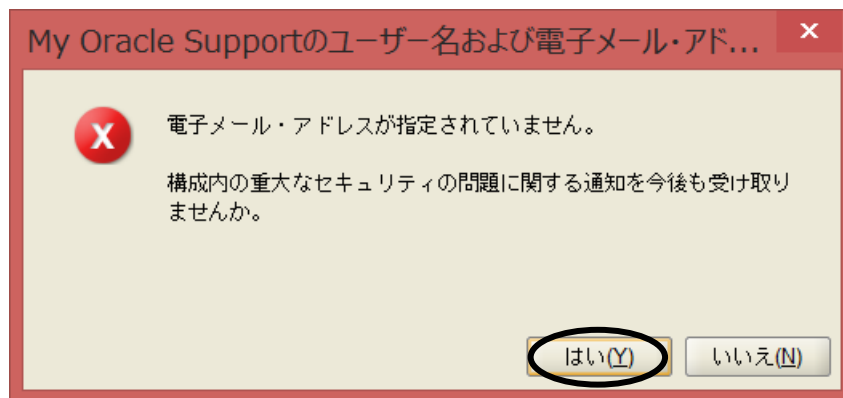
- ユーザアカウント制御はデフォルトではオンになっていますが、事前は無効化してください。

(2) セキュリティ・アップデートの構成画面が表示されます。

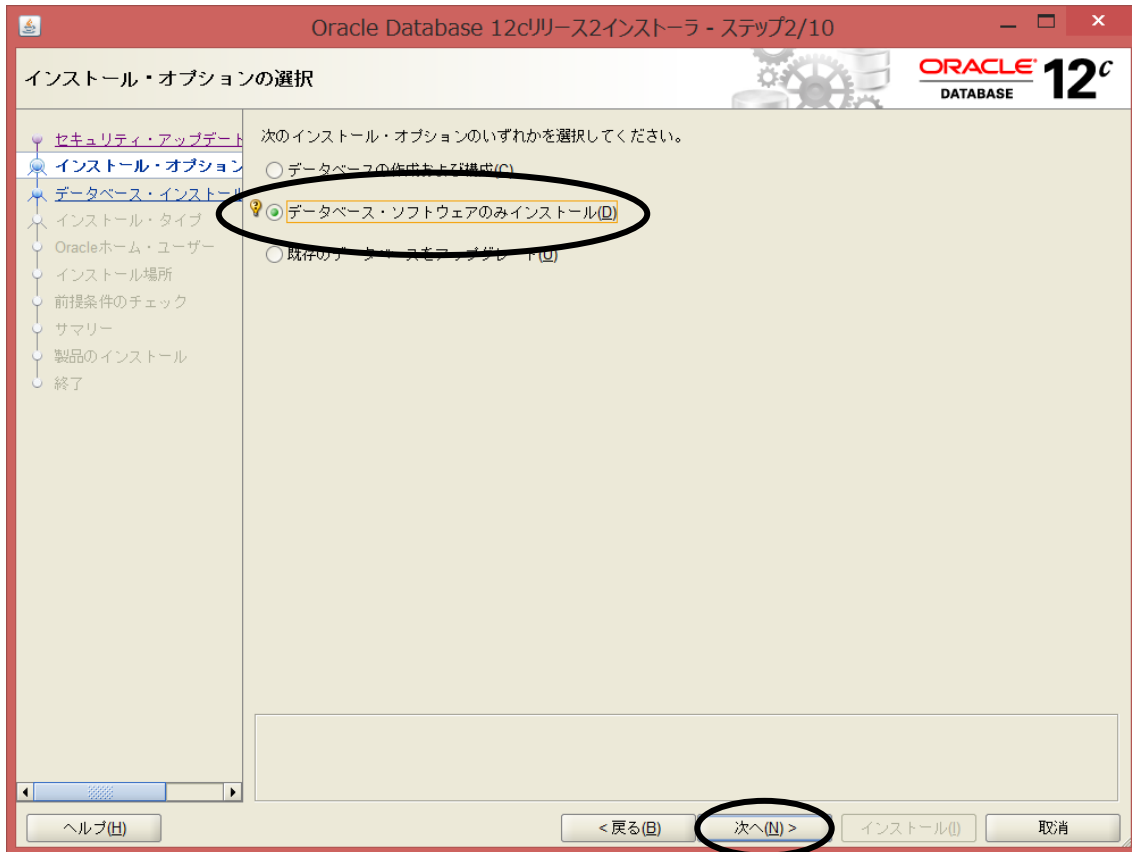
『セキュリティ・アップデートを My Oracle Support 経由で受け取ります』のチェックを外し、『次へ(N)』をクリックします。



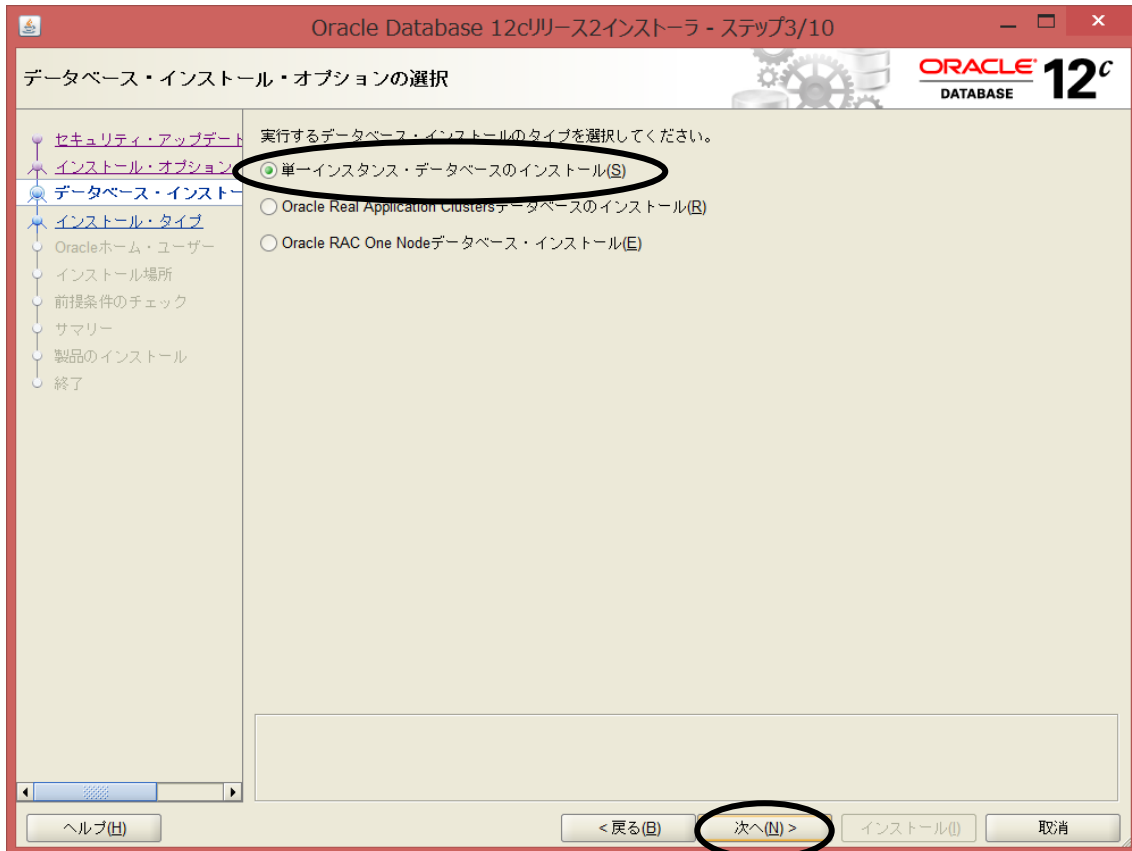
(3) 警告が表示されます、『はい(Y)』をクリックします。



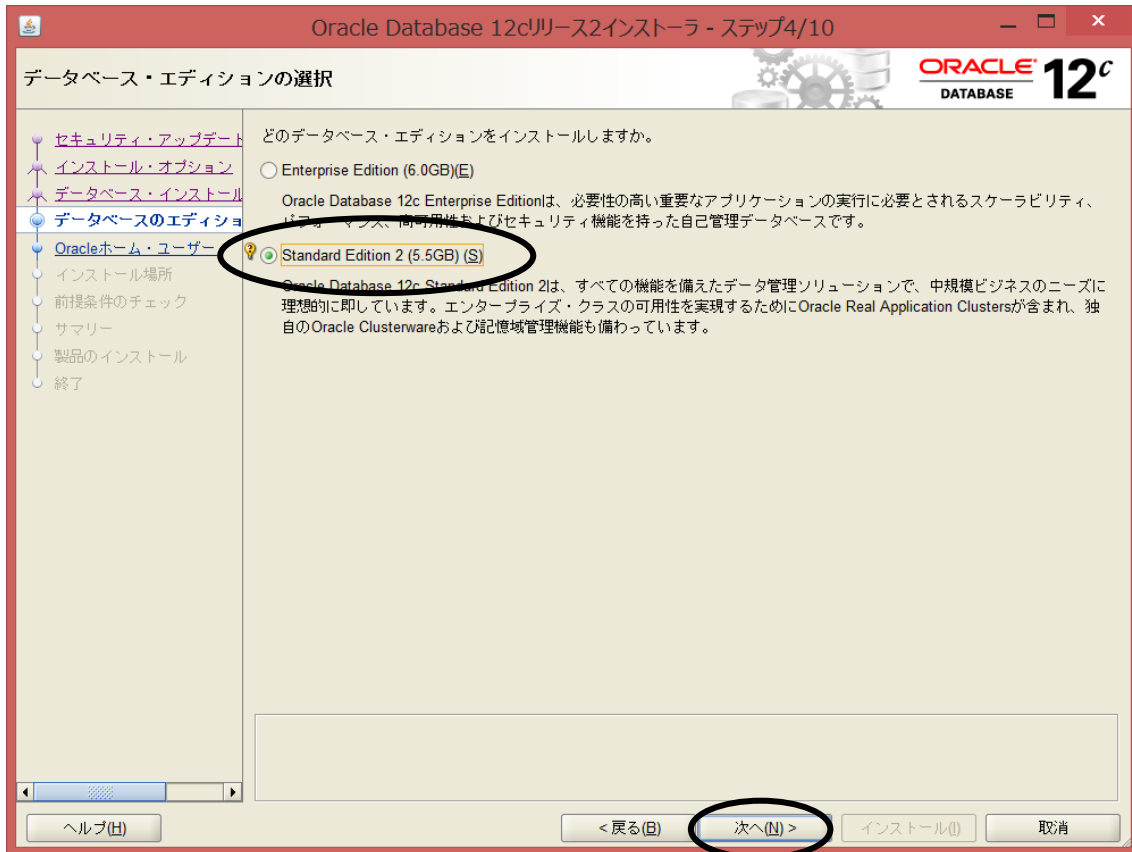
(4) 『データベース・ソフトウェアのみインストール』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



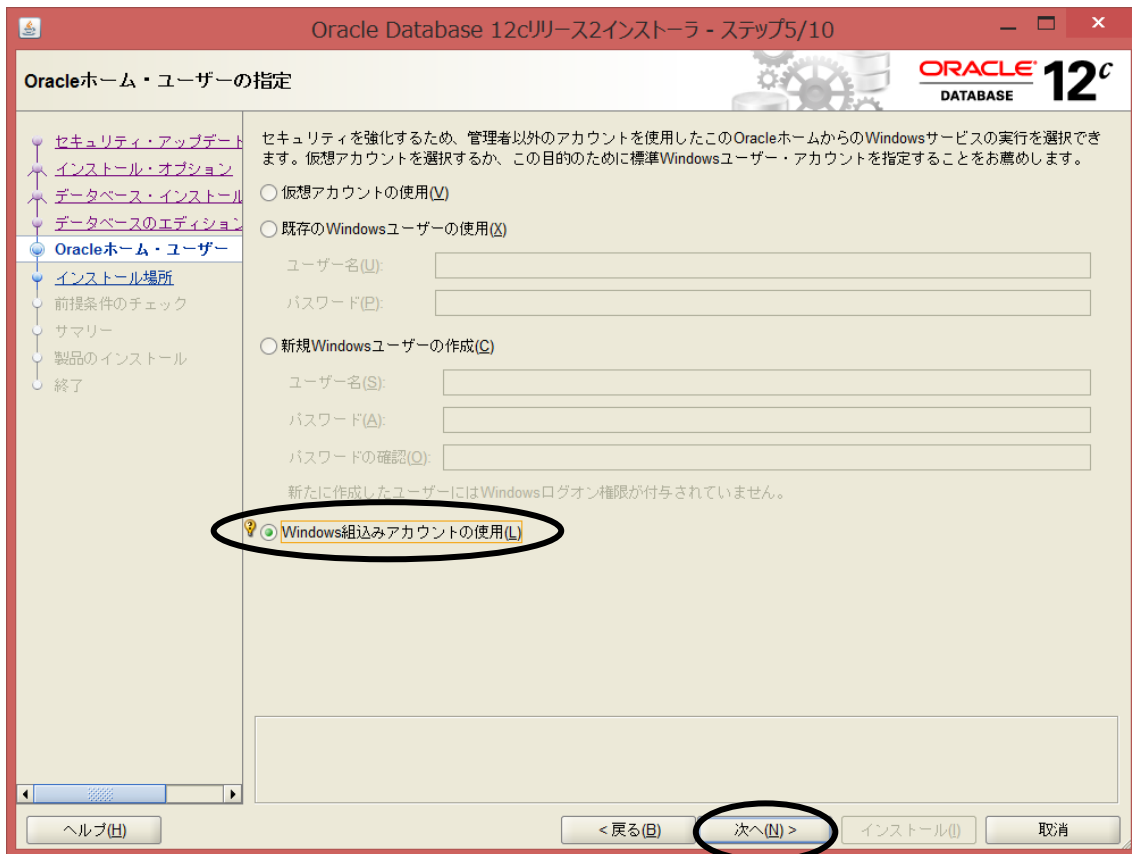
(5) 『単一インスタンス・データベースのインストール』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



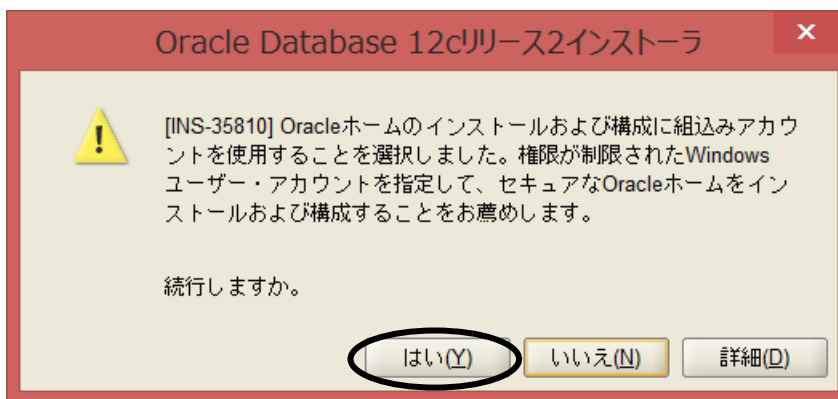
(6) 『Standard Edition 2 (5.5GB)』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



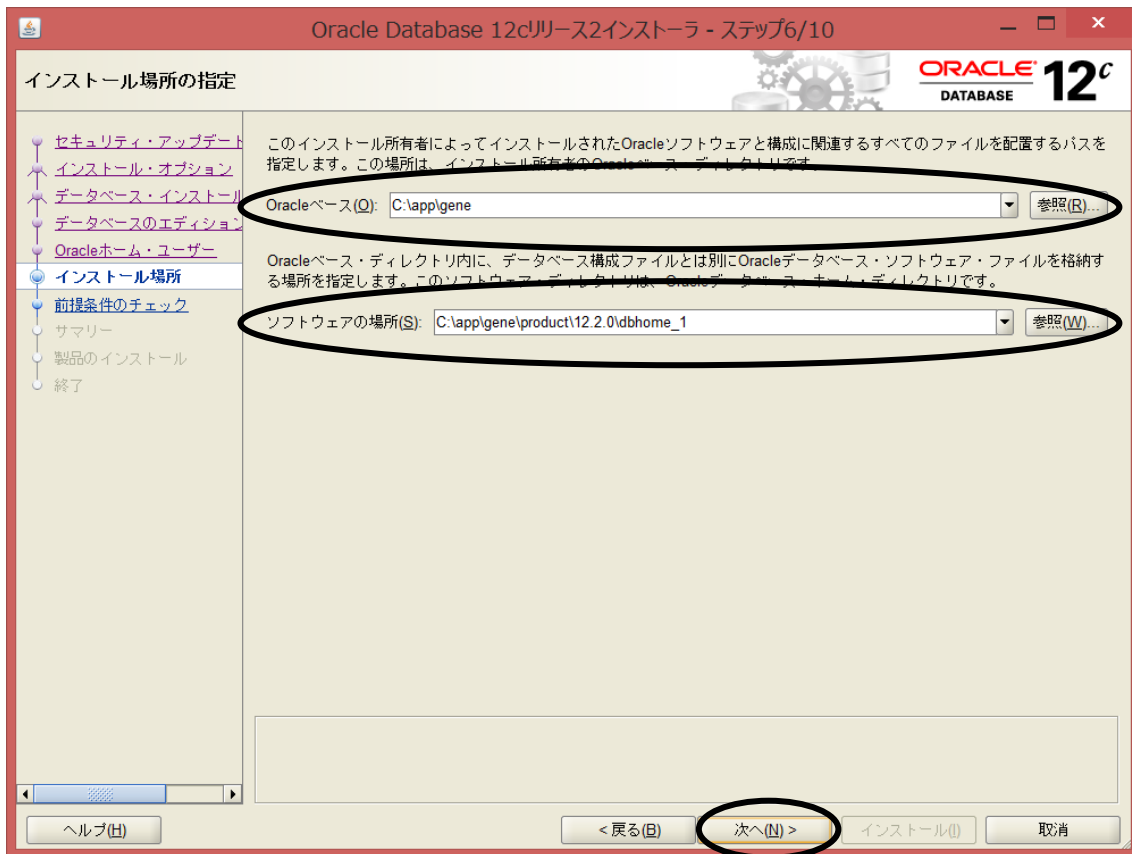
(7) 『Windows 組み込みアカウントの使用』を指定し、『次へ(N)』をクリックします。



(8) 警告が表示されます、『はい(Y)』をクリックします。



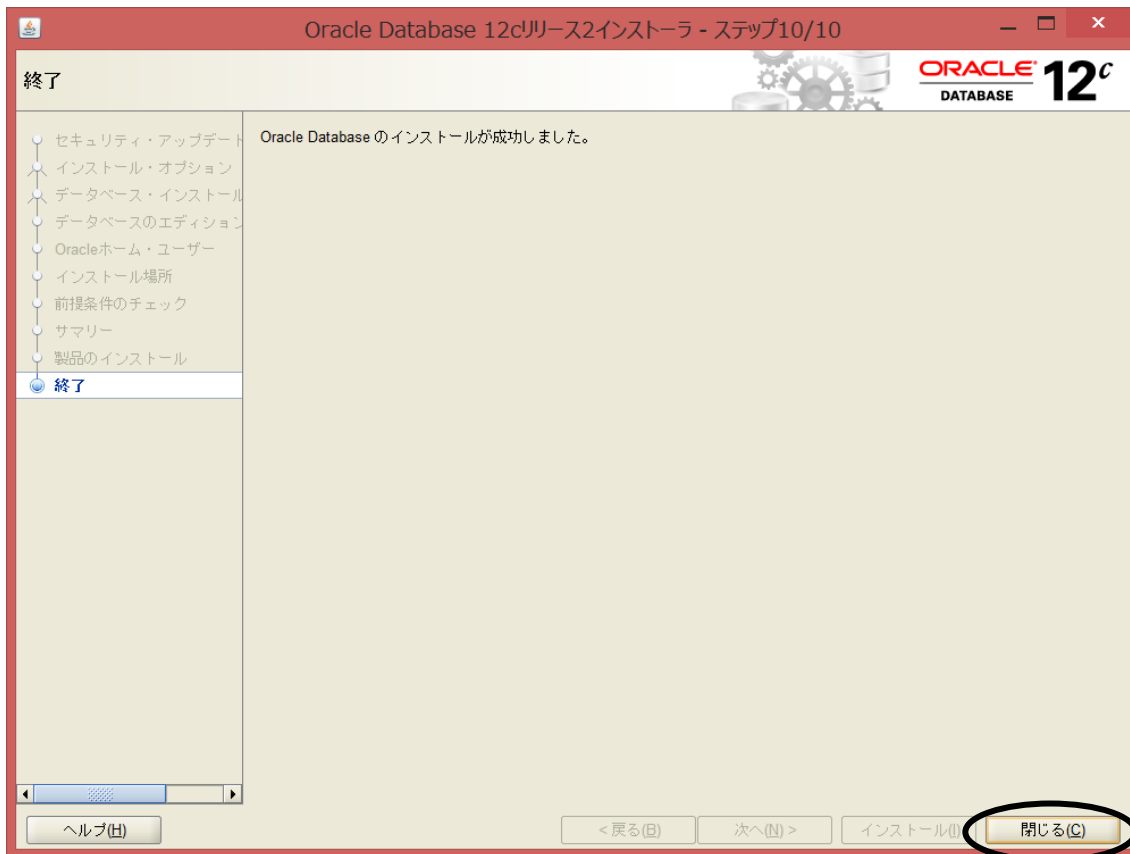
(9) 『Oracle ベース』『ソフトウェアの場所』を指定し、『次へ(N)』をクリックします。



(10) インストール内容のサマリーが表示されます。内容を確認し、『インストール(I)』をクリックするとインストールが開始されます。



(11)インストールの終了画面が表示されます。『閉じる(C)』ボタンを選択してください。



これでインストールは終了です。「2.4 Oracle の設定」へ進んでください。

2.3.2 Oracle Database 19c の場合

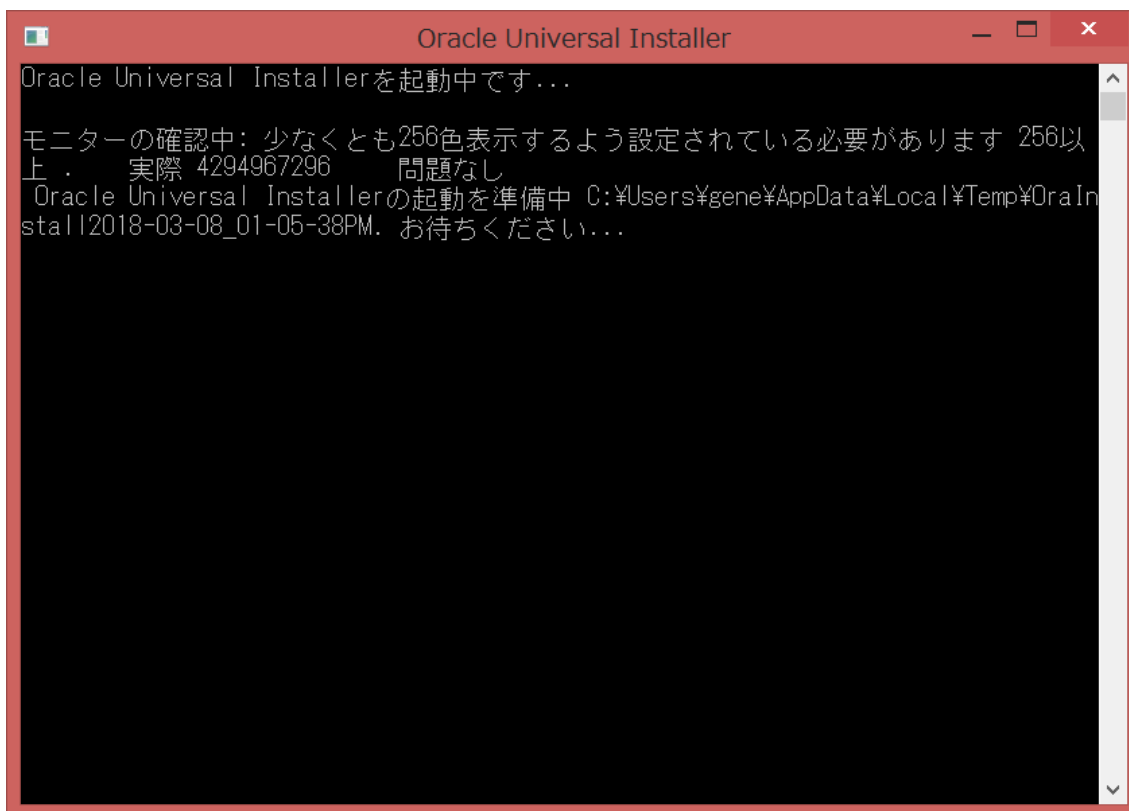
(1) ドライブに「Oracle Database 19c Release (19.0.0.0.0)」のダウンロードしたファイル(またはDVD)をセットし、以下の手順でインストーラを起動します。

- ① エクスプローラにて、Cドライブを開きます。
- ② メニューバーより「ファイル」>「コマンド プロンプトを開く」から、「コマンド プロンプトを管理者として開く」をクリックします。
- ③ コマンドプロンプトより下記のコマンドを入力します。

<Oracle Database 19c Release (19.0.0.0.0)の保存先>%database%setup.exe

例:保存先を「C:%TEMP」にした場合

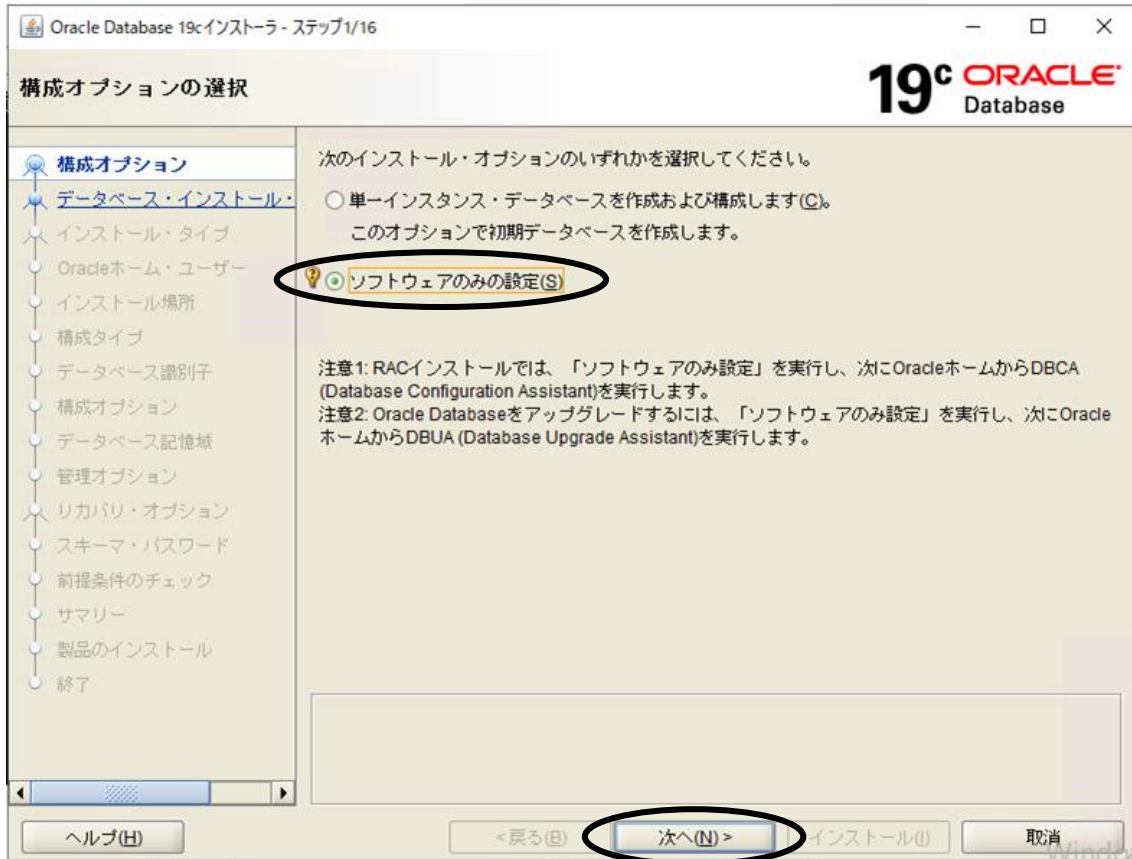
C:%TEMP%database%setup.exe



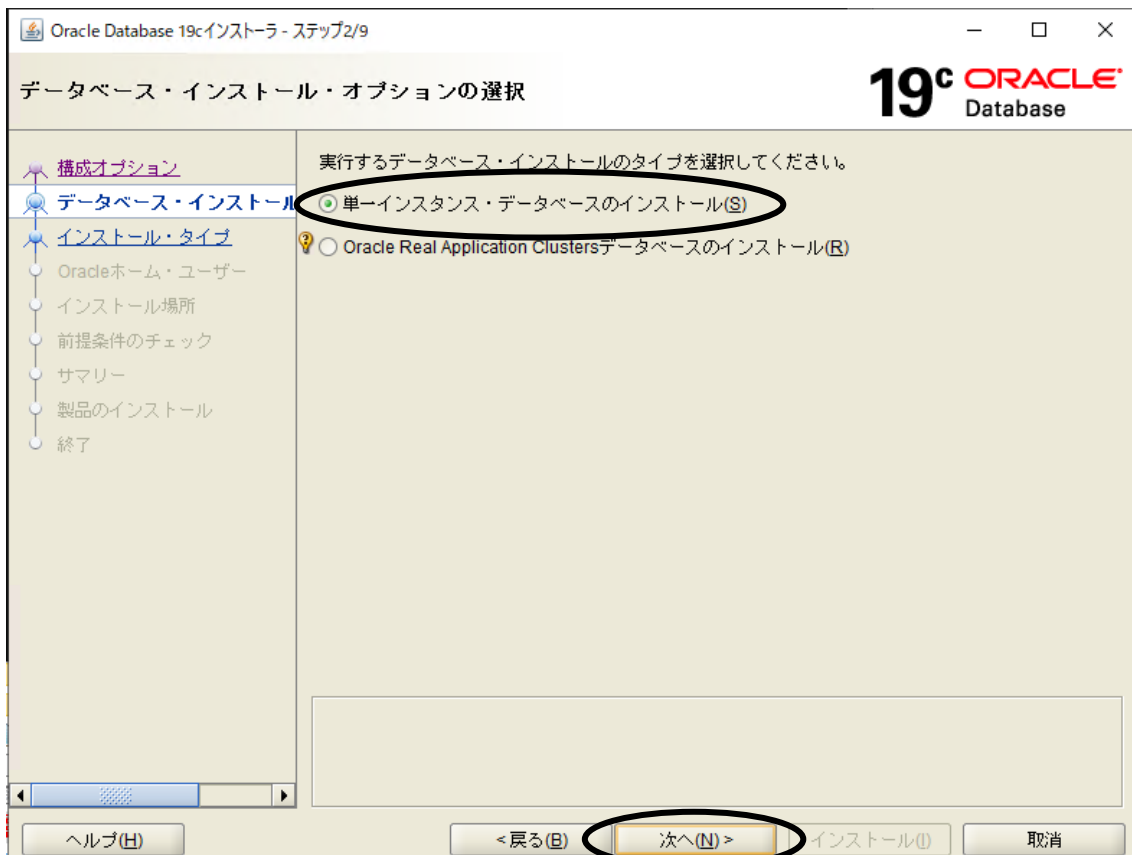
<重要>

- ユーザーアカウント制御はデフォルトではオンになっていますが、事前は無効化してください。

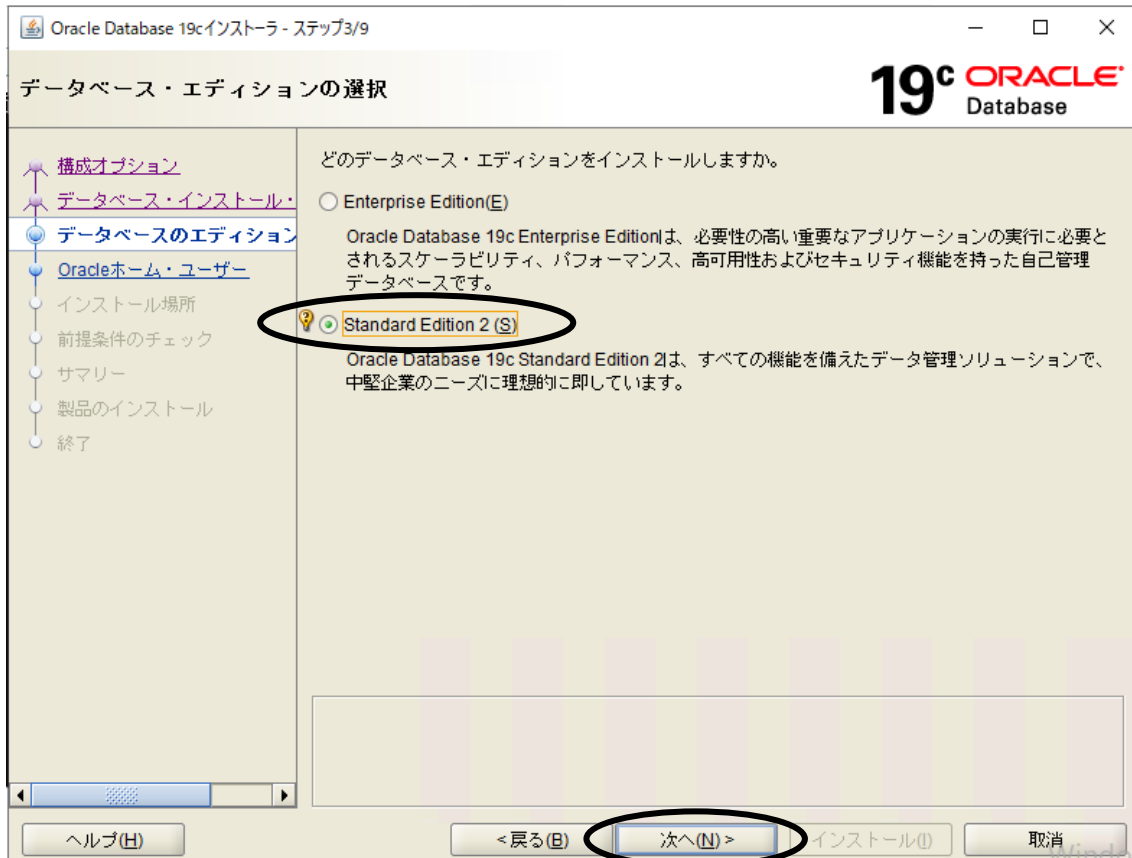
- (2) 構成オプションの選択画面が表示されます。『ソフトウェアのみの設定(S)』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



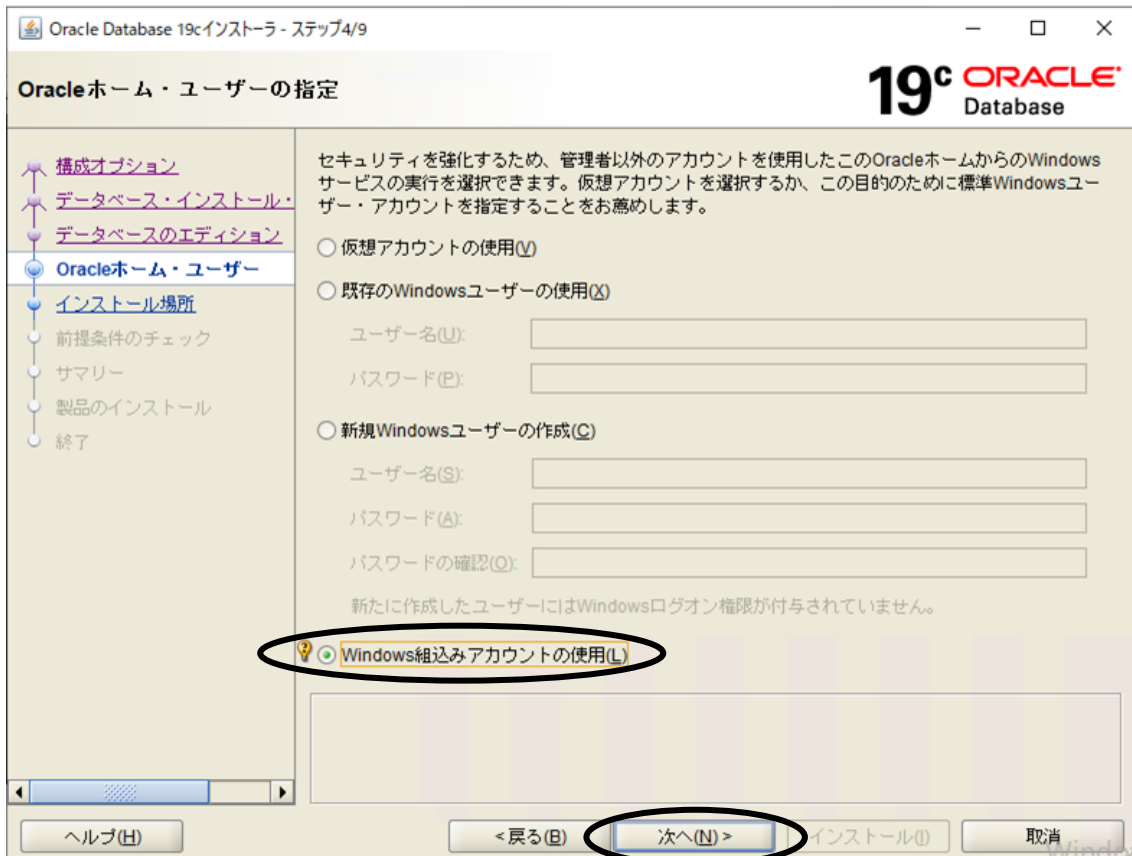
- (3) 『単一インスタンス・データベースのインストール(S)』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



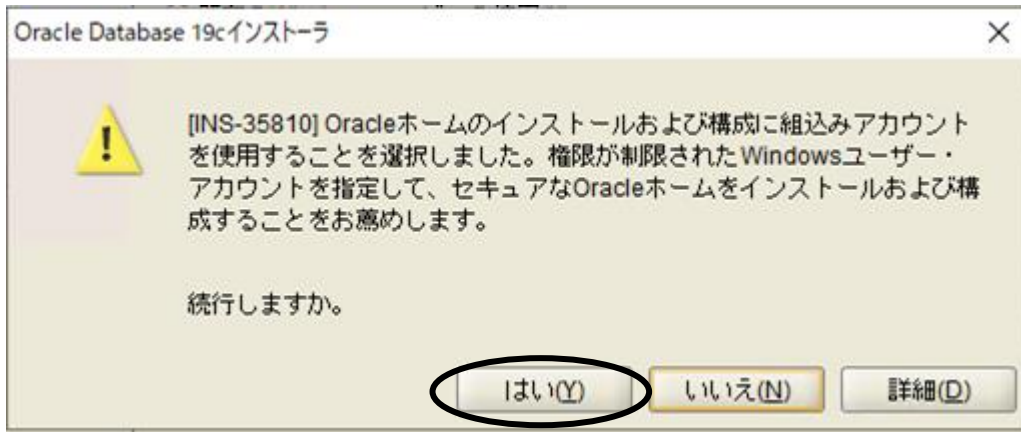
(4) 『Standard Edition 2 (S)』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



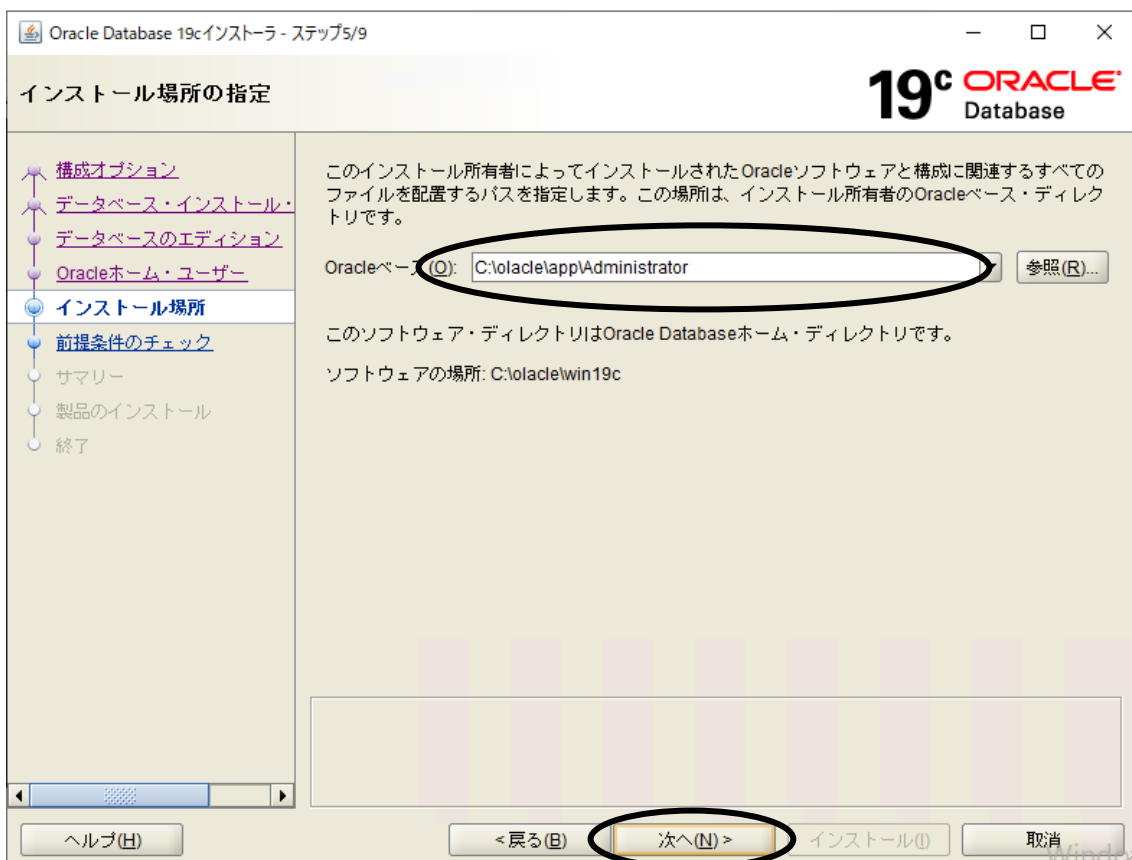
(5) 『Windows 組み込みアカウントの使用(L)』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



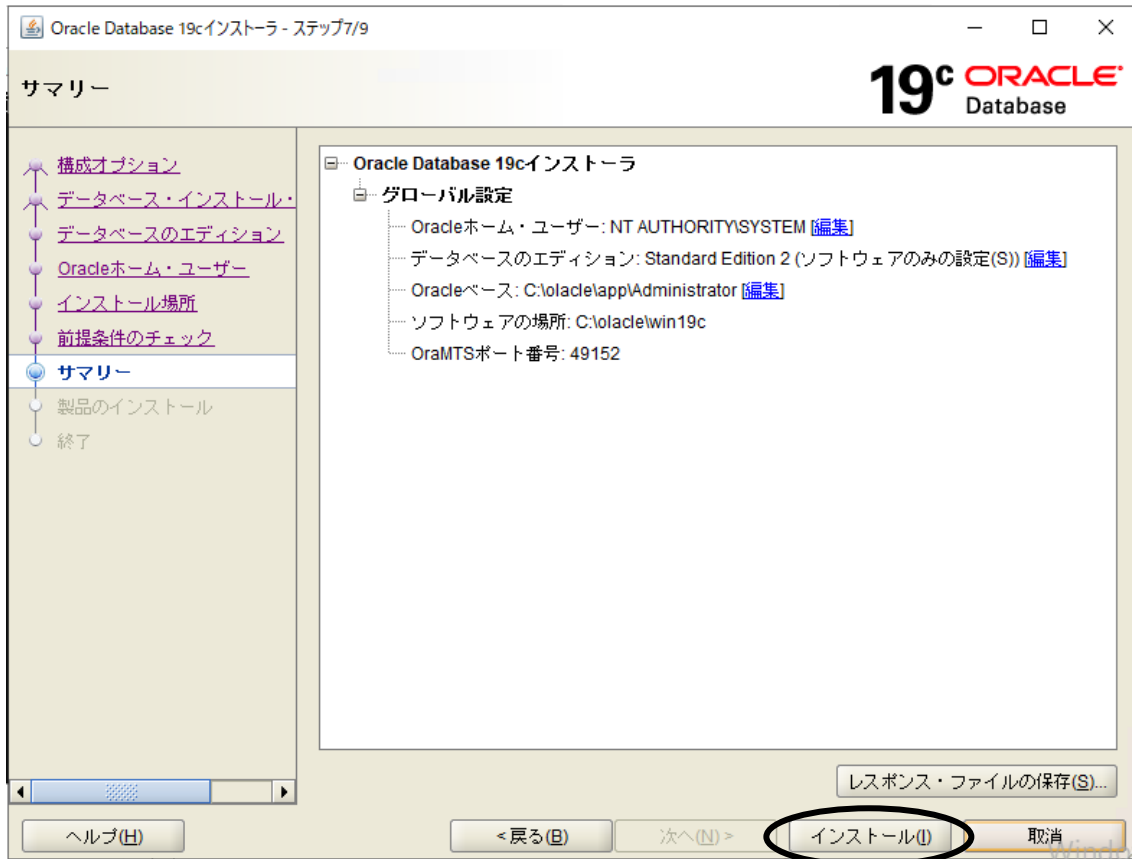
(6) 警告が表示されます、『はい(Y)』をクリックします。



(7) 『Oracle ベース』を指定し、『次へ(N)』をクリックします。



- (8) インストール内容のサマリーが表示されます。内容を確認し、『インストール(I)』をクリックするとインストールが開始されます。



- (9) インストールの終了画面が表示されます。『閉じる(C)』ボタンを選択してください。

これでインストールは終了です。「2.4 Oracle の設定」へ進んでください。

2.4 Oracle の設定

Generalist を使用するにあたり、Oracle を起動するためのオペレーティングシステムの設定を行います。導入マシン環境により設定は異なりますので、詳しくは『Oracle 管理者ガイド』、『Oracle Database インストレーション・ガイド』を参照してください。

※共有メモリについて

- Oracle では、SGA 領域をカーネルの共有メモリ上に確保します。本パラメータは重要であるため、システム管理者に十分相談された上で変更してください。

2.4.1 データベースインスタンスの作成

Generalist のオブジェクトを格納するデータベースインスタンスを作成します。データベースインスタンス作成の詳細については、『Oracle 管理者ガイド』をご参照ください。

インスタンスの利用者領域を確保するに当たって、システムが必要とする容量を求めるために、インストール用 CD-ROM の ¥Utility¥C.13 算出ツール フォルダのファイル”算出ツール.xls”をご利用いただけます。このファイルは Office 2000 形式の Microsoft Excel のブック形式ファイルです。ただし、ここで算出される容量はあくまで概算ですので、実際の設定に当たっては 10%～20%の余裕を見た設定を行ってください。

利用者用の表領域はテーブル用および INDEX 用の 2 つの領域を確保してください。



<重要>

- データベースサーバのオペレーティングシステムに関わらず、データベースの日本語コードは UTF-8(Oracle キャラクタセットの「AL32UTF8」)を設定します。
- NLS_LENGTH_SEMANTICS と MAX_STRING_SIZE は必ず以下の値を設定してください。

パラメータ	値
NLS_LENGTH_SEMANTICS	CHAR
MAX_STRING_SIZE	EXTENDED

2.4.2 作成時のオプションと設定

インストール時に必要な最低限の設定を下記に記載します。

Oracle Database 12c Release 2 / Oracle Database 19c の場合

- (1) データベースインスタンスを作成する際にはインストールオプションとして『Oracle JVM』を指定してください。プラガブル・データベース(以降、PDB と表記)をご利用の場合は『Oracle JVM』にチェックを入れ、『PDB に含める』にもチェックを入れてください。

例) Database Configuration Assistant で「拡張構成」を選択してデータベースインスタンスを作成する場合『データベース・オプションの選択』画面で、『Oracle JVM』にチェックを入れてください。

(デフォルトでチェック有りの状態です。)

- (2) データベースインスタンスを作成する際にはインストールオプションとして『コンテナ・データベースとして作成』を指定してください。

例) Database Configuration Assistant にて『データベース ID の詳細の指定』画面で、『コンテナ・データベースとして作成』にチェックを入れてください。

(デフォルトでチェック有りの状態です。)

- (3) Oracle Enterprise Manager 上にて、初期化パラメータ(下記、パラメータ)を修正してください。

パラメータ	値
open_cursors	300
global_names	TRUE
utl_file_dir	*(アスタリスク)
processes (※1) (※2)	180

※1 「3.4.4 データベース接続の設定」で、maxActive の値を変更した場合は、processes の値を以下のように修正してください。

$$(1.1 \times \text{processes の値} + 5) > \text{maxActive の値} \times 2$$

※2 PDB をご利用の場合、PDB の Oracle Enterprise Manager 上ではパラメータを修正できないため、マルチテナント・コンテナ・データベース(以降、CDBと表記)の Oracle Enterprise Manager 上で修正を行ってください。



<重要>

- PDB をご利用の場合、設定はすべて PDB 領域に対して行ってください。
- 初期化パラメータ設定後、設定を有効にするため PDB 領域の再起動を行ってください。
- データベースサーバが Oracle Database 12c R2 または Oracle Database 19c の場合、Generalist データベース管理ユーザ名/パスワードの大文字・小文字を区別して入力する必要があります。大文字・小文字を区別せずにログイン可能にするには下記の初期化パラメータを設定してください。

パラメータ	値
sec_case_sensitive_logon	false

- データベースサーバが Oracle Database 12c R2 の場合で、Oracle Enterprise Manager を使用する際、Flash が有効なブラウザを使用してください。
Oracle Database 19c の場合は、2020 年末で Flash のサポートが終了しているため Flash は不要です。

第3章 アプリケーションサーバのセットアップ(Oracle WebLogic Server)

3.1 概要

アプリケーションサーバのインストールと設定する際の手順について説明します。



<重要>

- オペレーティングシステム、Oracle のトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。
- アプリケーションサーバにモジュールを再インストールする場合は、一度アンインストール作業を行ってください。
- Generalist をインストールした後にアプリケーションサーバのシステム日付をインストールした日付より過去に変更しないでください。日付を戻してアプリケーションサーバを再起動した場合、自動で再インストールされ設定ファイル等が上書きされる可能性があります。
- 本章で Windows と記述してある場合は以下を指します。

Windows Server 2012、2012 R2

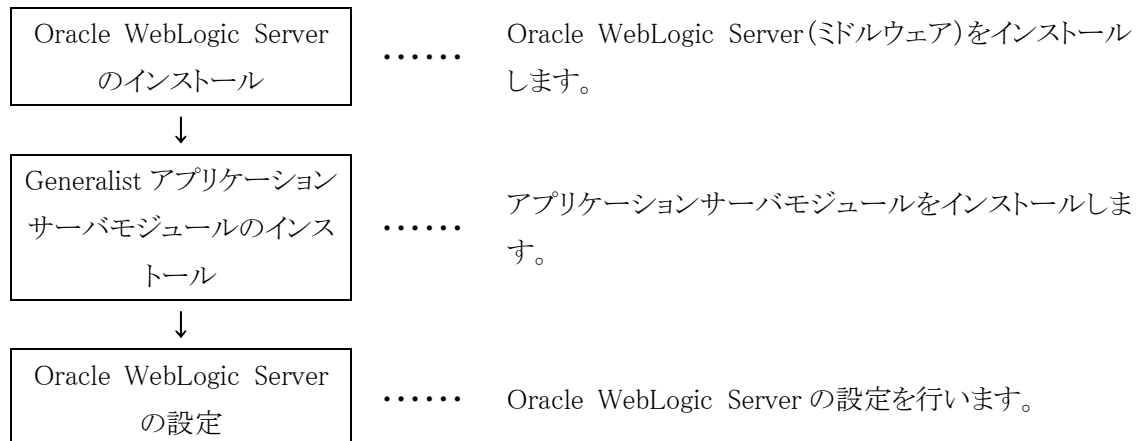
Windows Server 2016

Windows Server 2019

Windows Server 2022

3.2 セットアップの手順

以下の手順でセットアップを行います。

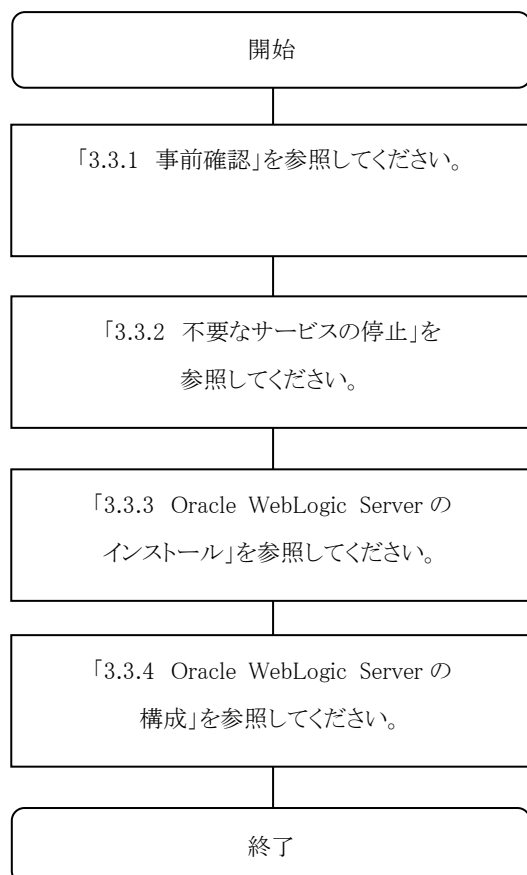


3.3 Oracle WebLogic Server のインストール

Oracle WebLogic Server (ミドルウェア) をインストールします。

※インストールに関する詳しい情報は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

Oracle WebLogic Server のセットアップ手順を記載します。下記のフローチャートを参照して手順を確認してください。



3.3.1 事前確認

事前に下記の項目を設定してください。

項目	例	お客様ご記入欄
Oracle WebLogic Server 管理ユーザ名	weblogic	
Oracle WebLogic Server 管理ユーザパスワード	OraWls01	

また、Oracle WebLogic Server をインストールする前にサーバに JDK(Java Development Kit)がインストールされている必要があります。必要なJDKのバージョンは下記のとおりです。インストールされていない場合には、以下の Oracle のサイトよりダウンロードし、インストールしてください。

【関連 HP】(2021年4月19日時点)

<https://www.oracle.com/jp/java/technologies/javase-downloads.html>

ミドルウェア	必要なJDKのバージョン
Oracle WebLogic Server 12c R2 の場合	1.8.0 Update131(64bit 版)以上
Oracle WebLogic Server 14c の場合	1.8.0 Update251(64bit 版)以上

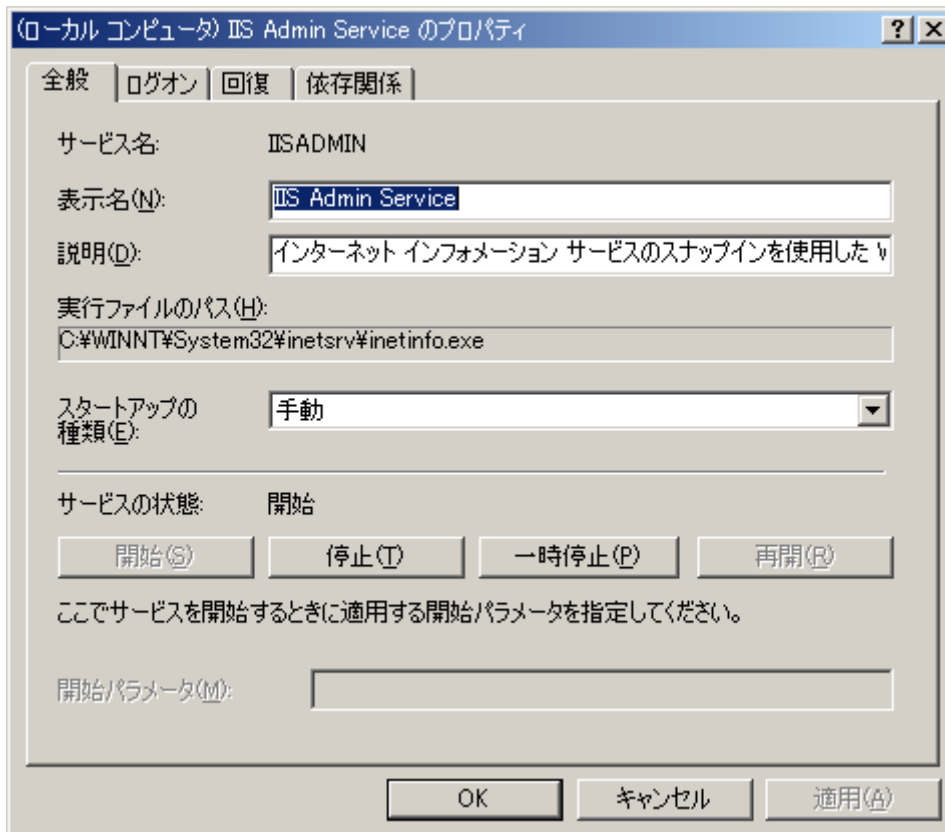
3.3.2 不要なサービスの停止

(1) Oracle WebLogic Server のインストール前に下記のサービスが起動している場合には、停止し、手動起動に変更します。サービスが起動していない場合、または、サービスが存在しない場合には本操作は不要です。

- IIS Admin Service
- World Wide Web Publishing Service
- Simple Mail Transport Protocol (SMTP)

サービスの停止と設定の変更は下記の手順で実行します。

1. 「コントロールパネル」より「管理ツール」→「サービス」の画面を表示します。
2. 該当するサービスを選択し、「操作」より「プロパティ」を選択し、プロパティ画面を開きます。



3. プロパティ画面より、『停止 (T)』ボタンを押下し、サービスを停止します。
4. 『スタートアップの種類 (E)』を『手動』に設定し、『OK』ボタンを押下します。

3.3.3 Oracle WebLogic Server のインストール

※※インストーラの jar ファイル名は各ミドルウェアのバージョンによって異なります。以下、バージョン 12.2.1.3 を例に説明します。

(1) インストーラの jar ファイル (fmw_12.2.1.3.0_wls.jar) を任意のフォルダにコピーし、下記の手順でインストーラを起動します。

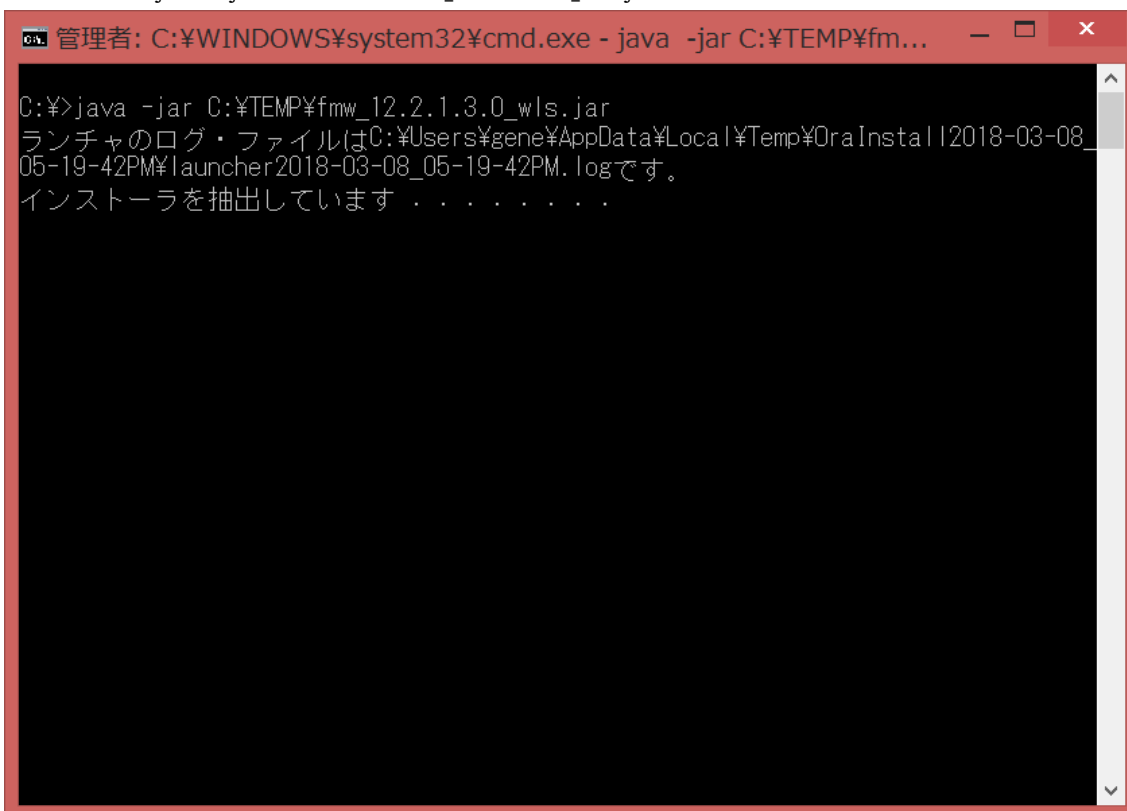
- ① エクスプローラにて、Cドライブを開きます。
- ② メニューバーより「ファイル」>「コマンド プロンプトを開く」から、「コマンド プロンプトを管理者として開く」をクリックします。
- ③ コマンドプロンプトより下記のコマンドを入力します。

```
java△-jar△<fmw_12.2.1.3.0_wls.jar へのパス>
```

※△は半角スペースです。また、すべての文を一行で続けて入力する必要があります。

例:コピー先を「C:¥TEMP」とした場合

```
java -jar C:¥TEMP¥fmw_12.2.1.3.0_wls.jar
```



The screenshot shows a Windows command prompt window titled "管理者: C:¥WINDOWS¥system32¥cmd.exe - java -jar C:¥TEMP¥fm...". The command entered is `java -jar C:¥TEMP¥fmw_12.2.1.3.0_wls.jar`. The output shows the installer starting and creating a log file at `C:¥Users¥gene¥AppData¥Local¥Temp¥OraInstal12018-03-08_05-19-42PM¥launcher2018-03-08_05-19-42PM.log`. The text "インストーラを抽出しています" (Extracting the installer) is visible, followed by several dots.

『ようこそ』画面が表示されます。『次へ(N)』をクリックします。



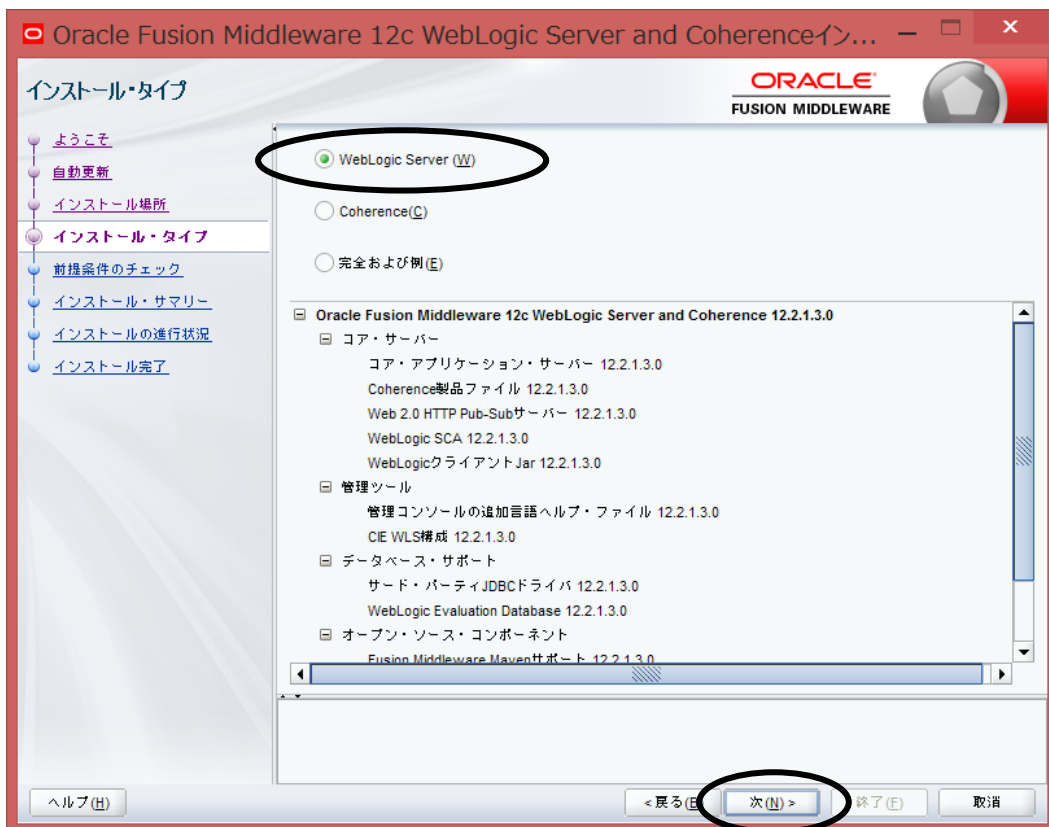
(2) 『自動更新』画面が表示されます。『自動更新をスキップ(A)』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



- (3) 『インストール場所』の設定画面が表示されます。『Oracle ホーム(O)』に WebLogic のインストール先を指定し、『次へ(N)』をクリックします。



- (4) 『インストール・タイプ』の設定画面が表示されます。『WebLogic Server (W)』を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



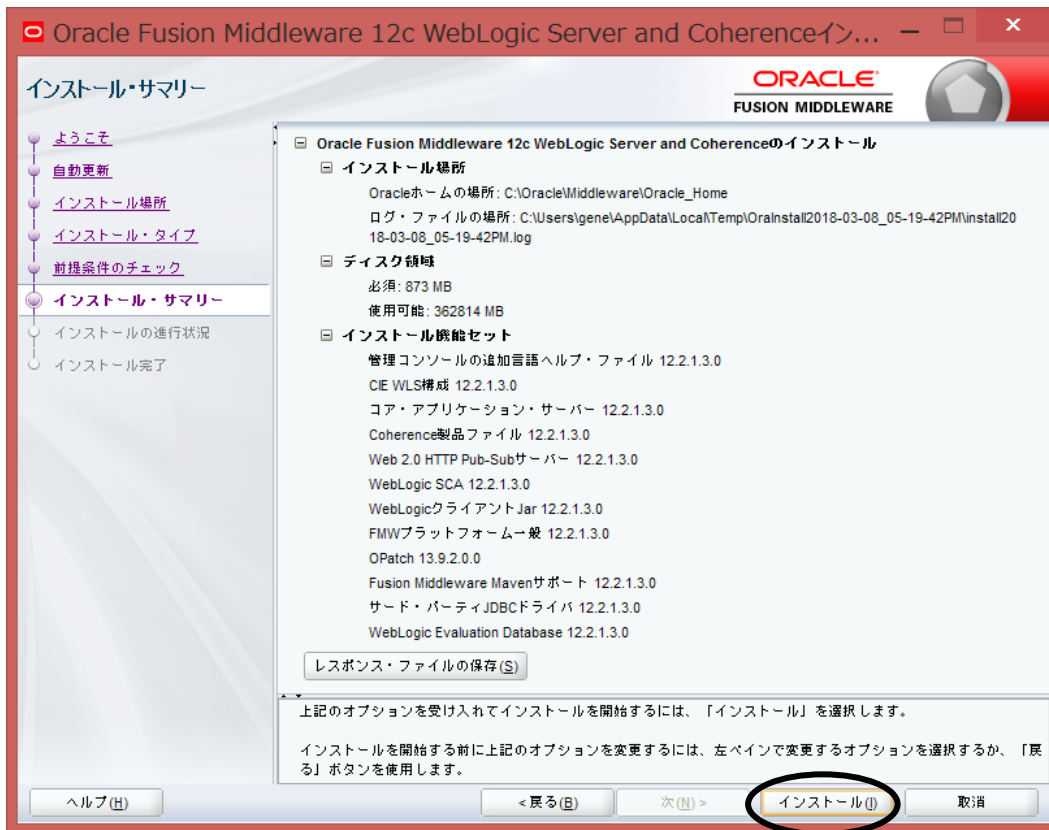
- (5) 『前提条件のチェック』画面が表示されます。すべてのチェックが完了した事を確認し、『次へ(N)』をクリックします。



<重要>

- Oracle WebLogic Server 12c R2 (12.2.1.3.0)をWindows Server 2012 R2へインストールする場合、上記の「オペレーションシステムの認証を確認中」に警告が表示されます。この警告は無視して下さい。

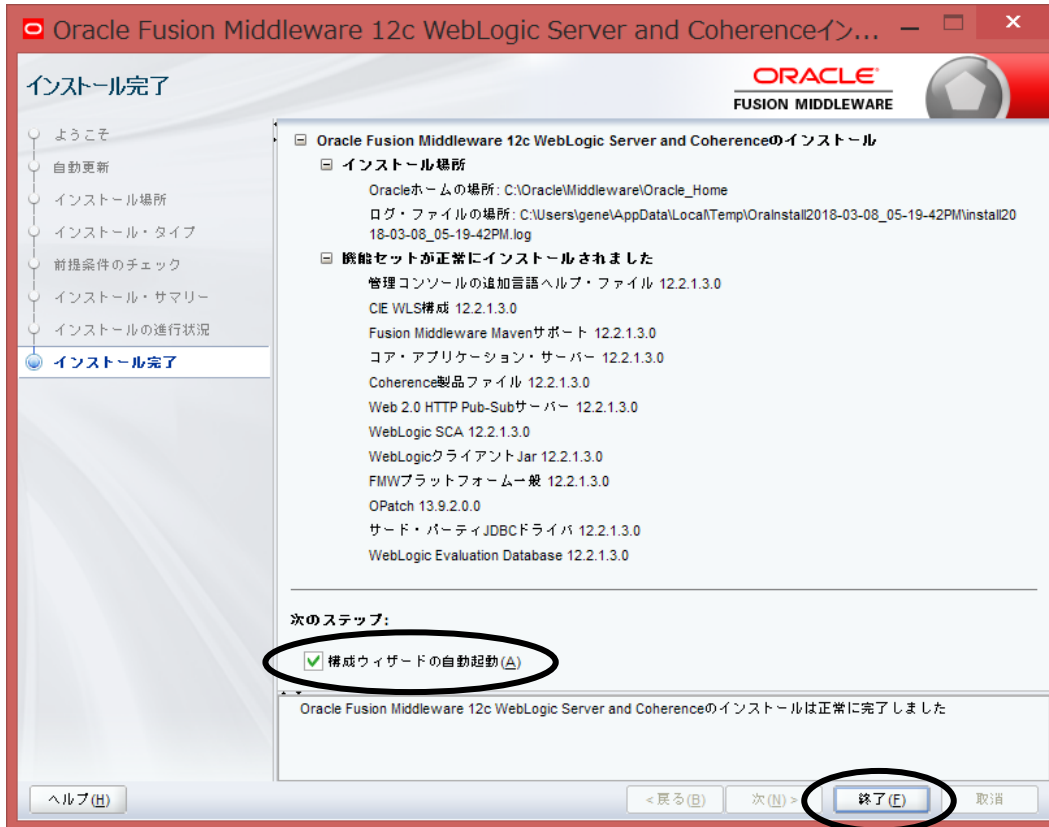
- (6) 『インストール・サマリー』画面が表示されます。内容を確認し、『インストール(I)』をクリックします。



- (7) 『インストールの進行状況』画面が表示されます。すべてのインストールが完了したことを確認し、『次へ(N)』をクリックします。



- (8) 『インストール完了』画面が表示されます。引き続き WebLogic の構成をおこなうために、『構成ウィザードの自動起動(A)』のチェックボックスにチェックを付け、『終了(F)』をクリックします。



3.3.4 Oracle WebLogic Server の構成

- (1) 『構成タイプ』の選択画面が表示されます。『新規ドメインの作成(C)』を選択するとともに、『ドメインの場所』を入力します。上記の設定を確認し、『次(N)>』をクリックします。



- (2) 『テンプレート』画面が表示されます。『製品テンプレートを使用してドメインを作成(P)』を選択し、『次(N)>』をクリックします。



- (3) 『管理者アカウント』の設定画面が表示されます。『名前』『パスワード』『パスワードの確認』を入力し、『次(N)>』をクリックします。ここで入力したユーザおよびパスワードは管理コンソールの利用時に使用します。

The screenshot shows the 'Administrator Account' configuration screen. The left sidebar lists the steps: 'ドメインの作成', 'テンプレート', '管理者アカウント', 'ドメイン・モードおよびJDK', '拡張構成', '構成のサマリー', '構成の進行状況', and '構成の終了'. The main area contains three input fields: '名前' (Name) with the value 'weblogic', 'パスワード' (Password), and 'パスワードの確認' (Confirm Password). A black circle highlights these three fields. Below the fields is a note: 'パスワードと同一にする必要があります。パスワードは、少なくとも一つの数字または特殊記号が含まれた8文字以上の英数字である必要があります。' (Password must be the same. Password must be at least 8 characters long, containing at least one digit or special character, and consisting of alphanumeric characters.) At the bottom, there are buttons: 'ヘルプ(H)' (Help), '< 戻る(B)' (Back), '次(N)>' (Next), '終了(F)' (Finish), and '取消' (Cancel). The '次(N)>' button is highlighted with a black circle.

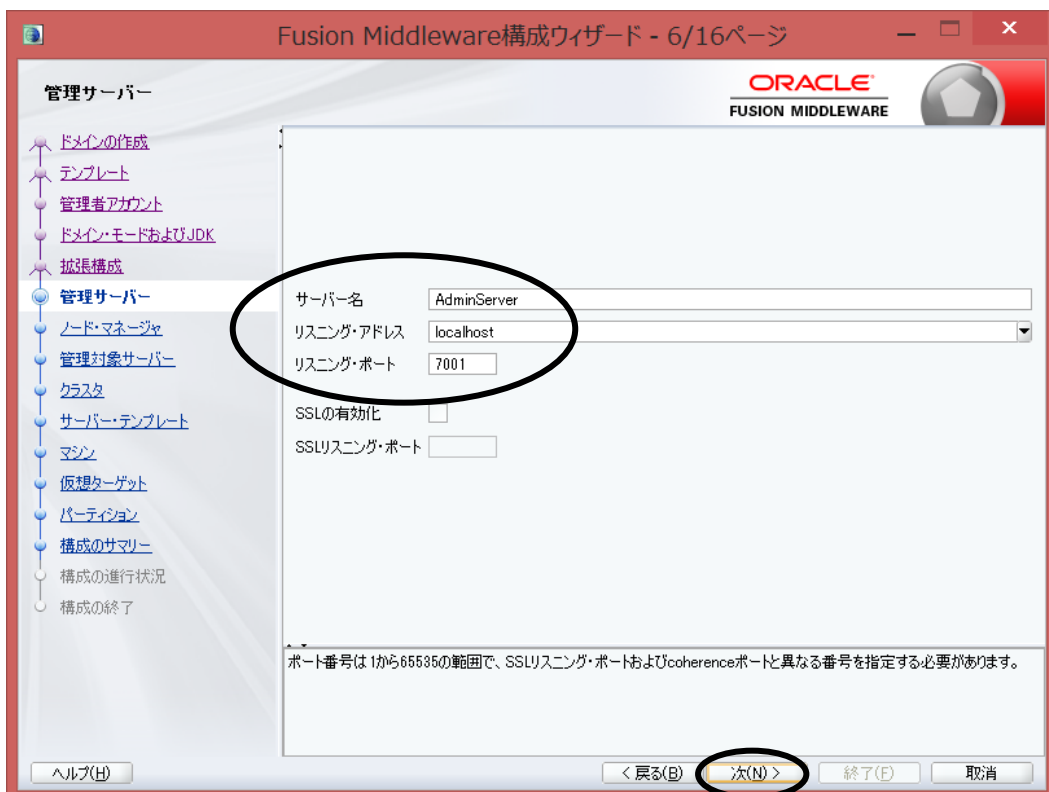
- (4) 『ドメイン・モードおよびJDK』の設定画面が表示されます。『ドメイン・モード』は、『本番(P)』を選択します。また、『JDK』は、インストール開始時に使用したJDKのパスが初期状態で表示されます。問題がなければそのまま選択します。他のJDKを利用する場合には、『その他のJDKの場所(L)』からJDKのインストールフォルダを設定してください。設定が完了したら、内容を確認の上、『次(N)>』をクリックします。

The screenshot shows the 'Domain Mode and JDK' configuration screen. The left sidebar lists the steps: 'ドメインの作成', 'テンプレート', '管理者アカウント', 'ドメイン・モードおよびJDK', '拡張構成', '構成のサマリー', '構成の進行状況', and '構成の終了'. The main area has two sections: 'ドメイン・モード' (Domain Mode) and 'JDK'. Under 'ドメイン・モード', there are two radio buttons: '開発モード(D)' (Development Mode) and '本番(P)' (Production). The '本番(P)' option is selected and circled in black. Below it is a note: 'ユーザー名とパスワードをboot.propertiesから取得します。またアプリケーションのデプロイをポーリングします。' (Obtain username and password from boot.properties. Also poll for application deployment.) Under 'JDK', there are two radio buttons: 'Oracle HotSpot 1.8.0_131 C:\PROGRAM~1\Java\JDK18~1.0_1' and 'その他のJDKの場所(L):'. The first option is selected and circled in black. Below it is a text input field for the path and a '参照(B)' (Browse) button. At the bottom, there are buttons: 'ヘルプ(H)' (Help), '< 戻る(B)' (Back), '次(N)>' (Next), '終了(F)' (Finish), and '取消' (Cancel). The '次(N)>' button is highlighted with a black circle.

- (5) 『拡張構成』画面が表示されます。『管理サーバー』『ノード・マネージャ』『トポロジ』のすべてのチェックボックスにチェックを入れ、『次(N)>』をクリックします。



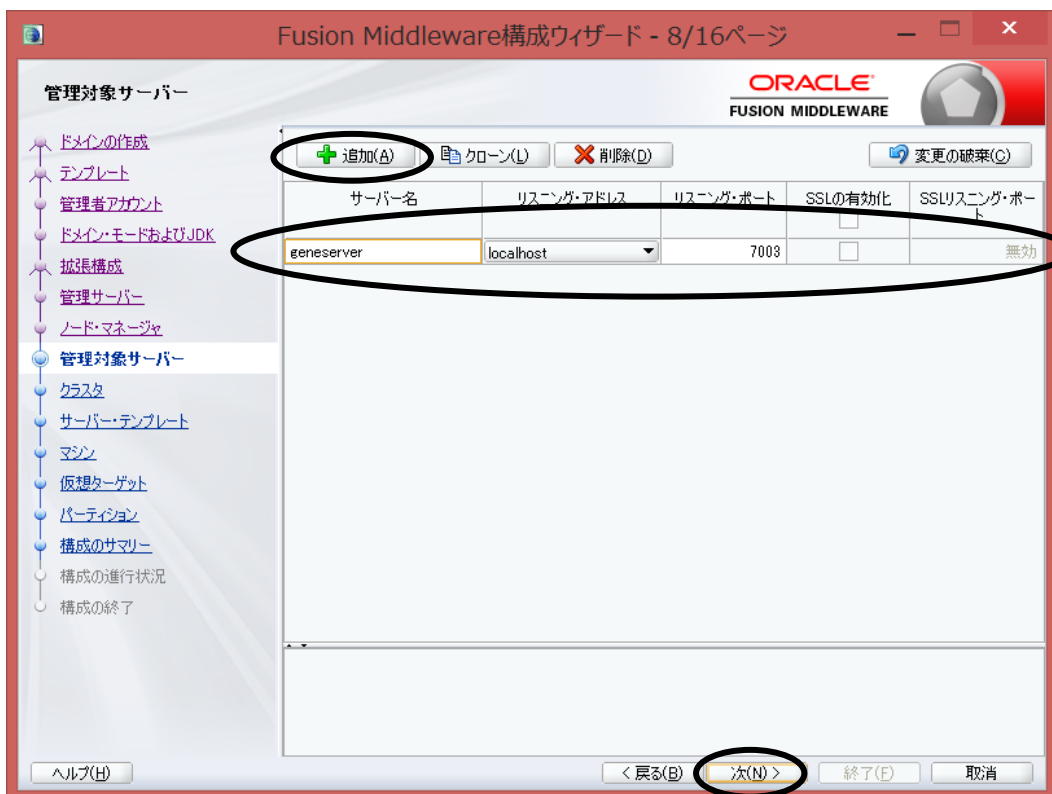
- (6) 『管理サーバー』の設定画面が表示されます。『サーバー名』『リスニング・アドレス』『リスニング・ポート』を設定します。『リスニング・アドレス』には、『すべてのローカル・アドレス』を選択せずに、当サーバのアドレスを指定してください。入力が完了したら『次(N)>』をクリックします。



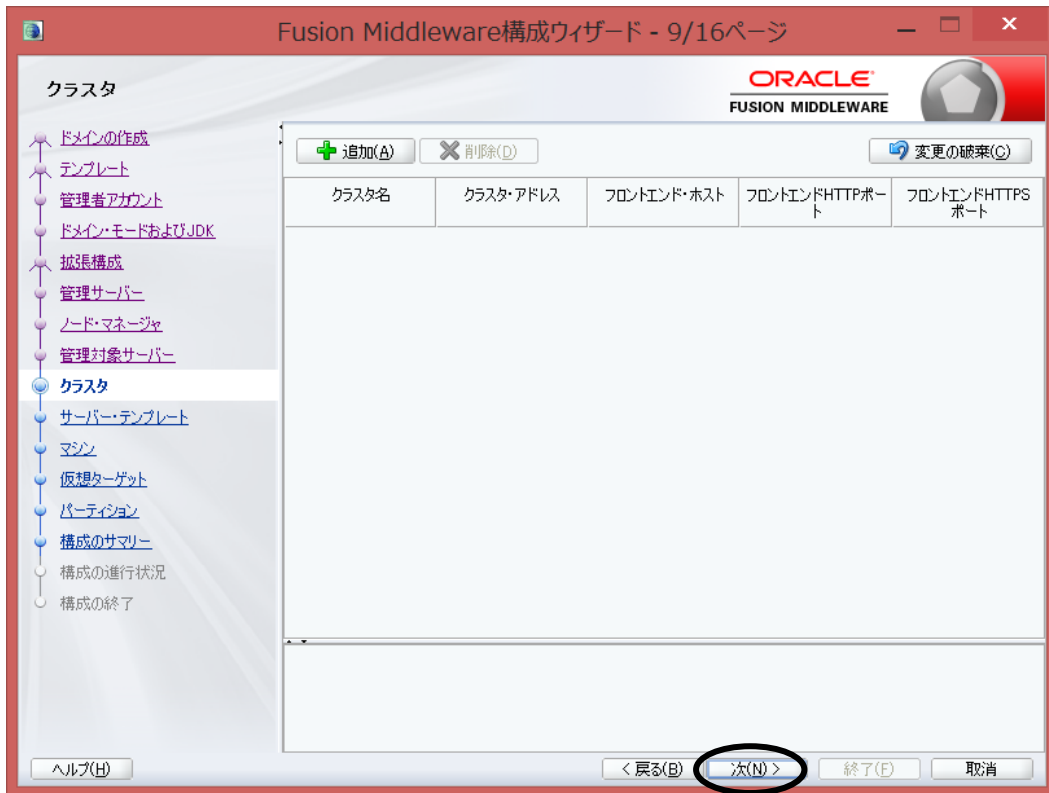
- (7) 『ノード・マネージャ』の設定画面が表示されます。『ノード・マネージャ・タイプ』で『ドメインごとのデフォルトの場所(D)』を選択し、『ノード・マネージャ資格証明』の各フィールドを入力します。入力が完了したら『次(N)>』をクリックします。



- (8) 『管理対象サーバー』画面が表示されます。『追加』をクリックし、Generalist 用の設定を追加します。『サーバー名』『リスニング・アドレス』『リスニング・ポート』を設定します。『リスニング・アドレス』は、当サーバのアドレスを設定してください。設定が完了したら『次(N)>』をクリックします。



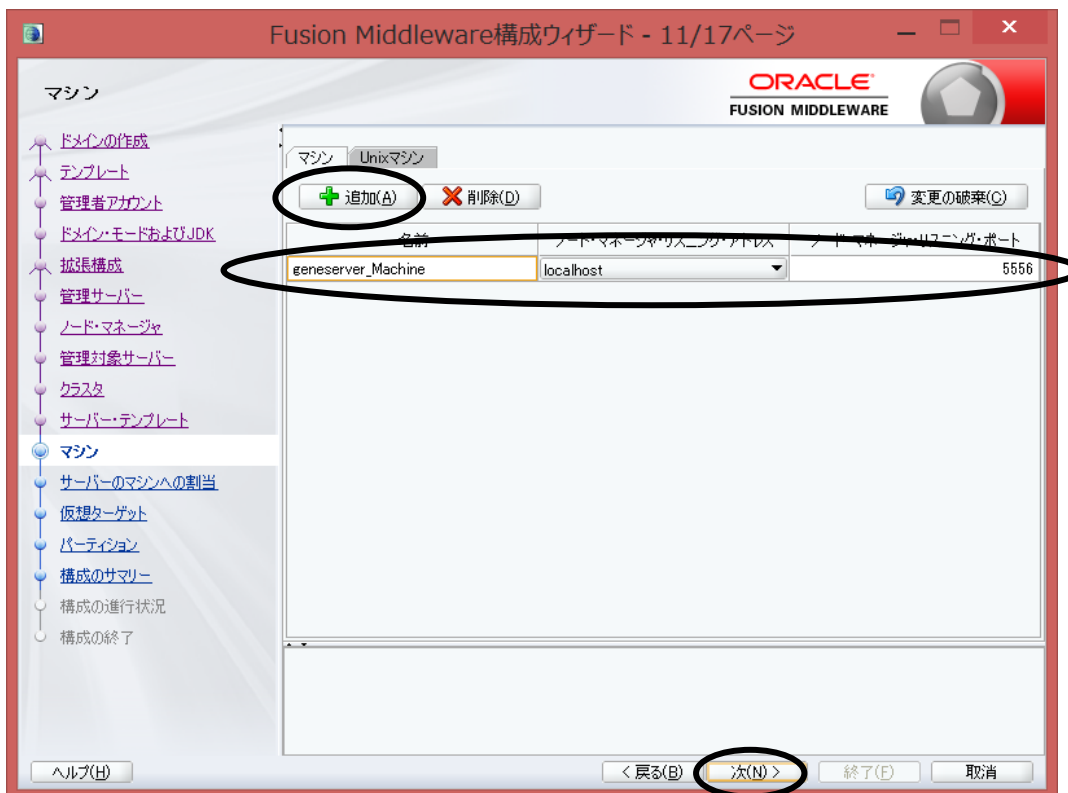
(9) 『クラスタ』の設定画面が表示されます。何も設定せずに『次(N)>』をクリックします。



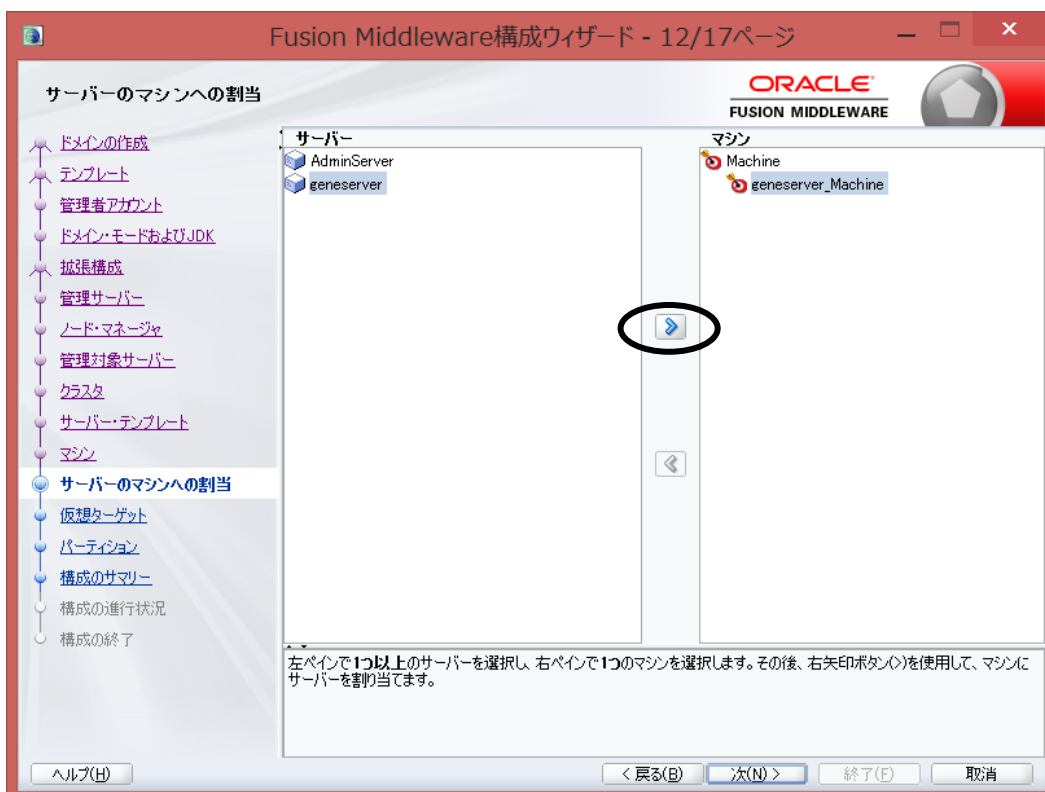
(10) 『サーバー・テンプレート』の設定画面が表示されます。何も設定せずに『次(N)>』をクリックします。



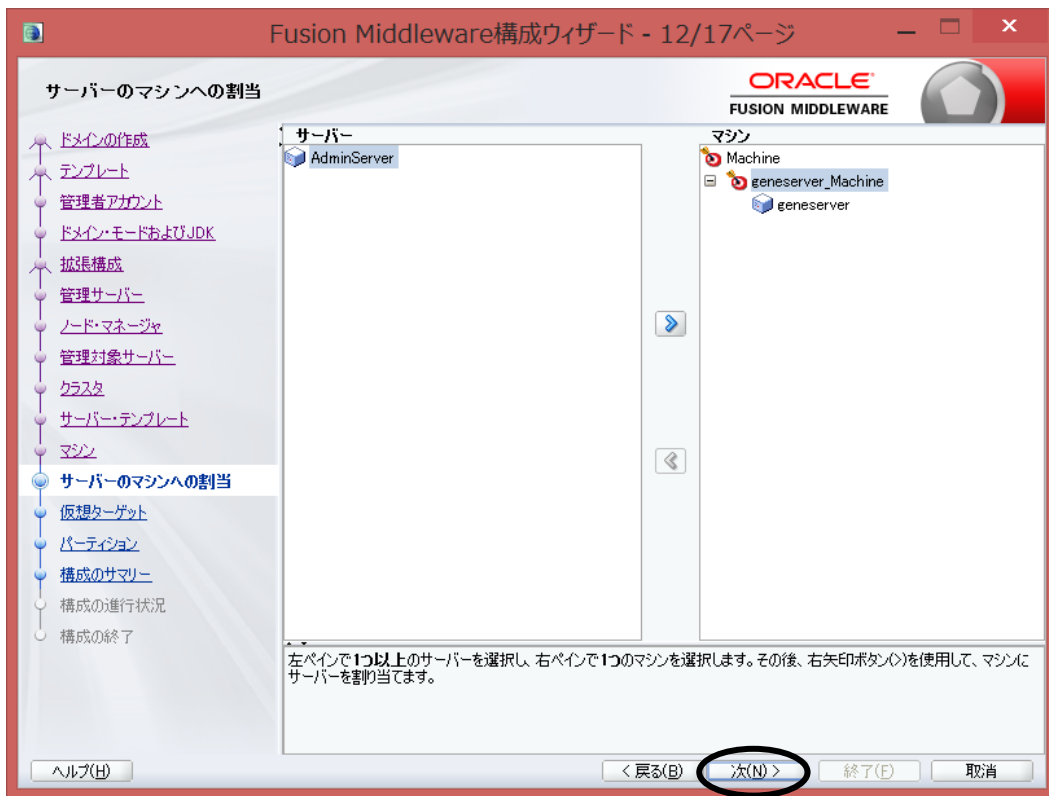
- (11)『マシン』の設定画面が表示されます。『追加』をクリックし、Generalist 用の設定を追加します。『名前』『ノード・マネージャ・リスニング・アドレス』『ノード・マネージャ・リスニング・ポート』を設定します。『ノード・マネージャ・リスニング・アドレス』は、当サーバのアドレスを設定してください。設定が完了したら『次(N)>』をクリックします。



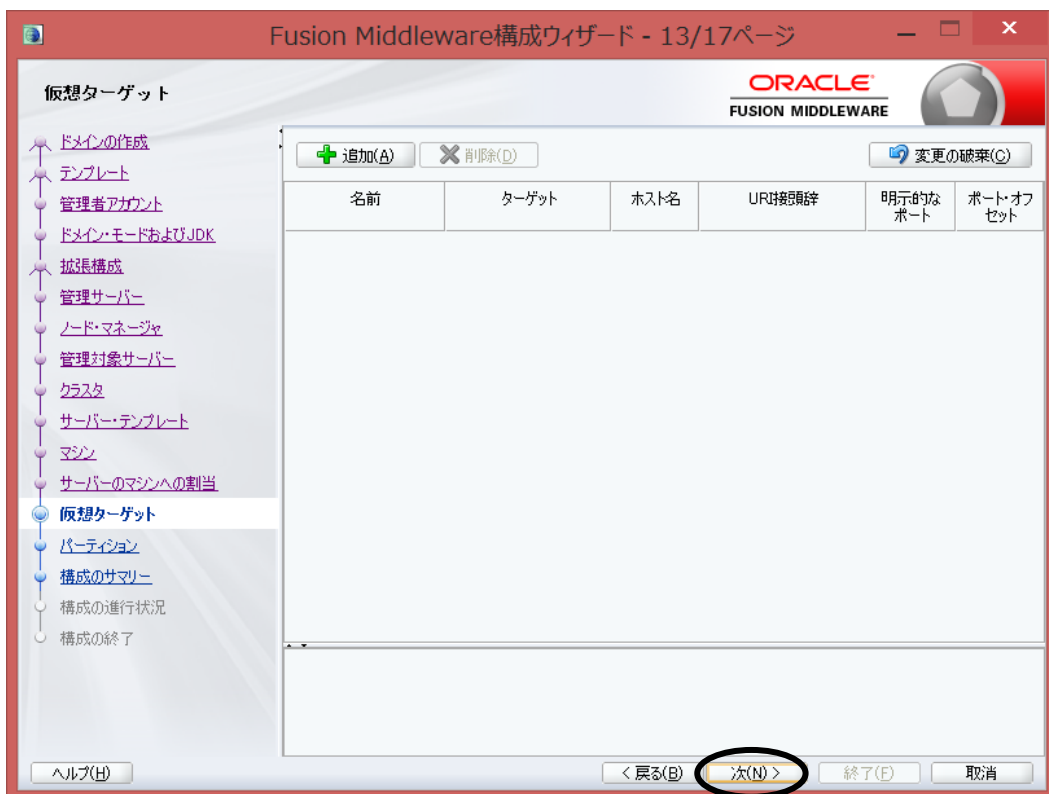
- (12)『サーバーのマシンへの割当』画面が表示されます。『サーバー』の一覧から手順(8)で作成したサーバーを選択し、『マシン』の一覧から手順(11)で作成したマシンを選択します。その後、『>』ボタンをクリックし、サーバーをマシンへ割当てます。



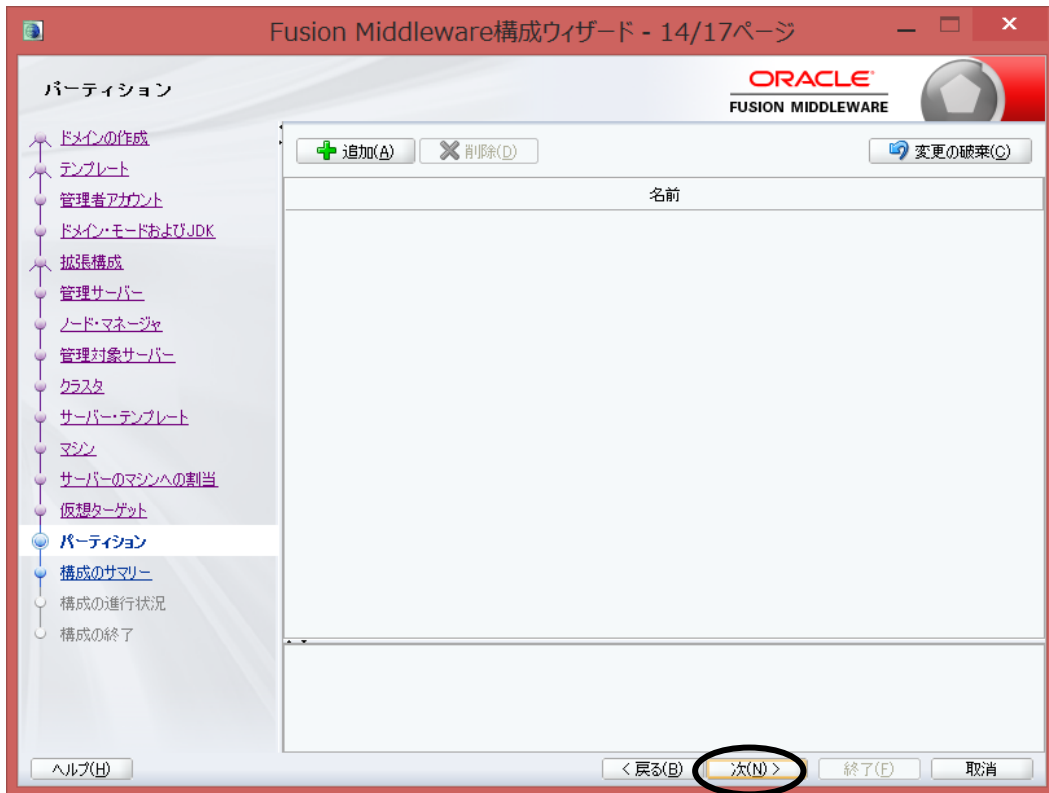
上記を実行すると、マシンの下にサーバーが移動します。この状態となっている事を確認し、『次(N)』をクリックします。



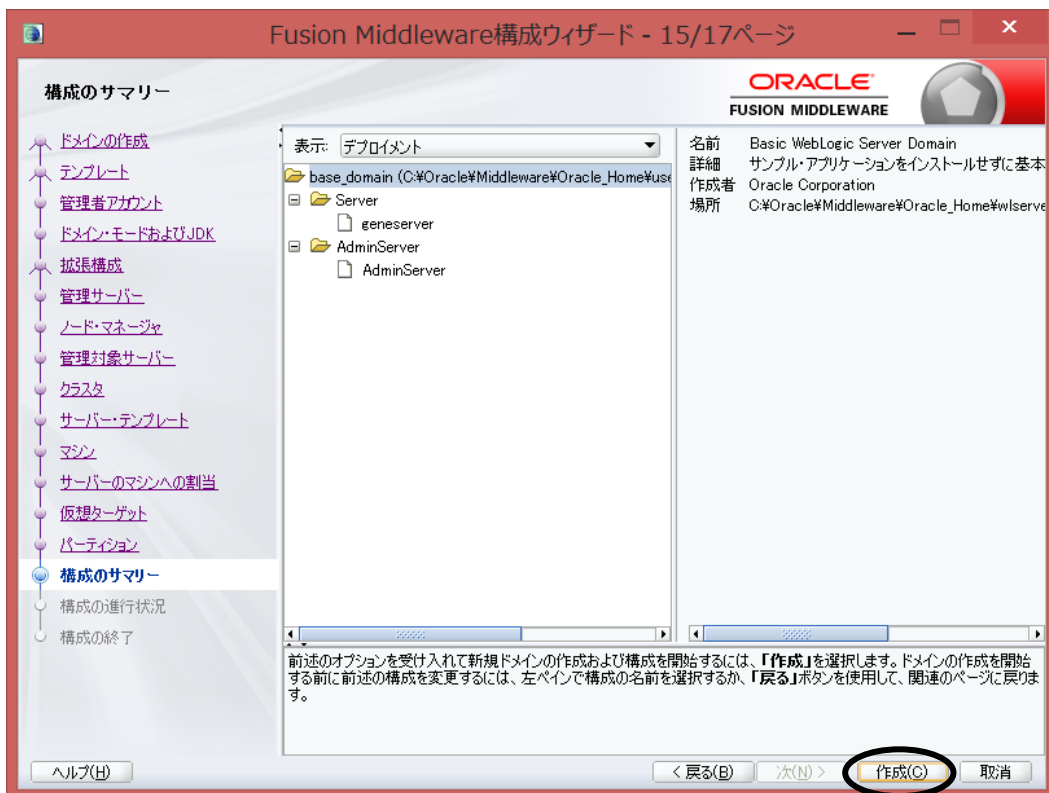
(13)『仮想ターゲット』の設定画面が表示されます。何も設定せずに『次(N)』をクリックします。



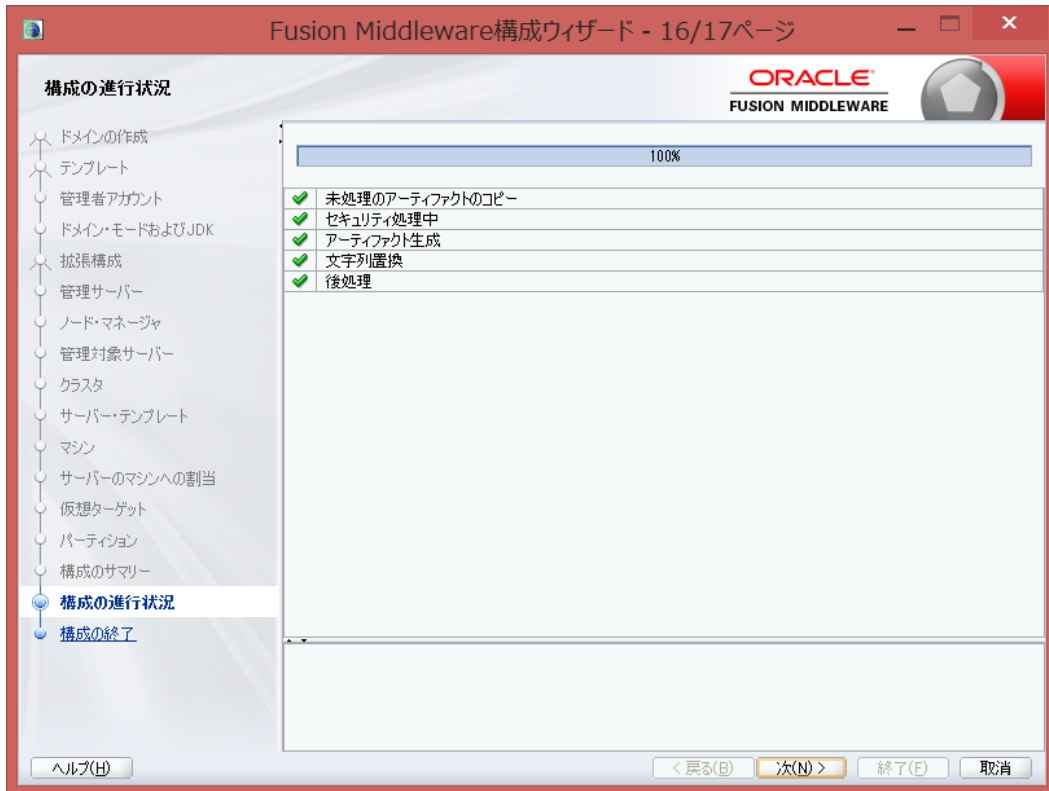
(14)『パーティション』の設定画面が表示されます。何も設定せずに『次(N)』をクリックします。



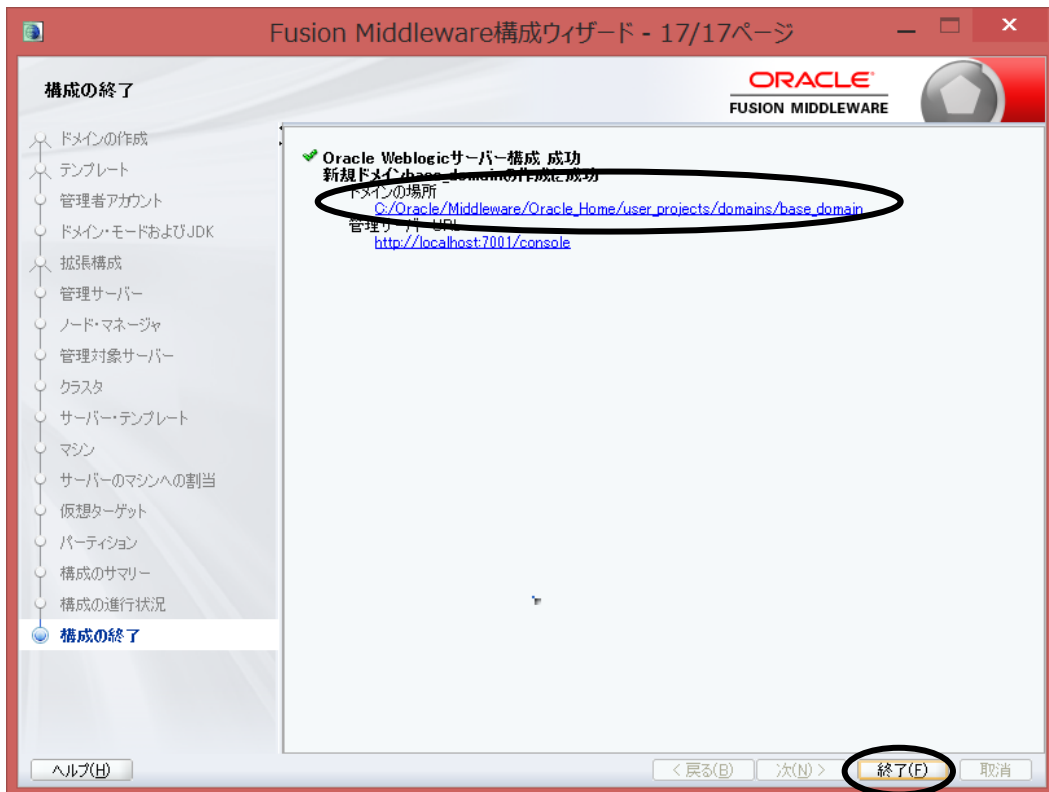
(15)『構成のサマリー』画面が表示されます。内容を確認し、『作成(C)』をクリックします。



(16)『構成の進行状況』画面が表示されます。進捗状況が 100%となったことを確認し、『次(N)>』をクリックします。



(17) 下記画面が表示されます。引き続き設定作業を行うため『ドメインの場所』をクリック。エクスプローラが開くので、同場所の「startWebLogic.cmd」を実行します。実行後、『終了』をクリックします。



- (18)「startWebLogic.cmd」を実行した場合、コマンドプロンプトが立ち上がり以下のような画面になります。WebLogic インストール時(3.3.4(3))に設定したユーザー名、パスワードを入力してください。



```
C:\WINDOWS\system32\cmd.exe
der -javaagent:C:\Oracle\MIDDLE~1\ORACLE~1\wlserver\server\lib\debugpatch-agent
.jar -da -Dwls.home=C:\Oracle\MIDDLE~1\ORACLE~1\wlserver\server -Dweblogic.home=
C:\Oracle\MIDDLE~1\ORACLE~1\wlserver\server weblogic.Server
<2018/03/08 18時40分04秒 JST> <Info> <Security> <BEA-090905> <起動パフォーマンス
を向上するためにCryptoJ JCEプロバイダ自己整合性チェックを無効にしています。この
チェックを有効にするには、-Dweblogic.security.allowCryptoJDefaultJCEVerification
=trueを指定します。>
<2018/03/08 18時40分04秒 JST> <Info> <Security> <BEA-090906> <RSA CryptoJのデフ
ォルトの乱数ジェネレータをECDRBG128からHMACDRBGに変更しています。この変更を無効
にするには、-Dweblogic.security.allowCryptoJDefaultPRNG=trueを指定します。>
<2018/03/08 18時40分05秒 JST> <Info> <WebLogicServer> <BEA-000377> <WebLogic Ser
verをOracle CorporationからJava HotSpot(TM) 64-Bit Server VMバージョン25.131-b11
で起動しています。>
<2018/03/08 18時40分05秒 JST> <Info> <RCM> <BEA-2165021> <このJVMでは「ResourceM
anagement」が有効になっていません。WebLogic Serverの「リソース消費管理」機能を使
用するには、「ResourceManagement」を有効化してください。「ResourceManagement」を
有効化するには、JVMが実行されているWebLogic Serverインスタンスで次のJVMオプショ
ンを指定する必要があります: -XX:+UnlockCommercialFeatures -XX:+ResourceManagemen
t。>
<2018/03/08 18時40分05秒 JST> <Info> <Management> <BEA-141107> <バージョン: WebL
ogic Server 12.2.1.3.0 Thu Aug 17 13:39:49 PDT 2017 1882952>
<2018/03/08 18時40分06秒 JST> <Info> <Security> <BEA-090065> <ユーザーから起動ア
イデンティティを取得しています。>
WebLogic Serverを起動するためのユーザー名を入力してください:weblogic
WebLogic Serverを起動するためのパスワードを入力してください:
```

- (19)コマンドプロンプトに『サーバーが RUNNING モードで起動しました。』と表示されます。管理サーバーの起動は完了です。



```
C:\WINDOWS\system32\cmd.exe
<2018/03/08 19時02分31,038秒 JST> <Notice> <WebLogicServer> <BEA-000365> <サーバ
ー状態がSTARTINGに変化しました。>
<2018/03/08 19時02分31,101秒 JST> <Notice> <Log Management> <BEA-170036> <ログ・
メッセージ・カウントを30秒ごとに確認するためのロギング・モニタリング・サービ
スタイマーが開始されました。>
<2018/03/08 19時02分44,716秒 JST> <Notice> <Log Management> <BEA-170027> <サーバ
ー(はドメイン・レベルの診断サービスとの接続を正常に確立しました。>
<2018/03/08 19時02分45,528秒 JST> <Notice> <WebLogicServer> <BEA-000365> <サーバ
ー状態がADMINに変化しました。>
<2018/03/08 19時02分45,726秒 JST> <Notice> <WebLogicServer> <BEA-000365> <サーバ
ー状態がRESUMINGに変化しました。>
<2018/03/08 19時02分45,757秒 JST> <Notice> <WebLogicServer> <BEA-000329> <ドメイ
ン"base_domain"で、WebLogic Server管理サーバー"AdminServer"を本番モードで起動し
ました。>
<2018/03/08 19時02分45,757秒 JST> <Notice> <Server> <BEA-002613> <チャンネル"Defau
lt"は、現在127.0.0.1: 7001でプロトコルiiop, t3, ldap, snmp, httpをリスニングして
います。>
<2018/03/08 19時02分45,773秒 JST> <Notice> <Server> <BEA-002613> <チャンネル"Defau
lt"は、現在127.0.0.1: 7001でプロトコルiiop, t3, ldap, snmp, httpをリスニングして
います。>
<2018/03/08 19時02分45,789秒 JST> <Notice> <WebLogicServer> <BEA-000360> <サーバ
ーがRUNNINGモードで起動しました。>
<2018/03/08 19時02分45,804秒 JST> <Notice> <WebLogicServer> <BEA-000365> <サーバ
ー状態がRUNNINGに変化しました。>
```



<重要>

- 管理サーバーの起動は、コマンドプロンプトを立ち上げ、3.3.4(1)で設定したフォルダ内の startWebLogic.cmd を実行することでも行えます。コマンドプロンプトを終了すると、管理サーバは停止します。

デフォルト設定の場合、下記のスクリプト

<WebLogic インストール先>%user_projects%domains%base_domain%startWebLogic.cmd

- 管理コンソール画面からサーバーの起動／停止を実行するには、以下のスクリプトを事前に実行する必要があります。

<WebLogic インストール先>%user_projects%domains%base_domain%bin%startNodeManager.cmd

3.4 アプリケーションサーバモジュールのインストール

アプリケーションサーバへ Generalist のモジュールをインストールします。

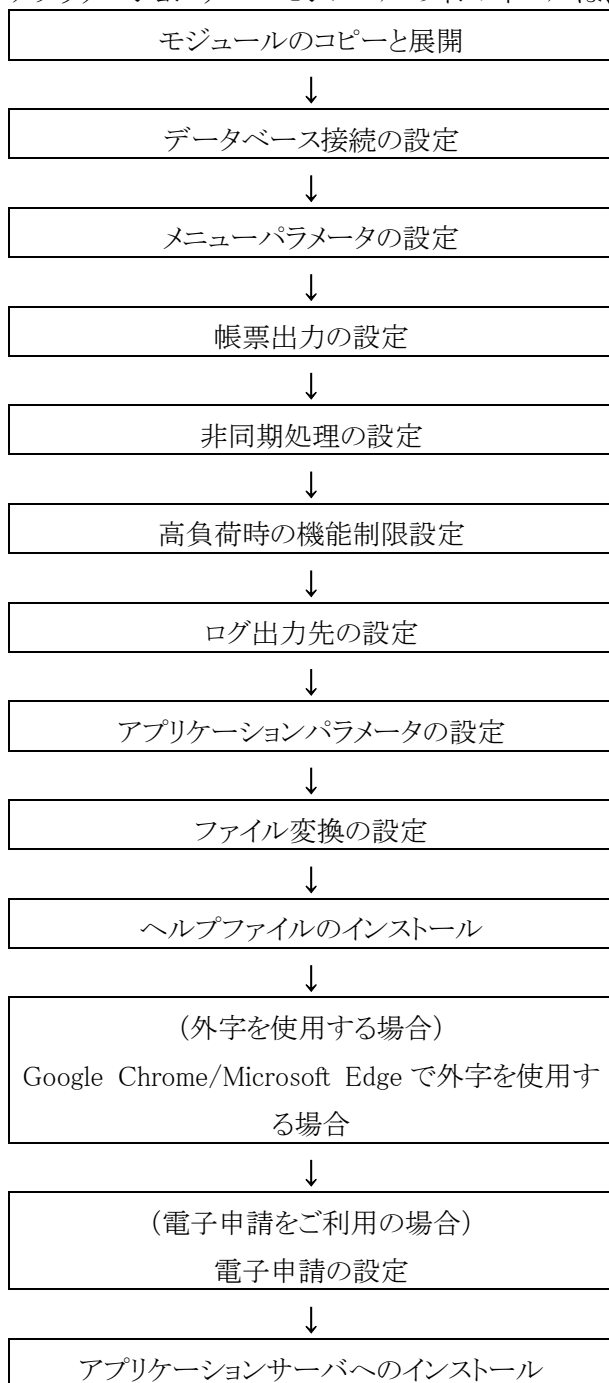


<重要>

- ここでは、Generalist モジュールやその他の必要ファイルをアプリケーションサーバに設定する作業を行います。
- 手順にしたがってインストールを開始する前に、すべての Windows アプリケーションを終了させておいてください。
- 動作中のアプリケーションがある場合、インストールに時間がかかることがあります。
- 動作中のアプリケーションがハードディスクに対して書き込み等を行っている場合、インストールプログラムは空きディスク容量を正確に把握することができません。このため、インストール作業が失敗することがあります。
- オペレーティングシステム、Oracle のトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。

3.4.1 アプリケーションサーバモジュールのインストールの流れ

アプリケーションサーバモジュールのインストールは、以下のステップからなります。



3.4.2 環境の想定

ここに示す手順は、以下のような環境を想定しています。

インストール先などを変更した場合は適宜読み替えてください。

- WebLogic のインストール先..... C:\¥Oracle¥wls12c
- アプリケーションサーバのホスト名 geneias
- アプリケーションサーバの IP アドレス 192.168.1.10
- データベースサーバへの接続文字列 GeneSVR
- DNS ドメイン名 gene.co.jp

- データベースサーバのホスト名 dbgene
- データベースサーバの SID geneSID
- データベースサーバのポート番号 1521
- Generalist データベースユーザ GRSYS
- Generalist データベースユーザパスワード GRSYS



<重要>

- ここでは Oracle WebLogic Server を C:\¥Oracle¥wls12c の下にインストールすることを前提としています。インストール先などを変更された場合は、適宜、読み換えてください。
- 設定内容において太字で記載している箇所は修正が必要な箇所です。さらに、下線が引かれている箇所は各環境で設定内容が異なりますので、適宜、読み替えてください。
- 設定ファイルのサンプルを CD-ROM の Utility¥C.21 サンプル設定ファイル フォルダに格納してあります。参考にしてください。サンプルファイルを作成した環境に上書きした場合、正常に動作しないことがあります。
- 「Generalist データベースユーザ名」と「Generalist データベースユーザパスワード」は「5.2.2 データベース管理ユーザの作成と権限の付与」で作成するユーザ名とパスワードと同じにする必要があります。アプリケーションサーバの設定を行う前に、決定しておいてください。

3.4.3 モジュールのコピーと展開

- (1) Generalist インストール CD-ROM の ApplicationServer フォルダ以下の Generalist.zip ファイルおよび GeneTools.zip を以下のフォルダにコピーします。

<WebLogic インストール先>¥webapps

- (2) Generalist.zip、GeneTools.zip を展開します。

以下のフォルダ構成になっていることを確認します。

GeneTools についても同様です。

```

<WebLogic のインストール先>¥webapps¥Generalist
├Generalist.war
└META-INF
   ├──application.xml
   └MANIFEST.MF

```

- (3) 展開先のフォルダの下にある Generalist.war フォルダを、以下では<Generalist インストールフォルダ>と記載します。また、GeneTools.war フォルダを<GeneTools インストールフォルダ>と記載します。

- (4) META-INF¥application.xml をテキストファイルで開き、以下の下線部をフォルダ名称に合わせて修正します。フォルダ名に変更がなければ以下の設定となります。

例: Generalist.war フォルダの場合

1	<?xml version="1.0"?>
2	
3	<application ...>
4	<display-name> Generalist </display-name>
5	<module>
6	<web>
7	<web-uri> Generalist.war </web-uri>
8	<context-root> Generalist </context-root>
9	</web>
10	</module>
11	</application>

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

4 行目 :display-name=<アプリケーション名>

7 行目 :web-uri=<アプリケーション名>.war

8 行目 :context-root =<アプリケーション名>

例: GeneTools.war フォルダの場合

1	<?xml version="1.0"?>
2	
3	<application ...>
4	<display-name> GeneTools </display-name>
5	<module>
6	<web>
7	<web-uri> GeneTools.war </web-uri>
8	<context-root> GeneTools </context-root>
9	</web>
10	</module>
11	</application>

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

4 行目 :display-name=<アプリケーション名>

7 行目 :web-uri=<アプリケーション名>.war

8 行目 :context-root =<アプリケーション名>



<重要>

- web-uri は「<アプリケーション名>.war」という表記で記載が必要です。
「.war」を消さないでください。

3.4.4 データベース接続の設定

(1) datasource.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%datasource.properties ファイルを開きます。下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	driverClassName=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
2	url=jdbc:oracle:thin:@ <u>dbgene:1521/geneSID</u>
3	username= <u>GRSYS</u>
4	password= <u>GRSYS</u>
5	maxActive= <u>100</u>
6	maxWait= <u>5000</u>
7	#maxActive_standalone=30
8	#maxWait_standalone=5000
9	
10	# Configuration for Observation Thread.
11	timeBetweenEvictionRunsMillis=300000
12	minIdle=0
13	testWhileIdle=False
14	minEvictableIdleTimeMillis=300000
15	numTestsPerEvictionRun=-1
16	#timeBetweenEvictionRunsMillis_standalone=300000
17	#minIdle_standalone=0
18	#testWhileIdle_standalone=False
19	#minEvictableIdleTimeMillis_standalone=300000
20	#numTestsPerEvictionRun_standalone=-1
21	connectionManagerMode= <u>0</u>
22	#Configuration for the interval of DB access
23	connKeepIntervalMillis=0
24	
25	testOnBorrow=true
26	validationQuery=SELECT SYSDATE FROM DUAL

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

2 行目 :url=jdbc:oracle:thin:@<データベースサーバのホスト名>:<ポート番号>/<SID>

3 行目 :username=<Generalist データベースユーザ>

4 行目 :password=<Generalist データベースユーザパスワード>

5 行目 :maxActive=<同時にデータベースに接続できる最大セッション数>

6 行目 :maxWait=<データベースに接続するときの待ち時間[ms]>

21 行目 :connectionManagerMode=<個人ログインのデータベース接続モード>

規定値は「0」です。「1」に変更することで個人ログインの同時接続最大数を増やすことができます。

「0」の場合はログインからログアウトまでの間、データベースへの接続を保持します。

「1」の場合はデータベースにアクセスする間のみ接続を行います。アクセスしない間は接続を行わないため、同時接続最大数は増やすことができますが、データベースアクセスごとに接続処理が必要となるため処理に時間がかかる場合があります。

3.4.5 メニューパラメータの設定

(1) menu.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%menu.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	#V4,CS,MO,WF
2	menu_V4Host=http://geneias/geneservlets/Web_Single_Sign_On?con=generalist
3	menu_CSHost=http://GeneralistCS/pages/common/Menu.do?SSO=true
4	menu_MOHost=http://GeneralistMO/pages/common/Menu.do?SSO=true
5	menu_WFHost=http://GeneralistWF/action_login.do?SSO=true
6	
7	#HelpFile
8	menu_HelpPathDefault= <u>http://GeneAS/Generalist/help/manualfiles/</u>
9	menu_HelpKakuchoshi=.html
10	
11	# FileUpload,Download
12	FILEPATH= <u>C:/Generalist/attachment/</u>
13	
14	# Logout(only SingleSignOn) 1:CloseWindow 0:MoveLogin
15	SsoLogoutCloseFlg= <u>1</u>
16	
17	# SSO PassCheck(only SingleSignOn) 1:Check 0:NoCheck
18	SsoPassCheck= <u>1</u>
19	
20	# PasswordUpdateFlg 1:PassUpdate 0:NoPassUpdate
21	passwordUpdateFlg= <u>1</u>
22	
23	# Error message(default:3)
24	defauslt_dispMsgCnt=3
25	
26	# V6 Host
27	menu_V6Host= <u>http://GeneralistV6</u>
28	
29	# 0:クライアント情報 (IP アドレス)を取得しない。 1:クライアント情報 (IP アドレス)を取得する。
30	IpCheckLoad=0

31	
32	# キーストアの別名
33	keyStoreAlias=tokenkeypair
34	
35	# ストアタイプキー
36	keyStoreStoretype=JKS
37	
38	# ストアパスワード
39	keyStoreStorepass=123456
40	
41	# キーストアファイルパス
42	keyStoreFilepath=v7/properties/tokenkeystore.jks
43	
44	#セッション名
45	#V7 環境と同一 AP 上に V6 環境を構築して V6 連携を利用する場合、変更が必要です。
46	#weblogic.xml に定義されている<cookie-name>の値と同じ値を設定してください。
47	#sessionName=GENE_JSSESSIONID
48	

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

- マニュアルを利用するために以下の設定が必要です。
8 行目: menu_HelpPathDefault=http://<アプリケーションサーバ名>/Generalist/help/manualfiles
- イベント機能で利用する添付ファイルを保存するパスです。
12 行目: FILEPATH=C:/Generalist/attachment/
- シングルサインオンでログインした場合にログアウト時に画面を閉じるかどうかを選択します。1:閉じる、0:ログイン画面に戻る
15 行目: SsoLogoutCloseFlg=1
- シングルサインオンでパスワードチェックを行うかどうかを選択します。0:チェックしない、1:チェックする
18 行目: SsoPassCheck=1

- パスワード有効期間が過ぎている場合、各ユーザがログイン時にパスワードを変更することを許可するかどうかを選択します。許可しないにした場合には管理者がユーザのパスワードを変更するまでそのユーザはログインできません。許可するにした場合、パスワード有効期間が過ぎたユーザがログインした際にパスワード変更画面に移動します。パスワード有効期間の設定についてはシステム管理マスタで行います。0:許可しない、1:許可する

21 行目 : passwordUpdateFlg=1



<重要>

- 「FILEPATH」の設定の最後には、「/」(スラッシュ)が必要です。
- ファイルのパスには日本語は使用できません。英字のフォルダを指定してください。

3.4.6 帳票出力の設定

- (1) reportedit.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%reportedit.properties ファイルをテキストエディタで開き、アプリケーションサーバの設定にあわせて、アプリケーションサーバのインストールフォルダおよび、base_url のアプリケーションサーバ名、および reportApplet_url のアプリケーション名を変更します。

1	system_root= <u>C:/oracle/wls12c/webapps/Generalist/Generalist.war</u> /WEB-INF/webdav/store/content/reports
2	definition_root=/reportdef/
3	result_root=/result/
4	access_import=1
5	temporary_root=/temp/
6	history_root=/history/
7	base_url= <u>http://geneias</u>
8	reportApplet_url= <u>Generalist</u> /applet
9	excel_export_pdf=false
10	multi_server_list=

3.4.7 非同期処理の設定

- (1) batchexecute.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%batchexecute.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	# Bach Execute Container Property
2	
3	# Temporary Files Folder

4	FILE_TMP_DIR= <u>C:/Generalist/batch_exe/file_upload/</u>
5	
6	# Output Files Folder
7	FILE_OUT_DIR=
8	
9	# Run History Save Days
10	HISTORY_SAVE_DAYS= <u>365</u>
11	
12	# Max Thread Count
13	MAX_THREAD_COUNT=5
14	
15	# Ikkatu Max Thread Count
16	IKKATU_MAX_THREAD_COUNT= <u>5</u>
17	
18	# Wait Time(secound)
19	WAIT_TIME=10
20	
21	# faces-config.xml FILES
22	FACES_CONFIG_FILES=faces-config-common.xml,faces-config-hr.xml,faces-config-menu.xml,faces-config-pr.xml,faces-config-reportedit.xml,faces-config-tool.xml,faces-config-viewedit.xml
23	
24	# Java VM options
25	JVM_OPTION=-Xmx512m -Djavax.xml.parsers.DocumentBuilderFactory=com.sun.org.apache.xerces.internal.jaxp.DocumentBuilderFactoryImpl
26	
27	# CLASS_PATH options
28	CLASS_PATH=
29	
30	# LOVS CONFIG FILES
31	LOVS_CONFIG_FILES=gene-config-lov.xml,gene-config-lov-addon.xml
32	
33	# UPLOAD TMP THRESHOLD
34	UPLOAD_TMP_THRESHOLD= <u>100000000</u>

- 非同期処理で利用する一時フォルダのパスです。
4行目:FILE_TMP_DIR=C:/Generalist/batch_exe/file_upload/
- 非同期処理で利用する最終ダウンロードファイル格納フォルダのパスです。デフォルトでは未設定です。別サーバの一時フォルダへ大量のファイルを出力する場合に設定してください。
7行目:FILE_OUT_DIR =C:/Generalist/batch_exe/file_out/

- 非同期処理の実行履歴の保存期間です。
10 行目: HISTORY_SAVE_DAYS=365
- 画面から一括実行を起動する際に指定する並行実行最大数です。
16 行目: IKKATU_MAX_THREAD_COUNT=5
- 一括実行で使用するファイルアップロード最大サイズです。単位は Byte です。
34 行目: UPLOAD_TMP_THRESHOLD=100000000



<重要>

- 「FILE_TMP_DIR」および「FILE_OUT_DIR」の設定の最後には、「/」(スラッシュ)が必要です。
- ファイルのパスには日本語は使用できません。英字のフォルダを指定してください。

3.4.8 高負荷時の機能制限設定

アプリケーションサーバの使用メモリが設定した閾値を越えた場合に、ログインおよび人事検索からの Excel 帳票出力を制限することができます。上記の機能を利用する場合には、以下の設定をおこなってください。



<重要>

- 機能制限をおこなわない場合には、本設定は不要です。

(1) web.xml ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥web.xml ファイルをテキストエディタで開き、111、124 行目のコメントアウトを削除してください。

(以下の太字の部分削除してください。)

110	<!-- System Check Filter -->
111	<!--
112	<filter>
113	<filter-name>SystemCheckFilter</filter-name>
114	<filter-class>jp.co.toshiba_sol.generalist.common.filter.GeneSystemCheckFilt
115	er</filter-class>
	</filter>
116	<filter-mapping>
117	<filter-name>SystemCheckFilter</filter-name>
118	<url-pattern>/faces/jsp/menu/login/login.jsp</url-pattern>
119	</filter-mapping>
120	<filter-mapping>

121	<filter-name>SystemCheckFilter</filter-name>
122	<url-pattern>/faces/jsp/menu/login/singleSignOn.jsp</url-pattern>
123	</filter-mapping>
124	==>



<重要>

- 上記以外のパラメータはシステムで固定のパラメータです。変更しないでください。
- ファイル変更時には文字コードは『UTF-8』で保存してください。コメント等に日本語を入力しない場合には文字コードの指定は不要です。

(2) memorychecker.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%memorychecker.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	# Configuration for Default.
2	
3	# Whether to check memory amount used.
4	memoryCheckFlag= <u>0</u>
5	
6	# Threshold amount used not to login, Please set the value on percentage.
7	memoryThreshold= <u>80</u>
8	noCheckWord=yes
9	#msg_memoryCheckError=
10	#msg_retryLogin=
11	
12	
13	# Configuration for GeneSystemCheckFilter only.
14	#GeneSytemCheckFilter_memoryCheckFlag=0
15	#GeneSytemCheckFilter_memoryThreshold=80
16	#GeneSytemCheckFilter_msg_memoryCheckError=
17	#GeneSytemCheckFilter_msg_retryLogin=
18	
19	
20	
21	# Configuration for GeneSystemCheckFilter only.
22	#JSI00700_memoryCheckFlag=0
23	#JSI00700_memoryThreshold=80
24	JSI00700_msg_memoryCheckError=¥u30B5¥u30FC¥u30D0¥u304C¥u6DF7¥u96D1 ¥u3057¥u3066¥u3044¥u308B¥u305F¥u3081Excel¥u51FA¥u529B¥u306F¥u884C¥u 3048¥u307E¥u305B¥u3093¥u3002

25	JSI00700_msg_retryLogin=¥u3057¥u3070¥u3089¥u304F¥u3057¥u3066¥u304B¥u3089¥u518D¥u5B9F¥u884C¥u3059¥u308B¥u304BCSV¥u30D5¥u30A1¥u30A4¥u30EB¥u51FA¥u529B¥u306B¥u5909¥u66F4¥u3057¥u3066¥u304F¥u3060¥u3055¥u3044¥u3002
26	

- メモリの閾値を超えた場合にログインおよび機能実行の制御を行うかどうかを設定します。制御をしない場合は「0」を設定します。制御する場合は「1」を設定します。システム全体に対する設定になります。

4 行目 :memoryCheckFlag=0

- アプリケーションサーバに設定するメモリの閾値です。パーセントで設定します。「80」を設定した場合、メモリ使用量が 80%を超えている状態で制御がかかります。システム全体に対する設定になります。

7 行目 :memoryThreshold=80

(3) 人事検索の Excel 出力を個別に制御するためには以下の設定が必要です。

- デフォルトではシステム全体の閾値を参照するように設定されていますので、人事検索の Excel 出力を個別に設定できるようにします。22 行目、23 行目の「#」を削除してください。

22 行目 :~~#~~JSI00700_memoryCheckFlag=0

23 行目 :~~#~~JSI00700_memoryThreshold=80

- メモリの閾値を超えた場合に人事検索の Excel 出力の制御を行うかどうかを設定します。制御をしない場合は「0」を設定します。制御する場合は「1」を設定します。

22 行目 :JSI00700_memoryCheckFlag=1

- 人事検索の Excel 出力に設定するメモリの閾値です。パーセントで設定します。「80」を設定した場合、メモリ使用量が 80%を超えている状態で制御がかかります。

23 行目 :JSI00700_memoryThreshold=80

3.4.9 ログ出力先の設定

(1) ログ設定ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥logback.xml ファイルをテキストエディタで開き、以下の行にある出力フォルダの設定を任意のフォルダに変更します。フォルダおよびログファイルは実行時に自動的に作成されます。

1	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
2	
3	<configuration>
4	
5	<property name="log.path" value="C:/Generalist/logs" />
6	(以降、省略)

(2) 一括実行／非同期処理用ログ設定ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥logbackbatch.xml ファイルをテキストエディタで開き、以下の行にある出力フォルダの設定を任意のフォルダに変更します。フォルダおよびログファイルは実行時に自動的に作成されます。

1	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
2	
3	<configuration>
4	
5	<property name="log.path" value="C:/Generalist/logs" />
6	(以降、省略)



<重要>

- ファイル変更時には文字コードは「UTF-8」で保存してください。コメント等に日本語を入力しない場合には文字コードの指定は不要です。

3.4.10 アプリケーションパラメータの設定

- (1) <Generalist インストールフォルダ>¥Generalist¥WEB-INF¥web.xml をテキストエディタで開き、以下の部分を編集します。

13～32 行目

13	<!-- User Setting Parameters -->
14	<context-param>
15	<param-name>common-location-gene-install-folder</param-name>
16	<param-value>C:¥oracle¥wls12c¥webapps¥Generalist¥Generalist.war¥</param-value>
17	</context-param>
18	<context-param>
19	<param-name>DOWNLOAD_PATH</param-name>
20	<param-value>C:¥Generalist¥temp¥download¥</param-value>
21	</context-param>
22	<context-param>
23	<param-name>UPLOAD_PATH</param-name>
24	<param-value>C:¥Generalist¥temp¥upload¥</param-value>
25	</context-param>
26	
27	...
28	<context-param>
29	<param-name>MNEvidence-WorkFolder</param-name>
30	<param-value>C:¥Generalist¥temp¥upload¥</param-value>
31	</context-param>
32	...

- common-location-gene-install-folder: <Generalist インストールフォルダ>を指定します。
- DOWNLOAD_PATH: ファイルのダウンロードで使用する一時フォルダです。アプリケーションサーバ上の任意のフォルダを指定してください。
- UPLOAD_PATH: ファイルのアップロードで使用する一時フォルダです。アプリケーションサーバ上の任意のフォルダを指定してください。
- MNEvidence-WorkFolder: 個人番号登録時にエビデンスファイルのアップロードで使用する一時フォルダです。アプリケーションサーバ上の任意のフォルダを指定してください。



<重要>

- 上記以外のパラメータはシステムで固定のパラメータです。変更しないでください。
- ファイル変更時には文字コードは『UTF-8』で保存してください。コメント等に日本語を入力しない場合には文字コードの指定は不要です。
- 各フォルダの設定の最後には「¥」が必要です。各フォルダの設定の最後に「¥」が入って

いることを確認してください。

- 各フォルダに対して、アプリケーションサーバのサービスを起動するユーザ(通常は、「ローカル システム」)の書き込み権限があることを確認してください。
- 大量のファイル取込処理を行った際にエラーとなり取込が行えない場合があります。その場合は application.properties の項目「uploadMemorySize」の値を増やしてください(初期値は 10k(キロバイト)です)。

- (2) <Generalist インストールフォルダ>%Generalist%WEB-INF%classes%properties%application.properties をテキストエディタで開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	# ファイルアップロード時のメモリサイズ(10K)
2	uploadMemorySize=10240
3	# アップロード可能な最大サイズ(15M)
4	uploadSizeMax=15728640
5	# アップロードするファイル毎の最大サイズ(5M)
6	uploadFileSizeMax=5242880
7	# プロファイルのインデックスファイルの格納場所
8	indexPath= <u>C:%Generalist%indexes</u>

- プロファイルのインデックスファイルとは人材検索で利用する情報です。
8 行目 : indexPath= C:%Generalist%indexes

3.4.11 ファイル変換の設定

- (1) fileconverter.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%fileconverter.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

12	# ドライバクラス名
13	driverClassName=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
14	# jdbc:subprotocol:subname 形式のデータベース URL
15	url=jdbc:oracle:thin:@ <u>dbgene:1521/geneSID</u>
16	# 接続ユーザ名
17	username= <u>GRSYS</u>
18	# 接続パスワード
19	password= <u>GRSYS</u>

3.4.12 ヘルプファイルのインストール

- (1) ヘルプファイルのコピー

Generalist の<インストールメディア>%Manual%manual.zip ファイルを解凍します。

解凍したファイルを以下のフォルダにコピーします。

コピー先:<Generalist のインストールフォルダ>%help

3.4.13 Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用する場合

- (1) 「付録 H Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用するための設定」を参照し、設定してください。

3.4.14 電子申請の設定

- (1) egov-beans-datasources.xml ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥egov-beans-datasources.xml ファイルを開きます。下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
	・
	(中略)
	・
27	<property name="url">
28	<value>jdbc:oracle:thin:@ <u>dbserver:1521/GENE</u> </value>
29	</property>
30	<property name="username">
31	<value> <u>GRSYS</u> </value>
32	</property>
33	<property name="password">
34	<value> <u>GRSYS</u> </value>
35	</property>
	・
	(中略)
	・
64	</beans>

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

28 行目 : jdbc:oracle:thin:@<データベースサーバのホスト名>:<ポート番号>/<SID>

31 行目 : <value><Generalist データベースユーザ></value>

34 行目 : <value><Generalist データベースユーザパスワード></value>

(2) egov-application.properties の編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥egov-application.properties ファイルを開きます。下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	#PROXY
2	proxy.flag= <u>0</u>
3	proxy.server.host=
4	proxy.server.port=
	•
	(中略)
	•
9	#EgovService
10	egov.send.outFolder= <u>C:¥¥Generalist¥¥egov¥¥Applies¥¥</u>
11	egov.send.zipFolder= <u>C:¥¥Generalist¥¥egov¥¥zip¥¥</u>
	•
	(中略)
	•
48	authRequestBody=<?xml version="1.0" ~
49	#0:Non auto/1:Auto
50	auto.download.finish= <u>1</u>
	•
	(中略)
	•
77	#REDIRECT GENE SERVER
78	egov2.generalist.server.host= <u>http://geneias:7003/Generalist</u>

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

2 行目 : proxy.flag=プロキシサーバの利用有無

規定値は「0」で、プロキシサーバを利用しない設定です。

プロキシサーバを利用する場合は「1」に変更し、「proxy.server.host」「proxy.server.port」にプロキシサーバのホスト名・ポート番号を設定してください。

3 行目 : proxy.server.host=プロキシサーバのホスト名

※proxy.flag を 1 に変更した場合に設定してください。

4 行目 : proxy.server.port=プロキシサーバのポート番号

※proxy.flag を 1 に変更した場合に設定してください。

10 行目 : egov.send.outFolder=電子申請時に利用するサーバ上の一時フォルダ1

11 行目 : egov.send.zipFolder=電子申請時に利用するサーバ上の一時フォルダ2

50 行目 : auto.download.finish=取得完了自動送信フラグ

1: 自動送信する (「取得完了」ボタンは非表示)

0: 自動送信しない (「取得完了」ボタンを表示)

規定値は「1」です。電子申請 公文書・コメント一覧ダイアログ画面に「取得完了」ボタンを表示する場合に設定してください。

78 行目 : egov2.generalist.server.host=http://<アプリケーションサーバのホスト名>:<ポート番号>/<アプリケーション名>

電子申請業務を行うクライアント PC から、Generalist を起動する際の URL を記載します。ご利用の環境に合わせてアプリケーションサーバ名、ポート番号、アプリケーション名を設定してください。ログイン URL が http://geneias:7003/Generalist の場合、各項目は以下のとおりです。

- アプリケーションサーバのホスト名geneias
- ポート番号7003
- アプリケーション名Generalist



<重要>

- 「egov.send.outFolder」「egov.send.zipFolder」には存在するフォルダを指定してください。送信時の一時フォルダとなります。送信後にファイルは削除します。
- フォルダのパスには日本語は使用できません。半角英数字のフォルダを指定してください。半角スペースは利用しないでください。
- フォルダの区切りには、「¥¥」を使用してください。フォルダの最後にも「¥¥」を付けてください。

(3) ルート証明書の設定

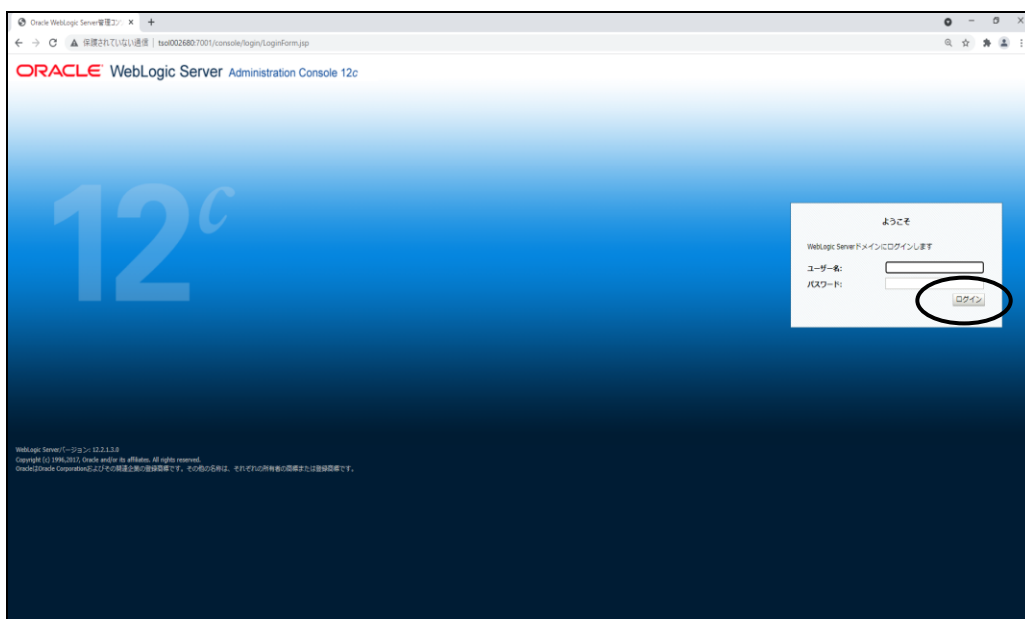
マイナポータル(健康保険組合向け)と暗号化して通信を行うに当たり、CISCO 社の中間証明書を設定していただく必要があります。

以下手順に沿って、ご利用の WebLogic が使用している Java のインストールフォルダを確認してください。

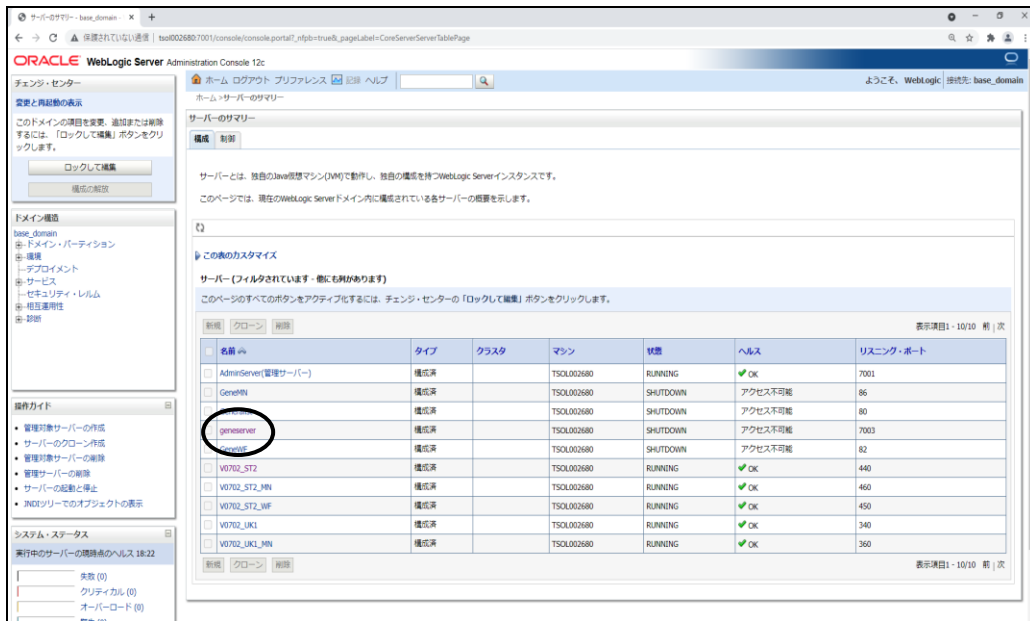
- ① 下記の URL を入力し、管理コンソールを開きます。

http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console

WebLogic のインストール時に設定したユーザ名とパスワードを使用し、ログインします。



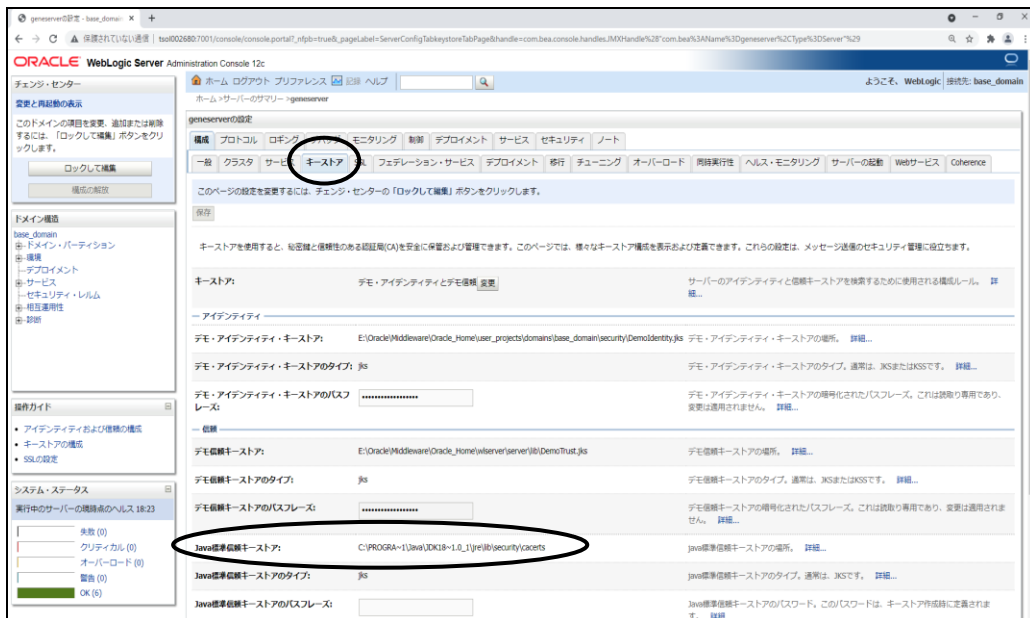
- ② 『サーバーのサマリー』画面を開き、ご利用のサーバー名をクリックしてください。
 サーバー名は「3.3.4 Oracle WebLogic Server の構成」の(8)を実施時に作成したサーバー名になります。(手順どおりに作成している場合は「geneserver」となります。)



- ③ タブのキーストアをクリックし、「Java 標準信頼キーストア」に記載されている Java インストールフォルダのパスを確認してください。

例) 「Java 標準信頼キーストア」に下記のように記載されていた場合は太字の部分 Java インストールフォルダのパス(以降、Java インストールフォルダと記載)となります。

C:\PROGRA~1\Java\JDK18~1.0_1\jre\lib\security\cacerts



ここからの作業はアプリケーションサーバ上で行う必要があります。

- ① アプリケーションサーバにログインします。
- ② エクスプローラを起動し、Java インストールフォルダに移動します。
＜Java インストールフォルダ＞¥jre」の直下に「＜インストールメディア＞¥Utility¥C41.電子申請用証明書¥ciscoumbrella.cer」ファイルをコピーします。

- ③ コマンドプロンプトを起動し、＜Java インストールフォルダ＞¥jre にカレントディレクトリを移動します。

例) 下記は、Java インストールフォルダが「C:¥PROGRAMFILES¥Java¥JDK18~1.0_1」とした想定で記載しています。

```
C:¥Users¥Administrator>cd /d C:¥PROGRAMFILES¥Java¥JDK18~1.0_1¥jre
C:¥Program Files¥Java¥jdk1.8.0_181¥jre>
```

※下線部分は環境に合わせて変更してください。

- ④ 下記のコマンドを実行します。

```
bin¥keytool△-import△-trustcacerts△-file△ciscoumbrella.cer△-keystore△lib¥security¥cacerts△-storepass△changeit△-alias△ciscoumbrellaca
```

※ 表記上は折り返していますが、上記コマンドは、1行で続けて入力してください。

※ △は半角スペースです。

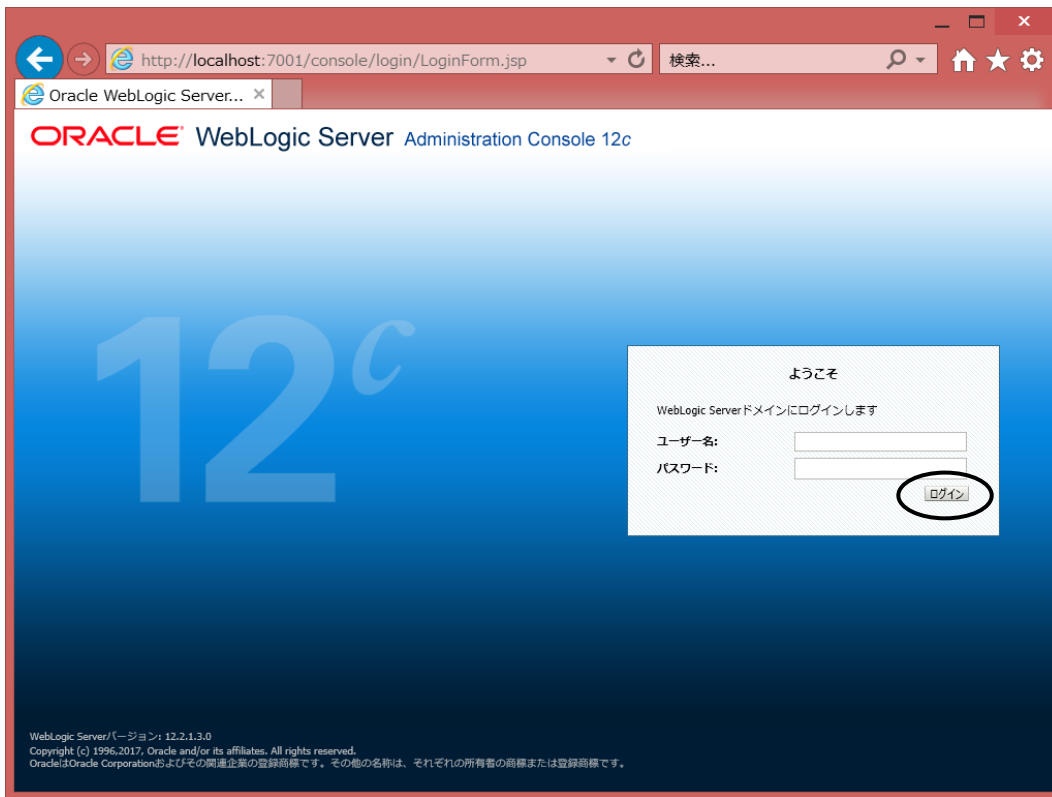
- ⑤ 証明書を信頼してよいかを聞かれるので、「はい」を入力し Enter キーを押してください。「証明書がキーストアに追加されました」と表示されることを確認してください。確認後、コマンドプロンプトを閉じます。

3.4.15 アプリケーションサーバへのインストール

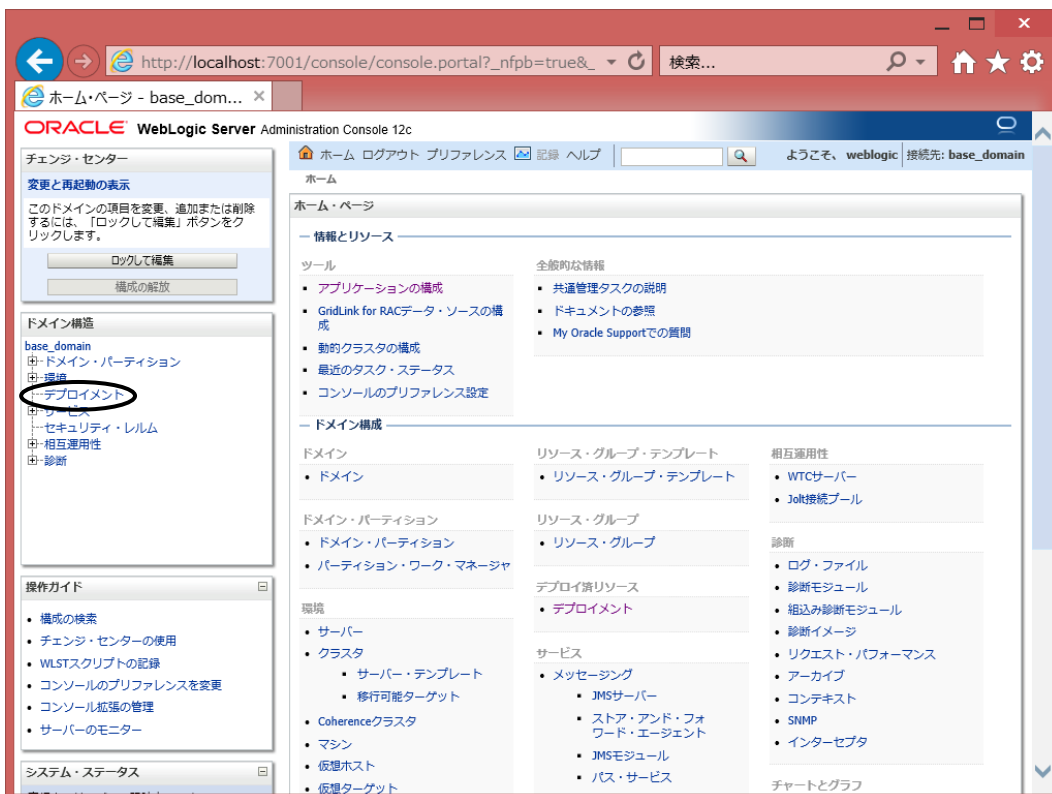
(1) 以下の URL を入力し、管理コンソールを開きます。

http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console

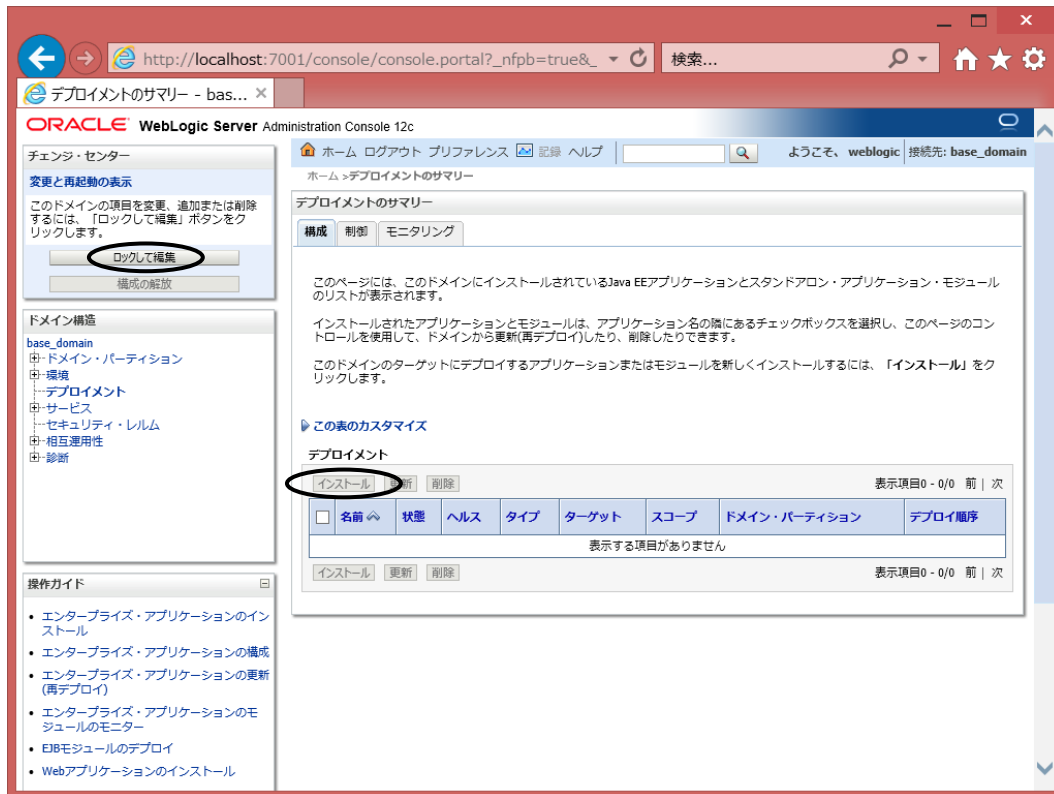
WebLogic のインストール時に設定したユーザ名とパスワードを使用し、ログインします。



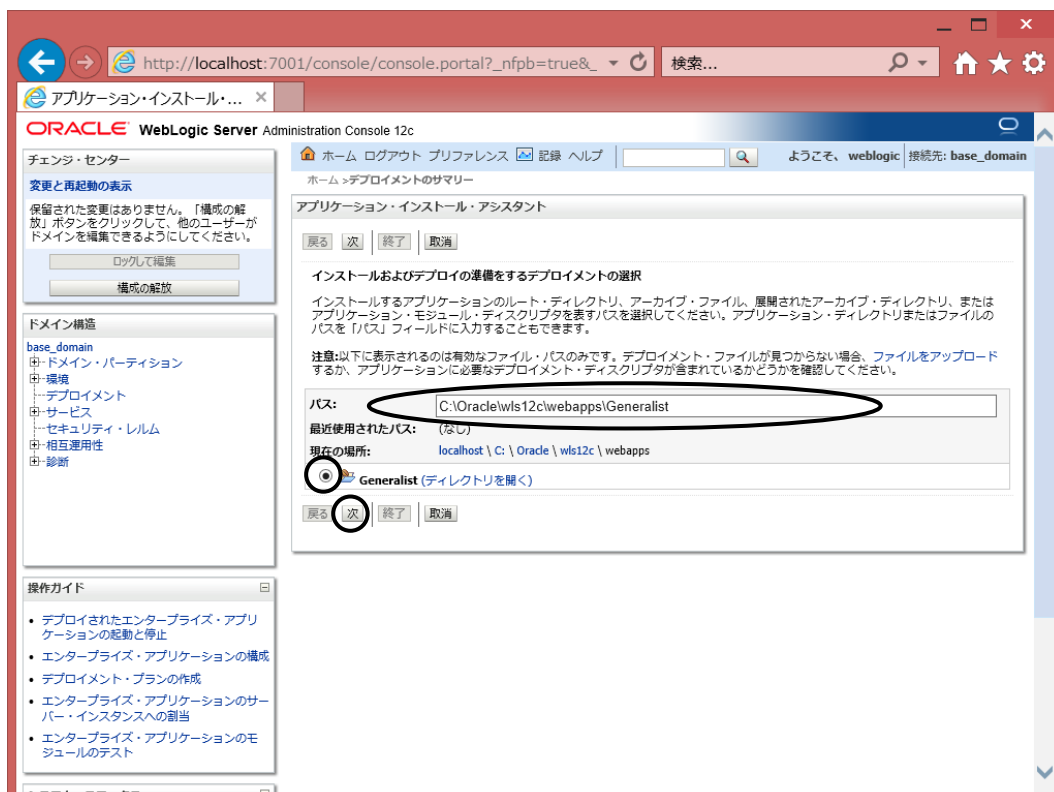
(2) ログインすると『ホーム』画面が表示されます。左に表示される『ドメイン構造』から『デプロイメント』を選択します。



- (3) 『デプロイメントのサマリー』画面が表示されます。画面左上の『ロックして編集』をクリックし、『インストール』をクリックします。
- ※ 『ロックして編集』ボタンはサーバの設定によって表示されないことがあります。表示されない場合は、ボタンをクリックする必要はありません。



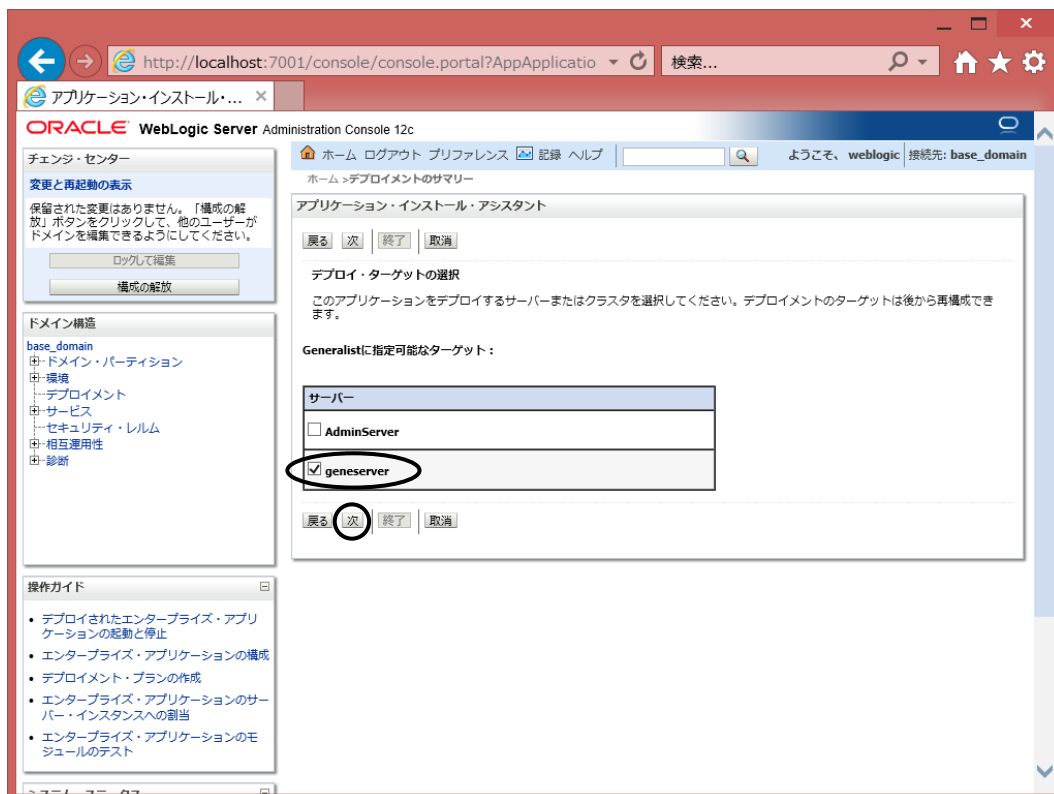
- (4) 『アプリケーション・インストール・アシスタント』画面が表示されます。パスに 3.4.3 で Generalist のモジュールを展開したフォルダを指定します。パスを指定すると、アプリケーション選択のラジオボタンが表示されるため、Generalist を指定し、『次』をクリックします。



- (5) 以下の画面が表示されます。『このデプロイメントをアプリケーションとしてインストールする』が選択されていることを確認し、『次』をクリックします。



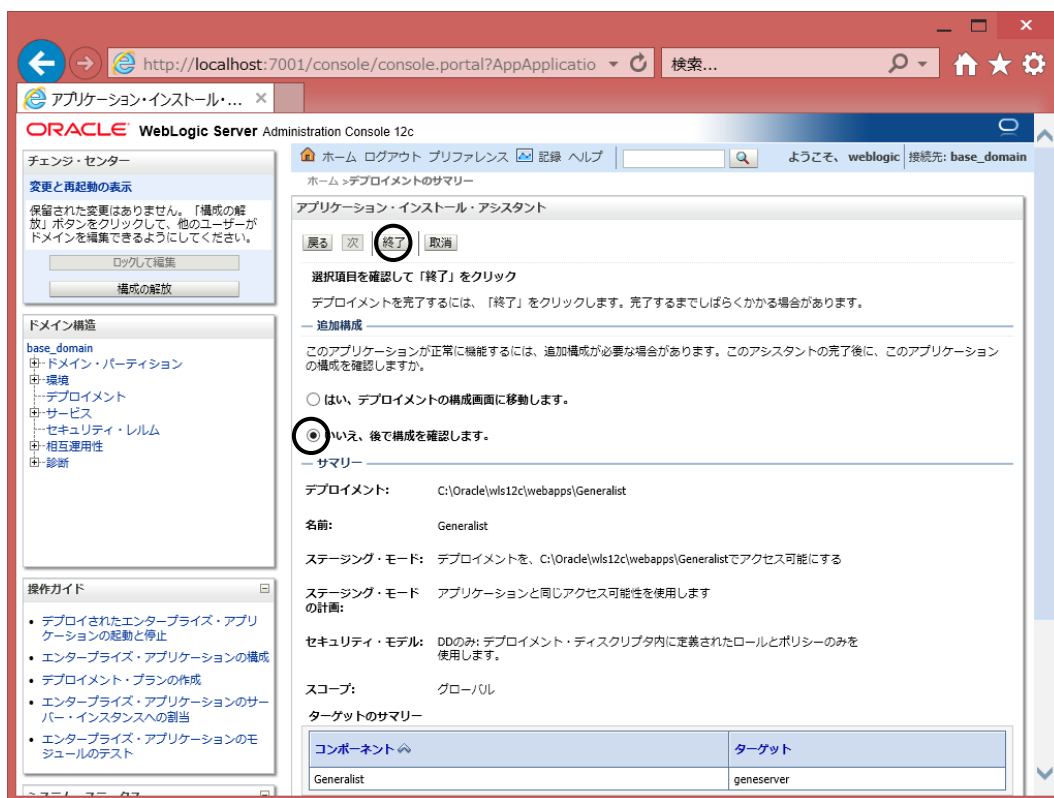
- (6) 以下の画面が表示されます。『3.3.4 Oracle WebLogic Server の構成』で設定したサーバーを選択し、『次』をクリックします。



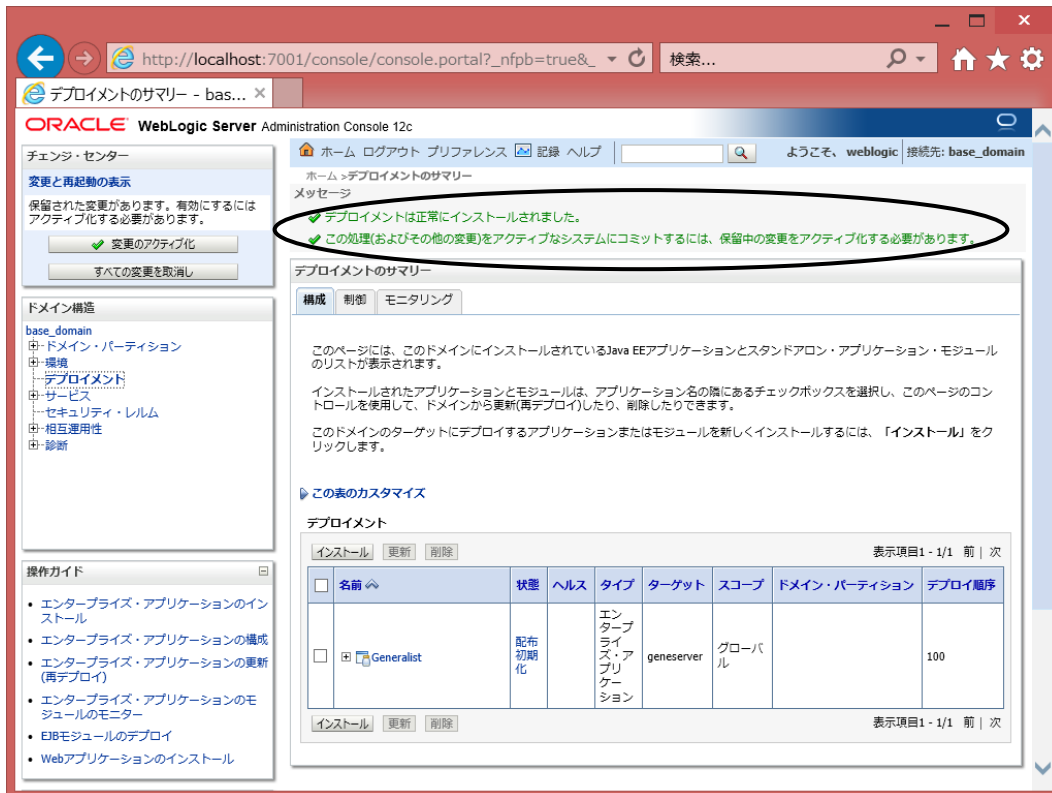
- (7) 以下の画面が表示されます。『デプロイメントを次の場所からアクセス可能にする』にチェックを入れます。内容を確認し、『次』をクリックします。



- (8) 以下の画面が表示されます。『追加構成』で『いいえ、後で構成を確認します。』を選択し、『終了』をクリックします。



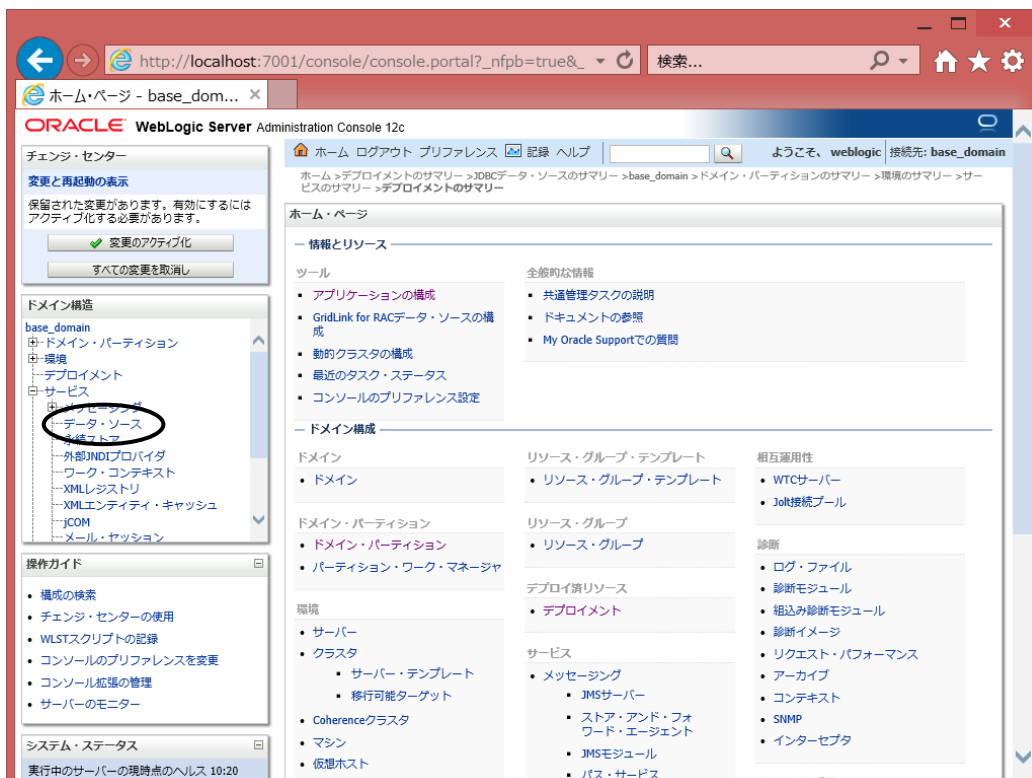
- (9) インストールが完了すると『デプロイメントのサマリー』画面へ戻り、上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。



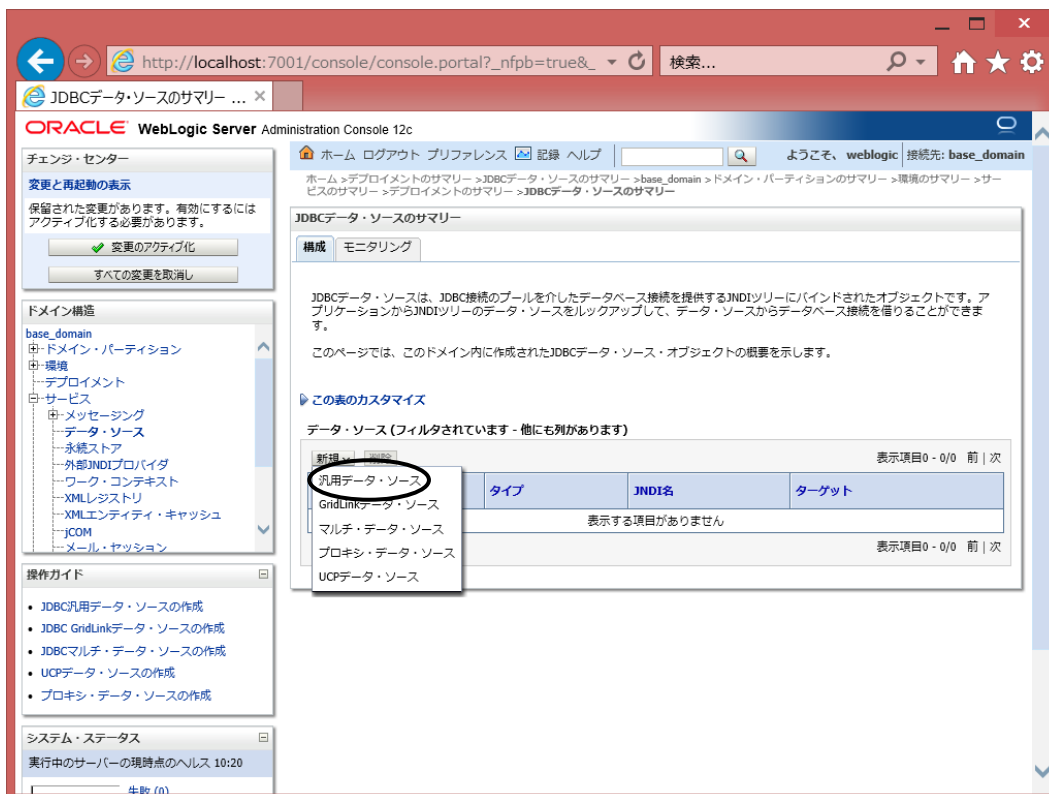
3.4.16 GeneTools モジュールのインストール

データソースの設定を行います。

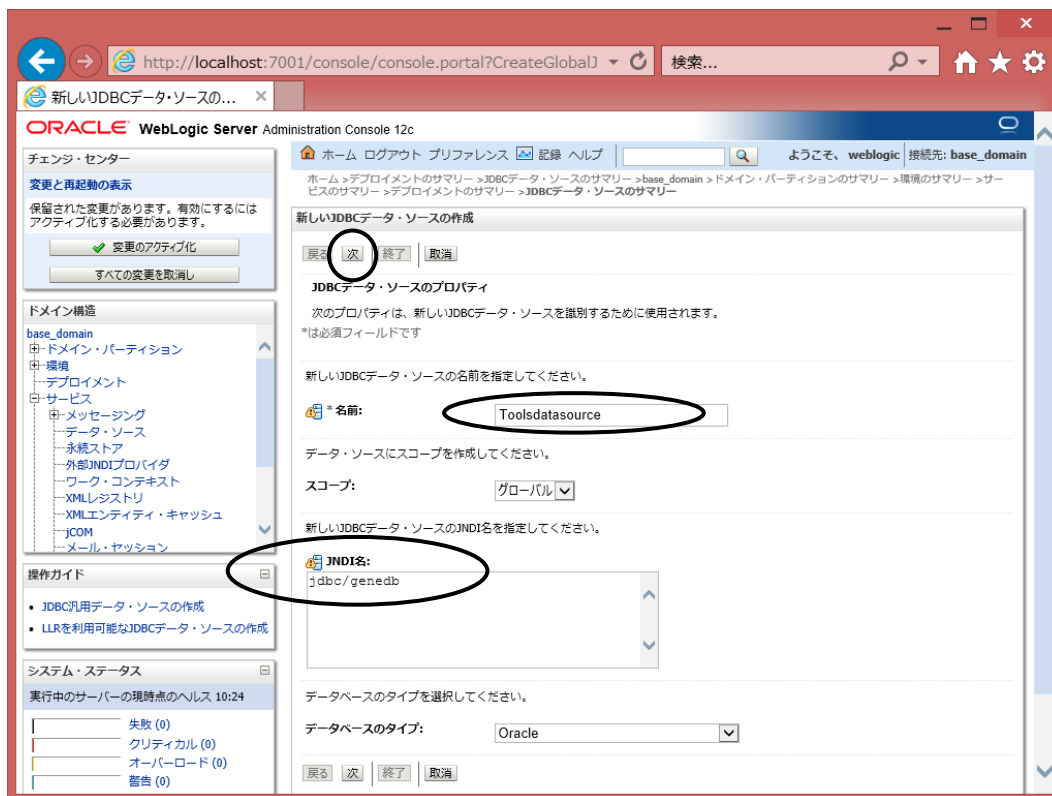
- (1) WebLogic Server 管理コンソール『ホーム』画面から、『ドメイン構造』の『データ・ソース』を選択します。



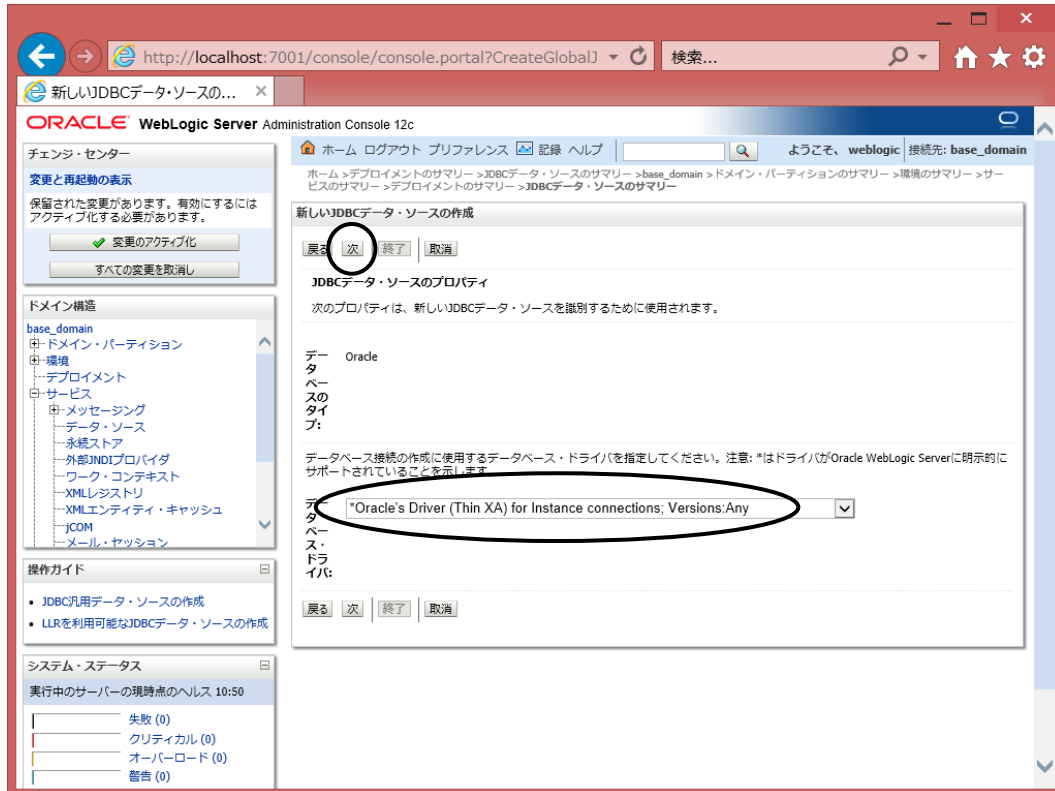
- (2) 新規のデータ・ソースを作成します。『新規』ボタンをクリックし、汎用データ・ソースを選択します。



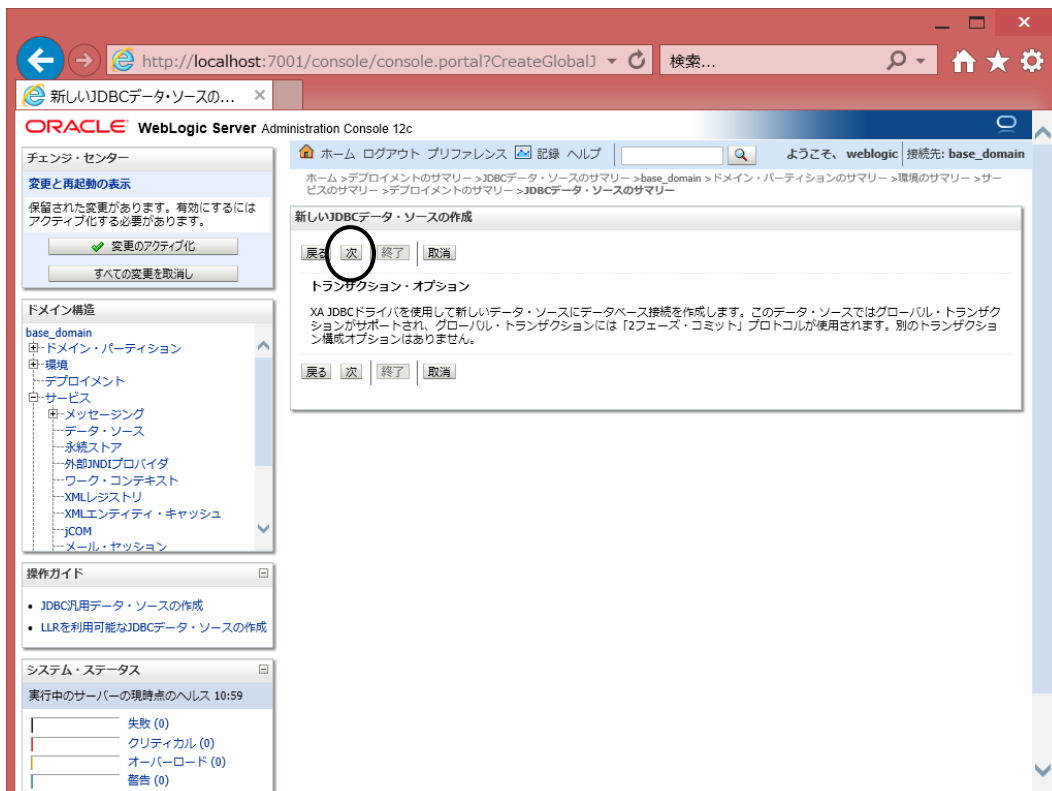
- (3) データ・ソース名、JNDI名(jdbc/genedb)を入力し、『次』ボタンを押下します。ここでは、データ・ソース名『Toolsdatasource』とします。



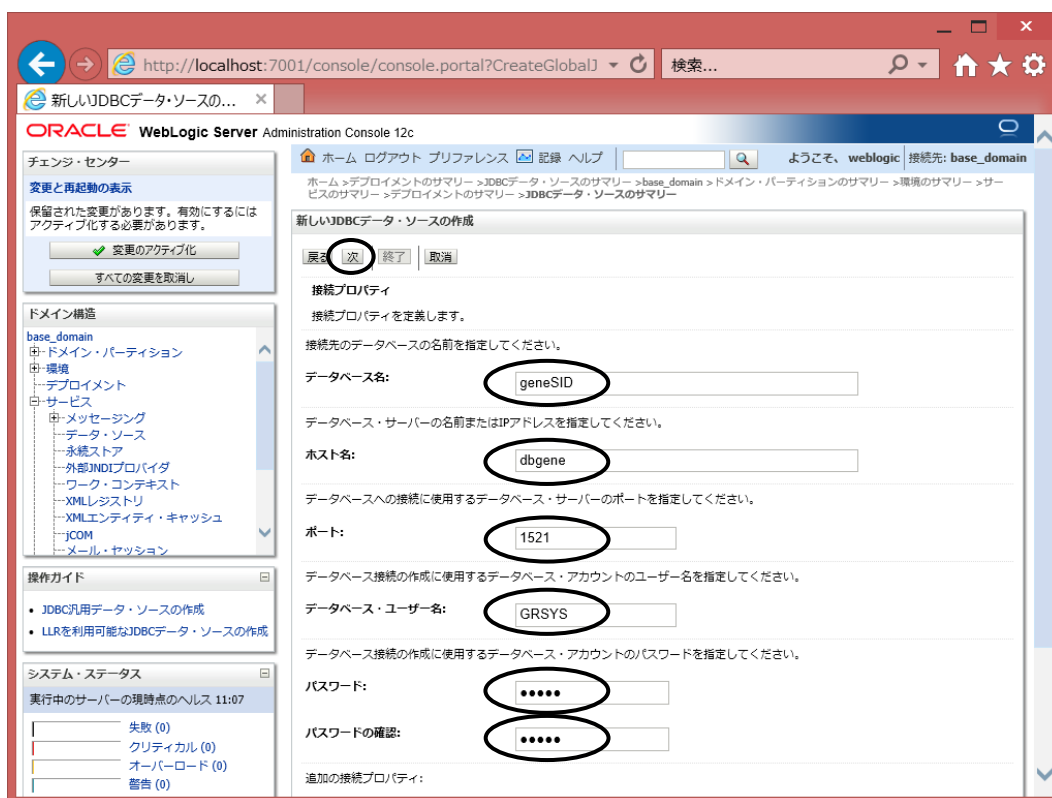
- (4) データベース・ドライバ:『*Oracle's Driver (Thin XA) for Instance connections; Versions:Any』を選択し、『次』ボタンを押下します。



- (5) 『次』ボタンを押下します。



- (6) 接続プロパティを定義します。ここでは、データベース名「geneSID」、ホスト名「dbgene」、ポート「1521」、データベースユーザ名「GRSYS」、パスワード「GRSYS」とします。入力後、『次』ボタンをクリックします。



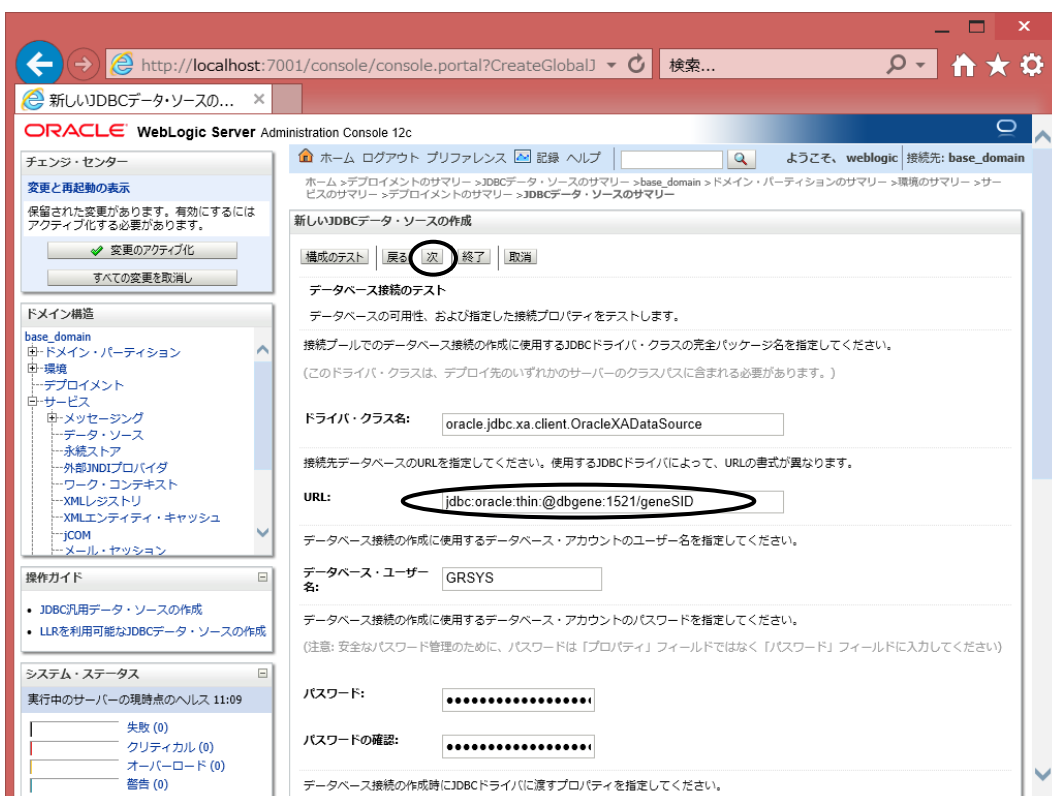
- (7) URL の確認を行います。

URL の欄を修正してください。

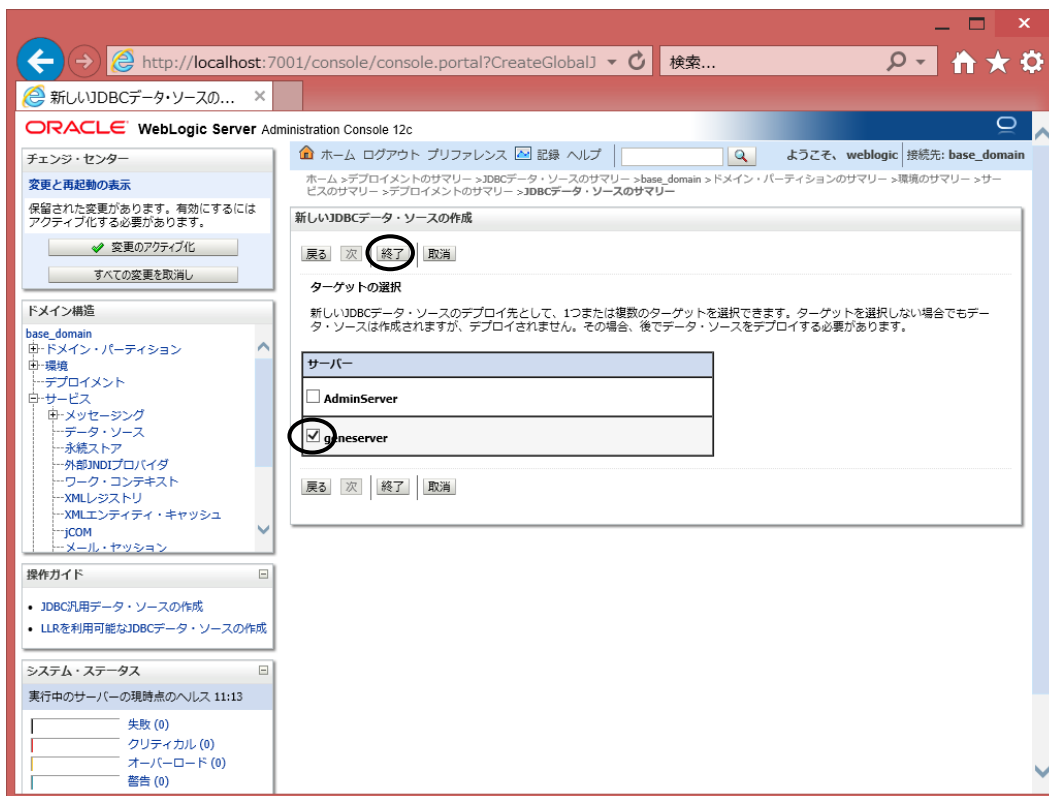
旧:「jdbc:oracle:thin:@<データベースサーバのホスト名>:<ポート番号>:<SID>」

新:「jdbc:oracle:thin:@<データベースサーバのホスト名>:<ポート番号>:<SID>」

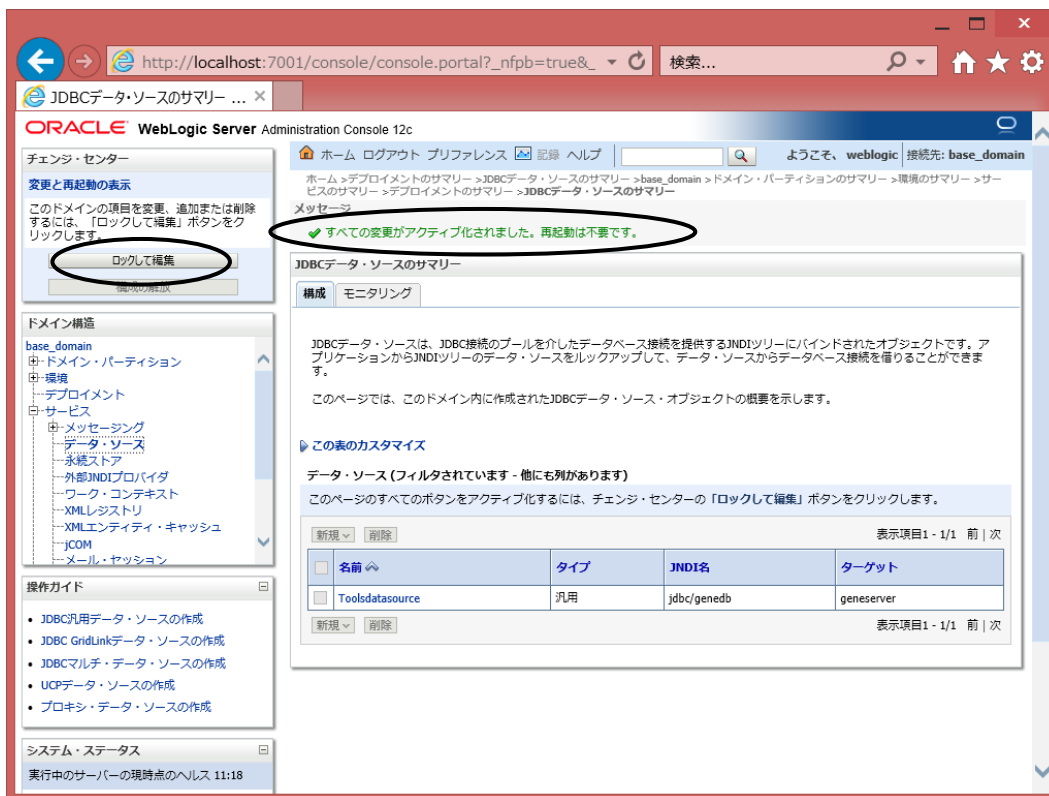
設定修正後、『次』ボタンを押下します。



- (8) ターゲットを選択します。『geneserver』横のチェックボックスにチェックを入れ、『終了』を押下します。



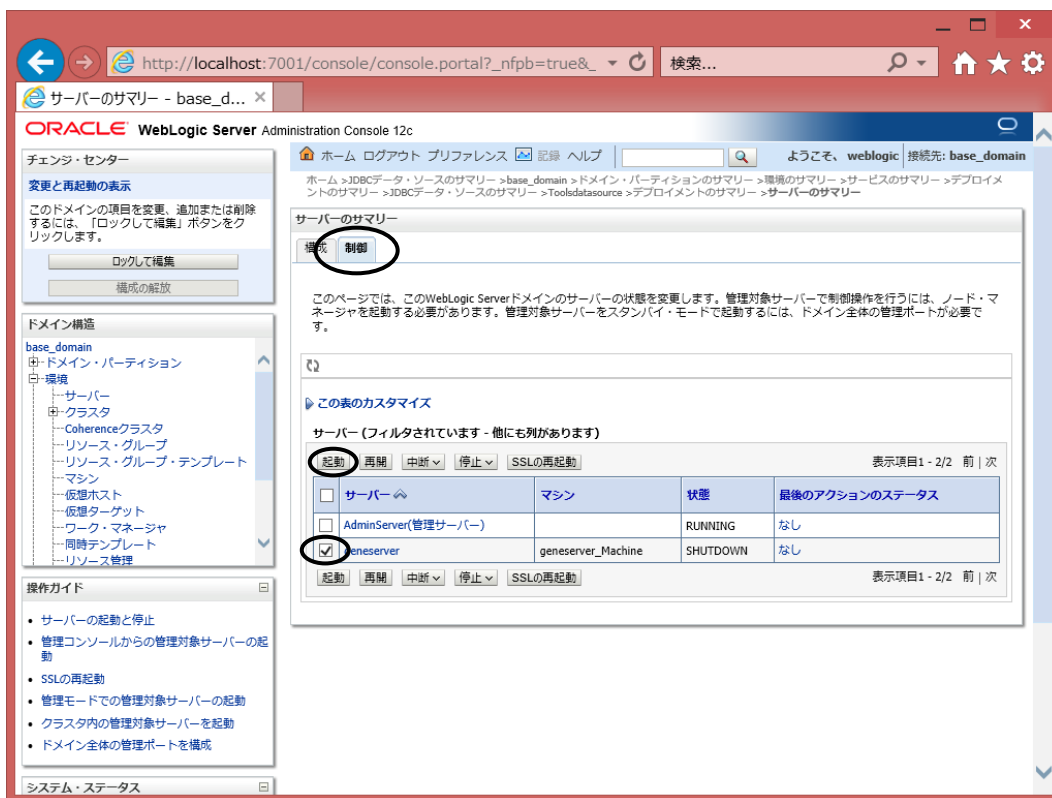
- (9) 変更のアクティブ化を行うと、正常に設定されると画面上部のメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。データ・ソースの設定は完了です。



(10) デプロイメントを行います。手順は(3.4.15 アプリケーションサーバへのインストール)と同様です。モジュールを展開したフォルダパスを GeneTools 用に置き換えて実行してください。実行後は『変更のアクティブ化』を忘れずに行ってください。

3.4.17 アプリケーションの起動

(1) サーバーの起動を行います。サーバーの起動は『サーバーのサマリー』画面から行えます。『制御』タブを選択します。起動したいサーバー (geneserver) にチェックをいれ、『起動』ボタンをクリックしてください。



以下のようなメッセージが表示された場合は、ノード・マネージャの起動が必要です。

メッセージ : 「サーバー<サーバー名>では、マシン<マシン名>に関連付けられているノード・マネージャにアクセスできません。」

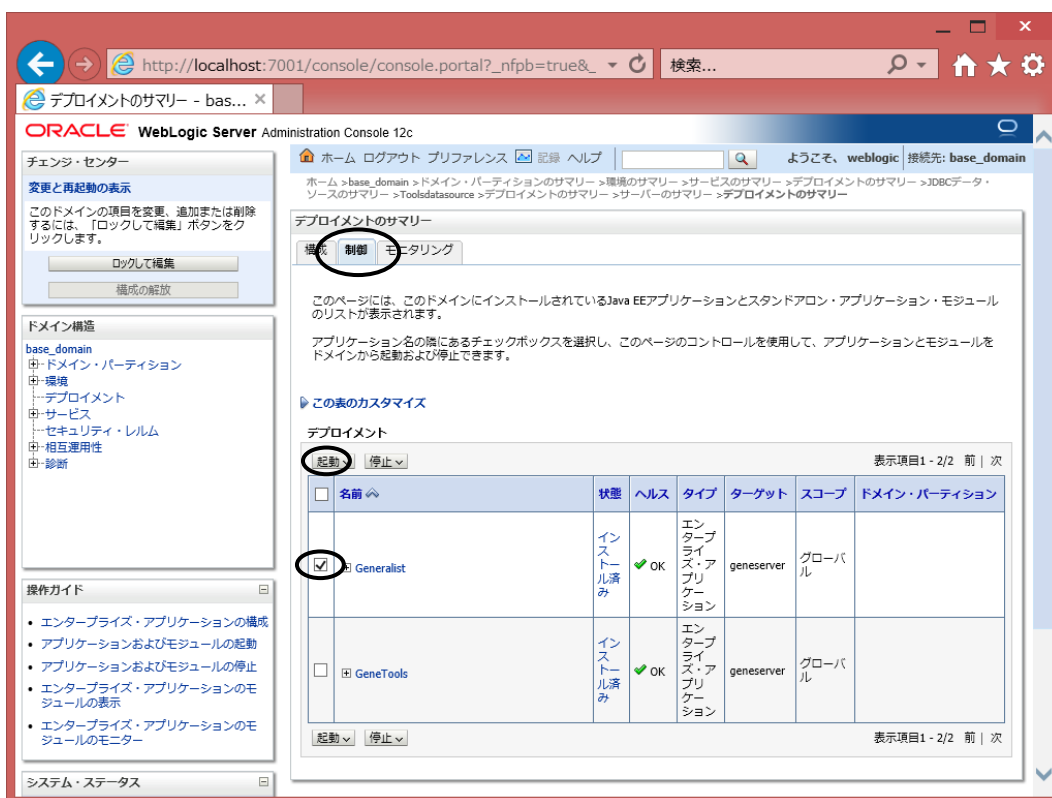
ノード・マネージャの起動はコマンドプロンプトから、以下のスクリプトを実行してください。

```
<WebLogic インストール時ドメイン作成したフォルダ>\bin\startNodeManager.cmd
```

ドメインを作成したフォルダはデフォルトでは以下の通りです。

```
<Oracle ホームディレクトリ>\user_projects\domains\base_domain
```

- (2) アプリケーションの起動を行います。アプリケーションの起動は『デプロイメントのサマリー』画面から行えます。『制御』タブを選択します。起動したいアプリケーションにチェックをいれ、『起動』ボタンをクリックし、『すべてのリクエストを処理』をクリックしてください。



- (3) 起動 URL は以下のとおりです。

Generalist : <http://<アプリケーションサーバの URL>:<ポート番号>/Generalist/>

GeneTools : <http://<アプリケーションサーバの URL>:<ポート番号>/GeneTools/servlet/>

URL 例

<http://geneias:7003/Generalist/>

3.5 Oracle WebLogic Server の設定

Generalist システムを Web 構成でご利用いただくために必要な Oracle WebLogic Server (以下 WebLogic) の設定手順を説明します。

3.5.1 起動パラメータの設定

- (1) WebLogic の管理コンソールを開き、『ドメイン構造』から『環境』→『サーバー』と選択します。その後、サーバーの一覧から Generalist 用のサーバーのリンクをクリックします。

The screenshot shows the Oracle WebLogic Server Administration Console. The left-hand pane displays the 'Domain Structure' (ドメイン構造) with 'Servers' (サーバー) selected and circled in red. The main content area shows the 'Servers Summary' (サーバーのサマリー) page. Below the introductory text, there is a table of servers. The 'geneserver' entry is circled in red.

名前	タイプ	クラス	マシン	状態	ヘルス	リスニング・ポート
AdminServer(管理サーバー)	構成済			RUNNING	OK	7001
geneserver	構成済		geneserver_Machine	RUNNING	OK	7003

(2) 『構成』タブの中にある『サーバーの起動』タブを選択します。

The screenshot displays the Oracle WebLogic Server Administration Console interface. The browser address bar shows the URL: `http://localhost:7001/console/console.portal?_nfpb=true&`. The page title is "geneserverの設定 - base...".

The navigation pane on the left includes sections for "チェンジ・センター", "ドメイン構造", "操作ガイド", and "システム・ステータス". The "ドメイン構造" section shows a tree view with "base_domain" expanded to "サーバー".

The main content area is titled "geneserverの設定" and features a breadcrumb trail: "ホーム > 環境のサマリ > サービスのサマリ > デプロイメントのサマリ > JDBCデータ・ソースのサマリ > Toolsdatasource > デプロイメントのサマリ > サーバーのサマリ > デプロイメントのサマリ > サーバーのサマリ > geneserver".

The "構成" tab is selected and highlighted with a red circle. Below it, the "サーバーの起動" sub-tab is also highlighted with a red circle. The page contains several configuration fields with labels and descriptions:

- Javaホーム:** This field is used for the Java home directory of the server. A description states: "このサーバーの起動時に使用するJavaのホーム・ディレクトリ(ノード・マネージャを実行しているマシン上のパス)。" (The home directory of Java used when starting this server (the path on the machine where the Node Manager is running)).
- Javaベンダー:** This field is used for the Java vendor. A description states: "このサーバーの起動時に使用するJavaベンダー値。" (The Java vendor value used when starting this server).
- BEAホーム:** This field is used for the BEA home directory. A description states: "このサーバーの起動時に使用するBEAのホーム・ディレクトリ(ノード・マネージャを実行しているマシン上のパス)。" (The BEA home directory used when starting this server (the path on the machine where the Node Manager is running)).
- ルート・ディレクトリ:** This field is used for the root directory. A description states: "このサーバーがルート・ディレクトリとして使用するディレクトリ。このディレクトリは、ノード・マネージャをホストするコンピュータ上に存在している必要があります。ルート・ディレクトリ値を指定しない場合は、デフォルトでドメイン・ディレクトリが使" (The directory used by this server as the root directory. This directory must exist on the computer that hosts the Node Manager. If no root directory value is specified, the default is the domain directory).

At the bottom left, the "システム・ステータス" section shows "実行中のサーバーの現時点のヘルス: 11:56" with a status of "失敗 (0)" and "クリミナル (0)".

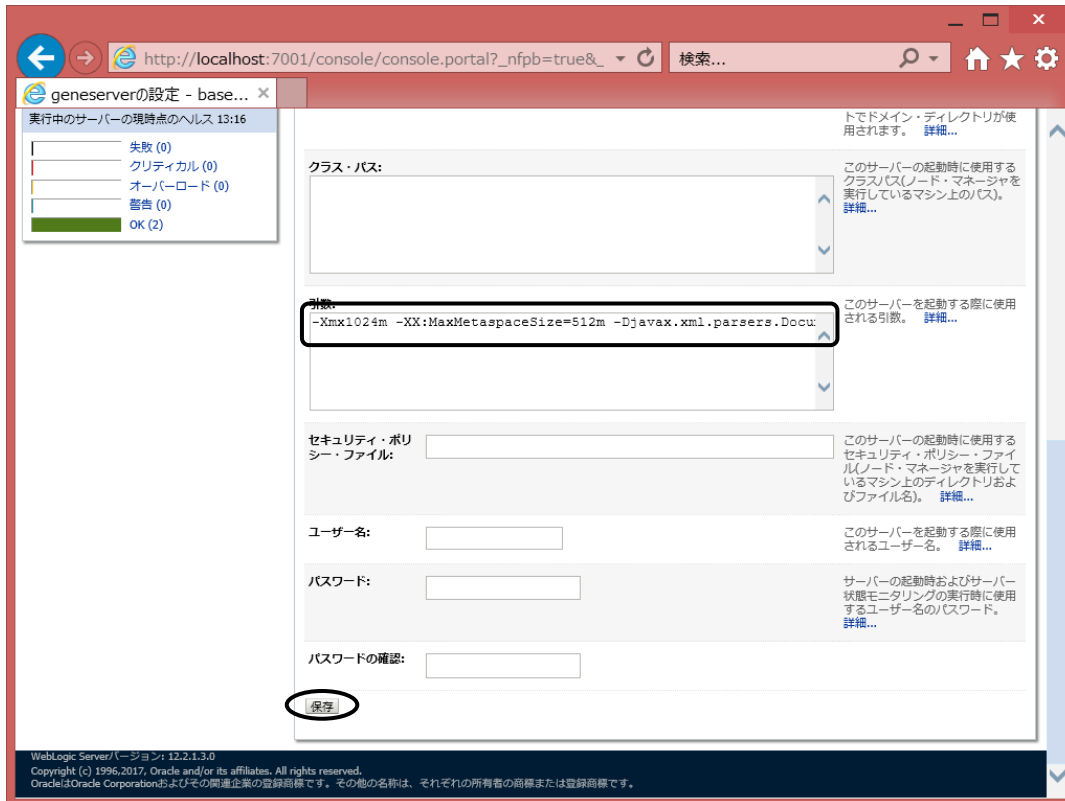
(3) 画面左上の『ロックして編集』をクリックし、『引数』のテキストフィールドの中に以下の設定を記載します。

※『ロックして編集』ボタンはサーバの設定によって表示されないことがあります。表示されない場合は、ボタンをクリックする必要はありません。

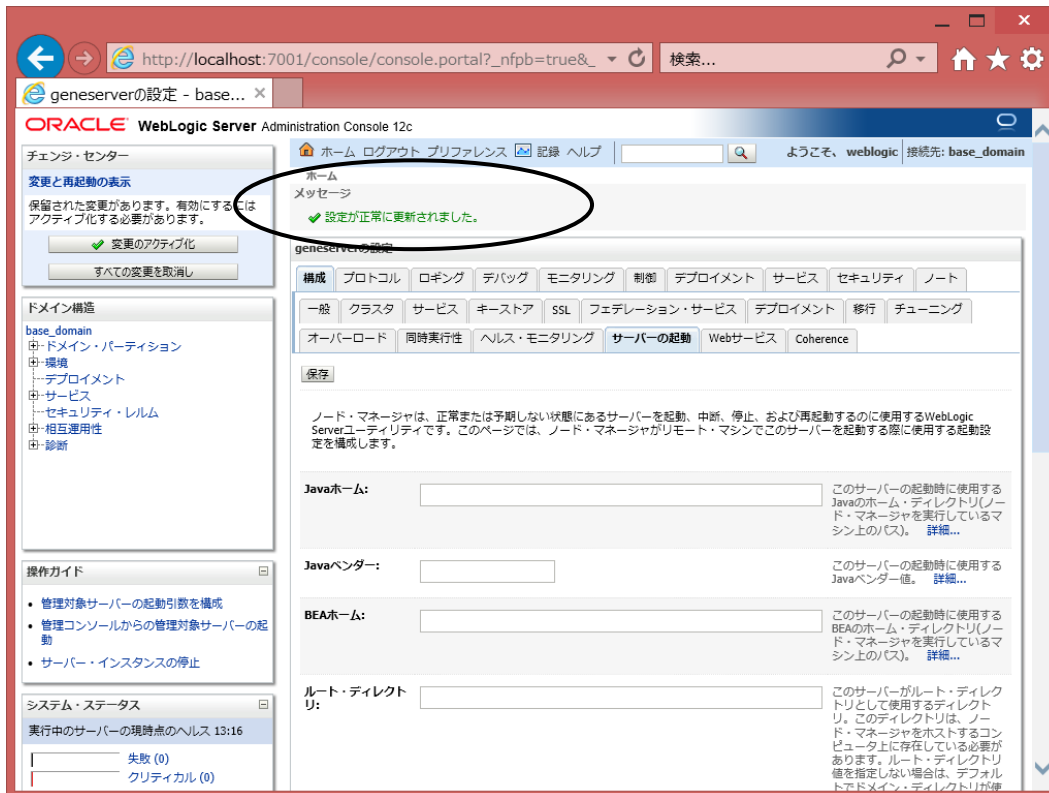
```
-Xmx1024m△-XX:MaxMetaspaceSize=512m△-Djavax.xml.parsers.DocumentBuilderFactory=com.sun.org.apache.xerces.internal.jaxp.DocumentBuilderFactoryImpl
```

※△は半角スペースです。

入力を確認し、『保存』をクリックします。



- (4) 保存が完了すると以下の画面に戻り、メッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認し、『変更のアクティブ化』ボタンをクリックして変更を確定してください。



3.6 アプリケーションサーバのアンインストール

Generalist アプリケーションサーバモジュールのアンインストールの手順について説明します。

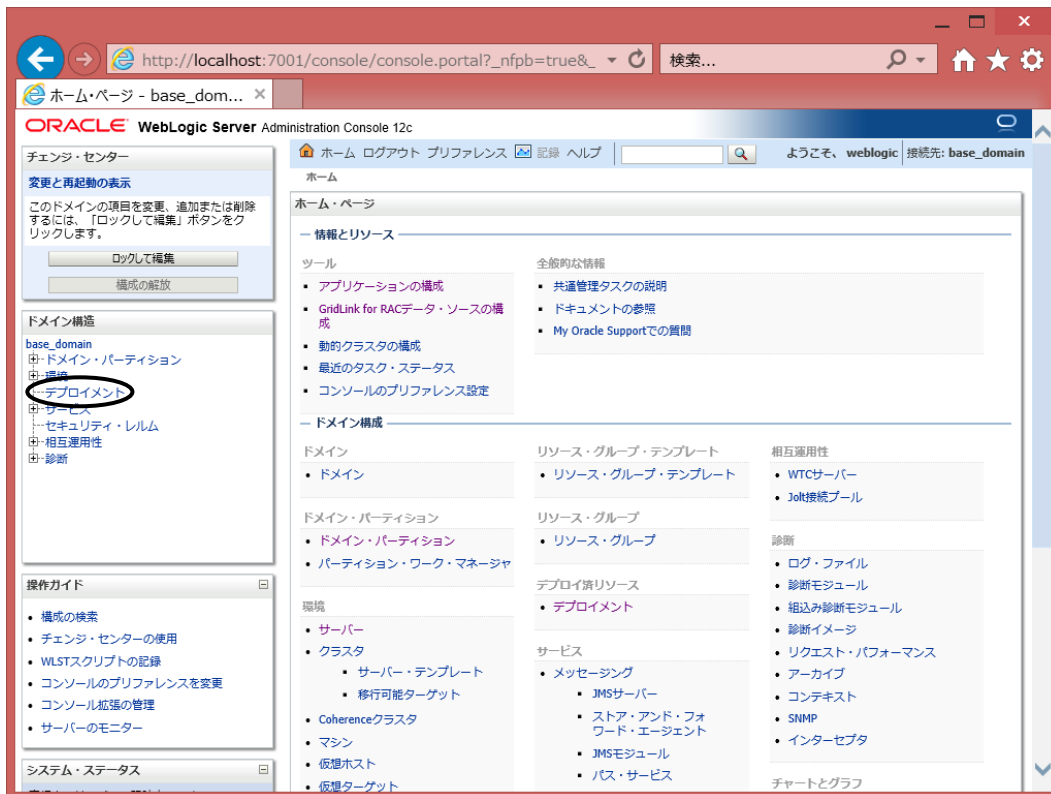


<重要>

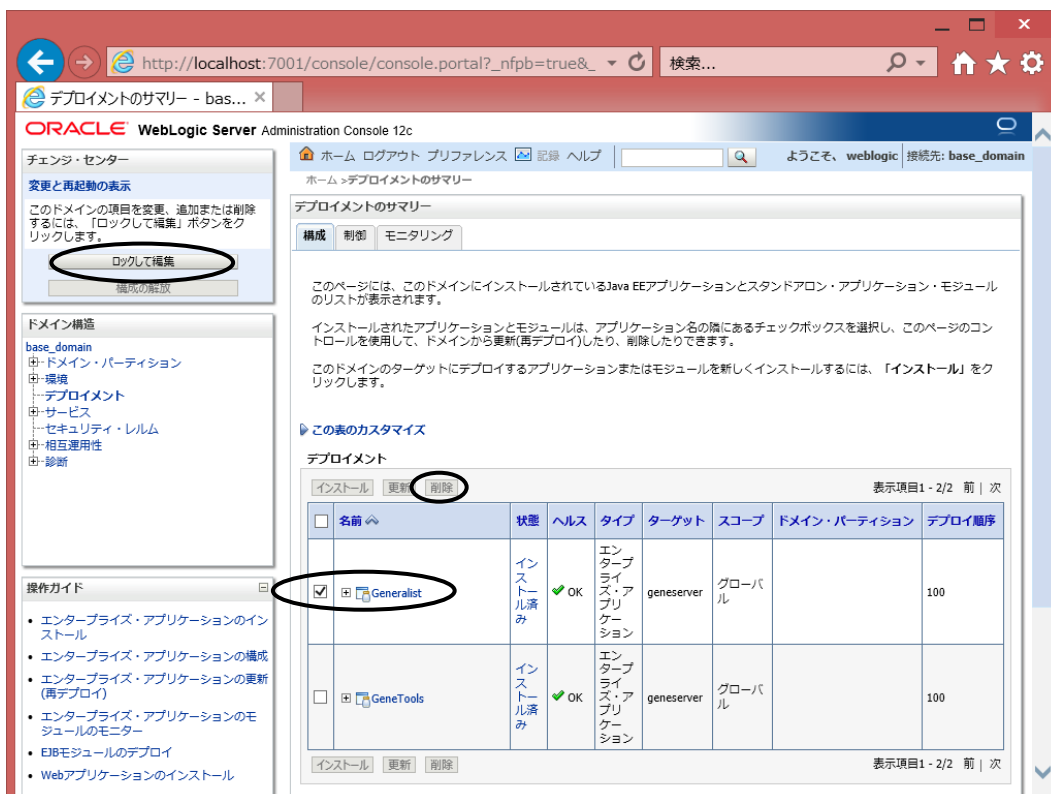
- ここでは、Generalist アプリケーションサーバモジュールやその他の不要ファイルをアプリケーションサーバから削除する手順を示します。
- 手順にしたがってアンインストールを開始する前にすべての Windows アプリケーションを終了させておいてください。
- 動作中のアプリケーションがある場合、アンインストールに時間がかかることがあります。
- 動作中のアプリケーションがハードディスクに対して書き込み等を行っている場合、アンインストールプログラムは作業が失敗することがあります。
- 一部のスケジューラソフトは設定された時間がくると自動的にチェックディスクなどのアンインストール処理に影響を与えるようなプログラムを実行するものがあります。このようなソフトウェアをお使いの場合は、アンインストール開始前に自動実行機能を一時停止させてください。
(代表的なスケジューラソフトには、Windows に付属のタスク スケジューラがあります。このソフトの場合は、タスク スケジューラにあるアイコンを右クリックして、「プロパティ」画面を表示させ「実行する」のチェックボックスのチェックを解除してください。)
- オペレーティングシステム、Oracle のトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。

3.6.1 アプリケーションサーバモジュールのアンインストール

- (1) WebLogic の管理コンソールにログインします。『ドメイン構造』より『デプロイメント』を選択します。



- (2) デプロイメントの一覧が表示されます。『ロックして編集』をクリックし、一覧から Generalist を選択し、『削除』をクリックします。



- (3) アンインストールが完了するとメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認し、『変更のアクティブ化』ボタンをクリックして変更を確定してください。

The screenshot shows the Oracle WebLogic Server Administration Console interface. At the top, there is a navigation bar with 'ホーム ログアウト プリファレンス 記録 ヘルプ' and a search box. Below this, a message box contains the following text:

- ✓ 選択したデプロイメントが削除されました。
- ✓ この処理(およびその他の変更)をアクティブなシステムにコミットするには、保留中の変更をアクティブ化する必要があります。

Below the message box, there is a section titled 'デプロイメントのサマリー' with tabs for '構成', '制御', and 'モニタリング'. The main content area contains instructions in Japanese regarding the deployment of Java EE applications and modules. Below this, there is a section titled 'この表のカスタマイズ' and a table for 'デプロイメント'.

インストール	更新	削除	表示項目 1 - 1/1 前 次				
名前	状態	ヘルス	タイプ	ターゲット	スコープ	ドメイン・パーティション	デプロイ順序
<input type="checkbox"/> GeneTools	インストール済み	OK	エンタープライズ・アプリケーション	geneserver	グローバル		100

At the bottom of the table, there are buttons for 'インストール', '更新', and '削除', and a footer indicating '表示項目 1 - 1/1 前 | 次'.

第4章 アプリケーションサーバのセットアップ(WebCube Application Server)

4.1 概要

アプリケーションサーバのインストールと設定する際の手順について説明します。



<重要>

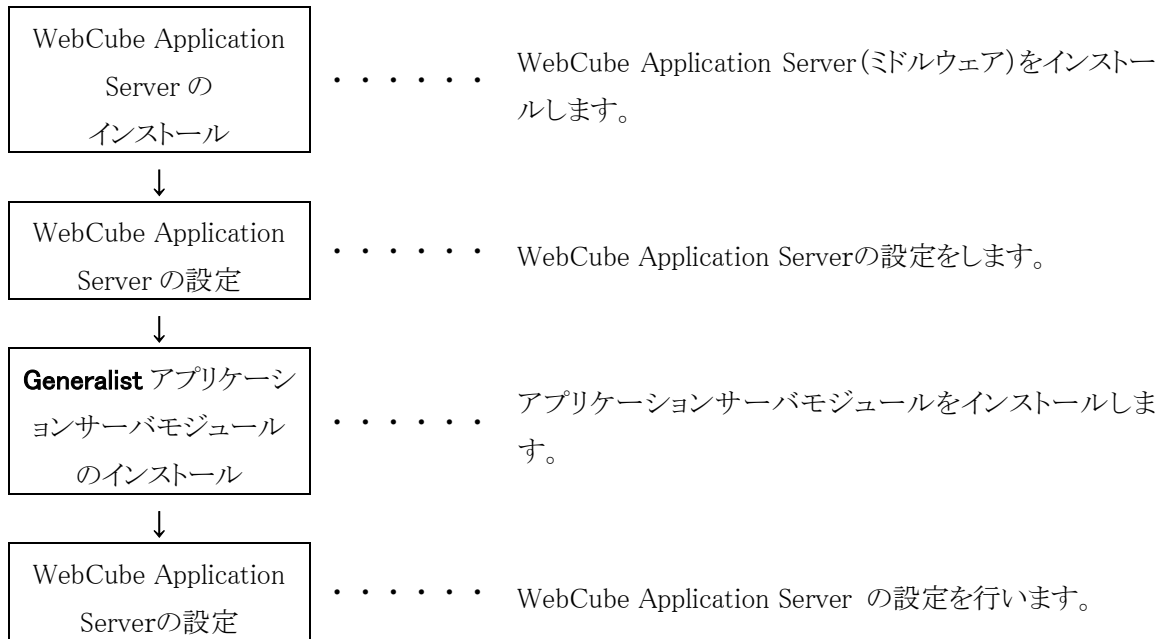
- オペレーティングシステムのトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。
- アプリケーションサーバにモジュールを再インストールする場合は、一度アンインストール作業を行ってください。複数回連続してインストール作業を行っても、一般には **Generalist** の動作に支障を来すことはありません。
- アプリケーションサーバのシステム日付をデプロイした日付より過去に変更しないでください。日付を戻してアプリケーションサーバを再起動した場合、自動で再デプロイされ設定ファイル等が上書きされる可能性があります。
- 本章で Windows と記述してある場合は以下を指します。

Windows Server 2019

Windows Server 2022

4.2 セットアップの手順

セットアップは以下の手順で実行します。



4.3 WebCube Application Server のインストール

WebCube Application Server(ミドルウェア)をインストールします。

※インストールに関する詳しい情報は、「アプリケーションサーバ ファーストステップガイド」を参照してください。

4.3.1 事前準備

事前に以下の項目を設定してください。

項目	例	お客様ご記入欄
作業用ディレクトリ	C:\temp	



<重要>

- 作業ディレクトリのパスには ";" (セミコロン), "." (ピリオド), 半角空白および全角文字を含めないでください。これらの文字が含まれている場合、インストール処理時にエラーが発生します。

バッチを実行するためサーバに JDK(Java Development Kit)をインストールしてください。必要な JDK のバージョンは下記のとおりです。バッチを実行する場合はインストールした JDK を指定してください。

【関連 HP】(2021 年 4 月 19 日時点)

<https://www.oracle.com/jp/java/technologies/javase-downloads.html>

必要な JDK のバージョン
1.8.0 Update131(64bit 版)以上



<重要>

- JDK のバージョンが 9 以上の場合、一部バッチが正常に動作しない場合があります。

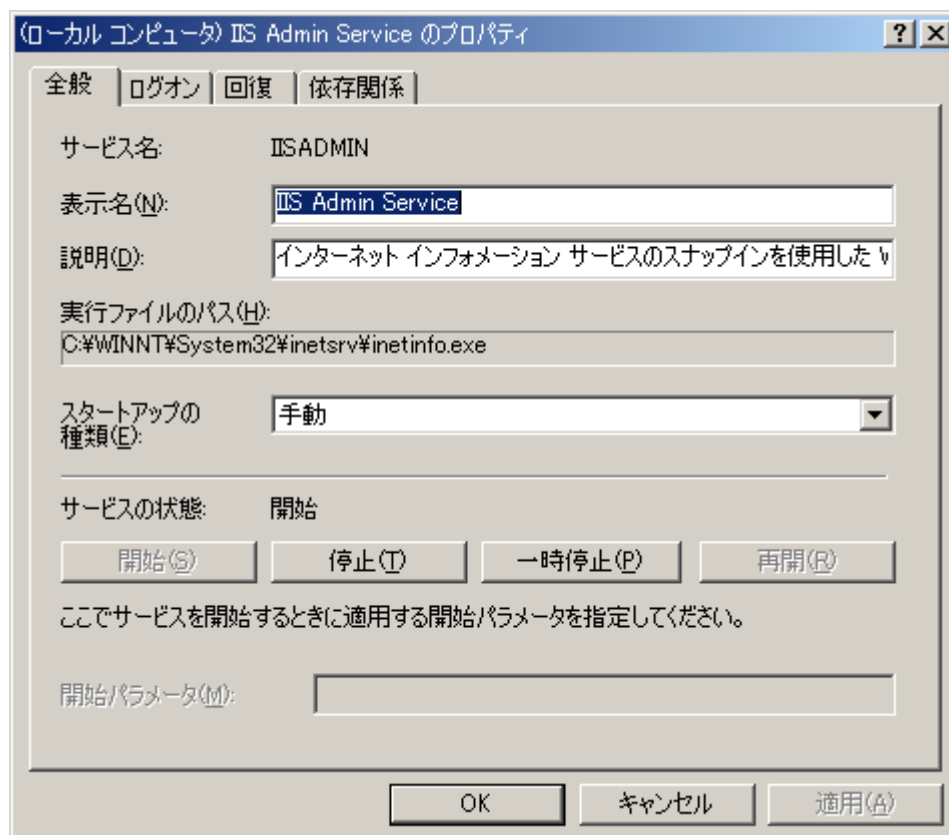
4.3.2 不要なサービスの停止

(1) WebCube Application Server のインストール前に以下のサービスが起動している場合には、停止し、手動起動に変更します。サービスが起動していない場合、または、サービスが存在しない場合には本操作は不要です。

- IIS Admin Service
- World Wide Web Publishing Service
- Simple Mail Transport Protocol (SMTP)

サービスの停止と設定の変更は下記の手順で実行します。

1. 「コントロールパネル」より「サービス」の画面を表示します。
2. 該当するサービスを選択し、「操作」より「プロパティ」を選択し、プロパティ画面を開きます。



3. プロパティ画面より、『停止 (T)』ボタンを押下し、サービスを停止します。
4. 『スタートアップの種類 (E)』を『手動』に設定し、『OK』ボタンを押下します。

4.3.3 環境変数の設定

実行環境で使用する環境変数を設定します。次の手順に従って、環境変数を設定してください。

1. Windows のメニューから[コントロールパネル]－[システム]－[システムの詳細設定]を選択します。

[システムのプロパティ]ダイアログが表示されます。

2. [詳細設定]タブの[環境変数]ボタンをクリックします。

[環境変数]ダイアログが表示されます。

3. [システム環境変数]に環境変数を設定します。

[システム環境変数]の枠に設定されている環境変数を確認してください。

Application Server で設定が必要な環境変数と設定する値を次の表に示します。

表 3-1 実行環境で使用する環境変数名	設定する値
TZ	JST-9

4. [環境変数]ダイアログで[OK]ボタンをクリックします。

[環境変数]ダイアログが閉じます。

5. [システムのプロパティ]ダイアログで[OK]ボタンをクリックします。
[システムのプロパティ]ダイアログが閉じて環境変数の設定が完了します。

これで、Application Server を使用するための環境変数の設定は完了です。

4.3.4 WebCube Application Server V11.1、V11.2またはV11.4のインストール

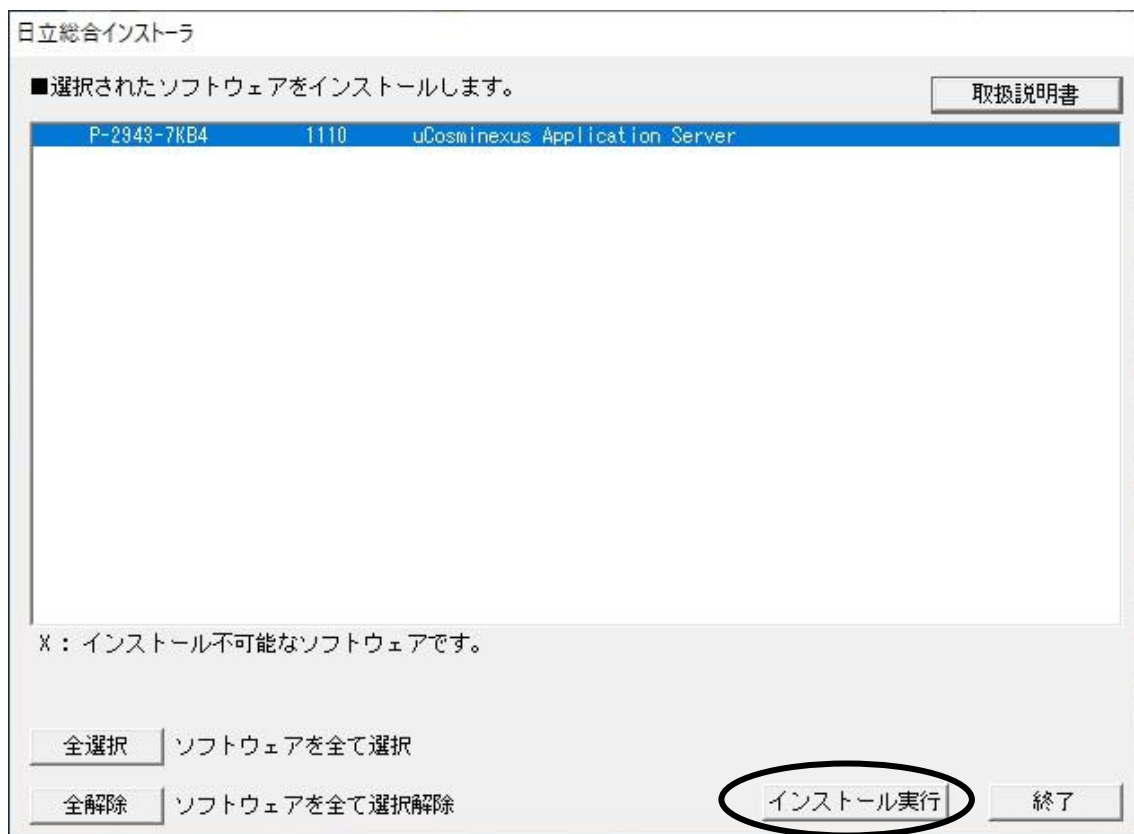
WebCube Application Server(ミドルウェア)をインストールします。

- (1) インストール DVD-ROM を、DVD-ROM ドライブにセットします。
- (2) エクスプローラで DVD-ROM ドライブを開き、インストーラのアーカイブファイルを作業用ディレクトリにコピーして展開します。

以下は V11.1 のファイルです。

・Windows64¥Installer¥APPSERVER_V111_Windows64_INST.zip (64bit 用インストールバイナリ)

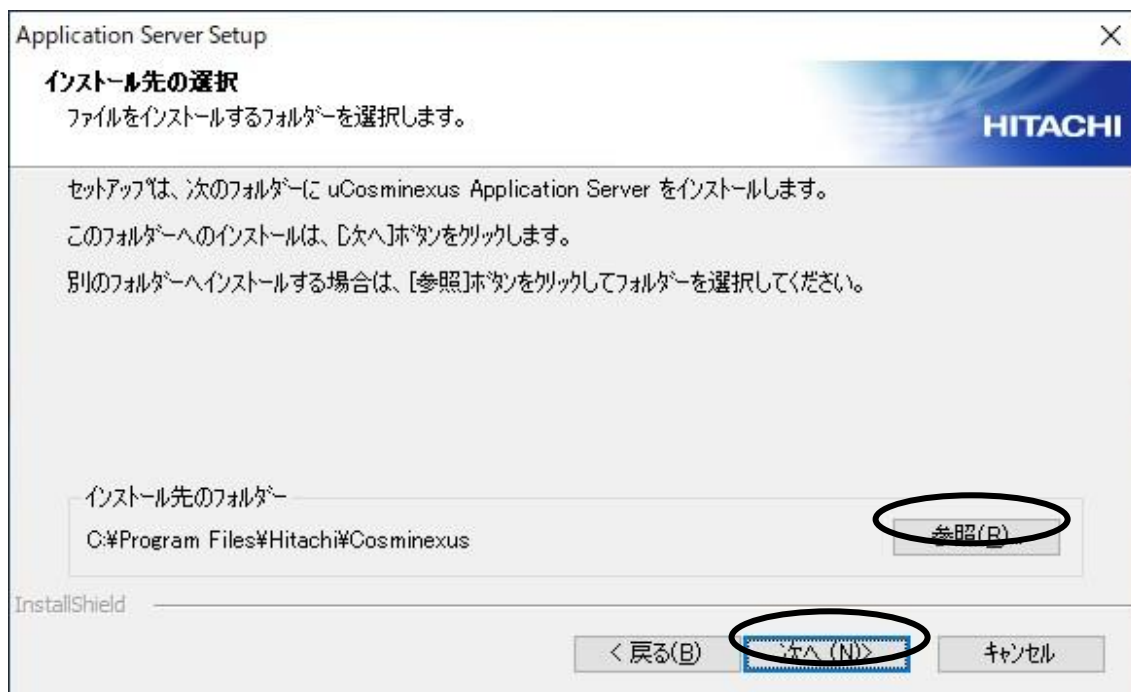
- (3) 展開したアーカイブファイルのセットアッププログラム(HCD_INST.EXE)を実行します。内容を確認した後『インストール実行』をクリックします。



(4) 『ようこそ』画面が表示されます。内容を確認した後『次へ(N)』をクリックします。



- (5) 『インストール先の選択』画面が表示されます。インストール先のフォルダを選択し、『次へ(N)』をクリックします。



<重要>

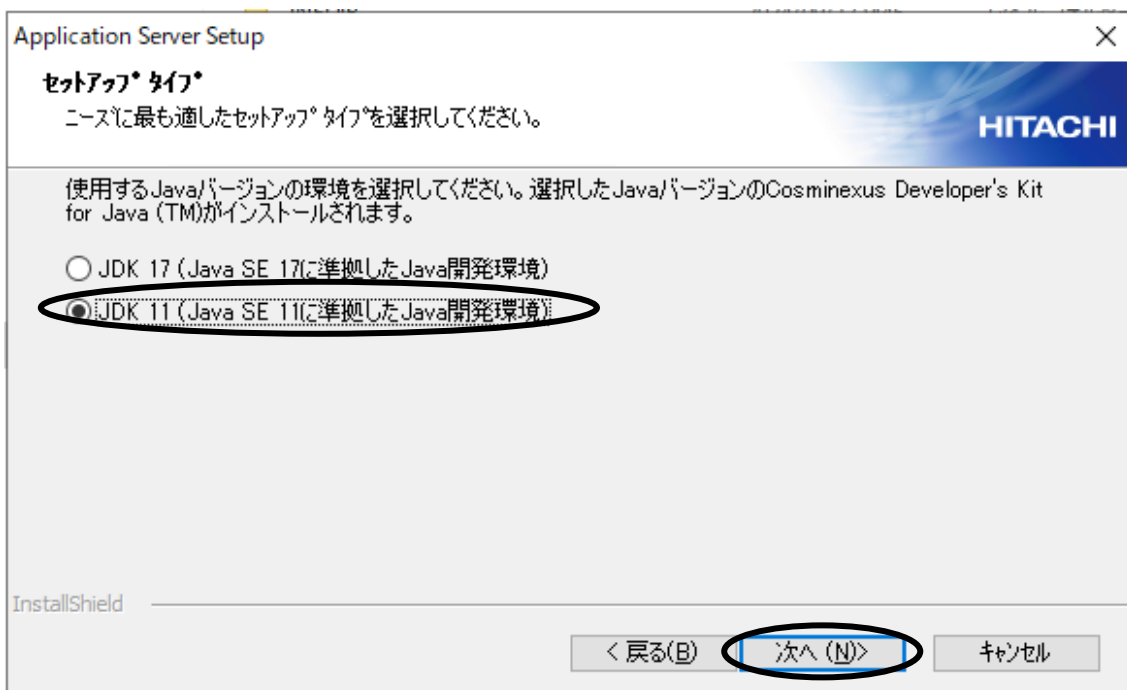
[インストール先のフォルダ]には、次のパスを指定しないでください。

- ・ ネットワークドライブ
- ・ 2 バイトコードを含むパス
- ・ 半角 50 文字を超えるパス
- ・ 末尾が ¥ のパス(C:\¥ など)

(6) 『機能の選択』画面が表示されます。標準 をクリックし、『次へ(N)』をクリックします。



(7) 『セットアップタイプ』画面が表示される場合は、JDK11 を選択し、『次へ(N)』をクリックします。



- (8) 『ユーザー情報』画面が表示されます。ユーザー名、会社名を入力し、『次へ(N)』をクリックします。

Application Server Setup

ユーザー情報
情報を入力してください。

ユーザー名、および会社名を入力してください。

ユーザー名(U):
administrator

会社名(C):
TOSHIBA

InstallShield

< 戻る(B) 次へ(N)> キャンセル

- (9) 『プログラムフォルダの選択』画面が表示されます。プログラムフォルダ名を入力し、『次へ(N)』をクリックします。

Application Server Setup

プログラムフォルダの選択
プログラムフォルダを選択してください。

セットアップは、次にリストされているプログラムフォルダにプログラムアイコンを追加します。新しいフォルダ名を入力するか、または既存のフォルダリストから1つを選択することもできます。

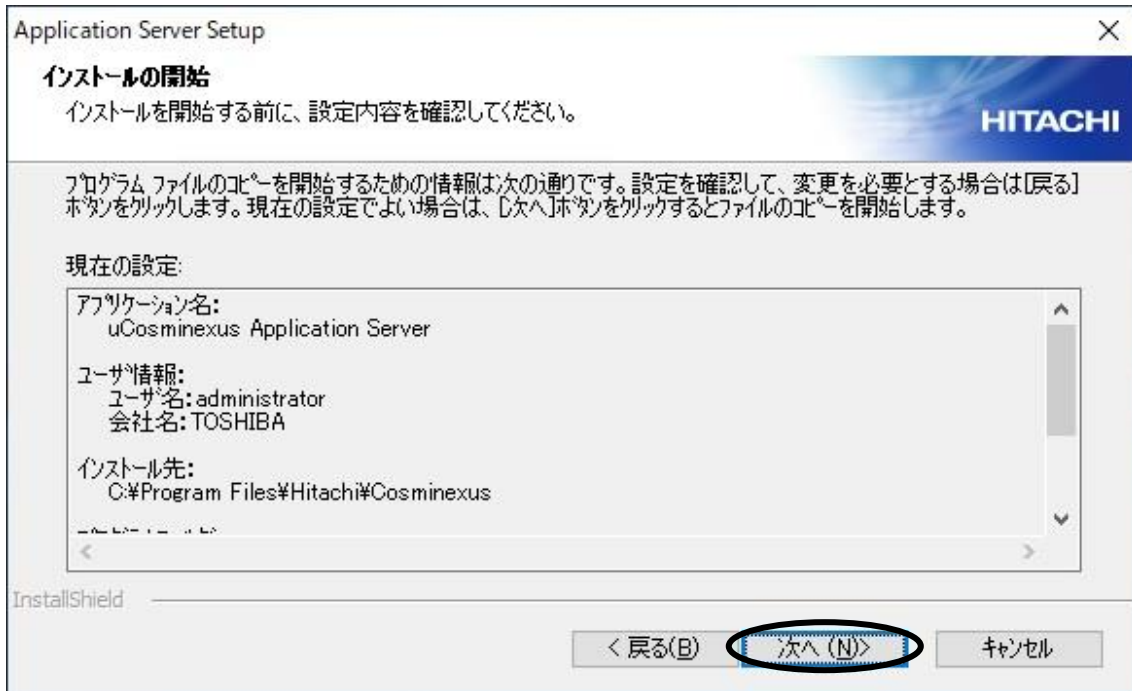
プログラムフォルダ(P):
Cosminexus

既存のフォルダ(X):
Accessibility
Accessories
Administrative Tools
Cylance
Git
Java
Maintenance
ManagementCore
Node.js

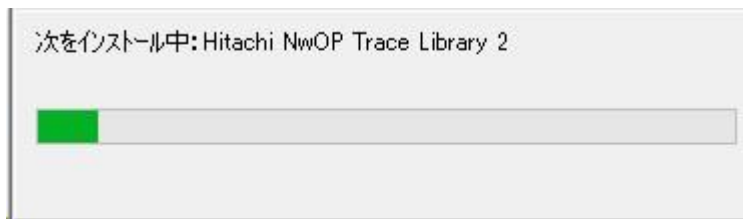
InstallShield

< 戻る(B) 次へ(N)> キャンセル

(10)『インストールの開始』画面が表示されます。『次へ(N)』ボタンをクリックします。



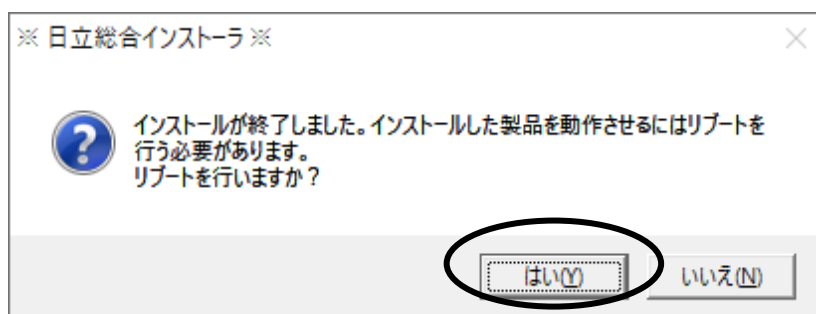
(11)インストールが開始され、進行状況を示すダイアログが表示されます。



(12) インストールが終了すると、『セットアップの完了』画面が表示されます。『完了』をクリックします。



(13) OS を再起動するかどうかを確認する画面が表示されます。『はい』をクリックします。OS が再起動し、Application Server のインストールが完了します。



(14)再起動後、以下のサービスが起動していることおよび、スタートアップが『自動(遅延開始)』になっていることを確認してください。起動していない場合には、サービスを『開始』し、『自動(遅延開始)』に変更します。サービスの変更方法は、4.3.2を参照してください。

- Cosminexus Management Server
- Cosminexus Management Server - Administration Agent

これで、WebCube Application Server はインストールされました。

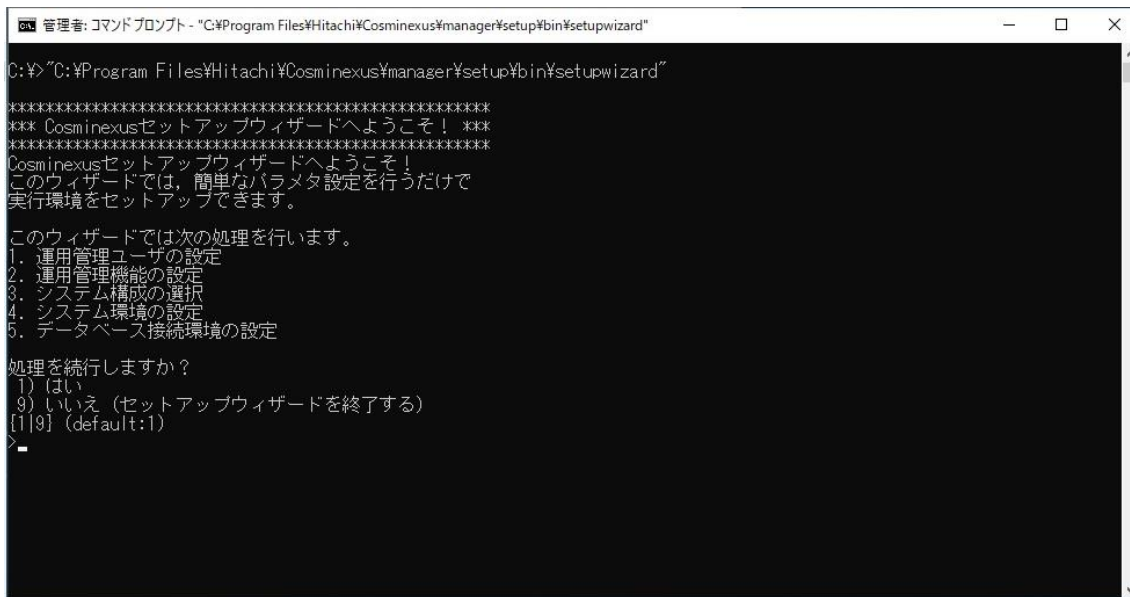
4.4 WebCube Application Server の設定

アプリケーションサーバモジュールのインストールを行う前に、セットアップウィザードを使用して WebCube Application Server の設定を行います。

(1) コマンドプロンプトを起動して、次のコマンドを実行します。

```
"<WebCube Application Server のインストールディレクトリ>%manager%setup%bin%setupwizard"
```

(2) 実行すると、『ようこそ』画面が表示されます。「1」を入力して、Enter キーを押します。

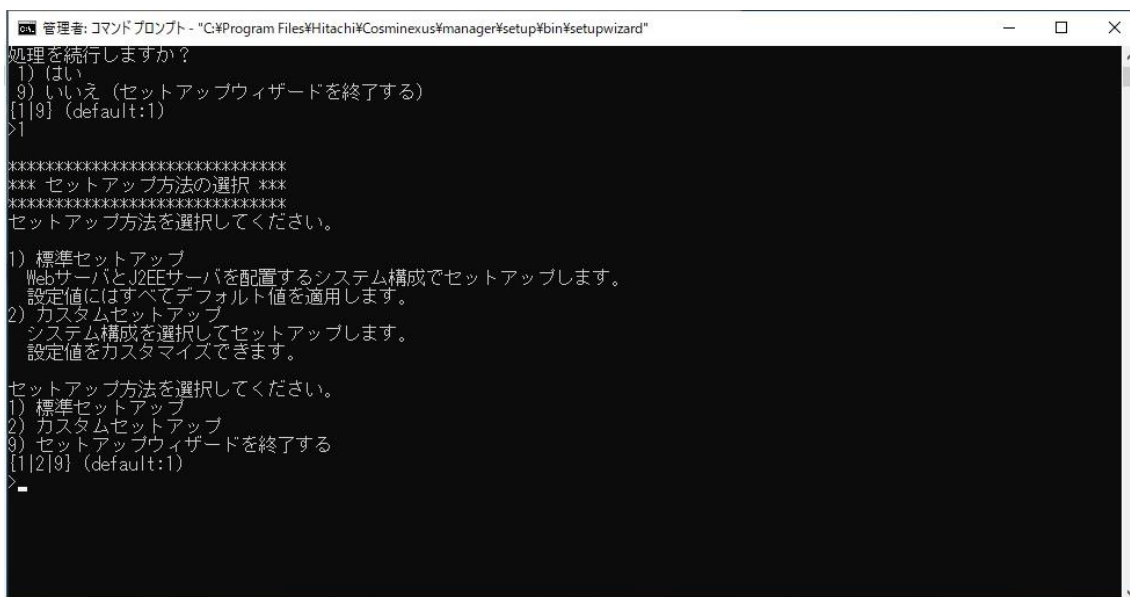


```
管理着: コマンド プロンプト - "C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\bin\setupwizard"
C:\>"C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\bin\setupwizard"
*****
*** Cosminexusセットアップウィザードへようこそ! ***
*****
Cosminexusセットアップウィザードへようこそ!
このウィザードでは、簡単なパラメタ設定を行うだけで
実行環境をセットアップできます。

このウィザードでは次の処理を行います。
1. 運用管理ユーザの設定
2. 運用管理機能の設定
3. システム構成の選択
4. システム環境の設定
5. データベース接続環境の設定

処理を続行しますか?
1) はい
9) いいえ (セットアップウィザードを終了する)
[1]9) (default:1)
>1
```

(3) 『セットアップ方法の選択』画面が表示されます。「1」を入力して、Enter キーを押します。



```
管理着: コマンド プロンプト - "C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\bin\setupwizard"
処理を続行しますか?
1) はい
9) いいえ (セットアップウィザードを終了する)
[1]9) (default:1)
>1

*****
*** セットアップ方法の選択 ***
*****
セットアップ方法を選択してください。

1) 標準セットアップ
   WebサーバとJ2EEサーバを配置するシステム構成でセットアップします。
   設定値にはすべてデフォルト値を適用します。
2) カスタムセットアップ
   システム構成を選択してセットアップします。
   設定値をカスタマイズできます。

セットアップ方法を選択してください。
1) 標準セットアップ
2) カスタムセットアップ
9) セットアップウィザードを終了する
[1]2]9) (default:1)
>1
```

- (4) 『データベース接続環境の設定』画面が表示されます。ここでは、データベースの接続設定を行わないため、nを入力して、Enter キーを押します。

```
管理者: コマンドプロンプト - "C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\bin\setupwizard"
セットアップ方法を選択してください。
1) 標準セットアップ
2) カスタムセットアップ
9) セットアップウィザードを終了する
[1|2|9] (default:1)
>1

*****
*** データベース接続環境の設定 (1/1) ***
*****
HiRDBまたはOracleへの接続環境の設定を行います。
このウィザードでは次のような接続環境の設定を行うことができます。
・ HiRDBへの接続環境
  HiRDB Type4ドライバを使用します。
  HiRDBが提供するJDBCドライバが必要です。
・ Oracleへの接続環境
  Oracle Thinドライバを使用します。
  Oracleが提供するJDBCドライバが必要です。

データベース接続環境の設定を行いますか？
'n'を選択すると、このウィザードではデータベース接続環境をセットアップしません。
[y|n] (default:y)
>n
```

- (5) 『確認』画面が表示されます。「1」を入力して、Enter キーを押します。

```
管理者: コマンドプロンプト - "C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\bin\setupwizard"
データベース接続環境の設定を行いますか？
'n'を選択すると、このウィザードではデータベース接続環境をセットアップしません。
[y|n] (default:y)
>n

*****
*** データベース接続環境の設定 (1/1) ***
*****
HiRDBまたはOracleへの接続環境の設定を行います。
このウィザードでは次のような接続環境の設定を行うことができます。
・ HiRDBへの接続環境
  HiRDB Type4ドライバを使用します。
  HiRDBが提供するJDBCドライバが必要です。
・ Oracleへの接続環境
  Oracle Thinドライバを使用します。
  Oracleが提供するJDBCドライバが必要です。

現在の設定
データベース接続環境の設定：しない
この設定でよろしいですか？
1) はい
2) いいえ (設定内容を変更します)
0) 前の画面に戻る
9) セットアップウィザードを終了する
[1|2|0|9] (default:1)
>1
```

(6) セットアップ情報が表示されます。「1」を入力してセットアップを開始します。

```
管理音: コマンド プロンプト - "C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\bin\setupwizard"
*****
*** セットアップ情報 ***
*****
Management Serverの管理ユーザアカウント
  ユーザID: admin
Management Serverの設定
  Management Server接続HTTPポート番号: 28080
  Management Server終了要求受信ポート番号: 28005
  Management Server内部通信用ポート番号: 28009
  運用管理エージェントのポート番号: 20295
Webシステムの設定
  システム構成: WebサーバとJ2EEサーバを配置(combined-tier)
  Webシステム名: MyWebSystem
Webサーバのパラメタ
  Webサーバのサーバ名: www.example.com
  Webサーバのポート番号: 80
J2EEサーバのパラメタ
  httpのポート番号: 8008
  管理用サーバのポート番号: 28008
  インプロセスのネーミングサービス用のポート番号: 900
  RMIレジストリのポート番号: 23152
  稼働情報取得時のリクエスト受付のポート番号: 23550
データベース接続設定
  データベース接続: しない

操作を選択してください。
1) セットアップを開始する
2) セットアップ情報を再設定する(セットアップ情報は保持されます)
3) セットアップ情報をファイルに保存する
0) 前の画面に戻る
9) セットアップウィザードを終了する
{1|2|3|0|9}
> 1
```

(7) セットアップ完了画面が表示されます。

```
管理音: コマンド プロンプト
システム構成: WebサーバとJ2EEサーバを配置(combined-tier)
Webシステム名: MyWebSystem
Webサーバのパラメタ
  Webサーバのサーバ名: www.example.com
  Webサーバのポート番号: 80
J2EEサーバのパラメタ
  httpのポート番号: 8008
  管理用サーバのポート番号: 28008
  インプロセスのネーミングサービス用のポート番号: 900
  RMIレジストリのポート番号: 23152
  稼働情報取得時のリクエスト受付のポート番号: 23550
データベース接続設定
  データベース接続: しない

操作を選択してください。
1) セットアップを開始する
2) セットアップ情報を再設定する(セットアップ情報は保持されます)
3) セットアップ情報をファイルに保存する
0) 前の画面に戻る
9) セットアップウィザードを終了する
{1|2|3|0|9}
> 1
セットアップを実行しています...
運用管理機能のセットアップ中...完了
システム環境のセットアップ中...完了
セットアップが完了しました。
セットアップ情報を次のファイルに保存しました。
C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\config\setupwizard_success.dat
C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\config\setupwizardlist.txt
使用した簡易構築定義ファイルを次に保存しました。
C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\manager\setup\config\cmxsetupwz.xml

セットアップウィザードを終了します。
C:\>
```

これで、WebCube Application Server の設定は完了しました。

4.5 アプリケーションサーバモジュールのインストール

アプリケーションサーバへ Generalist のモジュールをインストールします。

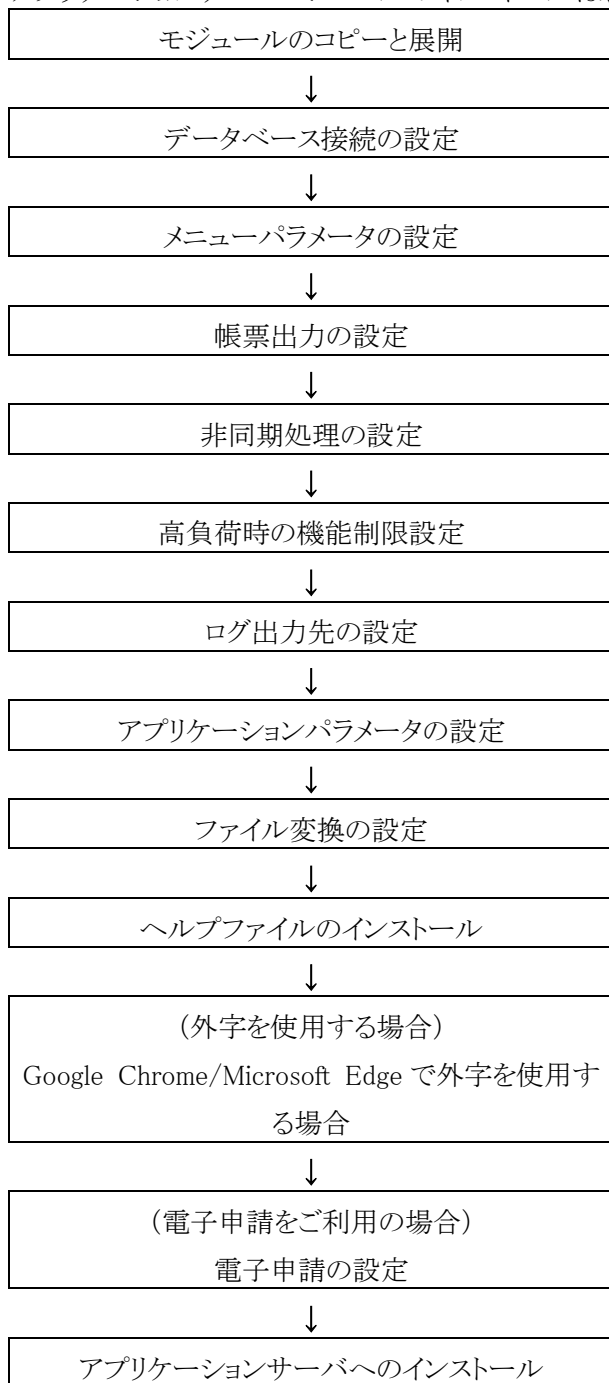


<重要>

- ここでは、Generalist モジュールやその他の必要ファイルをアプリケーションサーバに設定する作業を行います。
- 手順にしたがってインストールを開始する前に、すべての Windows アプリケーションを終了させておいてください。
- 動作中のアプリケーションがある場合、インストールに時間がかかることがあります。
- 動作中のアプリケーションがハードディスクに対して書き込み等を行っている場合、インストールプログラムは空きディスク容量を正確に把握することができません。このため、インストール作業が失敗することがあります。
- オペレーティングシステム、WebCube のトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。

4.5.1 アプリケーションサーバモジュールのインストールの流れ

アプリケーションサーバモジュールのインストールは、以下のステップからなります。



4.5.2 環境の想定

ここに示す手順は、以下のような環境を想定しています。

インストール先などを変更した場合は適宜読み替えてください。

- WebCube のインストール先C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus
- アプリケーションサーバのホスト名geneias

- アプリケーションサーバの IP アドレス..... 192.168.1.10
- データベースサーバへの接続文字列..... GeneSVR
- DNS ドメイン名..... gene.co.jp
- データベースサーバのホスト名..... dbgene
- データベースサーバの SID..... geneSID
- データベースサーバのポート番号..... 1521
- Generalist データベースユーザ..... GRSYS
- Generalist データベースユーザパスワード..... GRSYS



<重要>

- ここでは WebCube Application Server を C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus の下にインストールすることを前提としています。インストール先などを変更された場合は、適宜、読み換えてください。
- 設定内容において太字で記載している箇所は修正が必要な箇所です。さらに、下線が引かれている箇所は各環境で設定内容が異なりますので、適宜、読み替えてください。
- 設定ファイルのサンプルを CD-ROM の Utility\C.21 サンプル設定ファイル フォルダに格納してあります。参考にしてください。サンプルファイルを作成した環境に上書きした場合、正常に動作しないことがあります。
- 「Generalist データベースユーザ名」と「Generalist データベースユーザパスワード」は「5.2.2 データベース管理ユーザの作成と権限の付与」で作成するユーザ名とパスワードと同じにする必要があります。アプリケーションサーバの設定を行う前に、決定しておいてください。
- 「論理 Web サーバの作成」(9)の設定で必要なポート番号を事前に決定しておいてください。他の論理 Web サーバと被らないようにしてください。

4.5.3 モジュールのコピーと展開

- (1) Generalist インストール CD-ROM の ApplicationServer フォルダ以下の Generalist.zip ファイルおよび GeneTools.zip を以下のフォルダにコピーします。

<WebCube インストールディレクトリ>\CC\web\containers\<サーバ名>\webapps

- (2) Generalist.zip、GeneTools.zip を展開します。

展開先の Generalist.war フォルダを Generalist に、GeneTools.war フォルダを GeneTools に変更します。

下記のフォルダ構成となっていることを確認します。

GeneTools についても同様です。

```

<Application Server のインストールディレクトリ>\CC\web\containers\
<サーバ名>\webapps\Generalist
  |-Generalist
  -META-INF
  
```

```
|-application.xml
-MANIFEST.MF
```

以降の手順では、

〈WebCube インストールディレクトリ〉¥CC¥web¥containers¥〈サーバ名〉

¥webapps¥Generalist¥Generalist を〈**Generalist** インストールフォルダ〉、

〈WebCube インストールディレクトリ〉¥CC¥web¥containers¥〈サーバ名〉

¥webapps¥GeneTools¥GeneTools を〈**GeneTools** インストールフォルダ〉として記載します。

- (3) META-INF¥application.xml をテキストファイルで開き、以下の下線部をフォルダ名称に合わせて修正します。フォルダ名に変更がなければ以下の設定となります。

例: Generalist.war フォルダの場合

```
1 <?xml version="1.0"?>
2
3 <application ...>
4   <display-name>Generalist</display-name>
5   <module>
6     <web>
7       <web-uri>Generalist.war</web-uri>
8       <context-root>Generalist</context-root>
9     </web>
10  </module>
11 </application>
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

4 行目 :display-name=〈アプリケーション名〉

7 行目 :web-uri=〈アプリケーション名〉.war

8 行目 :context-root =〈アプリケーション名〉

例: GeneTools.war フォルダの場合

```
1 <?xml version="1.0"?>
2
3 <application ...>
4   <display-name>GeneTools</display-name>
5   <module>
6     <web>
7       <web-uri>GeneTools.war</web-uri>
8       <context-root>GeneTools</context-root>
9     </web>
10  </module>
11 </application>
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

4 行目 :display-name=<アプリケーション名>

7 行目 :web-uri=<アプリケーション名>.war

8 行目 :context-root =<アプリケーション名>



<重要>

- web-url は「<アプリケーション名>.war」という表記で記載が必要です。
「.war」を消さないでください。
- WebCube Application Server の場合、application.xml 中の<application>タグの内容は以下のように変更する必要があります(GeneTools ではこの修正は不要です)。

1	<?xml version="1.0"?>
2	
3	<application xmlns="http://xmlns.jcp.org/xml/ns/javaee" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xsi:schemaLocation="http://xmlns.jcp.org/xml/ns/javaee http://xmlns.jcp.org/xml/ns/javaee/application_7.xsd" version="7">
4	<display-name>Generalist</display-name>
5	<module>
6	<web>
7	<web-uri>Generalist.war</web-uri>
8	<context-root>Generalist</context-root>
9	</web>
10	</module>
11	</application>

4.5.4 データベース接続の設定

(1) datasource.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%datasource.properties ファイルを開きます。下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	driverClassName=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
2	url=jdbc:oracle:thin:@ <u>dbgene:1521/geneSID</u>
3	username= <u>GRSYS</u>
4	password= <u>GRSYS</u>
5	maxActive= <u>100</u>
6	maxWait= <u>5000</u>
7	#maxActive_standalone=30
8	#maxWait_standalone=5000
9	
10	# Configuration for Observation Thread.
11	timeBetweenEvictionRunsMillis=300000
12	minIdle=0
13	testWhileIdle=False
14	minEvictableIdleTimeMillis=300000
15	numTestsPerEvictionRun=-1
16	#timeBetweenEvictionRunsMillis_standalone=300000
17	#minIdle_standalone=0
18	#testWhileIdle_standalone=False
19	#minEvictableIdleTimeMillis_standalone=300000
20	#numTestsPerEvictionRun_standalone=-1
21	connectionManagerMode= <u>0</u>
22	#Configuration for the interval of DB access
23	connKeepIntervalMillis=0
24	
25	testOnBorrow=true
26	validationQuery=SELECT SYSDATE FROM DUAL

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

2 行目 :url=jdbc:oracle:thin:@<データベースサーバのホスト名>:<ポート番号>/<SID>

3 行目 :username=<Generalist データベースユーザ>

4 行目 :password=<Generalist データベースユーザパスワード>

5 行目 :maxActive=<同時にデータベースに接続できる最大セッション数>

6 行目 :maxWait=<データベースに接続するときの待ち時間[ms]>

21 行目 :connectionManagerMode=<個人ログインのデータベース接続モード>

規定値は「0」です。「1」に変更することで個人ログインの同時接続最大数を増やすことができます。

「0」の場合はログインからログアウトまでの間、データベースへの接続を保持します。

「1」の場合はデータベースにアクセスする間のみ接続を行います。アクセスしない間は接続を行わないため、同時接続最大数は増やすことができますが、データベースアクセスごとに接続処理が必要となるため処理に時間がかかる場合があります。

4.5.5 メニューパラメータの設定

(1) menu.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%menu.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	#V4,CS,MO,WF
2	menu_V4Host=http://geneias/geneservlets/Web_Single_Sign_On?con=generalist
3	menu_CSHost=http://GeneralistCS/pages/common/Menu.do?SSO=true
4	menu_MOHost=http://GeneralistMO/pages/common/Menu.do?SSO=true
5	menu_WFHost=http://GeneralistWF/action_login.do?SSO=true
6	
7	#HelpFile
8	menu_HelpPathDefault= <u>http://GeneAS/Generalist/help/manualfiles/</u>
9	menu_HelpKakuchoshi=.html
10	
11	# FileUpload,Download
12	FILEPATH= <u>C:/Generalist/attachment/</u>
13	
14	# Logout(only SingleSignOn) 1:CloseWindow 0:MoveLogin
15	SsoLogoutCloseFlg= <u>1</u>
16	
17	# SSO PassCheck(only SingleSignOn) 1:Check 0:NoCheck
18	SsoPassCheck= <u>1</u>
19	
20	# PasswordUpdateFlg 1:PassUpdate 0:NoPassUpdate
21	passwordUpdateFlg= <u>1</u>
22	
23	# Error message(default:3)
24	defauslt_dispMsgCnt=3
25	
26	# V6 Host
27	menu_V6Host= <u>http://GeneralistV6</u>
28	
29	# 0:クライアント情報 (IP アドレス)を取得しない。 1:クライアント情報 (IP アドレス)を取得する。
30	IpCheckLoad=0

31	
32	# キーストアの別名
33	keyStoreAlias=tokenkeypair
34	
35	# ストアタイプキー
36	keyStoreStoretype=JKS
37	
38	# ストアパスワード
39	keyStoreStorepass=123456
40	
41	# キーストアファイルパス
42	keyStoreFilepath=v7/properties/tokenkeystore.jks
43	
44	#セッション名
45	#V7 環境と同一 AP 上に V6 環境を構築して V6 連携を利用する場合、変更が必要です。
46	#weblogic.xml に定義されている<cookie-name>の値と同じ値を設定してください。
47	#sessionName=GENE_JSSESSIONID
48	

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

- マニュアルを利用するために以下の設定が必要です。
8 行目: menu_HelpPathDefault=http://<アプリケーションサーバ名>:<ポート番号>/Generalist/help/manualfiles
- イベント機能で利用する添付ファイルを保存するパスです。
12 行目: FILEPATH=C:/Generalist/attachment/
- シングルサインオンでログインした場合にログアウト時に画面を閉じるかどうかを選択します。1:閉じる、0:ログイン画面に戻る
15 行目: SsoLogoutCloseFlg=1
- シングルサインオンでパスワードチェックを行うかどうかを選択します。0:チェックしない、1:チェックする
18 行目: SsoPassCheck=1
- パスワード有効期間が過ぎている場合、各ユーザがログイン時にパスワードを変更することを許可するかどうかを選択します。許可しないにした場合には管理者がユーザのパスワードを変更するまでそのユーザはログインできません。許可するにした場合、パスワード有効期間が過ぎたユーザがログインした際にパスワード変更画面に移動します。パスワード有効期間の設定についてはシステム管理マスタで行います。0:許可しない、1:許可する



<重要>

- 「FILEPATH」の設定の最後には、「/」(スラッシュ)が必要です。
- ファイルのパスには日本語は使用できません。英字のフォルダを指定してください。

4.5.6 帳票出力の設定

(1) reportedit.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%reportedit.properties ファイルをテキストエディタで開き、アプリケーションサーバの設定にあわせて、アプリケーションサーバのインストールフォルダおよび、base_url のアプリケーションサーバ名、および reportApplet_url のアプリケーション名を変更します。

1	system_root= <u>C:/Program Files/Hitachi/Cosminexus/CC/web/containers/geneias/webapps/Generalist/Generalist.war</u> /WEB-INF/webdav/store/content/reports
2	definition_root=/reportdef/
3	result_root=/result/
4	access_import=1
5	temporary_root=/temp/
6	history_root=/history/
7	base_url= <u>http://geneias</u>
8	reportApplet_url= <u>Generalist</u> /applet
9	excel_export_pdf=false
10	multi_server_list=

- base_url のアプリケーションサーバ名には事前に決めたポート番号まで指定します。

7 行目 :base_url=http://<アプリケーションサーバ名>:<ポート番号>

4.5.7 非同期処理の設定

(1) batchexecute.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%batchexecute.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	# Bach Execute Container Property
2	
3	# Temporary Files Folder
4	FILE_TMP_DIR= <u>C:/Generalist/batch_exe/file_upload/</u>
5	
6	# Output Files Folder
7	FILE_OUT_DIR=

8	
9	# Run History Save Days
10	HISTORY_SAVE_DAYS= <u>365</u>
11	
12	# Max Thread Count
13	MAX_THREAD_COUNT=5
14	
15	# Ikkatu Max Thread Count
16	IKKATU_MAX_THREAD_COUNT= <u>5</u>
17	
18	# Wait Time(secound)
19	WAIT_TIME=10
20	
21	# faces-config.xml FILES
22	FACES_CONFIG_FILES=faces-config-common.xml,faces-config-hr.xml,faces-config-menu.xml,faces-config-pr.xml,faces-config-reportedit.xml,faces-config-tool.xml,faces-config-viewedit.xml
23	
24	# Java VM options
25	JVM_OPTION=-Xmx512m -Djavax.xml.parsers.DocumentBuilderFactory=com.sun.org.apache.xerces.internal.jaxp.DocumentBuilderFactoryImpl
26	
27	# CLASS_PATH options
28	CLASS_PATH=
29	
30	# LOVS CONFIG FILES
31	LOVS_CONFIG_FILES=gene-config-lov.xml,gene-config-lov-addon.xml
32	
33	# UPLOAD TMP THRESHOLD
34	UPLOAD_TMP_THRESHOLD= <u>100000000</u>

- 非同期処理で利用する一時フォルダのパスです。
4行目:FILE_TMP_DIR=C:/Generalist/batch_exe/file_upload/
- 非同期処理で利用する最終ダウンロードファイル格納フォルダのパスです。デフォルトでは未設定です。別サーバの一時フォルダへ大量のファイルを出力する場合に設定してください。
7行目:FILE_OUT_DIR =C:/Generalist/batch_exe/file_out/
- 非同期処理の実行履歴の保存期間です。
10行目:HISTORY_SAVE_DAYS=365

- 画面から一括実行を起動する際に指定する並行実行最大数です。
16 行目:IKKATU_MAX_THREAD_COUNT=5
- 一括実行で使用するファイルアップロード最大サイズです。単位は Byte です。
34 行目:UPLOAD_TMP_THRESHOLD=100000000



<重要>

- 「FILE_TMP_DIR」および「FILE_OUT_DIR」の設定の最後には、「/」(スラッシュ)が必要です。
- ファイルのパスには日本語は使用できません。英字のフォルダを指定してください。

4.5.8 高負荷時の機能制限設定

アプリケーションサーバの使用メモリが設定した閾値を越えた場合に、ログインおよび人事検索からの Excel 帳票出力を制限することができます。上記の機能を利用する場合には、以下の設定をおこなってください。



<重要>

- 機能制限をおこなわない場合には、本設定は不要です。

(1) web.xml ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥web.xml ファイルをテキストエディタで開き、111、124 行目のコメントアウトを削除してください。

(以下の太字の部分削除してください。)

110	<!-- System Check Filter -->
111	<!--
112	<filter>
113	<filter-name>SystemCheckFilter</filter-name>
114	<filter-class>jp.co.toshiba_sol.generalist.common.filter.GeneSystemCheckFilt
115	er</filter-class>
	</filter>
116	<filter-mapping>
117	<filter-name>SystemCheckFilter</filter-name>
118	<url-pattern>/faces/jsp/menu/login/login.jsp</url-pattern>
119	</filter-mapping>
120	<filter-mapping>
121	<filter-name>SystemCheckFilter</filter-name>
122	<url-pattern>/faces/jsp/menu/login/singleSignOn.jsp</url-pattern>
123	</filter-mapping>
124	-->



<重要>

- 上記以外のパラメータはシステムで固定のパラメータです。変更しないでください。
- ファイル変更時には文字コードは『UTF-8』で保存してください。コメント等に日本語を入力しない場合には文字コードの指定は不要です。

(2) memorychecker.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%memorychecker.properties
es ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	# Configuration for Default.
2	
3	# Whether to check memory amount used.
4	memoryCheckFlag= <u>0</u>
5	
6	# Threshold amount used not to login, Please set the value on percentage.
7	memoryThreshold= <u>80</u>
8	noCheckWord=yes
9	#msg_memoryCheckError=
10	#msg_retryLogin=
11	
12	
13	# Configuration for GeneSystemCheckFilter only.
14	#GeneSytemCheckFilter_memoryCheckFlag=0
15	#GeneSytemCheckFilter_memoryThreshold=80
16	#GeneSytemCheckFilter_msg_memoryCheckError=
17	#GeneSytemCheckFilter_msg_retryLogin=
18	
19	
20	
21	# Configuration for GeneSystemCheckFilter only.
22	#JSI00700_memoryCheckFlag=0
23	#JSI00700_memoryThreshold=80
24	JSI00700_msg_memoryCheckError=%u30B5%u30FC%u30D0%u304C%u6DF7%u96D1 %u3057%u3066%u3044%u308B%u305F%u3081Excel%u51FA%u529B%u306F%u884C%u 3048%u307E%u305B%u3093%u3002
25	JSI00700_msg_retryLogin=%u3057%u3070%u3089%u304F%u3057%u3066%u304B%u308 9%u518D%u5B9F%u884C%u3059%u308B%u304BCSV%u30D5%u30A1%u30A4%u30EB %u51FA%u529B%u306B%u5909%u66F4%u3057%u3066%u304F%u3060%u3055%u3044 %u3002
26	

- メモリの閾値を超えた場合にログインおよび機能実行の制御を行うかどうかを設定します。制御をしない場合は「0」を設定します。制御する場合は「1」を設定します。システム全体に対する設定になります。

4 行目 :memoryCheckFlag=0

- アプリケーションサーバに設定するメモリの閾値です。パーセントで設定します。「80」を設定した場合、メモリ使用量が 80%を超えている状態で制御がかかります。システム全体に対する設定になります。

7 行目 :memoryThreshold=80

(3) 人事検索の Excel 出力を個別に制御するためには以下の設定が必要です。

- デフォルトではシステム全体の閾値を参照するように設定されていますので、人事検索の Excel 出力を個別に設定できるようにします。22 行目、23 行目の「#」を削除してください。

22 行目 :~~#~~JSI00700_memoryCheckFlag=0

23 行目 :~~#~~JSI00700_memoryThreshold=80

- メモリの閾値を超えた場合に人事検索の Excel 出力の制御を行うかどうかを設定します。制御をしない場合は「0」を設定します。制御する場合は「1」を設定します。

22 行目 :JSI00700_memoryCheckFlag=1

- 人事検索の Excel 出力に設定するメモリの閾値です。パーセントで設定します。「80」を設定した場合、メモリ使用量が 80%を超えている状態で制御がかかります。

23 行目 :JSI00700_memoryThreshold=80

4.5.9 ログ出力先の設定

(1) ログ設定ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥logback.xml ファイルをテキストエディタで開き、以下の行にある出力フォルダの設定を任意のフォルダに変更します。フォルダおよびログファイルは実行時に自動的に作成されます。

1	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
2	
3	<configuration>
4	
5	<property name="log.path" value="C:/Generalist/logs" />
6	(以降、省略)

(2) 一括実行／非同期処理用ログ設定ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥logbackbatch.xml ファイルをテキストエディタで開き、以下の行にある出力フォルダの設定を任意のフォルダに変更します。フォルダおよびログファイルは実行時に自動的に作成されます。

1	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
2	
3	<configuration>
4	
5	<property name="log.path" value="C:/Generalist/logs" />
6	(以降、省略)



<重要>

- ファイル変更時には文字コードは「UTF-8」で保存してください。コメント等に日本語を入力しない場合には文字コードの指定は不要です。

4.5.10 アプリケーションパラメータの設定

- (1) <Generalist インストールフォルダ>¥Generalist¥WEB-INF¥web.xml をテキストエディタで開き、以下の部分を編集します。

13～32 行目

13	<!-- User Setting Parameters -->
14	<context-param>
15	<param-name>common-location-gene-install-folder</param-name>
16	<param-value>C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CC¥web¥containers¥geneias¥webapps¥Generalist¥Generalist.war¥</param-value>
17	</context-param>
18	<context-param>
19	<param-name>DOWNLOAD_PATH</param-name>
20	<param-value>C:¥Generalist¥temp¥download¥</param-value>
21	</context-param>
22	<context-param>
23	<param-name>UPLOAD_PATH</param-name>
24	<param-value>C:¥Generalist¥temp¥upload¥</param-value>
25	</context-param>
26	
27	...
28	<context-param>
29	<param-name>MNEvidence-WorkFolder</param-name>
30	<param-value>C:¥Generalist¥temp¥upload¥</param-value>
31	</context-param>
32	...

- common-location-gene-install-folder: <Generalist インストールフォルダ>を指定します。
- DOWNLOAD_PATH: ファイルのダウンロードで使用する一時フォルダです。アプリケーションサーバ上の任意のフォルダを指定してください。
- UPLOAD_PATH: ファイルのアップロードで使用する一時フォルダです。アプリケーションサーバ上の任意のフォルダを指定してください。
- MNEvidence-WorkFolder: 個人番号登録時にエビデンスファイルのアップロードで使用する一時フォルダです。アプリケーションサーバ上の任意のフォルダを指定してください。



<重要>

- 上記以外のパラメータはシステムで固定のパラメータです。変更しないでください。
- ファイル変更時には文字コードは『UTF-8』で保存してください。コメント等に日本語を入力しない場合には文字コードの指定は不要です。
- 各フォルダの設定の最後には「¥」が必要です。各フォルダの設定の最後に「¥」が入って

いることを確認してください。

- 各フォルダに対して、アプリケーションサーバのサービスを起動するユーザ(通常は、「ローカル システム」)の書き込み権限があることを確認してください。
- 大量のファイル取込処理を行った際にエラーとなり取込が行えない場合があります。その場合は application.properties の項目「uploadMemorySize」の値を増やしてください(初期値は 10k(キロバイト)です)。

- (2) <Generalist インストールフォルダ>¥Generalist¥WEB-INF¥classes¥properties¥application.p
roperties をテキストエディタで開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	# ファイルアップロード時のメモリサイズ(10K)
2	uploadMemorySize=10240
3	# アップロード可能な最大サイズ(15M)
4	uploadSizeMax=15728640
5	# アップロードするファイル毎の最大サイズ(5M)
6	uploadFileSizeMax=5242880
7	# プロファイルのインデックスファイルの格納場所
8	indexPath= <u>C:¥¥Generalist¥¥indexes</u>

- プロファイルのインデックスファイルとは人材検索で利用する情報です。
8 行目 : indexPath= C:¥¥Generalist¥¥indexes

4.5.11 ファイル変換の設定

- (1) fileconverter.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥properties¥fileconverter.properties
ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

12	# ドライバクラス名
13	driverClassName=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
14	# jdbc:subprotocol:subname 形式のデータベース URL
15	url=jdbc:oracle:thin:@ <u>dbgene:1521/geneSID</u>
16	# 接続ユーザ名
17	username= <u>GRSYS</u>
18	# 接続パスワード
19	password= <u>GRSYS</u>

4.5.12 ヘルプファイルのインストール

- (1) ヘルプファイルのコピー

Generalist の<インストールメディア>¥Manual¥manual.zip ファイルを解凍します。

解凍したファイルを以下のフォルダにコピーします。

コピー先:<Generalist のインストールフォルダ>%help

4.5.13 Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用する場合

- (1) 「付録 H Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用するための設定」を参照し、設定してください。

4.5.14 電子申請の設定

- (1) egov-beans-datasources.xml ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%egov-beans-datasources.xml ファイルを開きます。下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
	•
	(中略)
	•
27	<property name="url">
28	<value>jdbc:oracle:thin:@ <u>dbserver:1521/GENE</u> </value>
29	</property>
30	<property name="username">
31	<value> <u>GRSYS</u> </value>
32	</property>
33	<property name="password">
34	<value> <u>GRSYS</u> </value>
35	</property>
	•
	(中略)
	•
64	</beans>

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

28 行目 : jdbc:oracle:thin:@<データベースサーバのホスト名>:<ポート番号>/<SID>

31 行目 : <value><Generalist データベースユーザ></value>

34 行目 : <value><Generalist データベースユーザパスワード></value>

- (2) egov-application.properties の編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%egov-application.properties ファイルを開きます。下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

1	#PROXY
2	proxy.flag= <u>0</u>

3	proxy.server.host=
4	proxy.server.port=
	•
	(中略)
	•
9	#EgovService
10	egov.send.outFolder= <u>C:¥¥Generalist¥¥egov¥¥Applies¥¥</u>
11	egov.send.zipFolder= <u>C:¥¥Generalist¥¥egov¥¥zip¥¥</u>
	•
	(中略)
	•
48	authRequestBody=<?xml version="1.0" ~
49	#0:Non auto/1:Auto
50	auto.download.finish= <u>1</u>
	•
	(中略)
	•
77	#REDIRECT GENE SERVER
78	egov2.generalist.server.host= <u>http://geneias:7003/Generalist</u>

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

2 行目 : proxy.flag=〈プロキシサーバの利用有無〉

規定値は「0」で、プロキシサーバを利用しない設定です。

プロキシサーバを利用する場合は「1」に変更し、「proxy.server.host」「proxy.server.port」にプロキシサーバのホスト名・ポート番号を設定してください。

3 行目 : proxy.server.host=〈プロキシサーバのホスト名〉

※proxy.flag を 1 に変更した場合に設定してください。

4 行目 : proxy.server.port=〈プロキシサーバのポート番号〉

※proxy.flag を 1 に変更した場合に設定してください。

10 行目 : egov.send.outFolder=〈電子申請時に利用するサーバ上の一時フォルダ1〉

11 行目 : egov.send.zipFolder=〈電子申請時に利用するサーバ上の一時フォルダ2〉

50 行目 : auto.download.finish=〈取得完了自動送信フラグ〉

1: 自動送信する (「取得完了」ボタンは非表示)

0: 自動送信しない (「取得完了」ボタンを表示)

規定値は「1」です。電子申請 公文書・コメント一覧ダイアログ画面に「取得完了」ボタンを表示する場合に設定してください。

78 行目 : egov2.generalist.server.host=http://〈アプリケーションサーバのホスト名〉:〈ポート番号〉/〈アプリケーション名〉

電子申請業務を行うクライアント PC から、Generalist を起動する際の URL を記載します。ご利用の環境に合わせてアプリケーションサーバ名、ポート番号、アプリケーション名を設定してください。ログイン URL が http://geneias:7003/Generalist の場合、各項目は以下のとおりです。

- アプリケーションサーバのホスト名geneias
- ポート番号7003
- アプリケーション名Generalist



<重要>

- 「egov.send.outFolder」「egov.send.zipFolder」には存在するフォルダを指定してください。送信時の一時フォルダとなります。送信後にファイルは削除します。
- フォルダのパスには日本語は使用できません。半角英数字のフォルダを指定してください。半角スペースは利用しないでください。
- フォルダの区切りには、「¥」を使用してください。フォルダの最後にも「¥」を付けてください。

(3) ルート証明書の設定

- ① Oracle 社のホームページより、JDK をダウンロードしてください。

Java Downloads | Oracle 日本 (2023 年 1 月 19 日時点)

<https://www.oracle.com/jp/java/technologies/downloads/>

ダウンロードする JDK は、Windows 用の最新バージョンを選択してください。

OS は Windows で、ZIP ファイル形式のファイルをダウンロードしてください。

※2023 年 1 月 19 日時点では Java19 が最新バージョンです。

- ② ダウンロードした zip ファイルを任意のフォルダに解凍します。

- ③ 解凍したフォルダ内にある cacerts ファイルをコピーします。

コピー元:<任意のフォルダ>jdk-19_windows-x64_bin.zip¥jdk-19¥lib¥security¥cacerts

コピー先:<WebCube インストールフォルダ>¥jdk¥lib¥security

※コピー元のフォルダ構成は Java19 の場合になります。適宜読み替えてください。



<重要>

- Java 認証局証明書管理ファイル(cacerts)は、Java のバージョンに依存しません。
- 古いバージョンの JDK に含まれているファイルを利用すると、認証局の期限が古い情報となるため、最新バージョンの JDK を入手してください。

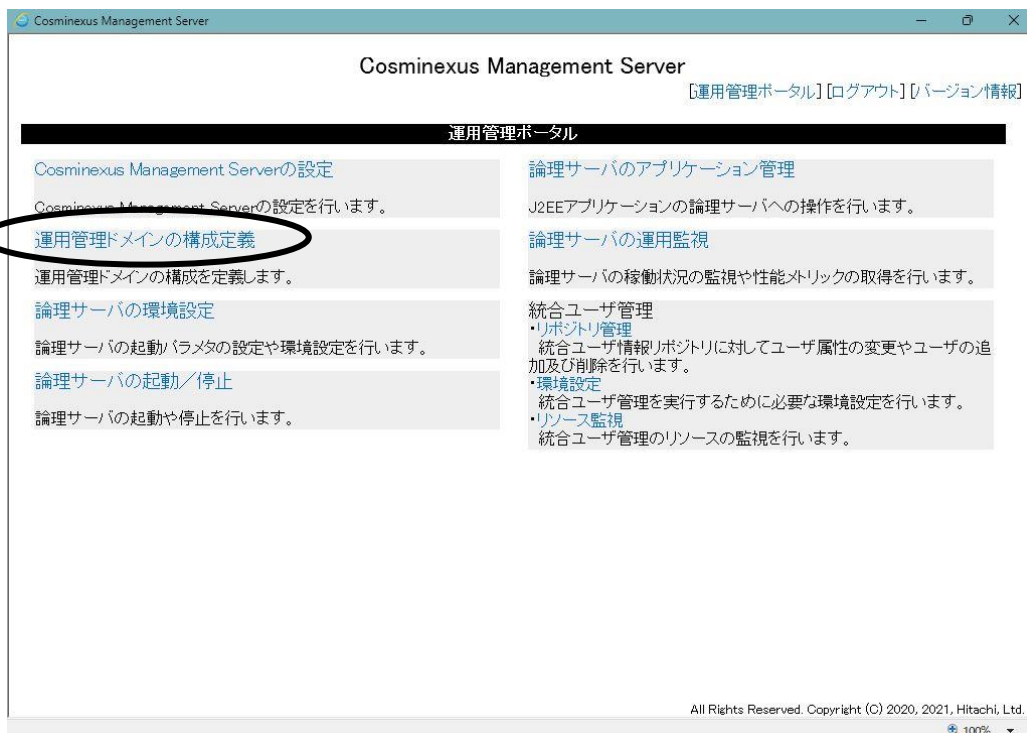
4.5.15 アプリケーションサーバへのインストール

(1) WebCube Management Server を起動し、ログインします。

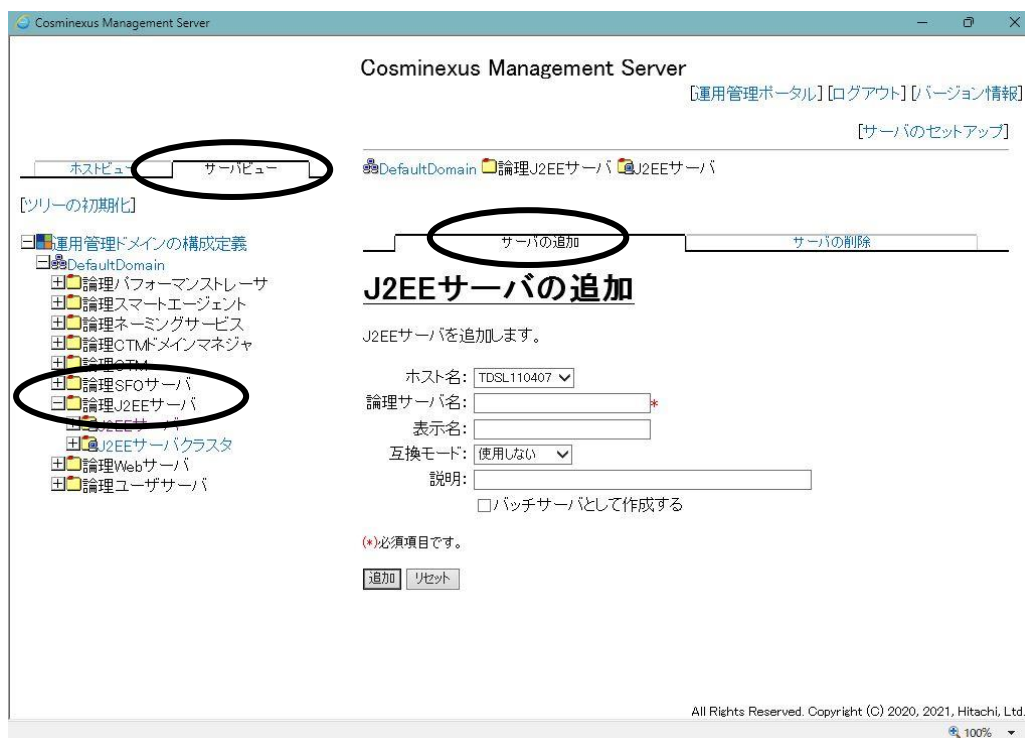
Web ブラウザを起動し、アドレスに” http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr ”と入力します。本アドレスを指定すると WebCube Application Server 管理コンソールが起動します。WebCube のインストール時に設定したユーザ名とパスワードを使用し、ログインします。(デフォルト設定の場合は、ユーザ ID「admin」パスワード「空欄」です。)



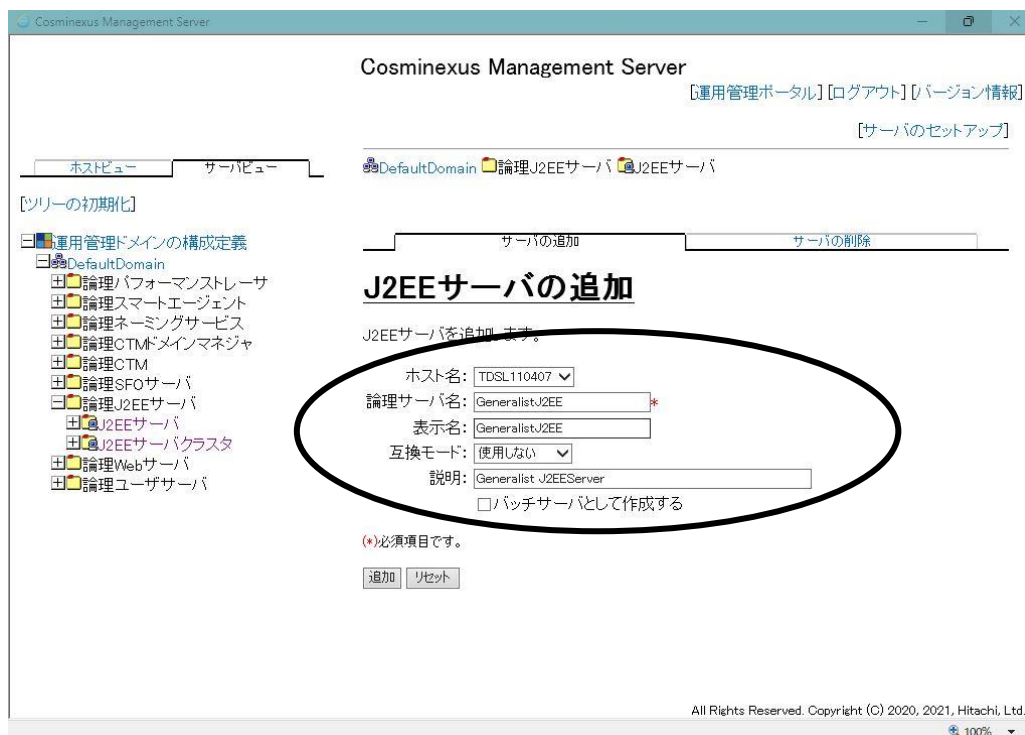
(2) ポータルより、『運用管理ドメインの構成定義』をクリックします。



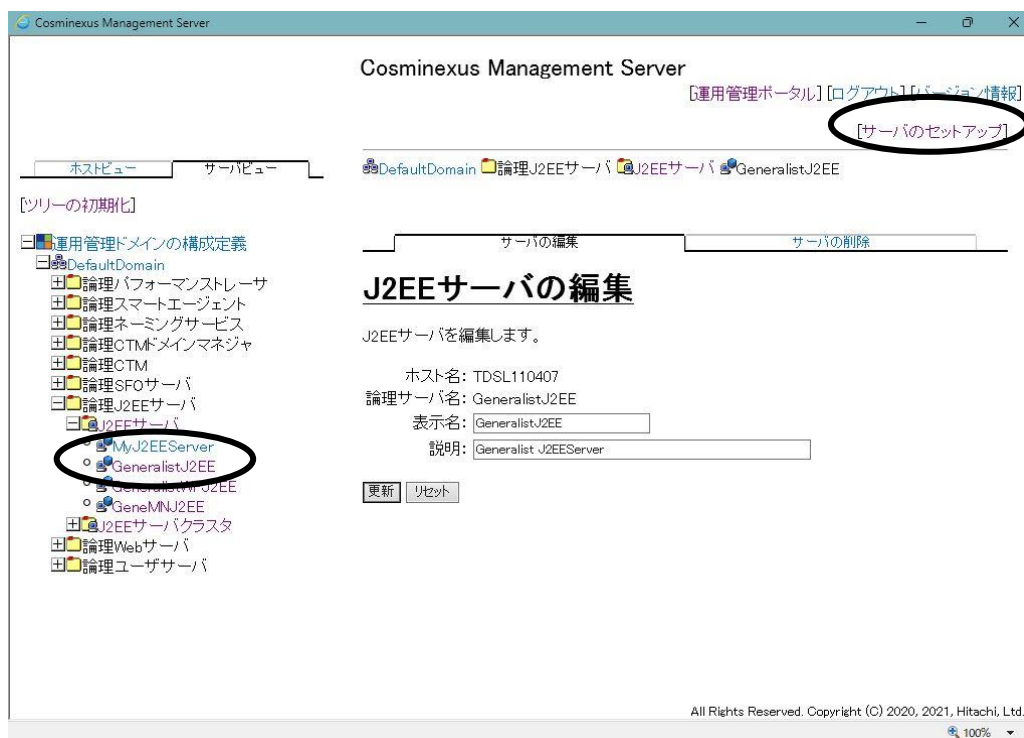
- (3) 『サーバビュー』、『論理 J2EE サーバ』の順にクリックします。『J2EE サーバ』をクリックし、『J2EE サーバの追加』画面を開きます。



- (4) 『論理サーバ名』『表示名』『説明』を入力し、『追加』ボタンをクリックします。



- (4) 『ツリーの初期化』をクリックし、再度『J2EE サーバ』をクリックしてください。追加したサーバが表示されることを確認します。追加したサーバをクリックし、右上の『サーバのセットアップ』をクリックします。



- (5) 追加したサーバの『セットアップ』のチェックボックスにチェックを入れ、『選択してセットアップ』をクリックします。



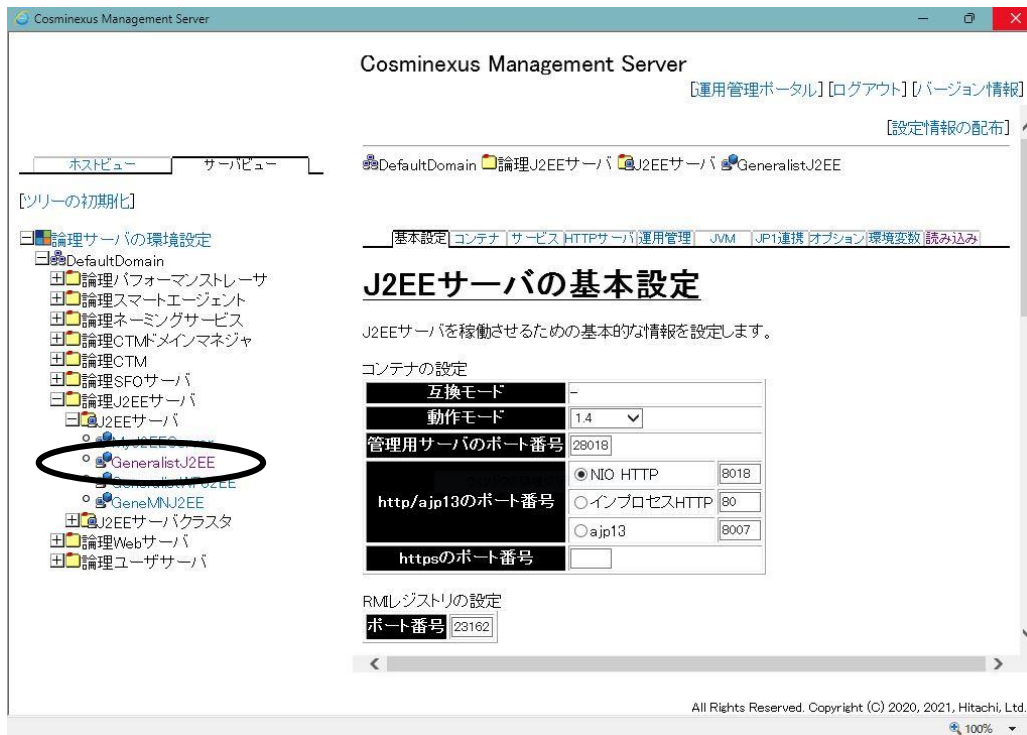
- (6) ステータスが『セットアップ済み』となったことを確認し、『運用管理ポータル』をクリックし、ポータル画面に戻ります。



- (7) ポータルより、『論理サーバの環境設定』をクリックします。



- (8) 『サーバビュー』から作成した J2EE サーバを選択します。



- (9) 『読み込み』タブを選択、『別のサーバから設定を読み込みます』のリストボックスで『MyJ2EEServer』を選択し、『読み込み』ボタンをクリックします。

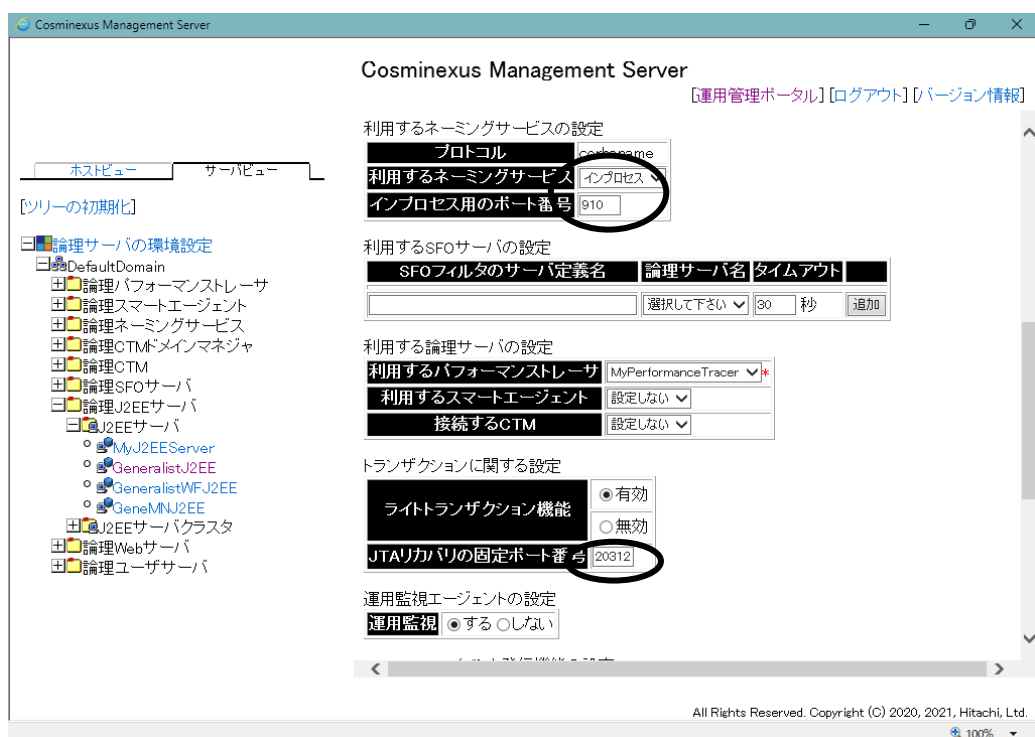
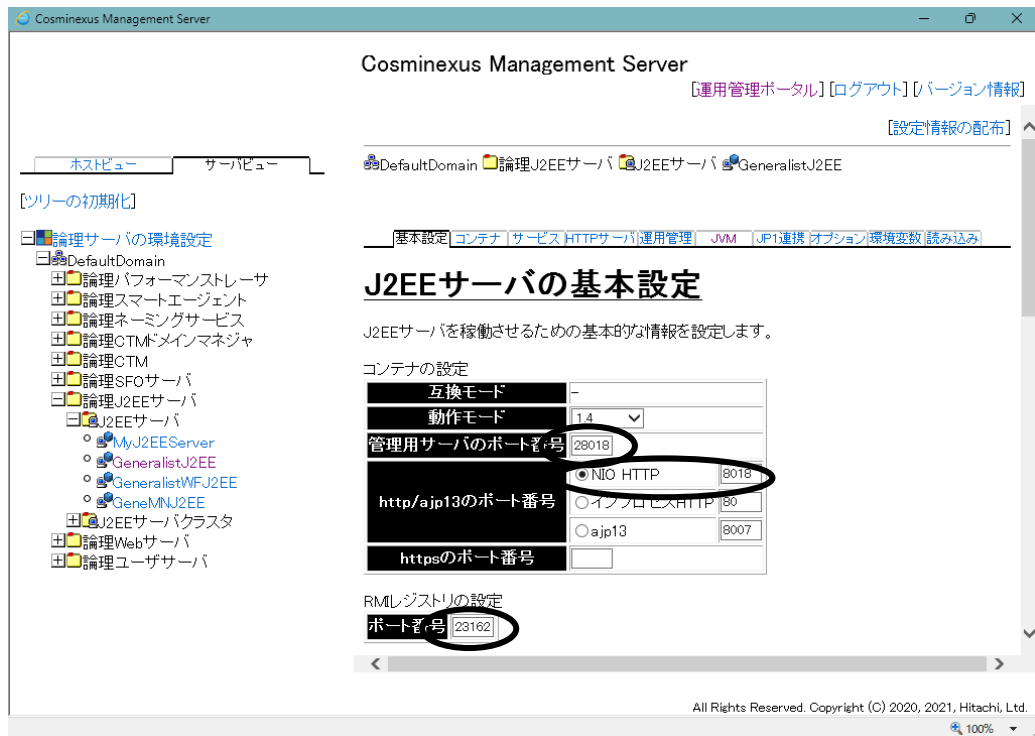


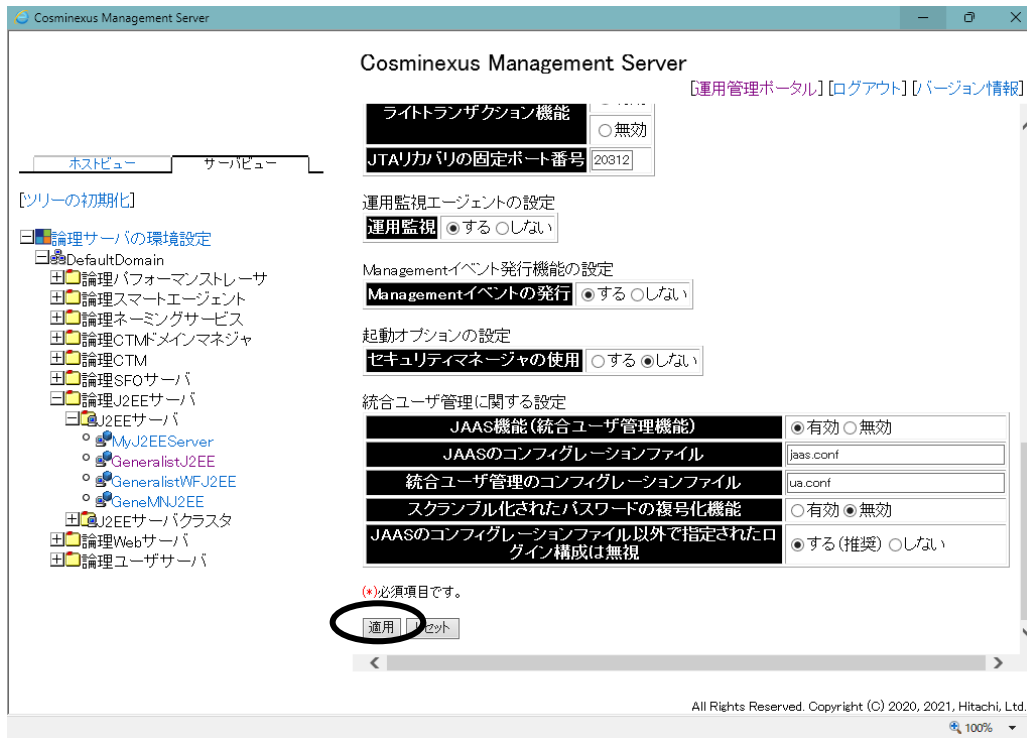
(10) 読み込みが完了後、『サーバビュー』から作成した J2EE サーバを選択します。『基本設定』タブを表示します。

「基本設定」タブでは各ポート番号を他サーバと被らないように変更します。

変更が必要なポート番号は以下です。

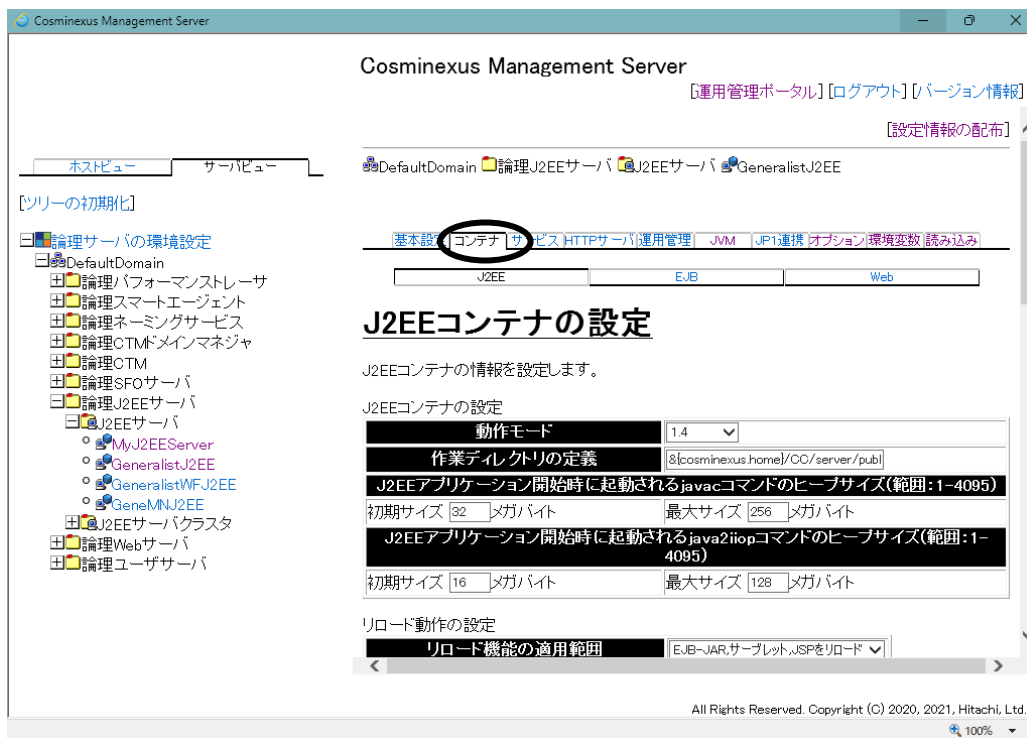
- 管理用サーバのポート番号
- http/ajp13 のポート番号 (NIO_HTTP)
- RMI レジストリの設定のポート番号
- 利用するネーミングサービスの設定のインプロセス用のポート番号
- JTA リカバリの固定ポート番号





ポートの変更が完了したら、『適用』をクリックします。

(11)『コンテナ』タブをクリックします。

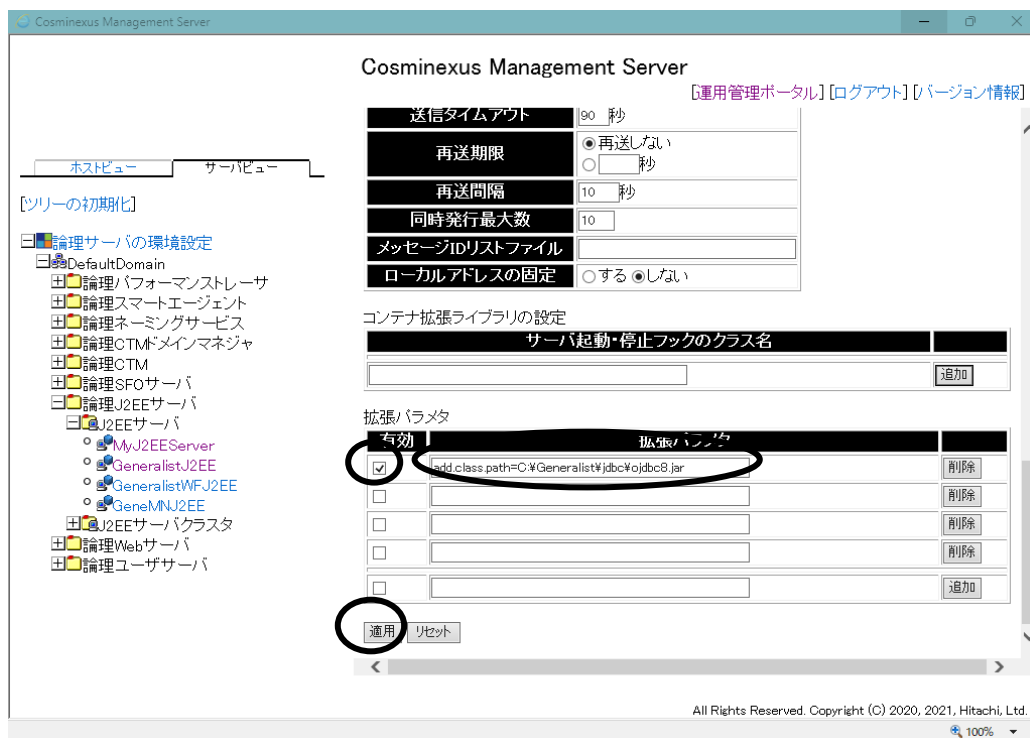


(12)『拡張パラメタ』の設定を行います。

以下の JDBC のライブラリをアプリケーションサーバマシンの任意のフォルダにコピーします。
コピーする JDBC のライブラリはご利用のデータベースにより異なります。

データ ベース	コピー元	⇒ コピー	デフォルトのコピー先 (フォルダを作成する 必要があります。)	拡張パラメタの設定値 (下記はデフォルトの場 合です。)
Oracle Database 12cR2 または、 Oracle Database 19c	<Oracle Database Server のインスト ールフォルダ>%jd bc%lib%ojdbc8.jar		C:%Generalist%jdbc	add.class.path=C:%Gen eralist%jdbc%ojdbc8.jar

『拡張パラメタ』に、表中の「拡張パラメタの設定値」に沿ってパラメタを追加します。
有効にチェックを入れ、『適用』をクリックします。



有効にチェックを入れ、『適用』をクリックします。

(13)『運用管理』タブの『通信』タブをクリックします。

他サーバと被らないように変更します。

変更が必要なポート番号は以下です。

-ポート番号

-通信ポート番号

Cosminexus Management Server

[運用管理ポータル] [ログアウト] [バージョン情報]

[設定情報の配布]

DefaultDomain 論理J2EEサーバ J2EEサーバ GeneralistJ2EE

基本設定 | コンテナ | サービス | HTTPサーバ | 運用管理 | JVM | JPI連携 | オプション | 環境変数 | 読み込み

稼働情報 | イベント | 通信

通信の設定

通信の情報を設定します。

RMIレジストリの設定

ポート番号	23162
ホストの固定	<input type="radio"/> 固定 <input checked="" type="radio"/> 固定しない <input type="radio"/> ループバックアドレス
通信ポート番号	<input type="radio"/> 自動 <input checked="" type="radio"/> 23550

適用 リセット

All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2021, Hitachi, Ltd.

(14)『JVM』タブをクリックします。『起動パラメタ』タブの『拡張起動パラメタ』の以下のパラメータの値を「512m」に修正してください。

- XX:MetaspaceSize=512m
- XX:MaxMetaspaceSize=512m

Cosminexus Management Server

[運用管理ポータル] [ログアウト] [バージョン情報]

Host View | Server View

[ツリーの初期化]

論理サーバの環境設定

DefaultDomain

- 論理パフォーマンスストレージャ
- 論理スマートエージェント
- 論理ネーミングサービス
- 論理CTMドメインマネージャ
- 論理CTM
- 論理SFOサーバ
- 論理J2EEサーバ
 - J2EEサーバ
 - MyJ2EEServer
 - GeneralistJ2EE
 - GeneralistWFJ2EE
 - GeneMNJ2EE
 - J2EEサーバクラスタ
 - 論理Webサーバ
 - 論理ユーザサーバ

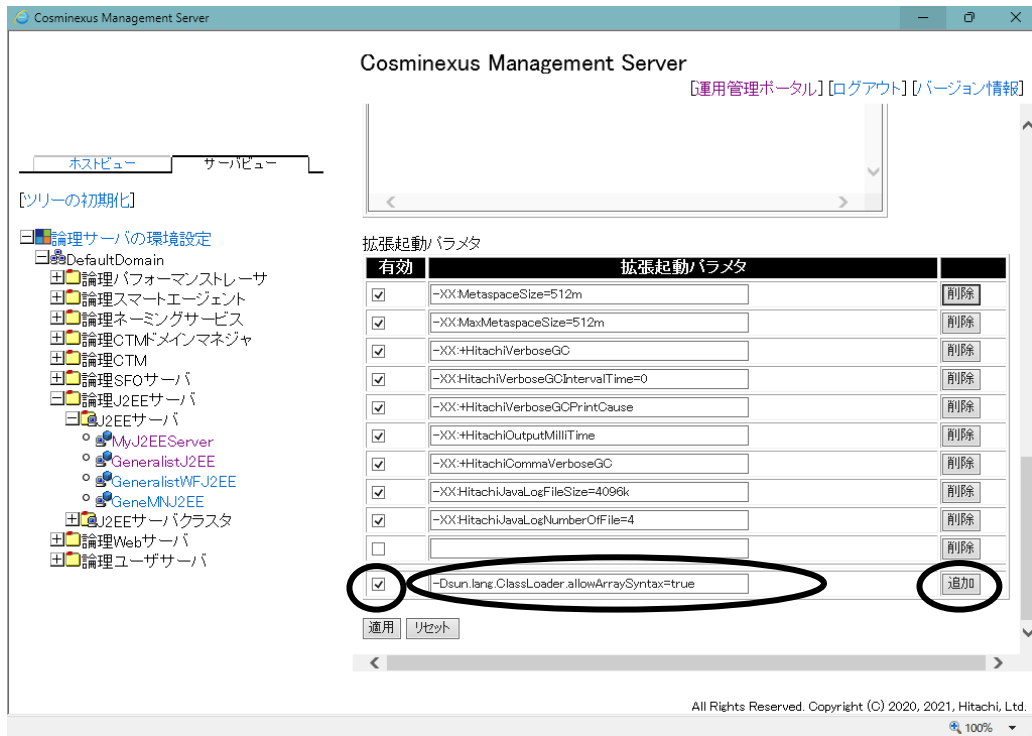
拡張起動パラメタ

有効	拡張起動パラメタ	
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:MetaspaceSize=512m	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:MaxMetaspaceSize=512m	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:+HitachiVerboseGC	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime=0	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:+HitachiVerboseGCPrintCause	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:+HitachiOutputMilliTime	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:+HitachiCommaVerboseGC	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:HitachiJavaLogFileSize=4096k	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=4	削除
<input type="checkbox"/>		削除
<input checked="" type="checkbox"/>	-Dsun.lang.ClassLoader.allowArraySyntax=true	追加

適用 リセット

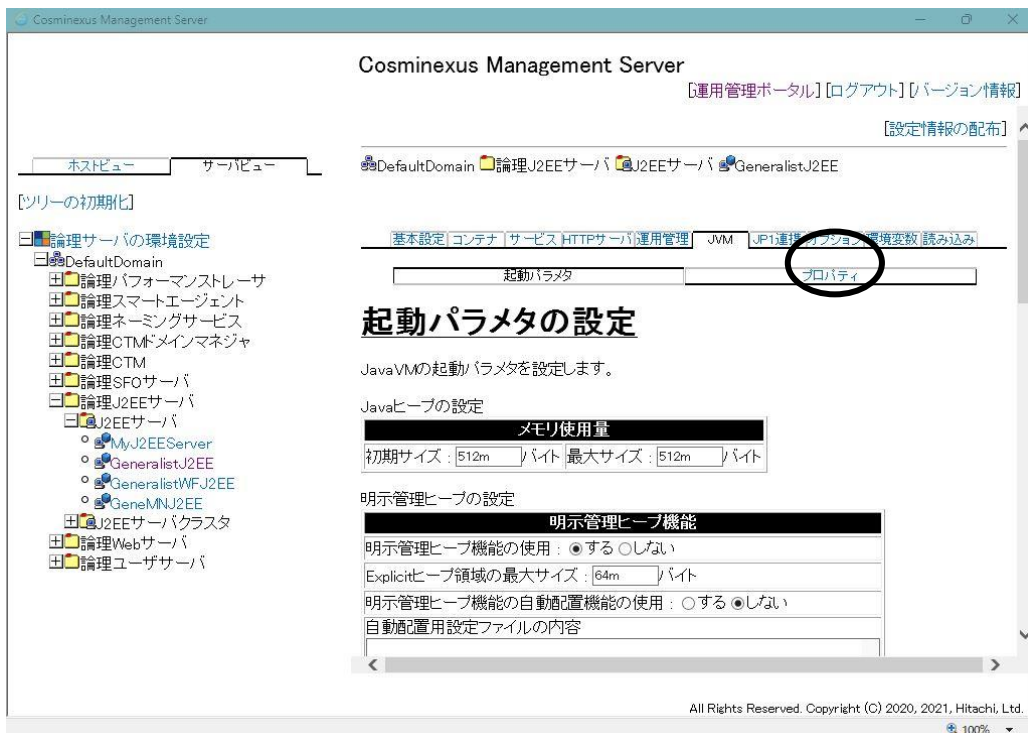
All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2021, Hitachi, Ltd.

- (15)『拡張起動パラメタ』に、-Dsun.lang.ClassLoader.allowArraySyntax=true を入力し、チェックを入れて追加をクリックします。

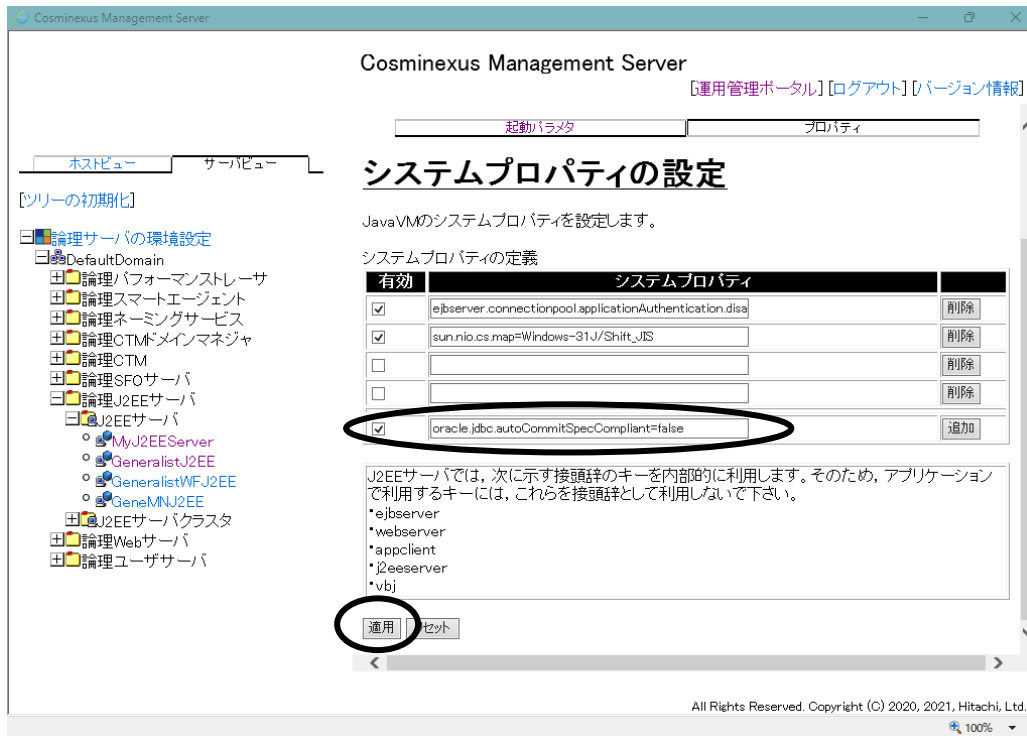


有効にチェックを入れ、『適用』をクリックします。

- (16)『JVM』タブ内の、『プロパティ』タブをクリックします。

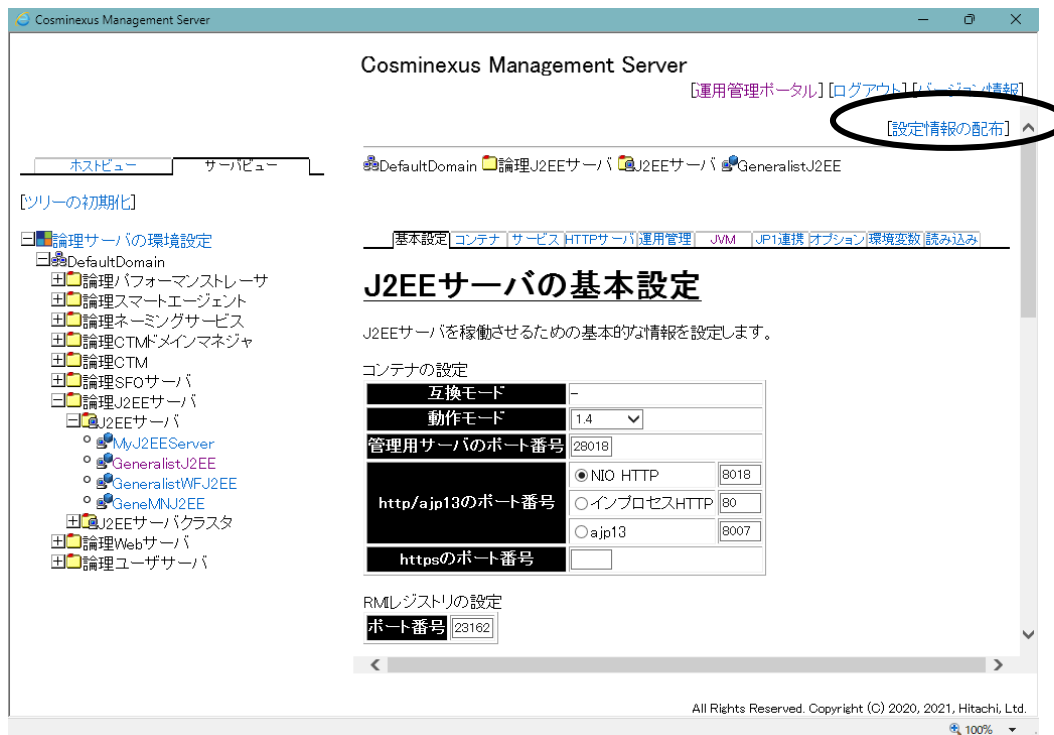


- (17)『システムプロパティの定義』に、「oracle.jdbc.autoCommitSpecCompliant=false」を入力し、チェックを入れて追加をクリックします。



有効にチェックを入れ、『適用』をクリックします。

- (18)設定が完了したら『設定情報の配布』をクリックします。



(19)今回追加した J2EE サーバの『配布』チェックボックスをチェックし、選択して配布をクリックします。

Cosminexus Management Server

[運用管理ポータル] [ログアウト] [バージョン情報]

ホストビュー サーバビュー 配布 ログの表示

[ツリーの初期化]

論理サーバの環境設定

- DefaultDomain
 - 論理パフォーマンスストレサ
 - 論理スマートエージェント
 - 論理ネーミングサービス
 - 論理CTMドメインマネージャ
 - 論理CTM
 - 論理SFOサーバ
 - 論理J2EEサーバ
 - J2EEサーバ
 - MyJ2EEServer
 - GeneralistJ2EE
 - GeneralistWFJ2EE
 - GeneMNJ2EE
 - J2EEサーバクラスタ
 - 論理Webサーバ
 - 論理ユーザサーバ

設定情報の配布

設定した情報を各ホストに配布します。

ステータス	配布	論理サーバ名	ホスト名
	<input type="checkbox"/>	MyJ2EE Server	TDSSL110407
	<input checked="" type="checkbox"/>	GeneralistJ2EE	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	GeneralistWFJ2EE	TDSSL110407
配布済	<input type="checkbox"/>	GeneMNJ2EE	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	MyWebServer	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	Generalist_Web	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	GeneralistWF_Web	TDSSL110407
配布済	<input type="checkbox"/>	GeneMN_Web	TDSSL110407

設定情報の配布後に論理サーバの再起動が必要です。再起動を行わない論理サーバには設定情報が反映されません。

All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2021, Hitachi, Ltd.

(20)『ステータス』が『配布済』となったことを確認します。

Cosminexus Management Server

[運用管理ポータル] [ログアウト] [バージョン情報]

ホストビュー サーバビュー 配布 ログの表示

[ツリーの初期化]

論理サーバの環境設定

- DefaultDomain
 - 論理パフォーマンスストレサ
 - 論理スマートエージェント
 - 論理ネーミングサービス
 - 論理CTMドメインマネージャ
 - 論理CTM
 - 論理SFOサーバ
 - 論理J2EEサーバ
 - J2EEサーバ
 - MyJ2EEServer
 - GeneralistJ2EE
 - GeneralistWFJ2EE
 - GeneMNJ2EE
 - J2EEサーバクラスタ
 - 論理Webサーバ
 - 論理ユーザサーバ

設定情報の配布

設定した情報を各ホストに配布します。

ステータス	配布	論理サーバ名	ホスト名
配布済	<input type="checkbox"/>	MyJ2EE Server	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	GeneralistJ2EE	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	GeneralistWFJ2EE	TDSSL110407
配布済	<input type="checkbox"/>	GeneMNJ2EE	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	MyWebServer	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	Generalist_Web	TDSSL110407
	<input type="checkbox"/>	GeneralistWF_Web	TDSSL110407
配布済	<input type="checkbox"/>	GeneMN_Web	TDSSL110407

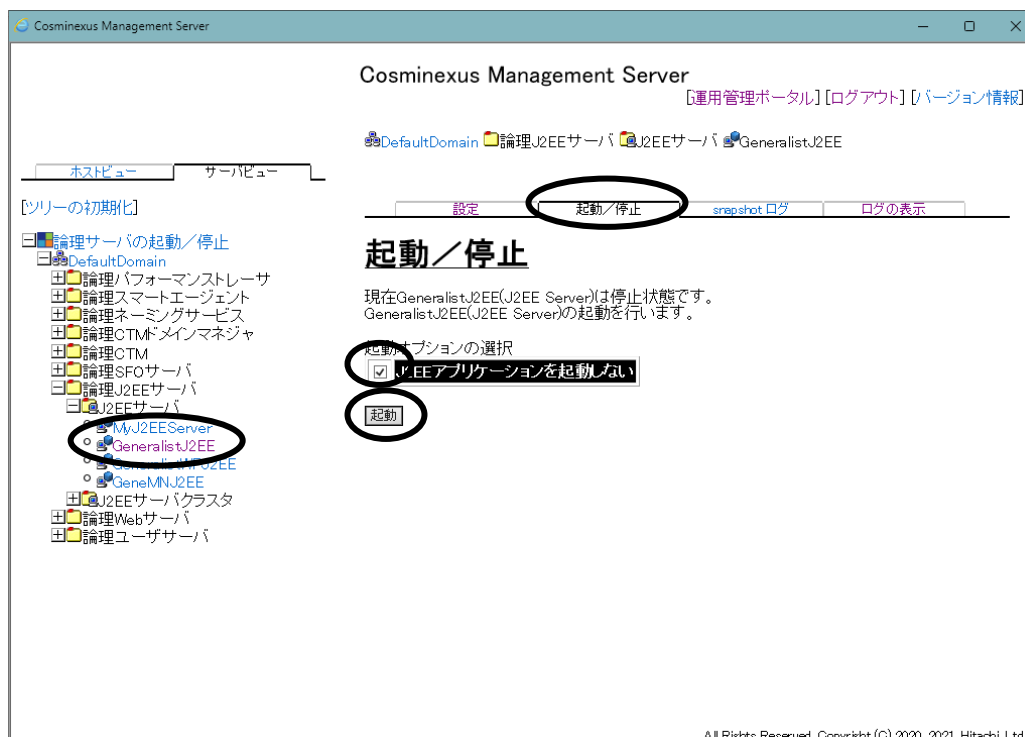
設定情報の配布後に論理サーバの再起動が必要です。再起動を行わない論理サーバには設定情報が反映されません。

All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2021, Hitachi, Ltd.

- (21) J2EE サーバを起動します。管理コンソールポータル画面から、『論理サーバの起動／停止』を選択します。既に J2EE サーバが起動している場合は、本手順は不要です。(21)へ進んでください。



- (22) J2EE サーバをクリックします。『起動／停止』タブを選択します。『J2EE アプリケーションを起動しない』にチェックをいれ、『起動』ボタンをクリックします。



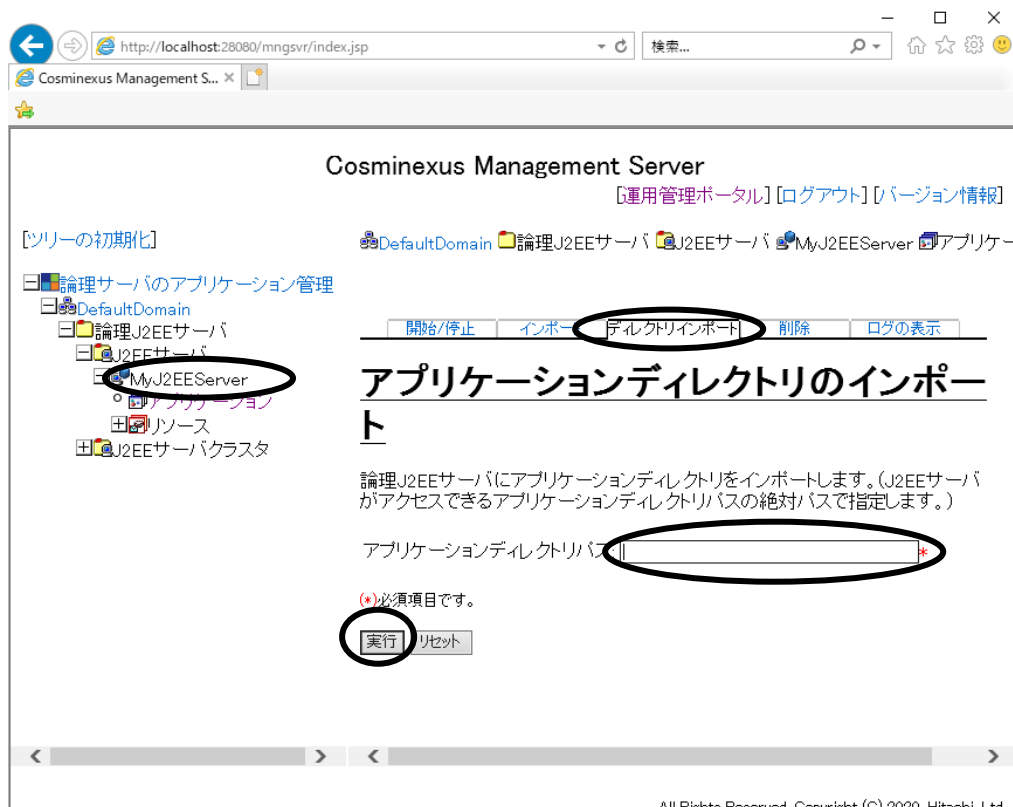
起動状況は、『ログの表示』から確認できます。

(23) 管理コンソールポータル画面より『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。

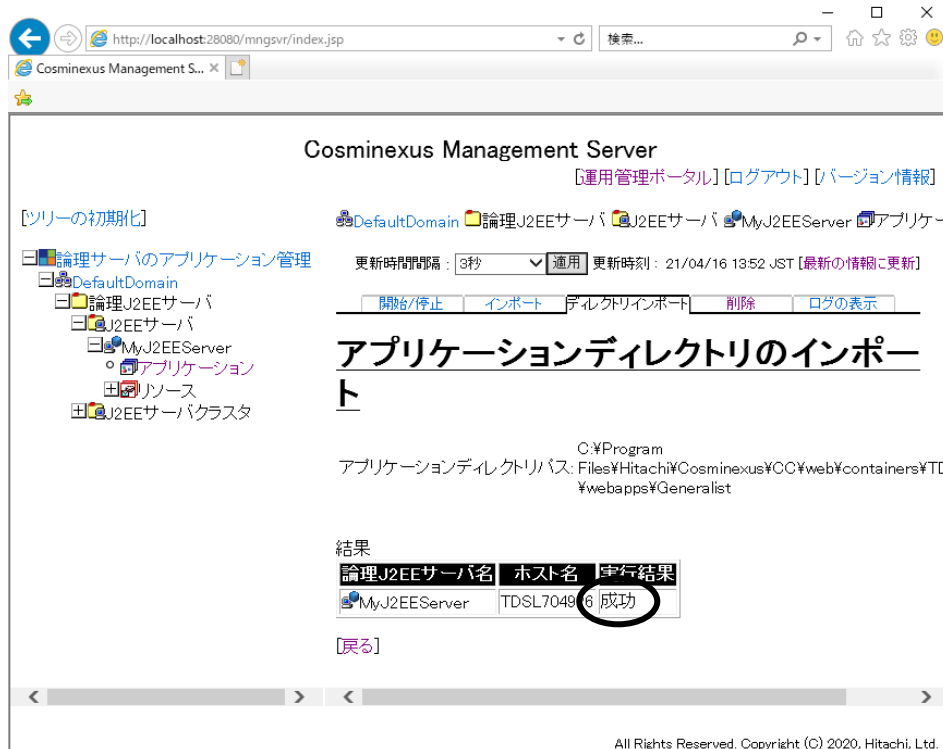


(24) 作成した J2EE サーバの『アプリケーション』を選択し、『ディレクトリインポート』タブをクリックします。アプリケーションディレクトリにデプロイするモジュールのディレクトリパス(以下参照)を入力し、実行ボタンをクリックします。

<WebCube Application Server のインストールディレクトリ> ¥CC¥web¥containers¥<サーバ名>¥webapps¥Generalist



(25) 実行結果が『実行中』から『成功』に変わります。



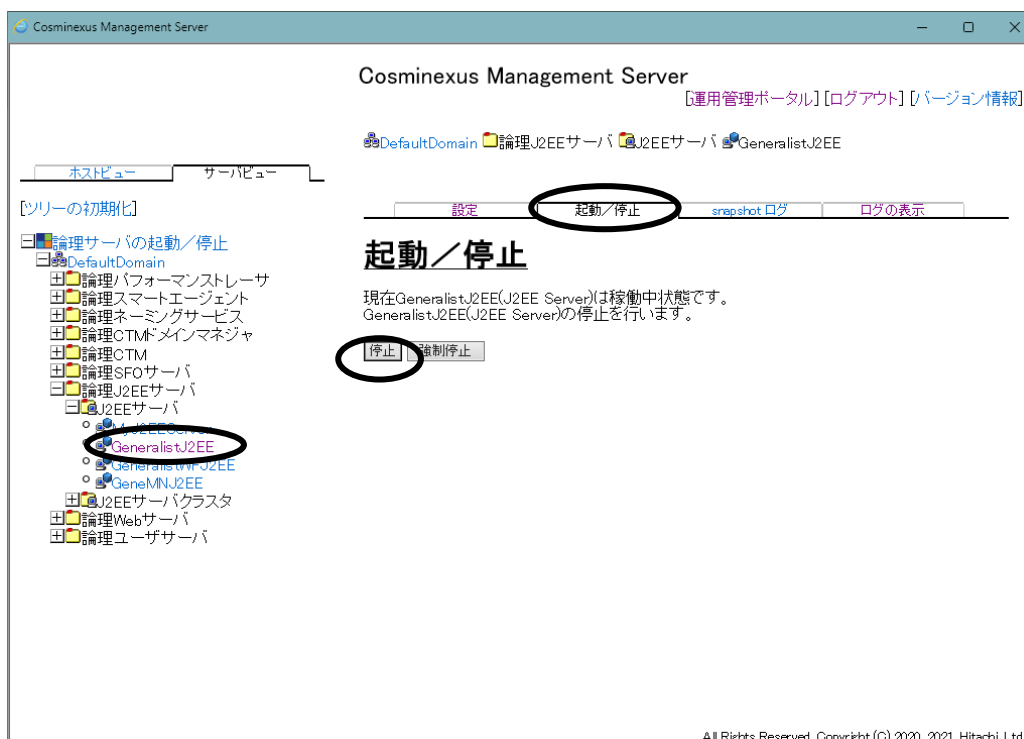
(26) 以下のフォルダに **Generalist** フォルダが作成されていることを確認します。

<WebCube Application Server のインストールディレクトリ>\¥CC¥server¥public¥
 ejb¥<作成した J2EE サーバ名>\¥apps¥<ユニーク文字列>\¥wars¥

(27) J2EE サーバを再起動します。管理コンソールポータル画面から、『論理サーバの起動／停止』を選択します。



(28) J2EE サーバをクリックします。『起動／停止』タブを選択します。『停止』ボタンをクリックします。



(29) userconf.properties ファイルを編集します。

HTTP セッションの管理方法を COOKIE のみに設定します。

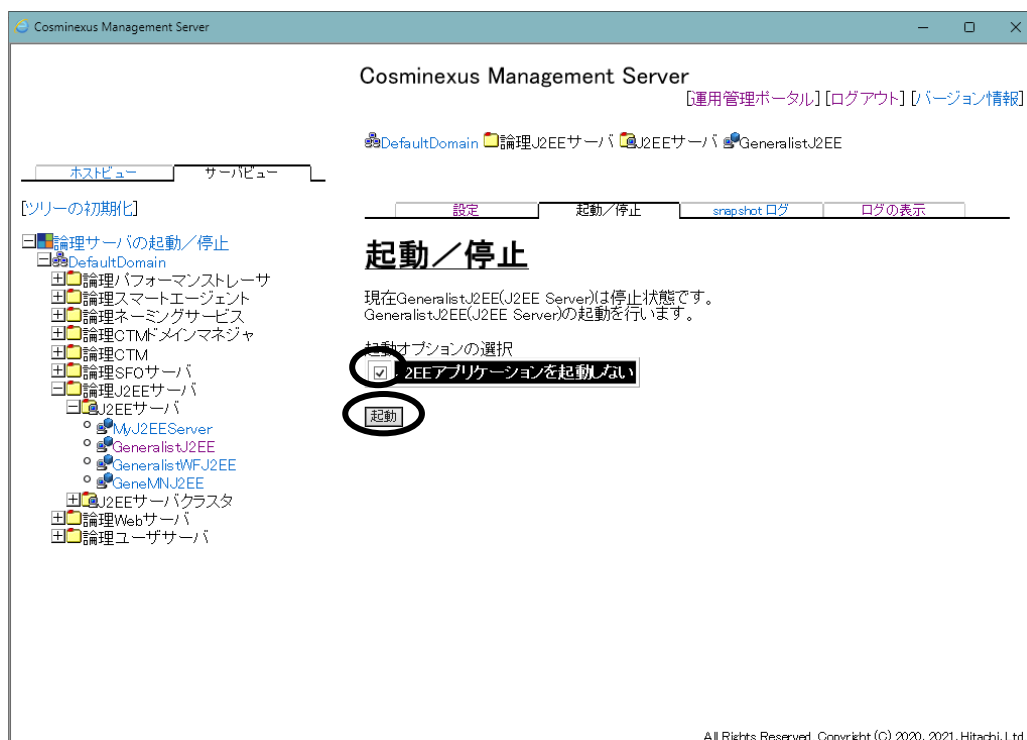
変更ファイル: <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%ejb
%<サーバ名称>%usrconf.properties

以下の設定を最終行に追加してください。

設定例 :

```
webservice.session.tracking_mode=COOKIE
```

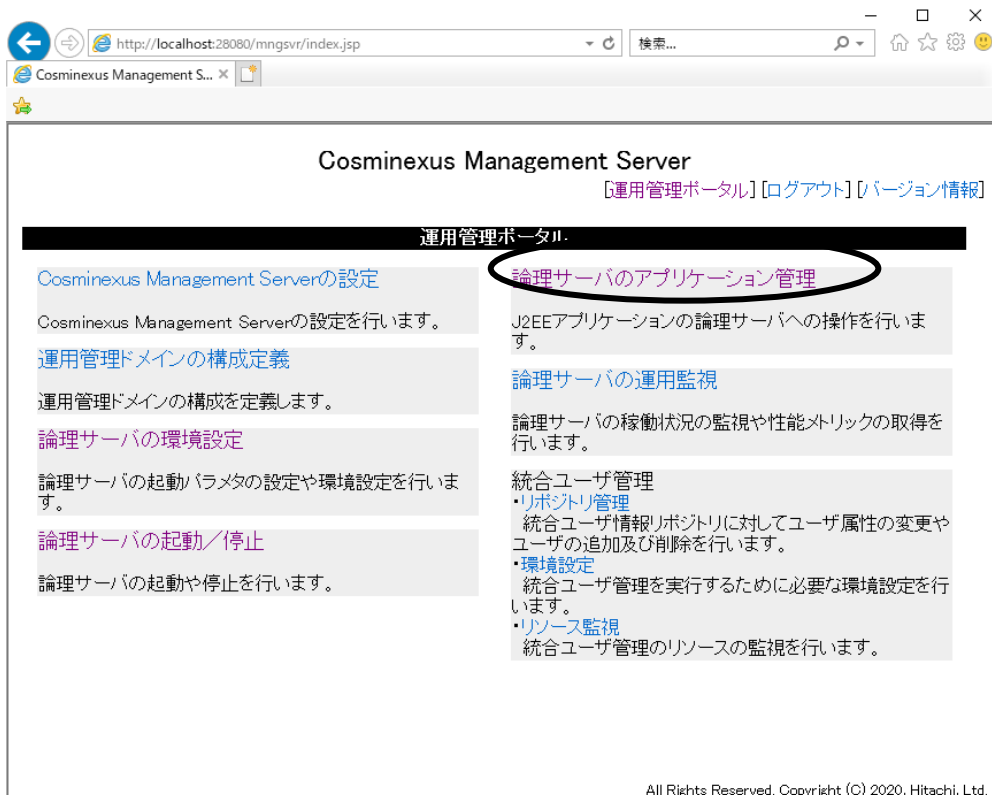
(30) 停止状態になりましたら、『J2EE アプリケーションを起動しない』にチェックをいれ、『起動』ボタンをクリックします。



起動状況は、『ログの表示』から確認できます。

4.5.16 GeneTools モジュールのインストール

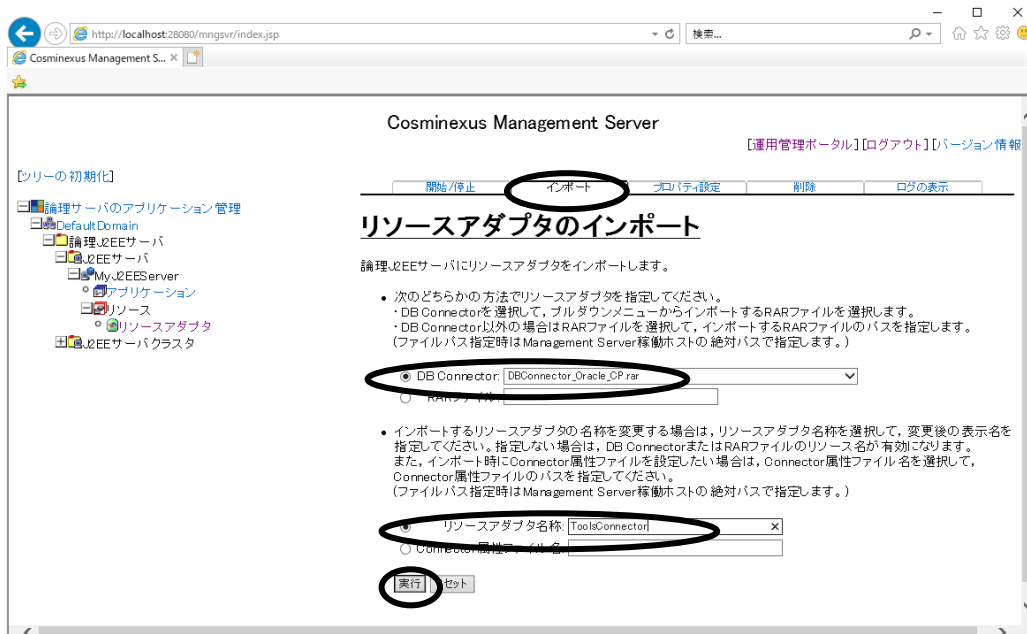
- (1) リソースアダプタを作成します。管理コンソールポータル画面から、『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。



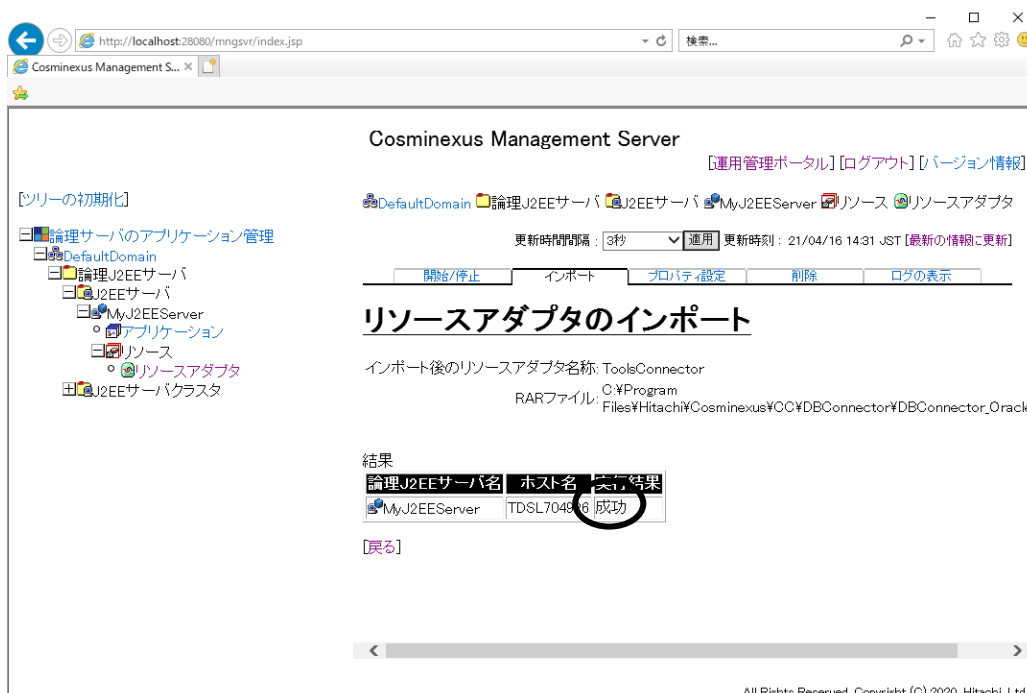
- (2) 『J2EE サーバ』、『作成したサーバ名』、『リソース』、『リソースアダプタ』の順に選択します。



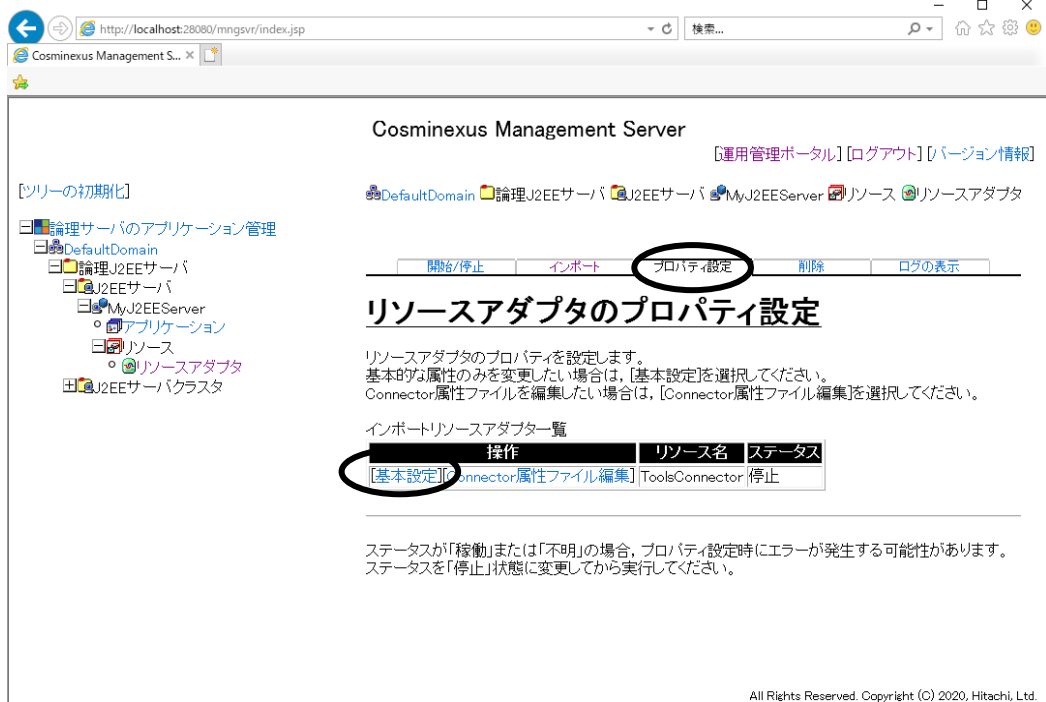
- (3) 『インポート』タブを選択します。DB Connector(DBConnector_Oracle_CP.rar)、任意のリソースアダプタ名称を入力し、『実行』ボタンをクリックします。ここでは、リソースアダプタ名称『ToolsConnector』とします。



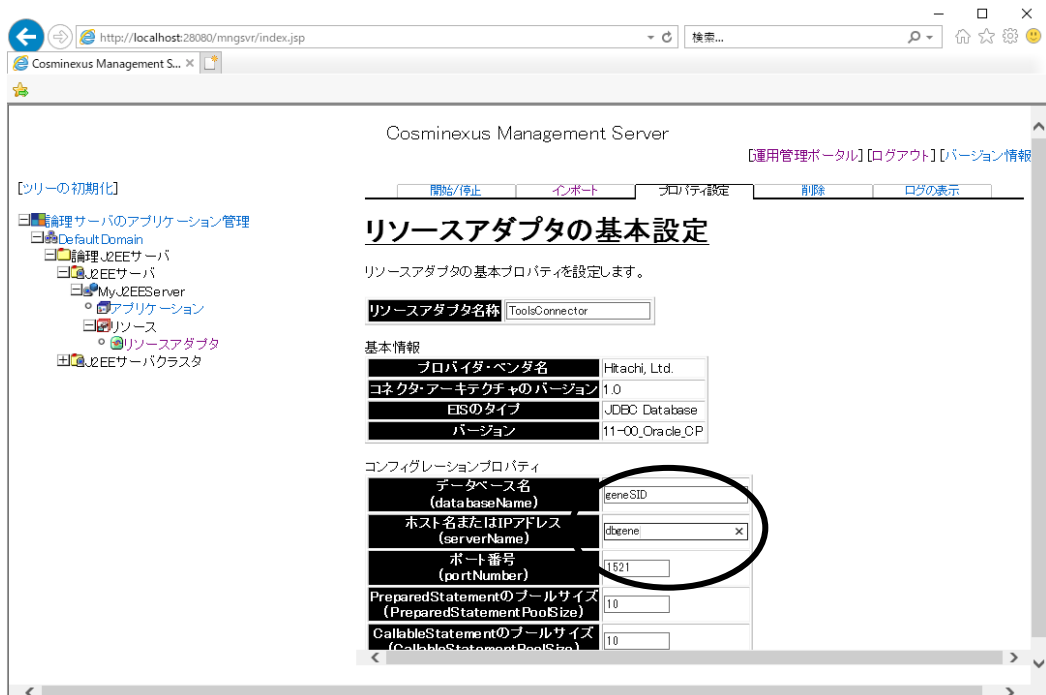
- (4) 『実行結果』が、『実行待ち』から『成功』に変わります。

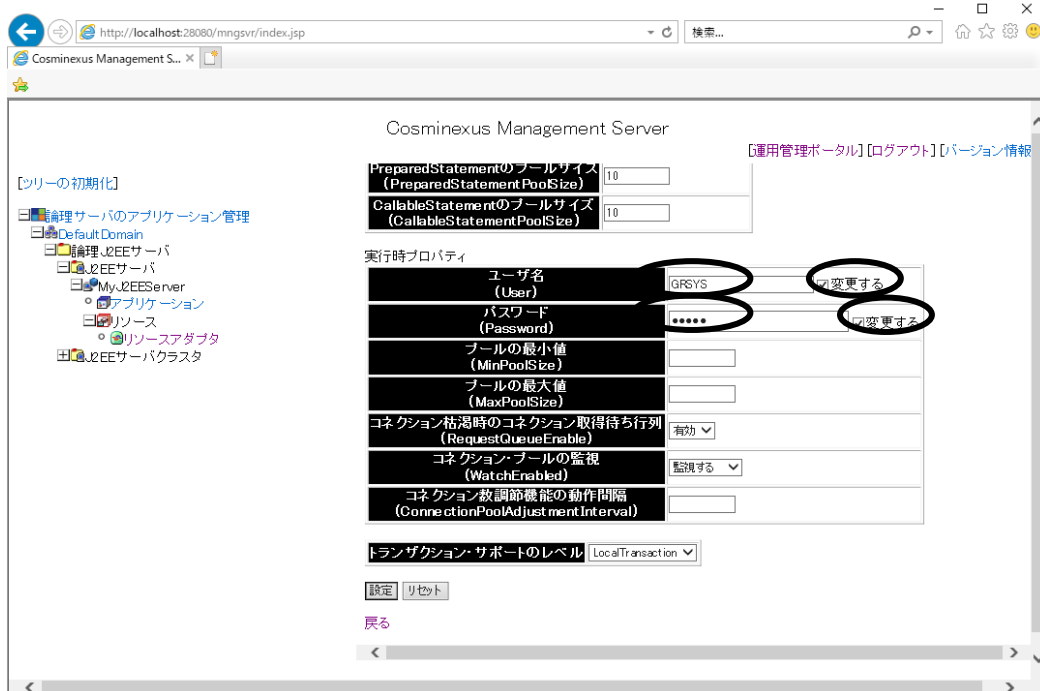


- (5) 『プロパティ設定』タブを選択します。該当するリソース名の『基本設定』をクリックします。



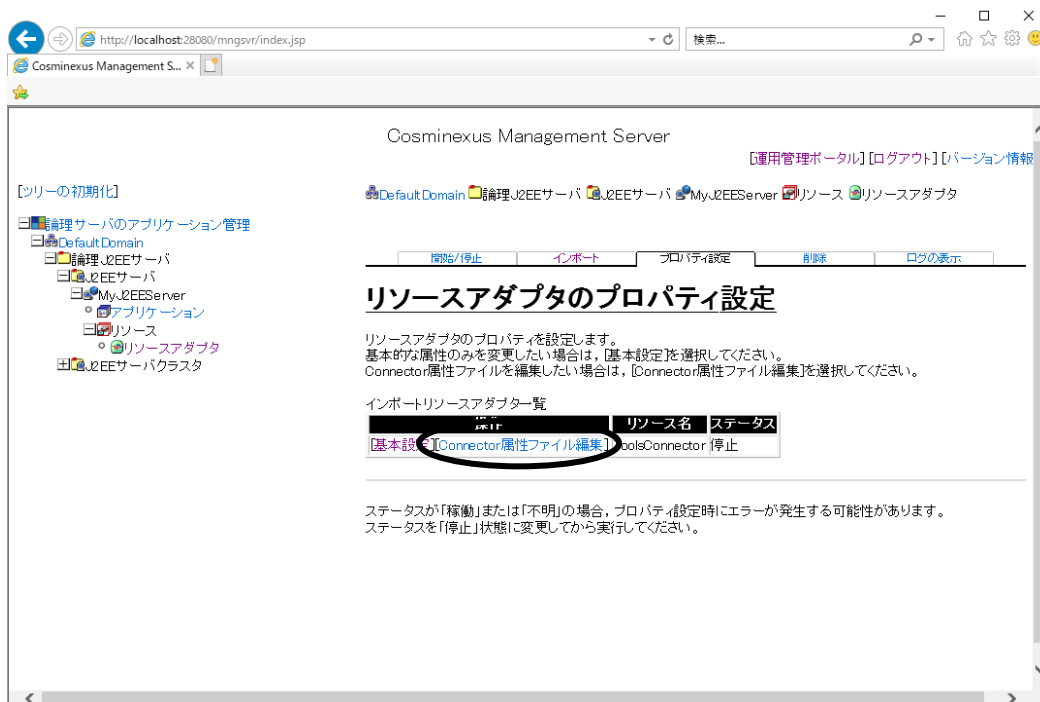
- (6) 接続プロパティを設定します。ここでは、データベース名「geneSID」、ホスト名「dbgene」、ポート番号「1521」、データベースユーザ名「GRSYS」、パスワード「GRSYS」とします。各項目を入力し、ユーザ名・パスワード右横の『変更する』にチェックを入れて、『設定』ボタンをクリックしてください。



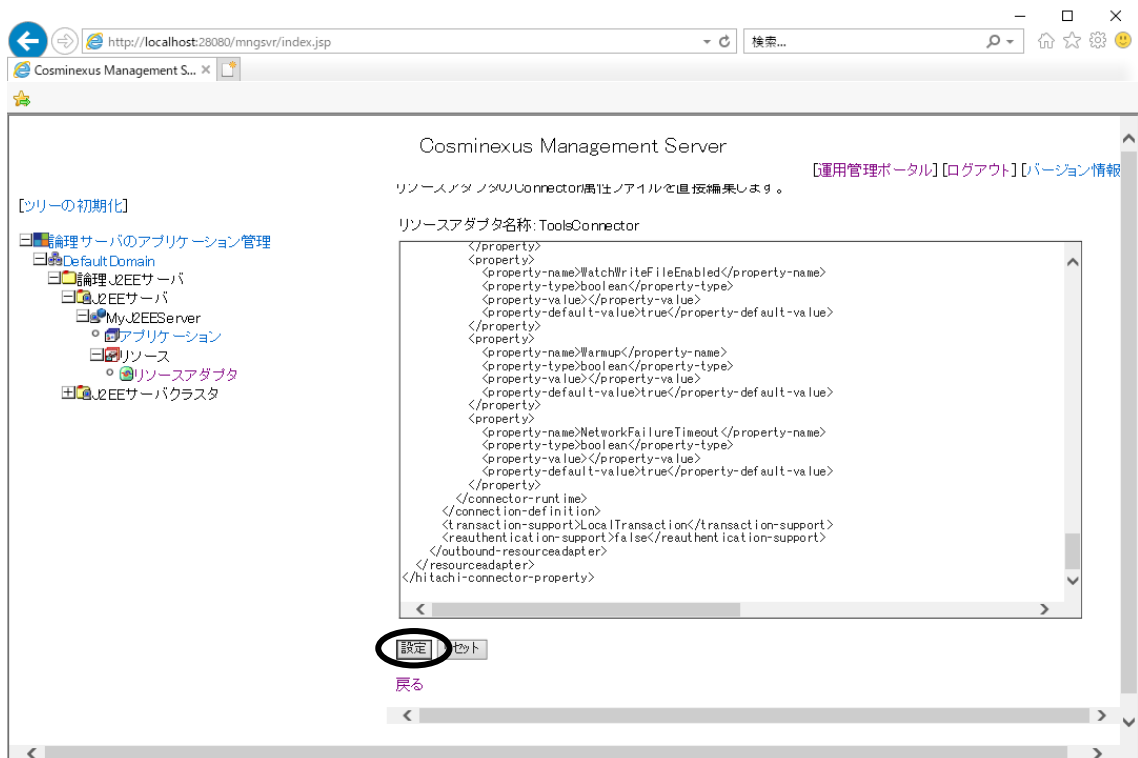


(7) プロパティの設定を行います。

該当するリソース名の『Connector 属性ファイル編集』をクリックします。



(8) リソースアダプタの Connector 属性ファイルを直接編集します。



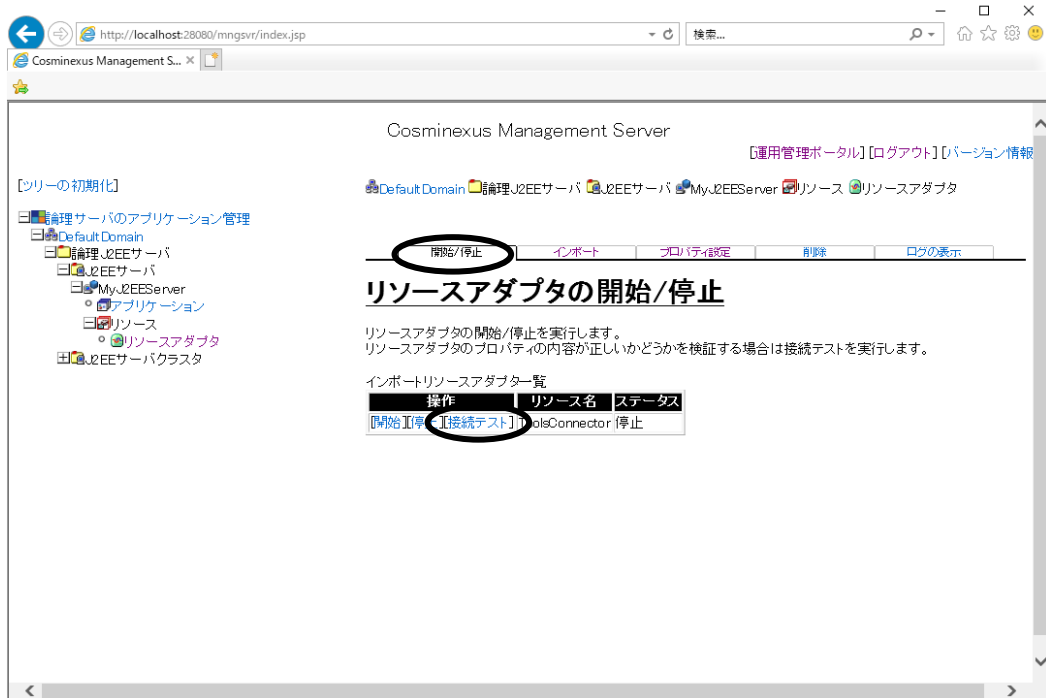
設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

42 行目: `jdbc:oracle:thin:@<データベースサーバのホスト名>:<ポート番号>/<SID>`

```
<config-property>
  <description xml:lang="en"></description>
  <config-property-name>url</config-property-name>
  <config-property-type>java.lang.String</config-property-type>
  <config-property-value>jdbc:oracle:thin:@dbgene:1521/geneSID</config-property-value>
</config-property>
```

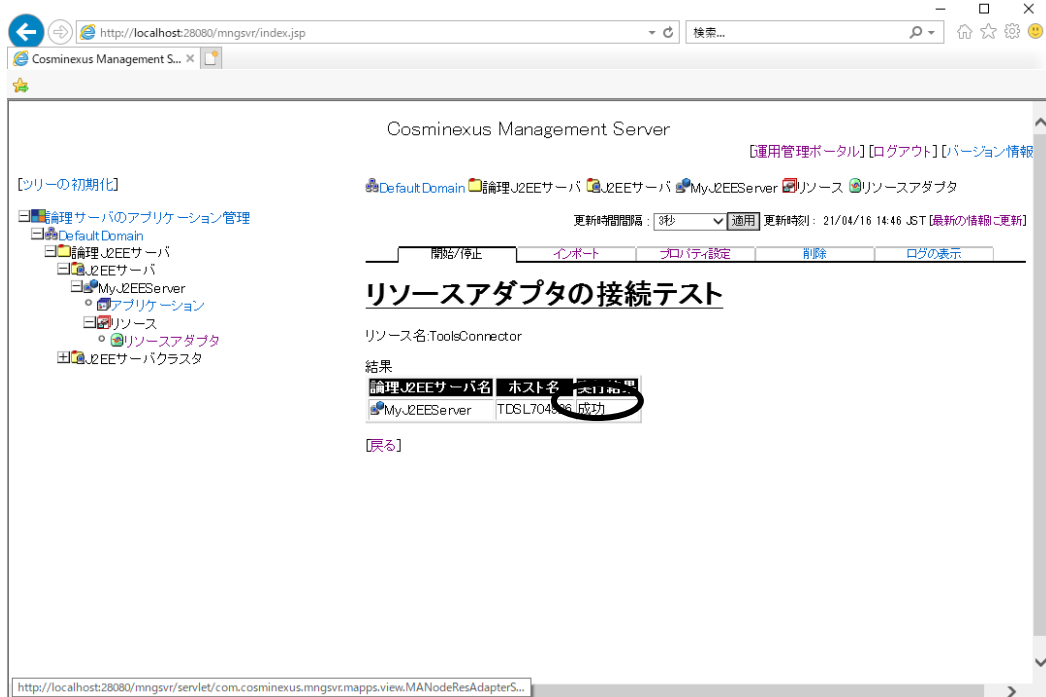
設定後に「設定」ボタンをクリックします。

- (9) 接続テストを行います。『開始/停止』タブを選択し、該当リソース名の『接続テスト』を押下します。

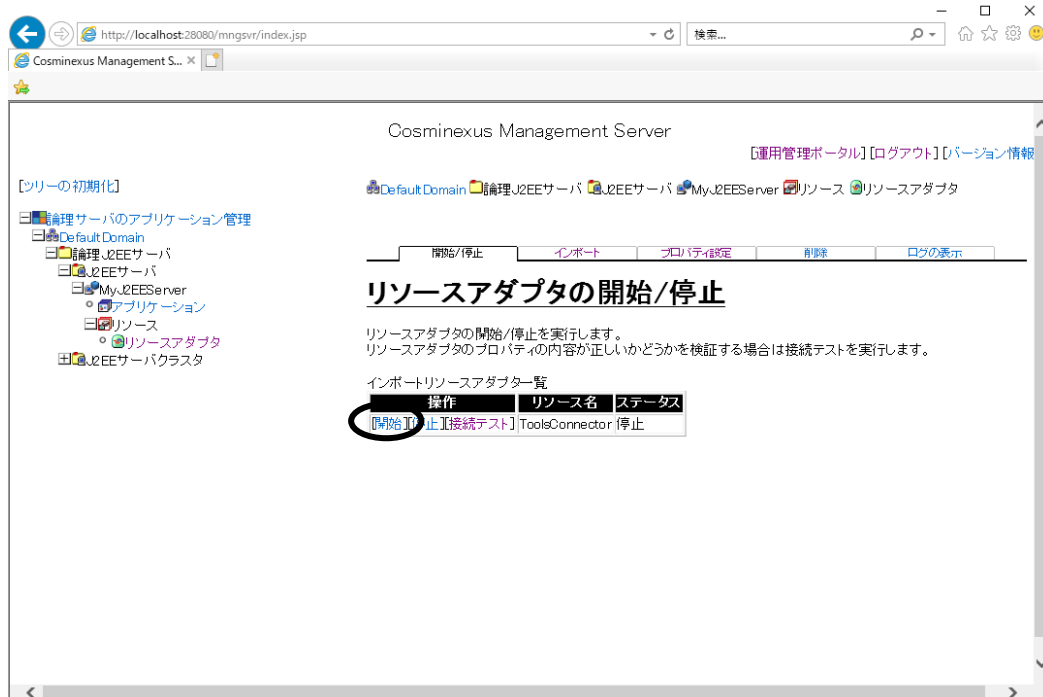


『接続しますか?』と表示されたら、『はい』ボタンを押下します。

- (10) 『実行結果』が、『実行待ち』から『成功』に変わります。



(11)リソースアダプタの開始を行います。該当リソース名の『開始』をクリックします。



『開始しますか?』と表示されたら、『はい』ボタンを押下します。
実行結果が、『実行待ち』から『成功』に変わったら完了です。

(12) web.xml ファイルを編集します。

変更ファイル: < **GeneTools** インストールフォルダ >¥WEB-INF¥web.xml

web.xml の 558 行目と 559 行目の間に、以下のように<resource-ref>タグを追加します。

```
<!-- welcome file list -->
<welcome-file-list>
    <welcome-file>index.jsp</welcome-file>
</welcome-file-list>
<resource-ref>
    <res-ref-name>jdbc/genedb</res-ref-name>
    <res-type>javax.sql.DataSource</res-type>
    <res-auth><作成したリソースアダプタの名称></res-auth>
</resource-ref>
<!-- login config -->
<login-config>
    <auth-method>BASIC</auth-method>
</login-config>
```

設定例 :

```
<!-- welcome file list -->
<welcome-file-list>
    <welcome-file>index.jsp</welcome-file>
</welcome-file-list>
<resource-ref>
    <res-ref-name>jdbc/genedb</res-ref-name>
    <res-type>javax.sql.DataSource</res-type>
    <res-auth>ToolsConnector</res-auth>
</resource-ref>
<!-- login config -->
<login-config>
    <auth-method>BASIC</auth-method>
</login-config>
```

(13) DBAccess.ini ファイルを編集します。

変更ファイル: <WebCube インストールディレクトリ>%CC%web%containers%<ホスト名>
%webapps%GeneTools%GeneTools%WEB-INF%classes%DBAccess.ini

以下のように、1 行目の#を削除し、2 行目に#を追加してください。

設定例 :

```
jdbc/genedb=java:comp/env/jdbc/genedb  
#jdbc/genedb=jdbc/genedb
```

(14) cosminexus.xml ファイルの編集を行います。

変更ファイル: <WebCube インストールディレクトリ>%CC%web%containers%<ホスト名>
%webapps%GeneTools%META-INF%cosminexus.xml

変更対象: (5 行目~8 行目)

```
<module-name><モジュール名></module-name>  
<resource-ref>  
  <res-ref-name>jdbc/genedb</res-ref-name>  
  <linked-to><作成したリソースアダプタの名称></linked-to>  
</resource-ref>
```

設定例 :

```
<module-name>GeneTools.war</module-name>  
<resource-ref>  
  <res-ref-name>jdbc/genedb</res-ref-name>  
  <linked-to>ToolsConnector</linked-to>  
</resource-ref>
```

以上で、リソースアダプタの作成手順は完了です。

(15) 作成した J2EE サーバに対して **GeneTools** モジュールのデプロイを行います。手順は 4. 5. 15 の (21) ~ (30) と同様です。アプリケーションディレクトリパスに注意して実行してください。

4.5.17 論理 Web サーバの作成

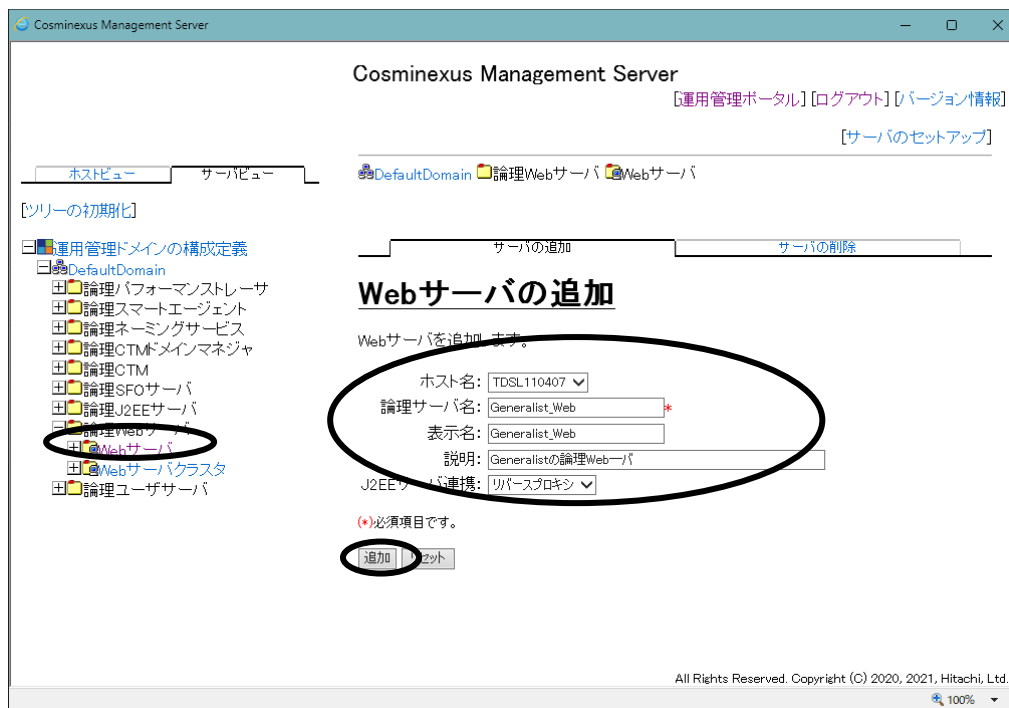
- (1) 運用管理ポータルより『運用管理ドメインの構成定義』をクリックします。



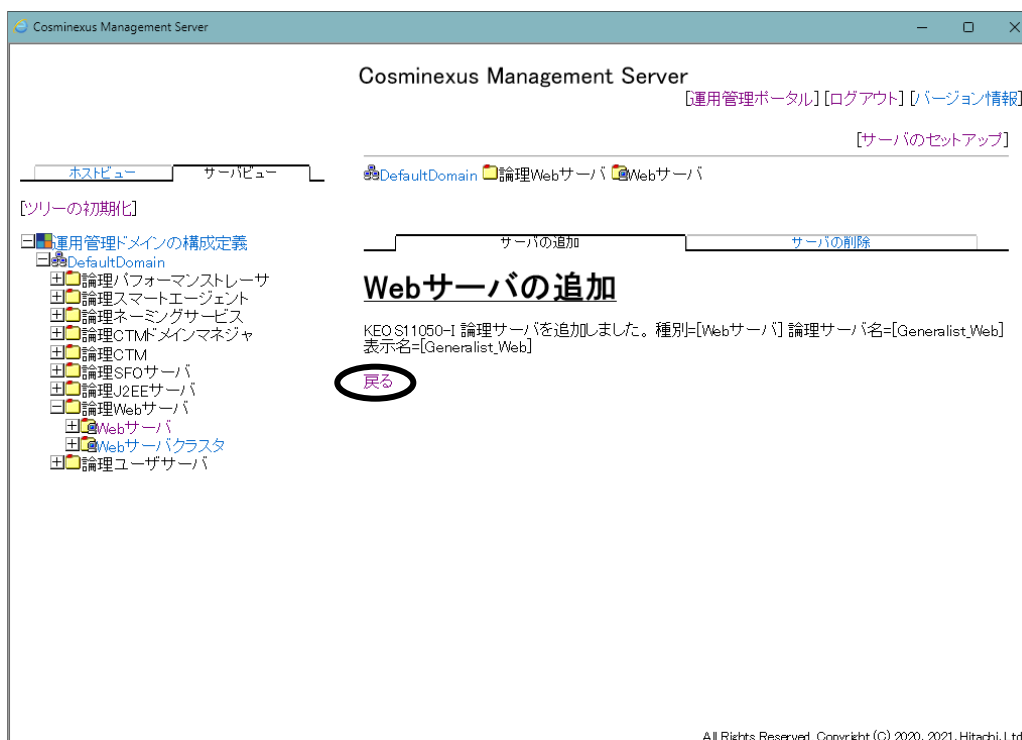
- (2) 『サーバビュー』から『論理 Web サーバ』を選択し、『Web サーバの追加』画面を表示します。



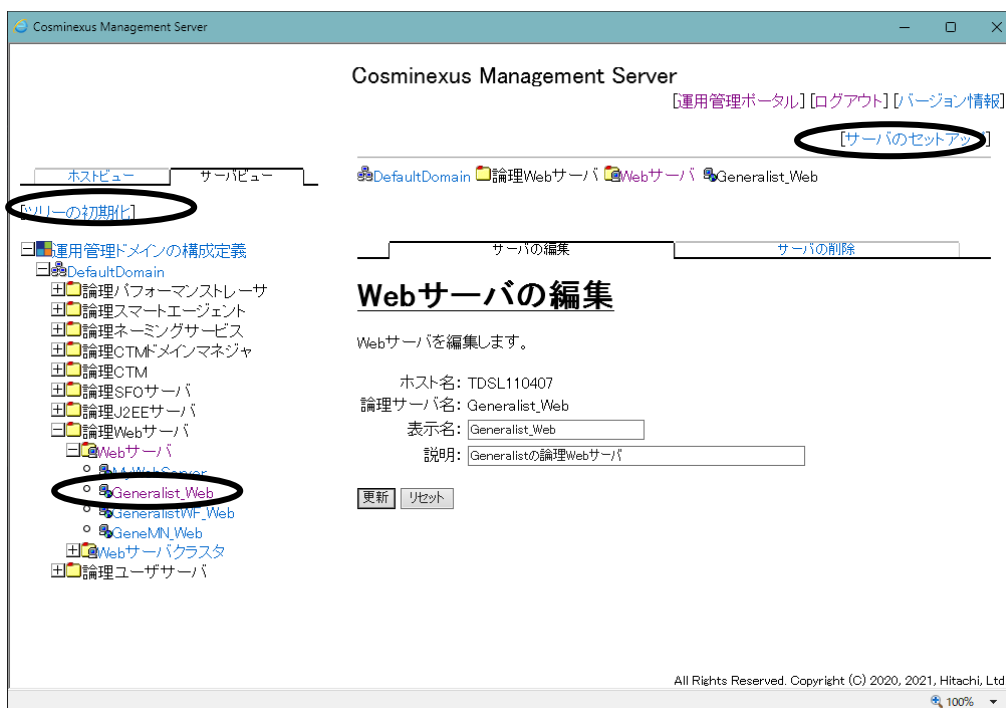
- (3) 『Web サーバの追加』画面で必要事項を入力し、『追加』ボタンをクリックします。



- (4) 設定が完了したことを確認し、『戻る』ボタンをクリックします。



- (5) 『ツリーの初期化』をクリックし、『Web サーバ』を開き直します。Web サーバが追加されたていることを確認し、追加した Web サーバを選択します。選択後、『サーバのセットアップ』をクリックします。



- (6) 追加した Web サーバの『セットアップ』にチェックをいれ、『選択してセットアップ』をクリックします。



(7) 処理完了後、『ステータス』が『セットアップ済』となることを確認します。

Cosminexus Management Server

運用管理ポータル [ログアウト] [バージョン情報]

ホストビュー サーバビュー セットアップ ログの表示

ツリーの初期化

運用管理ドメインの構成定義

- DefaultDomain
 - 論理パフォーマンスストレージ
 - 論理スマートエージェント
 - 論理ネーミングサービス
 - 論理CTMドメインマネージャ
 - 論理CTM
 - 論理SFOサーバ
 - 論理J2EEサーバ
 - 論理Webサーバ
 - Webサーバ
 - MyWebServer
 - Generalist_Web
 - GeneralistWF_Web
 - GeneMN_Web
 - Webサーババクスタ
 - 論理ユーザサーバ

論理サーバーをセットアップします。

ステータス	セットアップ時刻	セットアップ	論理サーバ名	ホスト名	実サーバ名
セットアップ済	22/12/01 14:16 JST	<input type="checkbox"/>	MyJ2EEServer	TDSSL110407	MyJ2EEServer
セットアップ済	22/12/02 14:54 JST	<input type="checkbox"/>	GeneralistJ2EE	TDSSL110407	GeneralistJ2EE
セットアップ済	22/12/06 15:00 JST	<input type="checkbox"/>	GeneralistWFJ2EE	TDSSL110407	GeneralistWFJ2EE
セットアップ済	22/12/08 14:45 JST	<input type="checkbox"/>	GeneMNJ2EE	TDSSL110407	GeneMNJ2EE
セットアップ済	22/12/01 14:16 JST	<input type="checkbox"/>	MyWebServer	TDSSL110407	MyWebServer
セットアップ済	22/12/05 11:48 JST	<input type="checkbox"/>	GeneralistWF_Web	TDSSL110407	GeneralistWF_Web
セットアップ済	22/12/08 14:32 JST	<input checked="" type="checkbox"/>	Generalist_Web	TDSSL110407	Generalist_Web

全てセットアップ 選択してセットアップ

All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2021, Hitachi, Ltd.

(8) 運用管理ポータルより『論理サーバーの環境設定』をクリックします。

Cosminexus Management Server

運用管理ポータル [ログアウト] [バージョン情報]

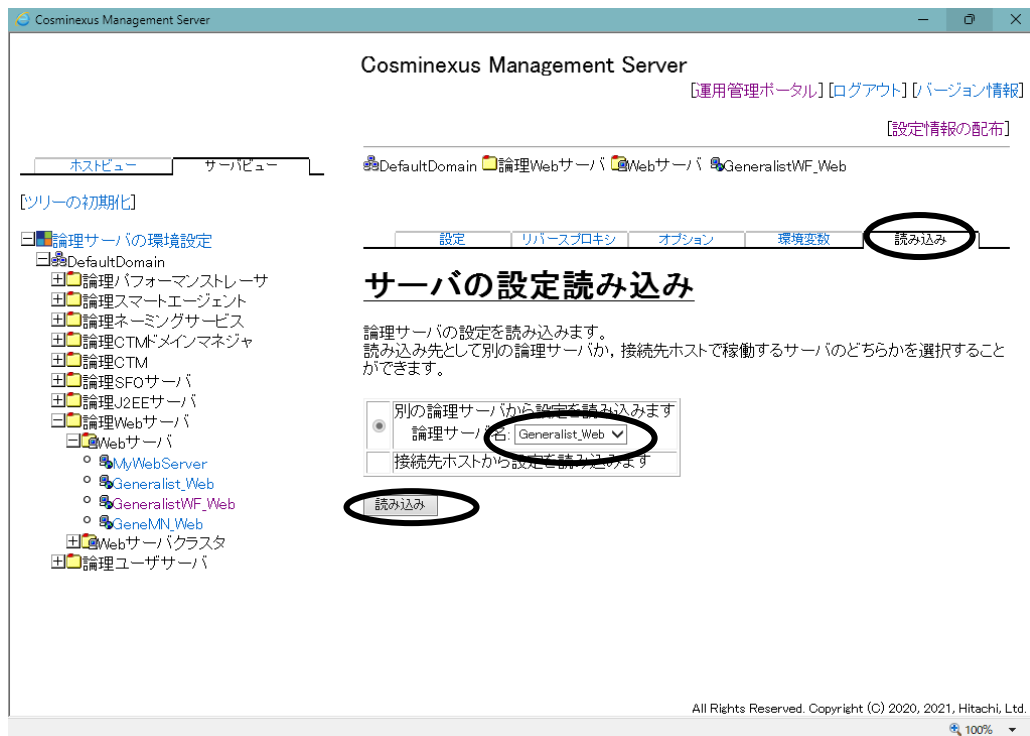
運用管理ポータル

- Cosminexus Management Serverの設定
 - Cosminexus Management Serverの設定を行います。
- 運用管理ドメインの構成定義
 - 運用管理ドメインの構成を定義します。
- 論理サーバーの環境設定
 - 論理サーバーの起動パラメタの設定や環境設定を行います。
- 論理サーバーの起動/停止
 - 論理サーバーの起動や停止を行います。
- 論理サーバーのアプリケーション管理
 - J2EEアプリケーションの論理サーバーへの操作を行います。
- 論理サーバーの運用監視
 - 論理サーバーの稼働状況の監視や性能メトリックの取得を行います。
- 統合ユーザ管理
 - リポジトリ管理
 - 統合ユーザ情報リポジトリに対してユーザ属性の変更やユーザの追加及び削除を行います。
 - 環境設定
 - 統合ユーザ管理を実行するために必要な環境設定を行います。
 - リソース監視
 - 統合ユーザ管理のリソースの監視を行います。

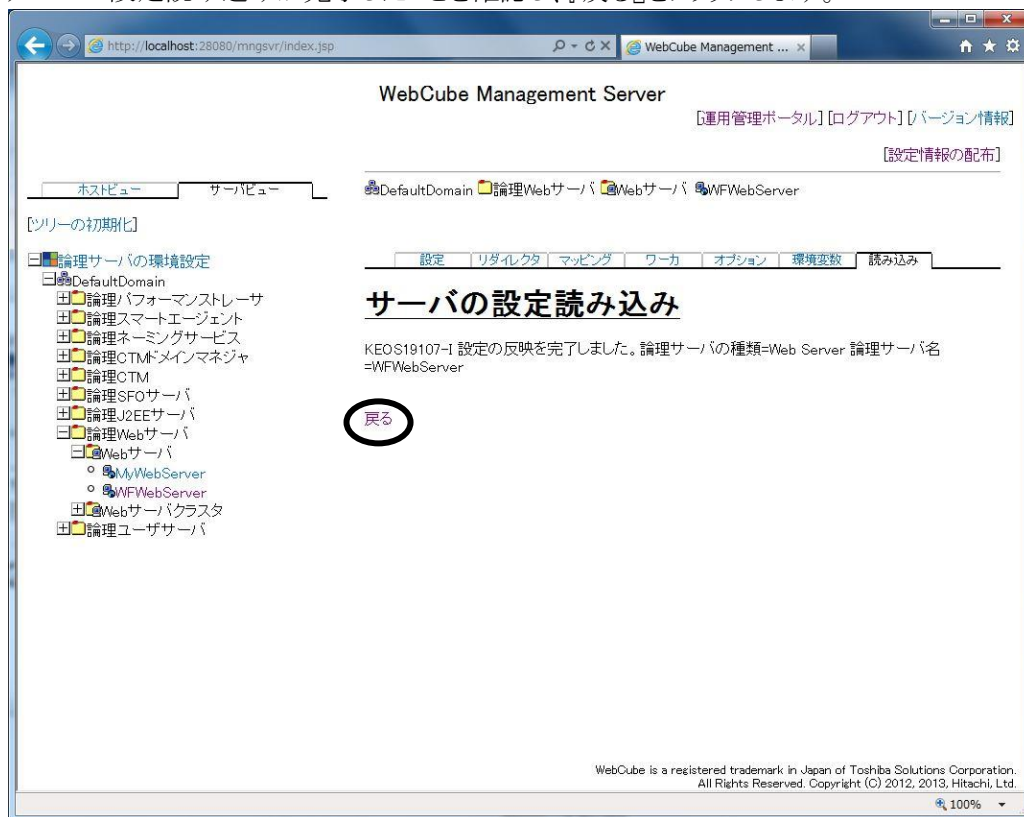
全てセットアップ 選択してセットアップ

All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2021, Hitachi, Ltd.

- (9) 『読み込み』タブを選択し、論理 Web サーバ『MyWebServer』を選択し、『読み込み』ボタンをクリックします。



- (10) サーバの設定読み込みが完了したことを確認し、『戻る』をクリックします。



(11) Web サーバの設定から、『設定』タブを選択します。

事前に決めた『ポート番号』を他の Web サーバと被らないように変更します。設定変更後、同じ画面の最下部にある『適用』ボタンをクリックします。

※事前に決めたポート番号から変更する場合は、設定ファイルも見直ししてください。



(12) 『リバースプロキシ』タブを選択します。



- (13) リバースプロキシの設定から、『リクエスト転送元パス名』に「/」が設定してある行の『論理サーバ名』に「4.5.15 アプリケーションサーバへのインストール」で追加した論理 J2EE サーバを指定します。『通信タイムアウト』に「3600」秒を設定します。同じ画面の最下部にある『適用』ボタンをクリックします。



<重要>

- 『リクエスト転送元パス名』の「/」の設定は固定のパラメータです。変更しないでください。

Cosminexus Management Server

設定 リバースプロキシ オプション 環境変数 読み込み

リバースプロキシの設定

リバースプロキシの情報を設定します。

パフォーマンストレーサに関する設定
 利用するパフォーマンストレーサ: MyPerformanceTracer

エラーページに関する設定
 エラーレスポンスのオーバーライド: する しない

リクエストのマッピングに関する設定

リクエスト転送元パス名	リクエスト転送先	通信タイムアウト
	プロトコル	J2EEサーバ
/	<input checked="" type="radio"/> HTTP <input type="radio"/> WebSocket	GeneralistJ2EE
	<input type="radio"/> HTTP <input type="radio"/> WebSocket	選択して下さい

通信タイムアウト: 3600 秒

(*)必須項目です。

適用 リセット

All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2021, Hitachi, Ltd.

- (14) 設定完了後、『設定情報の配布』をクリックします。

Cosminexus Management Server

設定 リバースプロキシ オプション 環境変数 読み込み

Webサーバの設定

Webサーバを稼働させるために必要な情報を設定します。項目ごとに設定するか、設定ファイルの内容を直接設定するかのどちらかの方法で設定します。

項目ごとに設定します。

Webサーバの基本的な設定

サーバ名	www.example.com
ポート番号	8002
ホスト固定	<input type="radio"/> する <input checked="" type="radio"/> しない
ユーザ名	bin (UNIXの場合のみ有効)
グループ名	bin (UNIXの場合のみ有効)
コアダンプ出力先ディレクトリ	(UNIXの場合のみ有効)
内部トレース出力先ディレクトリ	logs

設定情報の配布

All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2021, Hitachi, Ltd.

(15) Web サーバの『配布』にチェックを入れ、『選択して配布』をクリックします。



(16) 処理完了後、『ステータス』が『配布済』となっていることを確認します。



以上で、論理 Web サーバの作成は完了です。

4.5.18 アプリケーションの起動

WebCube Management Server からアプリケーションの起動を行います。

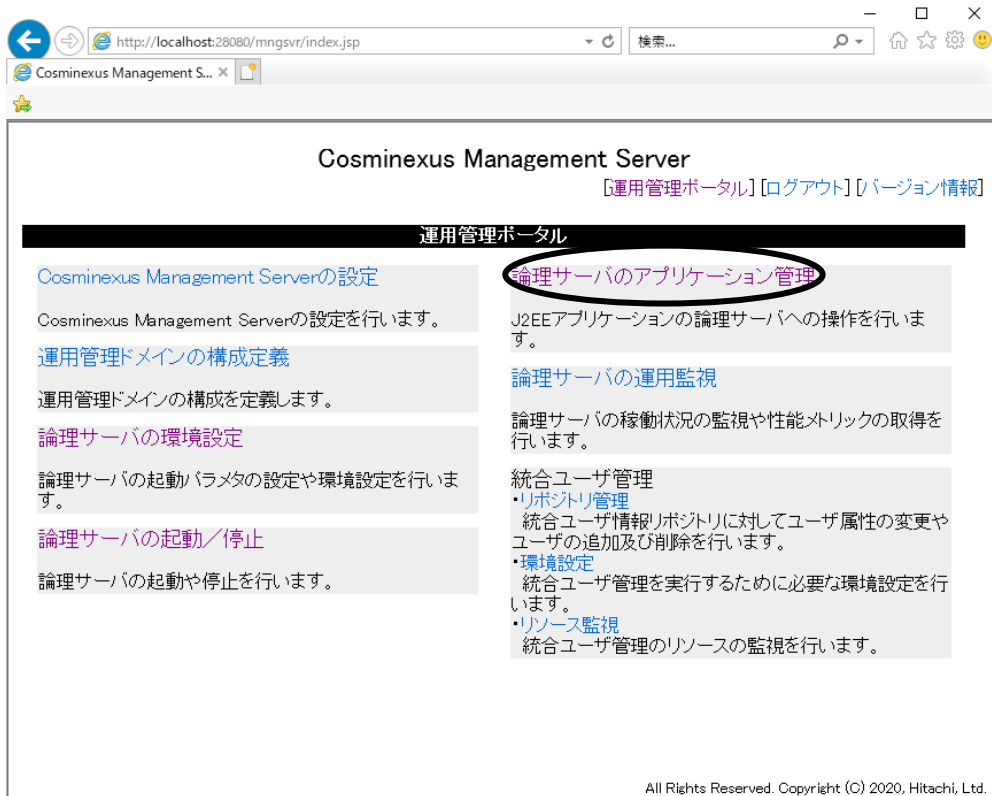
- (1) ポータルより『論理サーバの起動／停止』をクリックします。



- (2) 作成した論理 Web サーバを選択します。『起動／停止』タブをクリックします。
『起動』ボタンをクリックします。

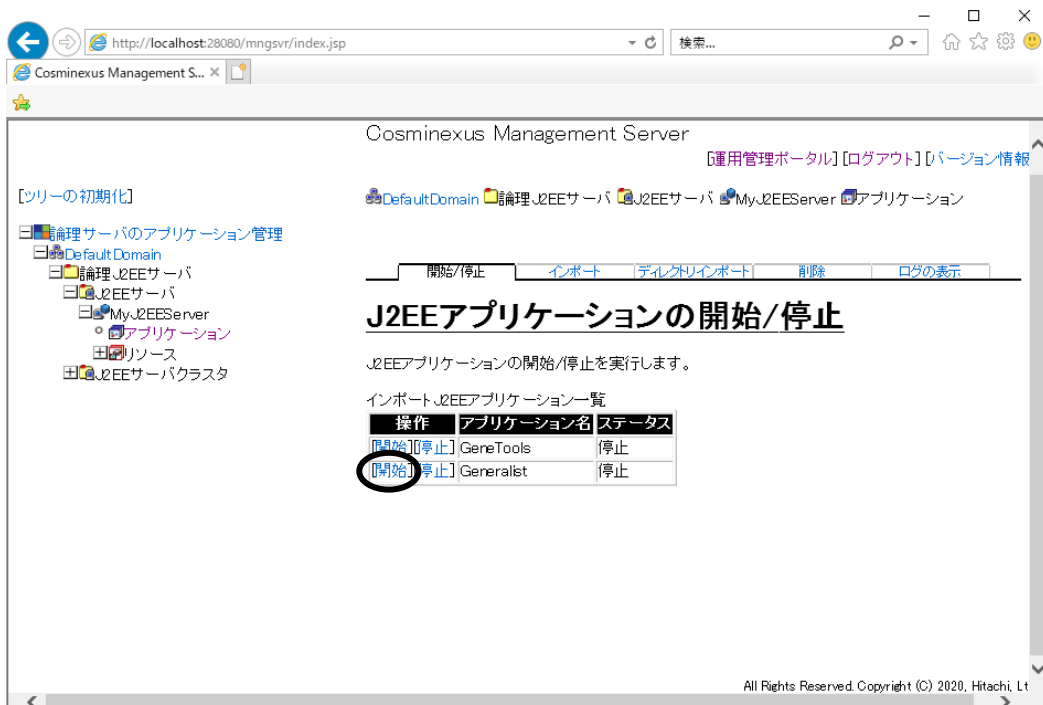


(3) ポータルより『論理サーバのアプリケーション管理』をクリックします。

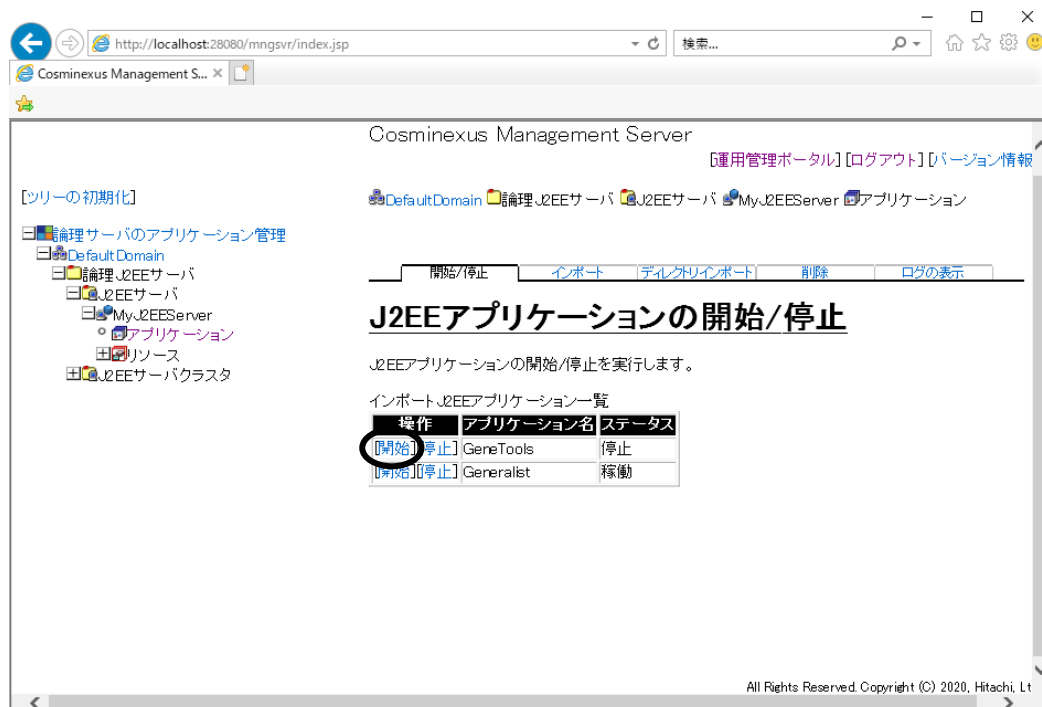


(4) 作成した J2EE サーバの『アプリケーション』を押下します。

操作から『開始』を押下します。



(5) GeneTools も同様の手順です。作成した J2EE サーバの『アプリケーション』を押下します。操作から『開始』を押下します。



実行結果が、実行待ちから成功に変わったら、アプリケーションの起動の完了です。

アプリケーションの起動に失敗した場合、以下のフォルダにあるログを確認してください。以下は『MyJ2EEServer』での例です。

- <Application Server のインストールフォルダ>%CC%\admin¥log
- <Application Server のインストールフォルダ>%CC%\server¥public¥ejb¥MyJ2EEServer¥logs
- <Application Server のインストールフォルダ>%CC%\web¥containers¥MyJ2EEServer¥logs

ログに以下のエラーが出ている場合

エラー: java.security.AccessControlException: access denied

- <Application Server のインストールフォルダ>%CC%\server¥usrconf¥ejb¥MyJ2EEServer¥server.policy

ファイルを開きます。ファイルの末部を下記のように修正してください。

```
grant {
//    permission java.util.PropertyPermission "*", "read";
//    permission java.lang.RuntimePermission "queuePrintJob";
//    permission java.net.SocketPermission "*", "connect";
permission java.security.AllPermission;
};
```

コマンドプロンプト(管理者として実行)からも、以下の手順でサーバの起動/停止を実行できます。

- (1) コマンドプロンプトを起動して次のコマンドを実行します。サーバが停止します。

```
"<WebCube Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%  
bin%cjstopsv" MyJ2EEServer
```

- (2) コマンドプロンプトを起動して次のコマンドを実行します。サーバが再起動します。

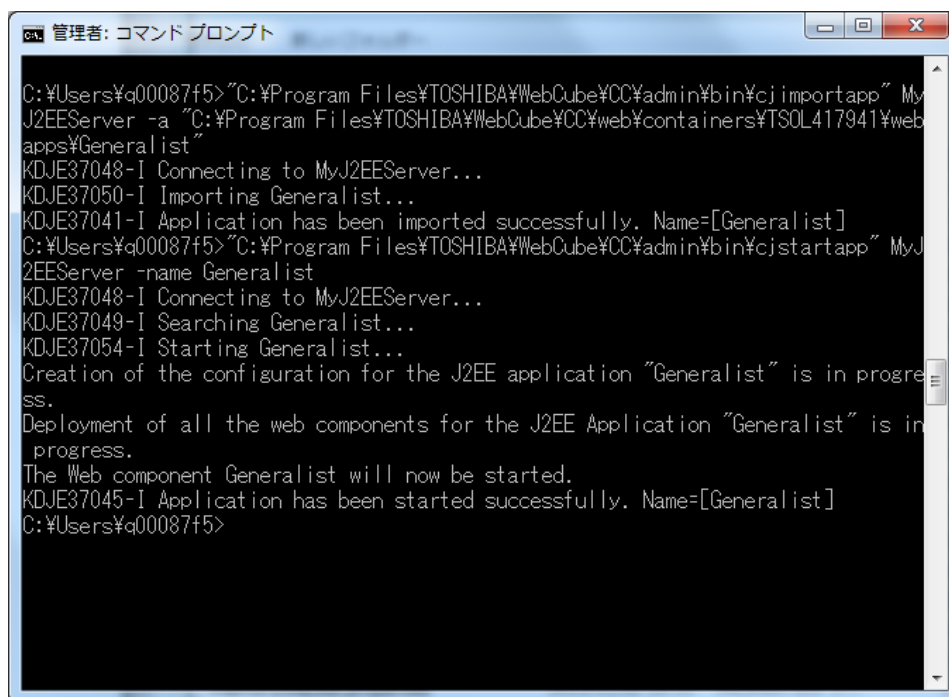
```
"<WebCube Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%  
bin%cjstartsv" MyJ2EEServer
```

- (3) コマンドプロンプトを起動して次のコマンドを実行します。**Generalist** が起動します。

```
"<WebCube Application Server のインストールディレクトリ>%CC%admin%  
bin%cjstartapp" MyJ2EEServer -name Generalist
```

次のメッセージが表示されることを確認します。

```
KDJE37045-I Application has been started successfully. Name=[Generalist]
```



```
管理者: コマンド プロンプト  
C:\Users\q00087f5>"C:\Program Files\TOSHIBA\WebCube\CC\admin\bin\cjimportapp" MyJ2EEServer -a "C:\Program Files\TOSHIBA\WebCube\CC\web\containers\TSOL417941\webapps\Generalist"  
KDJE37048-I Connecting to MyJ2EEServer...  
KDJE37050-I Importing Generalist...  
KDJE37041-I Application has been imported successfully. Name=[Generalist]  
C:\Users\q00087f5>"C:\Program Files\TOSHIBA\WebCube\CC\admin\bin\cjstartapp" MyJ2EEServer -name Generalist  
KDJE37048-I Connecting to MyJ2EEServer...  
KDJE37049-I Searching Generalist...  
KDJE37054-I Starting Generalist...  
Creation of the configuration for the J2EE application "Generalist" is in progress.  
Deployment of all the web components for the J2EE Application "Generalist" is in progress.  
The Web component Generalist will now be started.  
KDJE37045-I Application has been started successfully. Name=[Generalist]  
C:\Users\q00087f5>
```

4.6 アプリケーションサーバのアンインストール

Generalist アプリケーションサーバモジュールのアンインストールの手順について説明します。



<重要>

- ここでは、**Generalist** アプリケーションサーバモジュールやその他の不要ファイルをアプリケーションサーバから削除する手順を示します。
- 手順にしたがってアンインストールを開始する前にすべての Windows アプリケーションを終了させておいてください。
- 動作中のアプリケーションがある場合、アンインストールに時間がかかることがあります。
- 動作中のアプリケーションがハードディスクに対して書き込み等を行っている場合、アンインストールプログラムは作業が失敗することがあります。
- 一部のスケジューラソフトは設定された時間がくると自動的にチェックディスクなどのアンインストール処理に影響を与えるようなプログラムを実行するものがあります。このようなソフトウェアをお使いの場合は、アンインストール開始前に自動実行機能を一時停止させてください。
(代表的なスケジューラソフトには、Windows に付属のタスク スケジューラがあります。このソフトの場合は、タスク スケジューラにあるアイコンを右クリックして、『プロパティ』画面を表示させ『実行する』のチェックボックスのチェックを解除してください。)
- オペレーティングシステム、WebCube のトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。

4.6.1 アプリケーションサーバモジュールのアンインストール

(1) コマンドプロンプトを起動して次のコマンドを実行します。**Generalist** が停止します。

```
"<WebCube Application Server のインストールディレクトリ>%CC%\admin%\bin%\cjstopapp" MyJ2EEServer -name Generalist
```

(2) コマンドプロンプトから次のコマンドを実行します。**Generalist** がアンデプロイされます。

```
"<WebCube Application Server のインストールディレクトリ>%CC%\admin%\bin%\cjdeleteapp" MyJ2EEServer -name Generalist
```

(3) 下記フォルダを削除します。

```
<WebCube Application Server のインストールディレクトリ>%CC%\web%\containers%\<サーバ名>%webapps%\Generalist
```

削除が完了するとアンインストールは完了です。

第5章 データベースサーバのセットアップ

5.1 概要

システム導入時に1回だけ行う作業です。オペレーティングシステム上の Oracle データベースサーバのセットアップと Generalist システムが使用するデータベースオブジェクト(ユーザ、テーブル、ビュー、シーケンス、データベースリンク等)を作成し、初期データ(デフォルトのログインID、メニューデータ、JIS コードマスタデータ等)を登録する作業です。

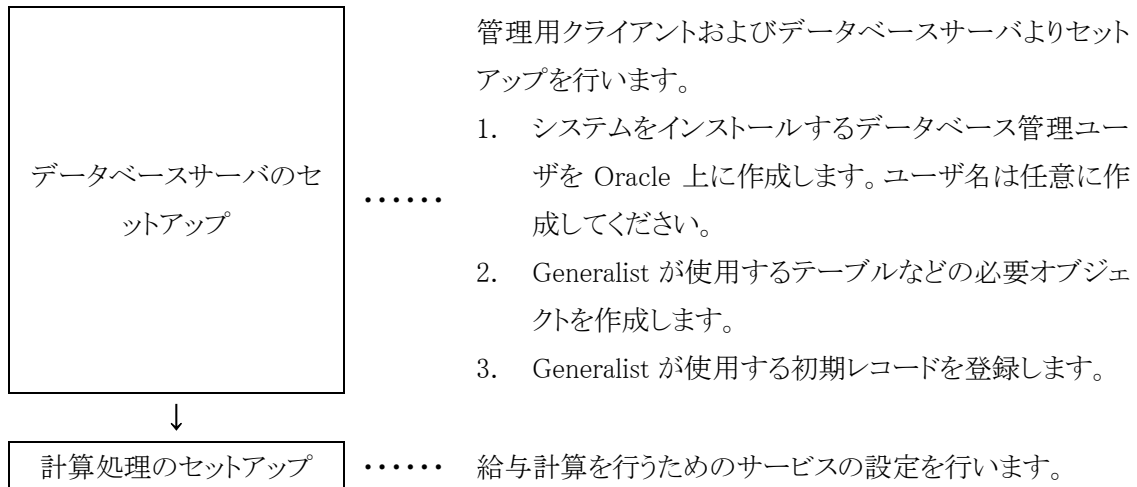


<重要>

- オペレーティングシステム、Oracle のトラブルに関しては、サポート対象外とさせていただきます。
- 本手順は Generalist の推奨である「プラグブル・データベース(PDB)」および「ローカルユーザ」をご利用の前提で記載します。「マルチテナント・コンテナ・データベース(CDB)」および「共通ユーザ」をご利用の場合は手順が異なる場合がありますのでご承知ください。

5.2 セットアップの手順

データベースサーバのセットアップを行う手順を記載します。



次に事前に設定しておくべき事項を示します。

項目	例	お客様ご記入欄
OS ユーザ名/パスワード	Oracle/Oracle	
Generalist データベース管理ユーザ名/パスワード	GRSYS/GRSYS	
統合インスタンス名	CDBGENE	
デフォルト表領域	USERS	
INDEX 表領域	INDX	
テンポラリ表領域	TEMP	
アプリケーションサーバから、統合インスタンスへの Net 接続文字列	PDBGENE	
PDB インスタンス名 (※)	PDBGENE	

データベースサーバのセットアップには管理用クライアントが必要です。管理用クライアントとは Windows の PC に Oracle の管理クライアントがセットアップされている端末を指します。

データベースオブジェクトは管理用クライアントより作成し、初期データはデータベースサーバより登録します。

(※) Oracle12c から新たにマルチテナント・アーキテクチャがサポートされました。これに伴い、データベース領域やユーザタイプが新たに設定されました。詳細は「付録 G OracleDatabase12c について」を参照してください。

5.2.1 データベースサーバのセットアップ

Oracle データベースに、Generalist をセットアップします。

Generalist インストールメディアの DatabaseServer フォルダ以下の内容を管理用クライアントのハードディスクにコピーし DatabaseServer.zip を展開します。ここではインストールメディアが D ドライブ (D:¥)に有り、C:¥TEMP 以下に展開したものとします。

解凍元ファイル	⇒	解凍先
D:¥DatabaseServer¥DatabaseServer.zip		C:¥TEMP¥

解凍後のフォルダ構成例
C:¥TEMP¥ └ DatabaseServer ├ common ├ (中略) └ ins.bat



<重要>

- データベースサーバ・管理用クライアント間の Net 接続が正常に完了していることをあわせてご確認願います。
- 以降の手順は、PDB 領域のローカルユーザを対象に行うものとして記載します。SQL*Plus 等の接続先も、すべて PDB 領域のローカルユーザに接続するものとします。接続先には十分ご注意ください。また CDB 領域の共通ユーザを対象に行う場合は、手順が異なりますのでご承知ください。

5.2.2 データベース管理ユーザの作成と権限の付与

データベース管理ユーザを作成してください。管理用クライアントのコンソールを使用し、実行してください。Oracle のバージョンやユーザで処理手順が異なります。当てはまる条件に記載されている処理を行ってください。

Oracle Database 12c/Oracle Database 19c ローカルユーザの場合
コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行し SYS ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
C:¥>cd C:¥temp¥DatabaseServer  
C:¥temp¥DatabaseServer>SQLPLUS "SYS/<パスワード>@PDBGENE AS SYSDBA"
```

SQL*Plus の画面より、以下のコマンドでユーザの作成を行ってください。

```
SQL>@others¥createuser_local.sql
```

- スクリプトを実行すると、以下の 6 点が質問されます。
 - PDB の名前
 - ユーザ名
 - パスワード
 - デフォルト表領域
 - INDEX 表領域
 - テンポラリ表領域

※それぞれ「事前に設定しておくべき事項」にて、決定した値を入力してください。



<重要>

- デフォルト表領域、INDEX 表領域、テンポラリ表領域の3領域はあらかじめ PDB 領域 に作成しておいてください。
- ユーザ作成時に「DBMS_JAVA.GRANT_PERMISSION」でエラーが発生する場合は、『Oracle JVM』が PDB 領域に含まれていません。「2.4.2 作成時のオプションと設定」を参照の上、データベースインスタンスの再作成を行ってください。

5.2.3 データベースオブジェクトの作成

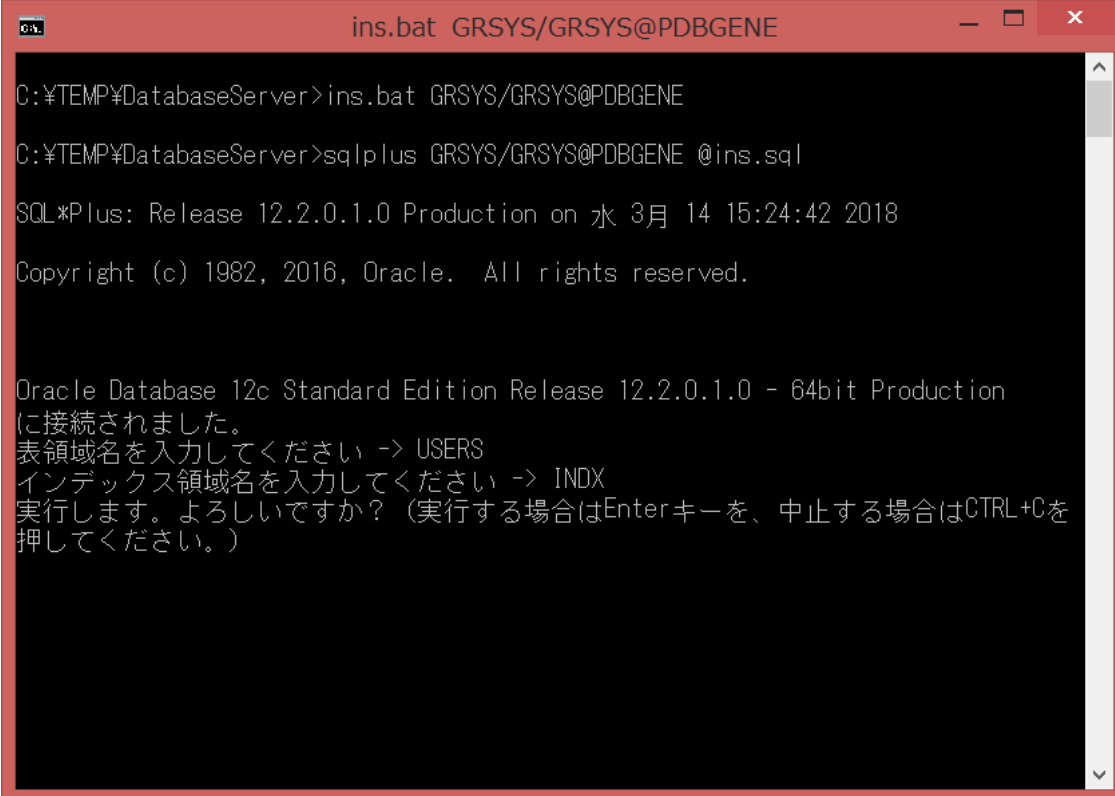
以下の手順にしたがって、データベースオブジェクトを作成してください。

データベースオブジェクトの作成を行います。コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行してください。

```
C:¥TEMP¥DatabaseServer>ins.bat GRSYS/GRSYS@PDBGENE
```

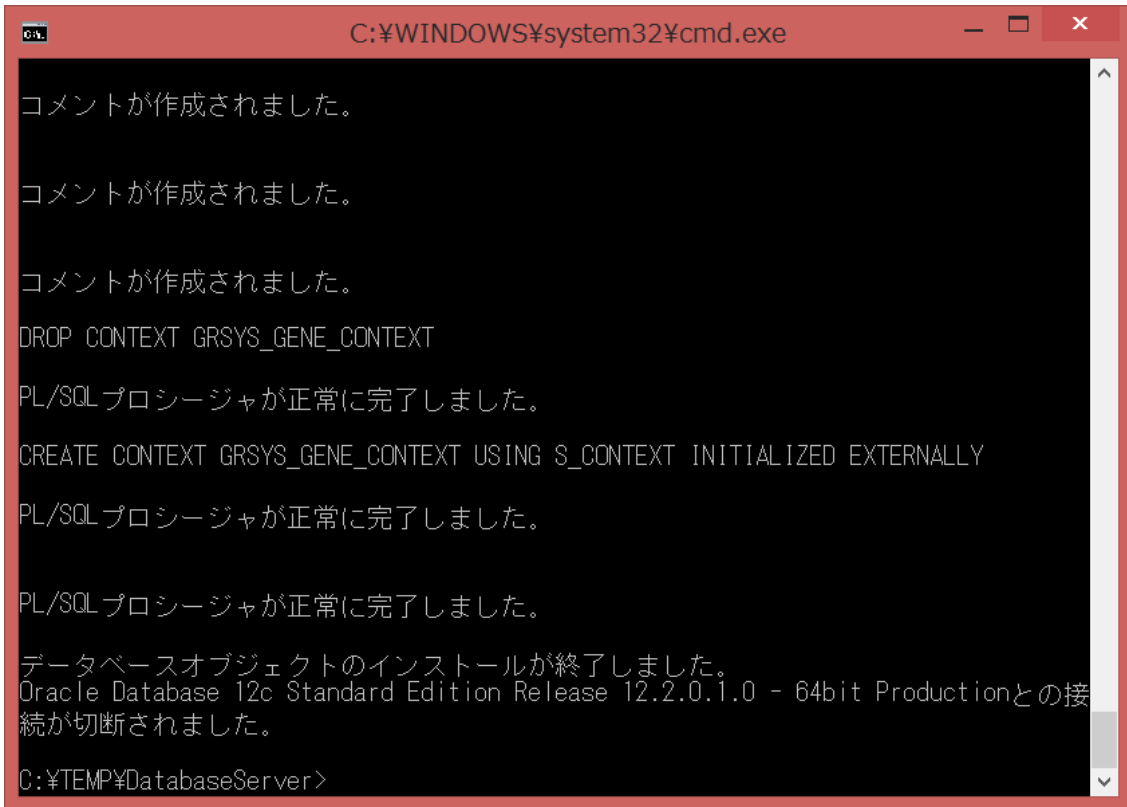
- コマンドを実行すると、以下の2点が質問されます。
 - デフォルト表領域
 - INDEX 表領域

※それぞれ「事前に設定しておくべき事項」にて、確認した値を入力してください。



```
ins.bat GRSYS/GRSYS@PDBGENE
C:¥TEMP¥DatabaseServer>ins.bat GRSYS/GRSYS@PDBGENE
C:¥TEMP¥DatabaseServer>sqlplus GRSYS/GRSYS@PDBGENE @ins.sql
SQL*Plus: Release 12.2.0.1.0 Production on 水 3月 14 15:24:42 2018
Copyright (c) 1982, 2016, Oracle. All rights reserved.

Oracle Database 12c Standard Edition Release 12.2.0.1.0 - 64bit Production
に接続されました。
表領域名を入力してください -> USERS
インデックス領域名を入力してください -> INDX
実行します。よろしいですか？ (実行する場合はEnterキーを、中止する場合はCTRL+Cを押してください。)
```



```
C:\WINDOWS\system32\cmd.exe

コメントが作成されました。

コメントが作成されました。

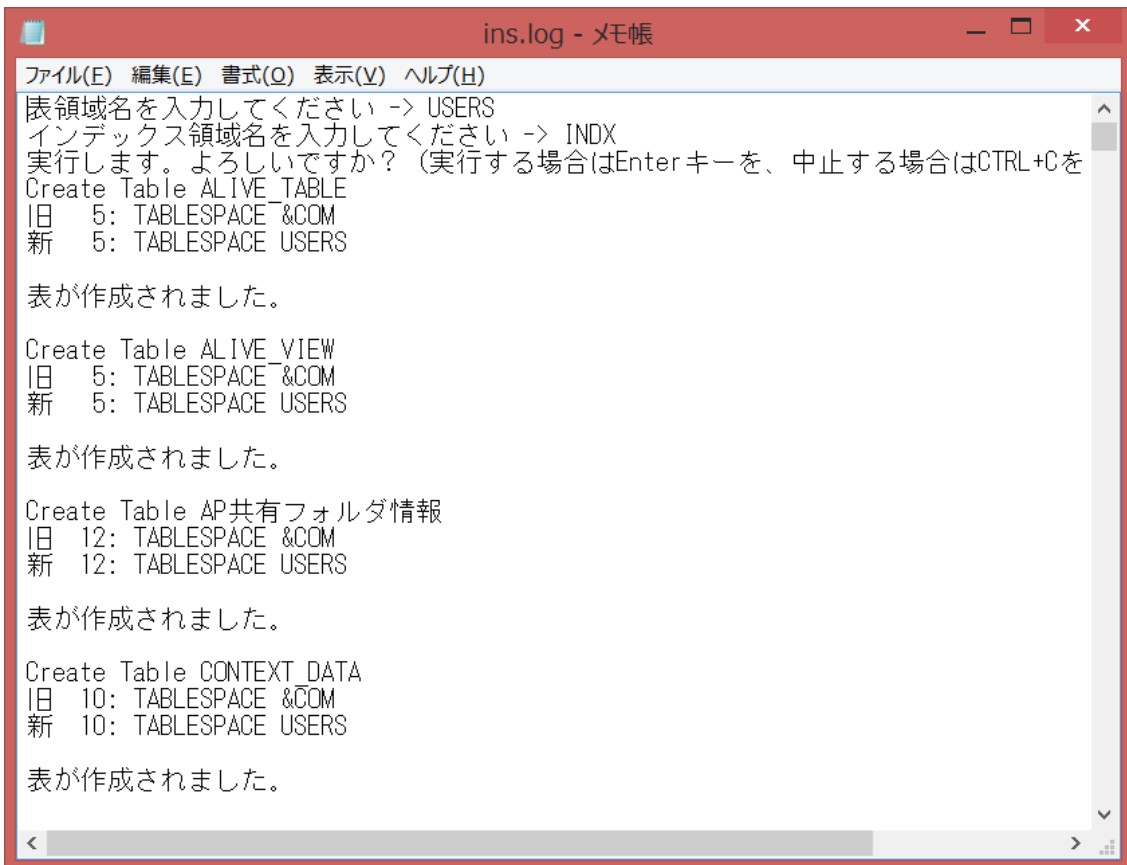
コメントが作成されました。
DROP CONTEXT GRSYS_GENE_CONTEXT
PL/SQLプロシージャが正常に完了しました。
CREATE CONTEXT GRSYS_GENE_CONTEXT USING S_CONTEXT INITIALIZED EXTERNALLY
PL/SQLプロシージャが正常に完了しました。

PL/SQLプロシージャが正常に完了しました。

データベースオブジェクトのインストールが終了しました。
Oracle Database 12c Standard Edition Release 12.2.0.1.0 - 64bit Productionとの接続が切断されました。

C:\TEMP\DatabaseServer>
```

コマンドを実行したフォルダにログファイル(ins.log)が出力されます。テキストエディタ(メモ帳など)でログファイルを参照しエラーが発生していないことを確認して次の作業に進んでください。



```
ins.log - メモ帳
ファイル(E) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
表領域名を入力してください -> USERS
インデックス領域名を入力してください -> INDX
実行します。よろしいですか? (実行する場合はEnterキーを、中止する場合はCTRL+Cを
Create Table ALIVE_TABLE
旧 5: TABLESPACE &COM
新 5: TABLESPACE USERS

表が作成されました。

Create Table ALIVE_VIEW
旧 5: TABLESPACE &COM
新 5: TABLESPACE USERS

表が作成されました。

Create Table AP共有フォルダ情報
旧 12: TABLESPACE &COM
新 12: TABLESPACE USERS

表が作成されました。

Create Table CONTEXT_DATA
旧 10: TABLESPACE &COM
新 10: TABLESPACE USERS

表が作成されました。
```

以下のストアドプロシージャのコンパイルエラーについては、全て再コンパイルされるため問題あり

ません。

警告: プロシージャが作成されましたが、コンパイル・エラーがあります。

警告: ファンクションが作成されましたが、コンパイル・エラーがあります。

警告: パッケージ本体が作成されましたが、コンパイル・エラーがあります。



<重要>

- JAVA ストアドプロシージャ(S_XBD00101)の作成時に ORA-03113 が発生する場合、JVM の再インストールが必要となります。JVMの再作成手順に関しては Oracle のマニュアルを参照してください。

コマンドプロンプトより、下記のコマンドを実行してください。

```
C:¥temp¥DatabaseServer>upd_GENE_FUNCTION_TYPE.bat GRSYS/GRSYS@PDBGENE
```

```
C:¥WINDOWS¥system32¥cmd.exe
C:¥TEMP¥DatabaseServer>upd_GENE_FUNCTION_TYPE.bat GRSYS/GRSYS@PDBGENE
C:¥TEMP¥DatabaseServer>sqlldr GRSYS/GRSYS@PDBGENE control=data¥GENE_FUNCTION_T
E_V7.ctl log=GENE_FUNCTION_TYPE_V7.log
SQL*Loader: Release 12.2.0.1.0 - Production on 水 3月 14 15:46:07 2018
Copyright (c) 1982, 2017, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
使用パス: 従来型
コミット・ポイントに達しました - 論理レコード件数13
表GENE_FUNCTION_TYPE:
  13 行は正常にロードされました。
確認するログ・ファイル:
  GENE_FUNCTION_TYPE_V7.log
ロードの詳細を参照してください。
C:¥TEMP¥DatabaseServer>
```

コマンドを実行したフォルダにログファイル(GENE_FUNCTION_TYPE_V7.log)が出力されます。テキストエディタ(メモ帳など)でログファイルを参照しエラーが発生していないことを確認して次の作業に進んでください。



```
GENE_FUNCTION_TYPE_V7.log - メモ帳
ファイル(E) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)

SQL*Loader: Release 12.2.0.1.0 - Production on 水 3月 14 15:46:07 2018
Copyright (c) 1982, 2017, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

制御ファイル: data\GENE_FUNCTION_TYPE_V7.ctl
データファイルdata\GENE_FUNCTION_TYPE_V7.dat
不良ファイル: data\GENE_FUNCTION_TYPE_V7.bad
廃棄ファイル: 指定なし

(すべて廃棄できます)

ロード数: ALL
スキップ数: 0
許容エラー数: 50
バインド配列: 64行、最大256000バイト
継続文字: 指定なし
使用パス: 従来型

表GENE_FUNCTION_TYPE、ロード済 すべての論理レコードから
この表に対する有効な挿入オプション: APPEND

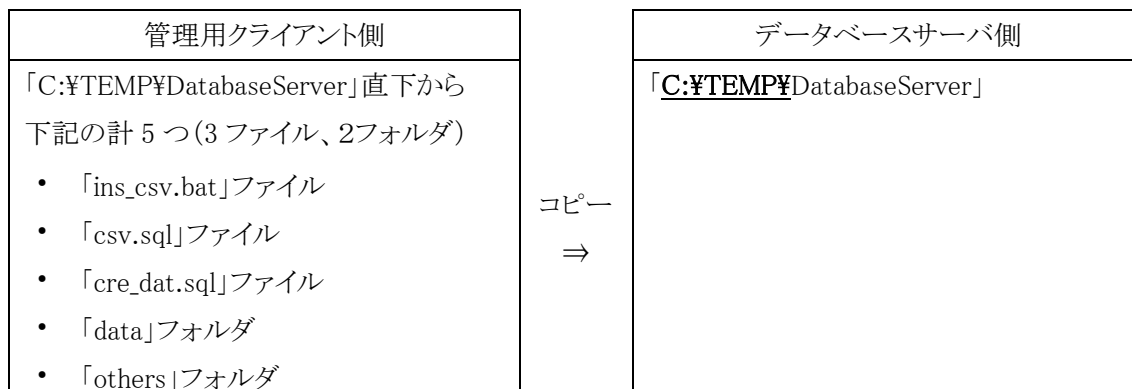
 列名                位置 長さ 用語暗号化データ型
-----
FUNCTION_TYPE_ID     FIRST * , CHARACTER
FUNCTION_TYPE_NAME   NEXT * , CHARACTER
ICON_FILE            NEXT * , CHARACTER
```

5.2.4 初期データの登録

Generalist を動作させるために必要な初期データをデータベースに登録します。

※初期データの登録はデータベースサーバ上で行う必要があります。

データベースサーバに以下のファイルをコピーします。ここでは C:¥TEMP 以下にコピーしたものとします。



データベースサーバのコマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行してください。(以下のコマンドを 1 行で入力してください。)

```
C:¥TEMP¥Databaseserver>ins_csv.bat GRSYS/GRSYS@PDBGENE C:¥TEMP¥Databaseserver¥data 1 4111111
```



<注意>

- ins_csv.bat の実行時、下記に該当する場合に「ORA-29283: 無効なファイル操作です」が発生し、処理が正常終了しない場合があります。
 - 管理用クライアント側で ins_csv.bat の実行をしている。
 - データベースサーバ側の ins_csv.bat を置いたフォルダのフルパス中に日本語が含まれている。

ins_csv.bat のパラメータは以下の通りです。各パラメータを半角スペースで区切って入力してください。

パラメータ	用途	入力例
1 番目のパラメータ	ユーザ名/パスワード@接続文字列	GRSYS/GRSYS@PDBGENE
2 番目のパラメータ	data フォルダのフルパス	C:¥TEMP¥Databaseserver¥data
3 番目のパラメータ	メニューのタイプについて、「1」もしくは「2」を入力してください。 Generalist の場合:1 GeneralistVariet の場合:2	1

パラメータ	用途	入力例
4番目のパラメータ	メニューパラメータ メニューパラメータの詳細は下表を参照 ください。	4111111

【メニューパラメータ】メニューパラメータは7桁の数値で構成されています。

1桁目	インストールタイプ	人事給与システムは「4」
2桁目	確定拠出	インストールする場合は「1」 インストールしない場合は「0」
3桁目	総合引去	
4桁目	出向精算	
5桁目	厚生	
6桁目	シェアードサービス	
7桁目	退職金	

```

C:\WINDOWS\system32\cmd.exe - ins_csv.bat GRSYS/GRSYS@PD...
C:\TEMP\DatabaseServer>ins_csv.bat GRSYS/GRSYS@PDBGENE C:\TEMP\Databaseserver\data 1 4111111
C:\TEMP\DatabaseServer>sqlplus GRSYS/GRSYS@PDBGENE @csv.sql C:\TEMP\Databaseserver\data 1 4111111
SQL*Plus: Release 12.2.0.1.0 Production on 水 3月 14 15:54:23 2018
Copyright (c) 1982, 2016, Oracle. All rights reserved.
最終正常ログイン時間: 水 3月 14 2018 15:46:07 +09:00
Oracle Database 12c Standard Edition Release 12.2.0.1.0 - 64bit Production
に接続されました。
ファンクションが作成されました。
ファンクションが作成されました。
プロシージャが作成されました。

```

```
C:\WINDOWS\system32\cmd.exe
GENE_PROFILE_SHEET_OWNERS_V7.dat
/* ----- */

PL/SQLプロシージャが正常に完了しました。

コミットが完了しました。

PL/SQLプロシージャが正常に完了しました。

PL/SQLプロシージャが正常に完了しました。

同期処理開始区分:0
履歴情報作成区分:0

PL/SQLプロシージャが正常に完了しました。

メニューデータのアップデートが終了しました。
Oracle Database 12c Standard Edition Release 12.2.0.1.0 - 64bit Productionとの接続が切断されました。

C:\TEMP\DatabaseServer>
```

コマンドを実行したフォルダにログファイル(csv.log)が出力されます。テキストエディタ(メモ帳など)でログファイルを参照しエラーが発生していないことを確認して次の作業に進んでください。

```
csv.log - メモ帳
ファイル(E) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)

ファンクションが作成されました。

ファンクションが作成されました。

プロシージャが作成されました。

PL/SQLプロシージャが正常に完了しました。

ファンクションが削除されました。

ファンクションが削除されました。

プロシージャが削除されました。

/* ----- */
GENE_FUNCTION_TYPE_INFO_V7.dat
/* ----- */
```

5.2.5 作成内容の確認

以下の手順にしたがって、作成したオブジェクトの確認を行ってください。

コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行しデータベース管理ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
C:¥>cd C:¥temp¥DatabaseServer
C:¥temp¥DatabaseServer>SQLPLUS GRSYS/GRSYS@PDBGENE
```

SQL*Plus の画面より、以下のコマンドを入力してください。

```
SQL>select object_name from user_objects where status = 'INVALID';
```

“レコードが選択されませんでした。”と表示されることを確認してください。

レコードが選択された場合は SQL*Plus から次のコマンドを実行して再コンパイルを行ってください。

```
SQL>@others¥compile.sql
```

以下に実行結果の例を示します。

```
SQL>@others¥compile.sql
PL/SQL プロシージャが完了しました。
SQL>
```

5.2.6 データベースオブジェクトの再作成

以下の手順にしたがって、データベースオブジェクトを再作成してください。

データ移行を行う場合には、データ移行完了後に実行してください。

SQL*Plus から c:¥temp¥DatabaseServer¥others¥con_change.sql を実行してください。

例) SQL>@c:¥temp¥DatabaseServer¥others¥con_change.sql;

5.2.7 一般的なエラーメッセージ

サーバのセットアップ作業中には、ログファイルが作成されます。このファイルにはエラーが発生していれば、そのエラー内容も出力されています。

次の表に、一般的なメッセージとその想定される原因を示しますので、参考にしてください。

メッセージ	想定される原因
ORA-01547 エクステン (サイズ:<名前>,表領域<名前>)の割り当てに失敗しました。	オブジェクトの作成や、挿入、更新などの操作を行うために必要な空き領域が、指定した表領域にありません。通常は指定した表領域にデータファイルを追加することにより解決できます。
ORA-01562 ロールバックセグメントを拡張できません(ID:<名前>)。	ロールバックセグメントが小さすぎて更新、挿入、削除を行うことができません。利用可能なロールバックセグメントがすべて同じサイズであることを確認してください。また、サイズの変更も行ってください。
ORA-02298: 制約(名前)を使用可能にできません。親キーがありません。	このエラーが発生した場合、データの整合性が取れていません。データの内容を確認の上、再度データの取込を行ってください。

5.2.8 初期データの登録について

初期データの登録では、システムを起動するための必要最低限度のシステムデータを導入しています。



<重要>

- デフォルトの法人コード”@@@”を削除しないでください。
- デフォルトの業務グループ”ADMN”は削除しないでください。
- デフォルトのログインID”ADMIN@@@”は削除しないでください。
- デフォルトのロールID”ADMIN@@@”は削除しないでください。
- デフォルトのロールID”ADMIN@@@”のパスワードはインストール作業終了後、速やかに更新することを強くお勧めします。
- メッセージマスタの内容を修正・削除等しないでください。

5.3 計算処理のセットアップ

計算処理(給与計算処理、賞与計算処理、社保算定および月変の一括更新、年末調整事前準備処理、年末調整計算処理、サブシステム一括取込)を行うために設定を行います。

(以下の説明で△はスペースを表します。)

Generalist インストールメディアの DatabaseServer フォルダ以下の内容を管理用クライアントのハードディスクにコピーし DatabaseServer.zip を展開します。ここでは c:¥temp 以下に DatabaseServer フォルダをコピーし、展開したものとします。

5.3.1 Windows における設定方法

(1-1) 事前準備

データベースサーバに、Oracle に付属の Java Runtime Environment がインストール済みであるか確認してください。インストールされていない場合はインストールを行います。

(通常は、Oracle のインストール時に、「<Oracle のインストールフォルダ>¥jdk¥bin¥」および「<Oracle のインストールフォルダ>¥jdbc¥」にインストールされています)

(1-2) モジュールのコピー

データベースサーバの任意のフォルダに以下のファイルをコピーします。

コピー先のフォルダは「<ドライブルート>¥calstart¥」(例: c:¥calstart¥)にしてください。

それぞれのファイルの取得元は以下のとおりです。

- CalcEntryLog.jar : c:¥temp¥Databaseserver¥service
- log4j-over-slf4j-1.7.25.jar : c:¥temp¥Databaseserver¥service
- logback-classic-1.2.3.jar : c:¥temp¥Databaseserver¥service
- logback-core-1.2.3.jar : c:¥temp¥Databaseserver¥service
- slf4j-api-1.7.25.jar : c:¥temp¥Databaseserver¥service
- logback.xml : c:¥temp¥Databaseserver¥service
- CalcSvc.exe : c:¥temp¥Databaseserver¥service
- JDBC ドライバ : 以下のファイルをコピーします。

<Oracle Database Server のインストールフォルダ>¥jdbc¥lib¥ojdbc8.jar

サービス登録プログラム(「CalcSvc.exe」)を「%SystemRoot%¥system32」フォルダにコピーします。※「%SystemRoot%」は OS がインストールされているフォルダを示します。

例) 「c:¥winnt」に OS がインストールされている場合、「%SystemRoot%」は「c:¥winnt」を示し、サービス登録プログラムの格納先フォルダは「c:¥winnt¥system32」となります。



<重要>

- データベースサーバが 64bit 版 Windows の場合、サービス登録プログラム(「calcsvc.exe」)を「%SystemRoot%¥system32」フォルダおよび「%SystemRoot%¥SysWOW64」フォルダにコピーしてください。

(1-3) ログ出力先の設定

「logback.xml」の下線部を編集してログ出力先を設定してください。

1	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
2	
3	<configuration>
4	
5	<property name="fatal.log.path" value="C:/work/gene/CalcEntry.log" />
	(以降、省略)
6	

「C:¥calcstart¥CalcEntry.log」に出力する場合

5 行目 : <property name="fatal.log.path" value="C:/calcstart/CalcEntry.log" />

(1-4) サービスの登録

コマンドプロンプトにて、「**calcsvc△ -install△ [Generalist△PR△Listener]△**

[javapath△java_eng△classpath△log4j△host_name△sid△port△user_name△passwd△wtime]」と入力してサービス登録を実行します。([] を含めて入力します。)

最初の [] の中身は「サービスプロパティ」に表示されるサービス名称です。半角 128 文字以内で入力してください。

2 番目の [] の中身はサービス開始時の開始パラメータを表します。すべて半角にて入力してください。

(パラメータの説明)

Javapath : 「java.exe」が格納されているフォルダ。パスはフルパスで記述します。フォルダの繋ぎは「¥¥」にしてください。

java_eng : java の実行ファイル (通常は java.exe)

classpath : java のクラスファイルが格納されているフォルダ。必要となるクラスファイルは以下の Class およびフォルダです。パスはフルパスで記述します。フォルダの繋ぎは「¥¥」にしてください。

— c:¥¥calcstart

— c:¥¥calcstart¥¥*

(合計で最大半角 128 文字まで入力できます。)

Log4j : 固定値「log4j」を入力してください。

host_name : データベースサーバのホスト名 (最大 64 文字まで入力できます。)

SID : データベースの SID (最大 64 文字まで入力できます。)

port : データベース接続時のポート番号

user_name : データベース接続時のユーザ名 (最大 32 文字まで入力できます。)

passwd : データベース接続時のパスワード (最大 32 文字まで入力できます。)

wtime : データベースを読み込むインターバル (単位はミリ秒)

(最大 99999999 文字まで入力できます。)

例)

Javapath = d:¥oracle¥ora12c¥jdk¥bin¥

java_eng = java.exe

classpath = c:¥¥calcstart;c:¥¥calcstart¥¥*

```
Log4j      = log4j
host_name  = oracle
sid        = orcl
port       = 1521
user_name  = pruser
passwd     = admin
wtime     = 20000
```

設定は上記と同じとした場合、コマンドプロンプトからの入力は次のようになります。

```
Prompt>calcsvc△-install△[Generalist△PR△Listener]△[d:¥¥oracle¥¥ora12c¥¥jdk¥¥bin
¥¥△java.exe△c:¥¥calcstart;c:¥¥calcstart¥¥*△log4j△oracle△orcl△1521△pruser△admin
△20000]
```

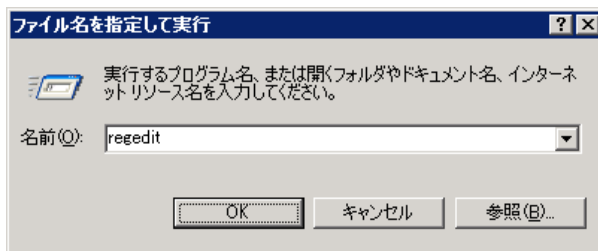


<重要>

- Oracle Database 12c R2 または Oracle Database 19c を使用する場合、ログインパスワードの大文字／小文字が区別されます。ただし、上記サービスの登録では、小文字でしか登録されないため、ログインパスワードに大文字を使用している場合、サービス登録後に下記手順中でレジストリを変更する必要があります。

(1-5) レジストリエディタの起動

データベースサーバ上で「スタートメニュー」→「ファイル名を指定して実行」にて「regedit」と入力し、レジストリエディタを起動してください。



(1-6) レジストリの編集

以下のレジストリキーを編集してください。ログインパスワードに大文字を使用している場合は、編集するパラメータの末尾付近のログインパスワードも修正してください。

編集するレジストリキー：

[HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥GeneListen]

編集するパラメータ：

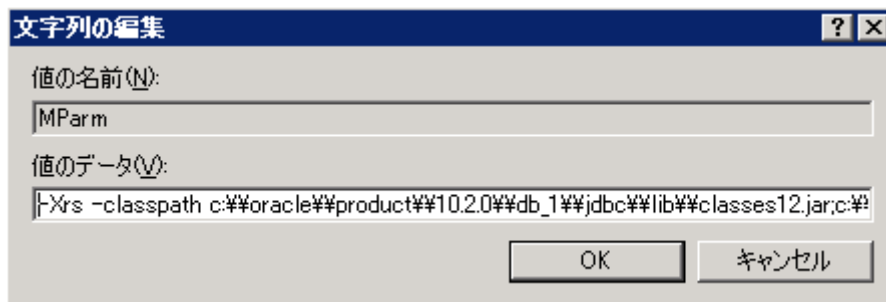
“Mparm”

編集内容：

JRE1.3.1 以降の場合は先頭に「-Xrs△」(△は半角スペース)を追加してください。

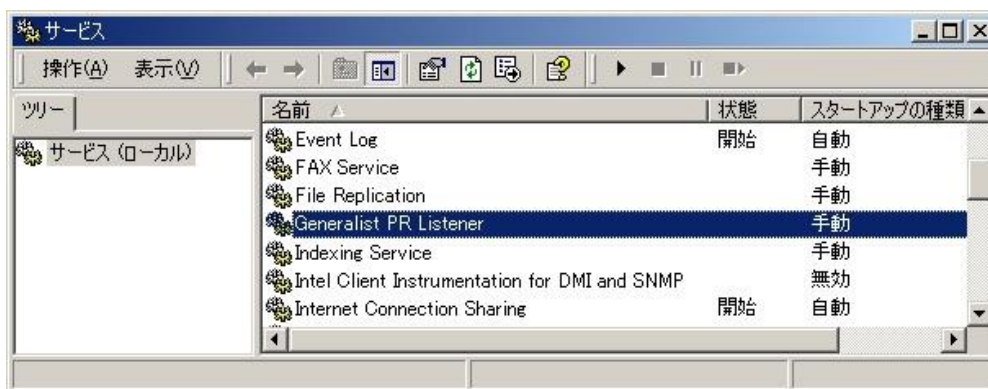
(変更前)「-classpath△c:¥¥oracle¥¥product¥¥102~1.0¥¥・・・」

(変更後)「-Xrs△-classpath△c:¥¥oracle¥¥product¥¥102~1.0¥¥・・・」

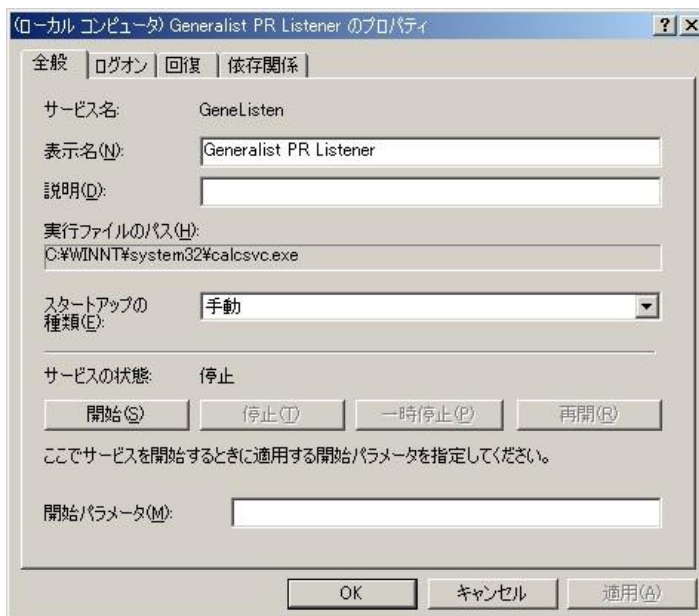


(1-7) サービスの開始

- (1) [コントロールパネル]より「サービス」の画面を表示します。
「Generalist PR Listener」を選択し、「操作(A)」より「プロパティ(R)」を選択してください。

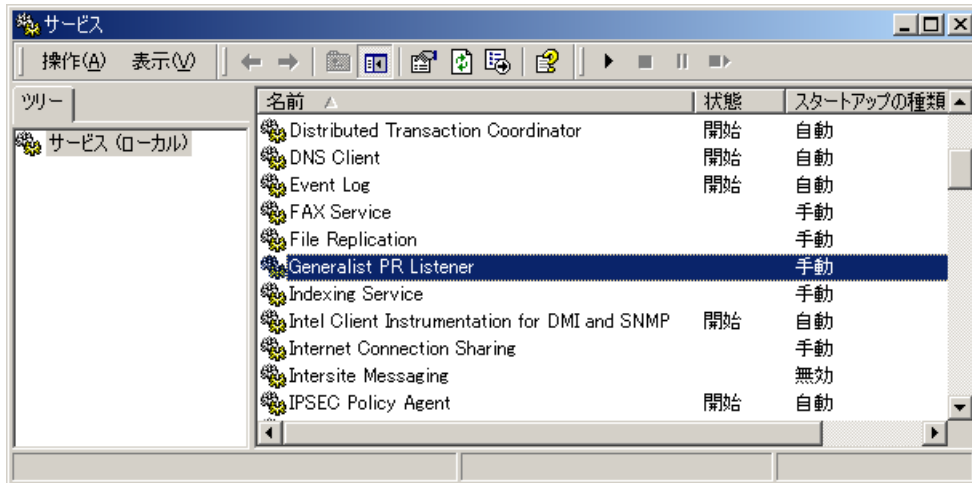


- (2) 「開始(S)」をクリックします。



(1-8) サービスの停止

- (1) [コントロールパネル]より「サービス」の画面を表示します。
「Generalist PR Listener」サービスを選択し、「操作(A)」より「停止(O)」を選択してください。



(1-9) サービスの削除

「Generalist PR Listener」サービスを削除する場合は以下の手順で削除してください。

- (1) コマンドプロンプトにて、「calcsvc△-remove」と入力してサービス削除を実行します。



<重要>

計算サービスは Windows のタスクに登録して起動することも可能です。タスクに登録する際には以下の手順で登録を行ってください。

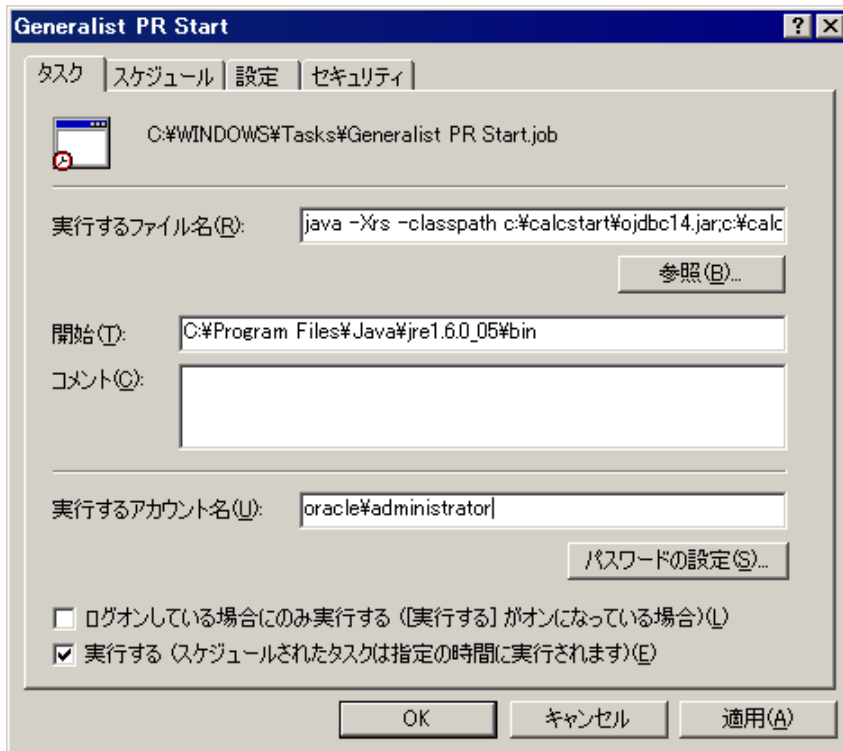
- (1) 実行するファイル名 (R) は給与計算サービスを起動させるための java コマンドを入力します。
- (2) その時に、オプション -Xrs を追加で指定します。
- (3) 開始 (T) は実行する java.exe があるディレクトリをフルパスで指定します。
- (4) 実行するにチェックをします
- (5) タスクのスケジュール (S) はシステム起動時にします。

タスクの設定終了後システムを再起動し給与計算が動くことを確認してください。

設定例)

実行するファイル名 (R):

```
java -Xrs -classpath c:¥calcstart;c:¥calcstart¥* CalcEntry log4j oracle orcl 1521 pr
user admin 20000
```



第6章 クライアントのセットアップ

この章では Generalist を動作させるクライアントマシンに対して必要な設定、および帳票出力を行うために必要なクライアントのセットアップを説明します。

6.1 クライアントマシン設定

クライアントマシンの OS や Web ブラウザの種類やバージョンにより必要な設定が異なります。

6.1.1 共通の設定

- ポップアップブロックの機能は必ずオフにしてください。
- Generalist のサイトがイントラネットもしくは信頼済みサイトのゾーンに入るように、以下の手順で設定を行ってください。
 - (1) コントロールパネルから「インターネットオプション」を起動してください。
 - (2) 「セキュリティ」タブを選択してローカル イントラネットもしくは信頼済みサイトを選択します。
 - (3) 「サイト(S)」ボタンを押します。
 - (4) ローカル イントラネットを選択した場合、「詳細設定(A)」ボタンを押します。
 - (5) 「この Web サイトをゾーンに追加する」に、Generalist のサイトを入力し、「追加(A)」ボタンを押します。
- httpで運用する場合、ファイルダウンロードを行うためにブラウザの設定を変更する必要があります。

【Google Chrome の場合】

- (1) Chrome の画面右上の [...]ボタン > [設定]をクリック
- (2) (左側) [プライバシーとセキュリティ]をクリック
- (3) [サイトの設定]をクリック
- (4) [その他のコンテンツ設定]をクリック
- (5) [安全でないコンテンツ]をクリック
- (6) [安全でないコンテンツの表示を許可するサイト]欄 > [追加]ボタンをクリック
- (7) **Generalist**のURLを入力し、[追加]ボタンをクリック

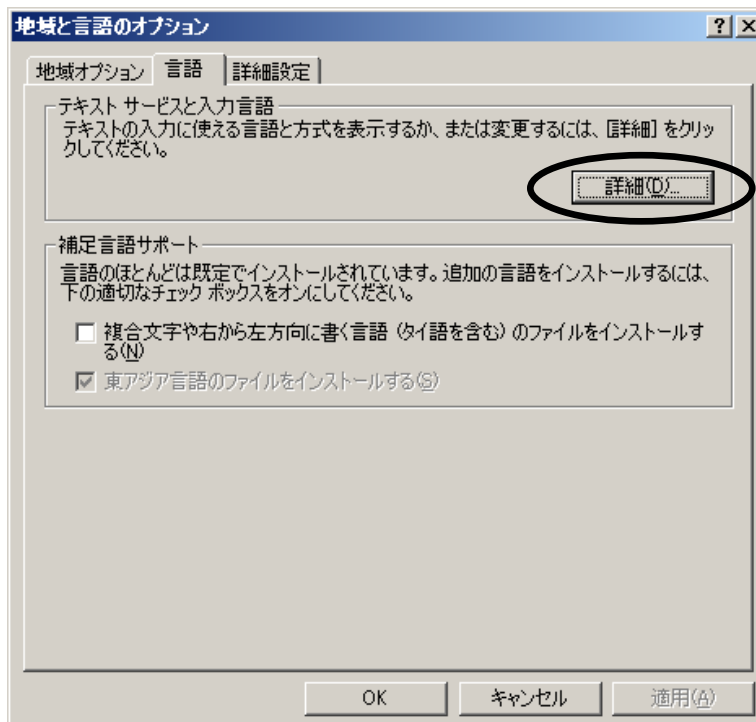
【Microsoft Edgeの場合】

- (1) Edgeの画面右上の [...]ボタン > [設定]をクリック
- (2) (左側) [Cookieとサイトのアクセス許可]をクリック
- (3) [セキュリティで保護されていないコンテンツ]をクリック
- (4) [許可]欄 > [追加]ボタンをクリック
- (5) **Generalist**のURLを入力し、[追加]ボタンをクリック

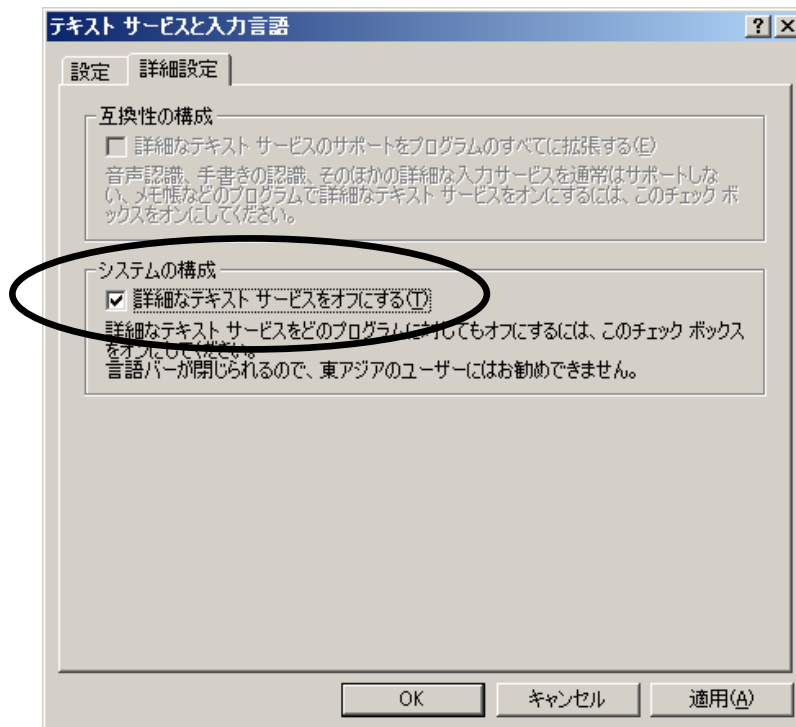


<ポイント>

- 一台のクライアントマシン上で複数のブラウザを起動し、複数の Generalist を同一セッションで立ち上げた場合は、Generalist が正常に動作しません。
- 機能画面の[リスト]ボタンを使用後に IME の切替ができなくなる場合には、下記の設定を行うことでこの現象を回避することができます。
 - (1) 「コントロールパネル」より「地域と言語のオプション」の画面を表示します。
「言語」タブを選択し、テキストサービスと入力言語の「詳細(D)」ボタンを押下してください。



(2) 「詳細設定」タブを選択してください。



- システムの構成
「詳細なテキストサービスをオフにする(T)」をチェックしてください。

(3) 設定後、OK ボタンを押下して設定を反映してください。

6.2 Access 帳票出力セットアップ手順

初回印刷時には「6.3 帳票初回印刷時の設定」の手順を実行してください。

6.2.1 Access または Access Runtime のインストール

(1) クライアントPCに Access または Access Runtimeをインストールしてください。

Access Runtime を利用する場合は、Microsoft のページからダウンロードしてください。Microsoft Access Runtime の入手方法は以下の URL を参照してください。

【Microsoft Access 2016 Runtime】

<https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=50040>

【Microsoft Access 365 Runtime】

<https://support.microsoft.com/ja-jp/office/access-runtime-%E3%82%92%E3%83%80%E3%82%A6%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89microsoft-365%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%81%99%E3%82%8B-185c5a32-8ba9-491e-ac76-91cbe3ea09c9>



<重要>

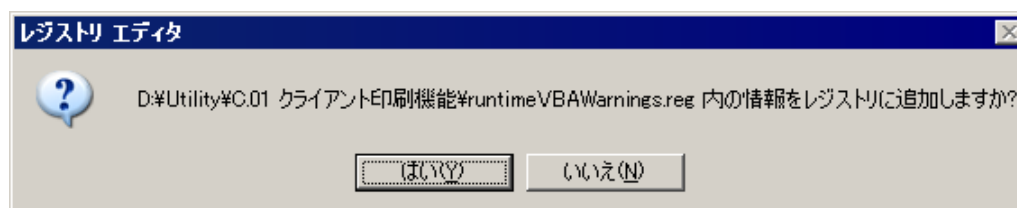
- インストール時は必ず Administrator ユーザーでログインしてください。
- バージョン(ビット バージョン含む)の異なる Office や Access Runtime がインストールされている場合、正常に動作しない可能性があるため、サポート対象外となります。ただし、Microsoft Office 2019、2021 (LTSC を含む)または 2024 をご利用の場合は、インストールしているビットと同じ Microsoft 365 Access Runtime をご利用ください。

(2) Access Runtimeを利用する場合は、レジストリ情報を追加してください。

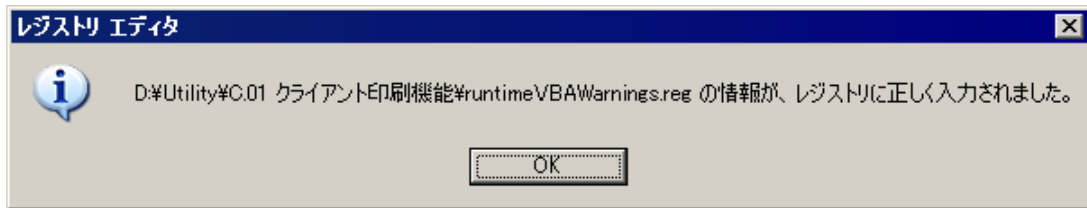
「インストールメディア¥Utility¥ C.01 クライアント印刷機能」フォルダにあるレジストリ情報追加スクリプトをダブルクリックします。「はい(Y)」ボタンを押してレジストリ情報を追加します。

※バージョンにより追加するレジストリ情報が異なります。

2016 runtime または 365 runtime の場合は runtimeVBAWarnings2016.reg を実行してください。



(3) レジストリ情報の追加が完了しました。「OK」ボタンを押してウィンドウを閉じます。



6.2.2 Generalist 帳票起動ツール、ReportRuntime のインストール

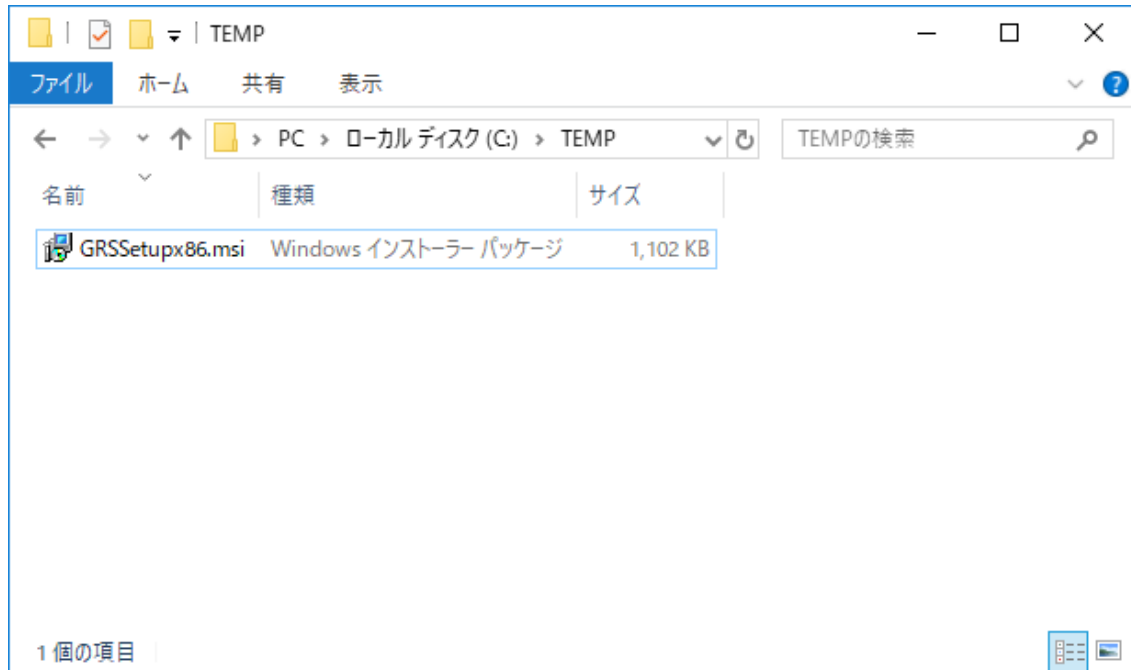
クライアントPCに Access がすでにインストールされている場合は、Generalist のトップページより下記のツールをダウンロードし、インストールを行ってください。

- Generalist 帳票起動ツール
- ReportRuntime

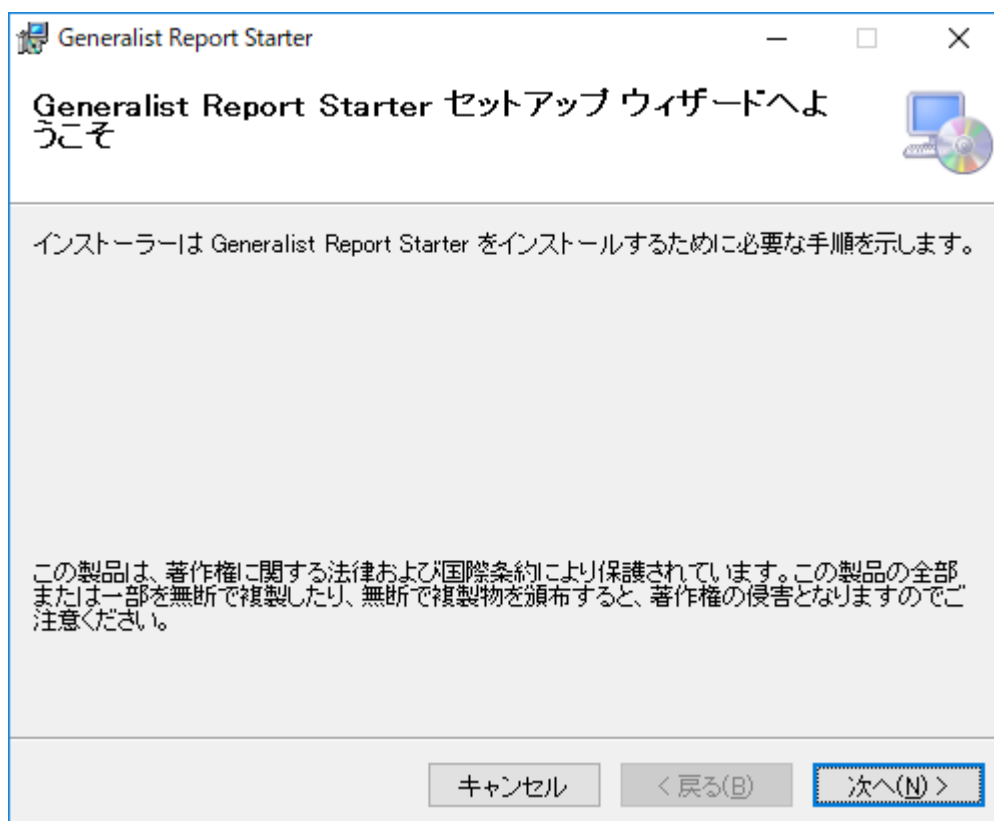
下の図は Generalist のトップページですが、赤で囲った箇所にリンクが張ってありますので、これをクリックしてクライアントPCの適当なフォルダに保存してください。

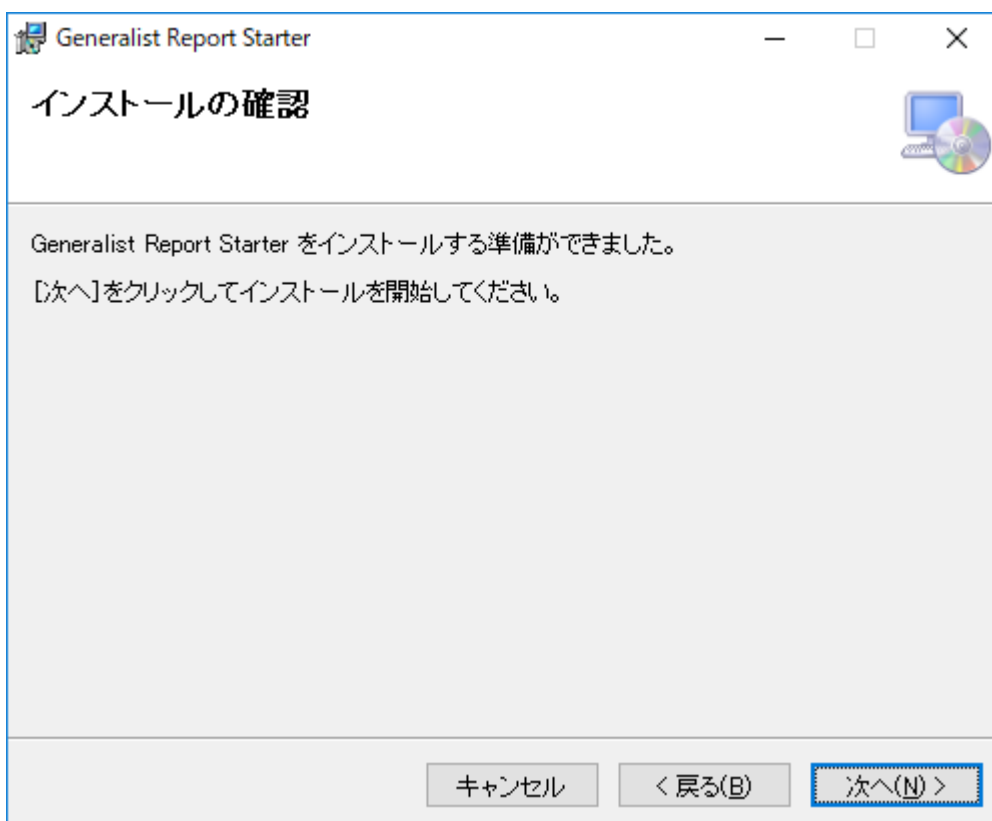
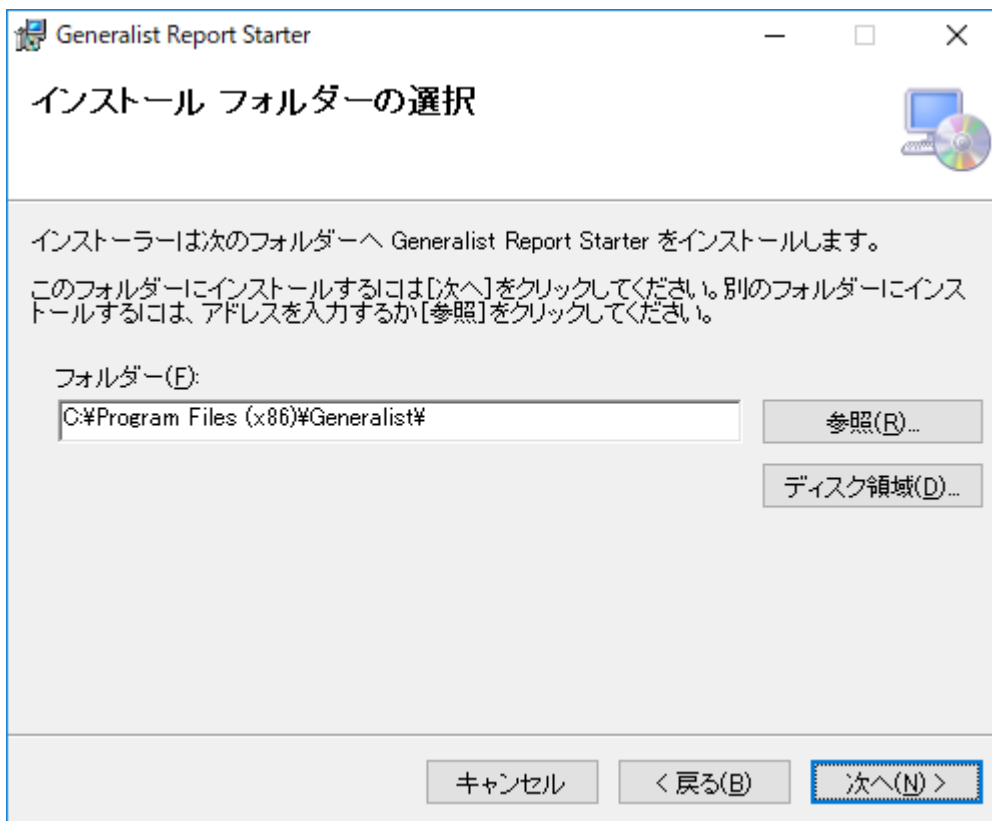


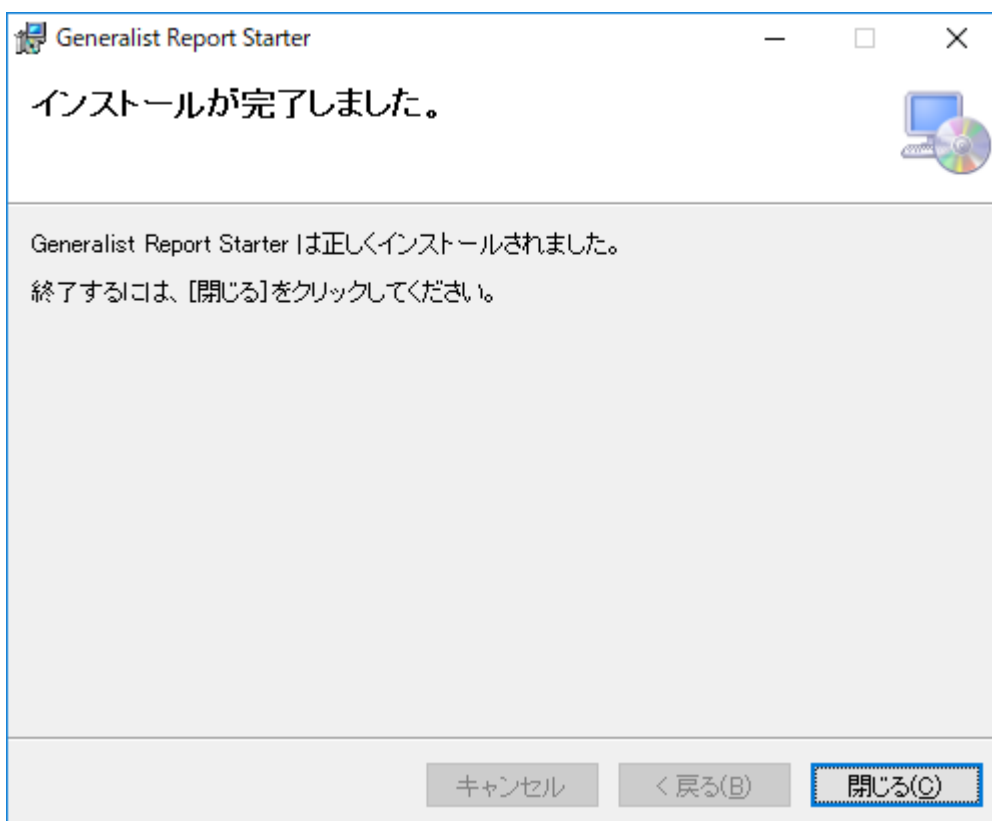
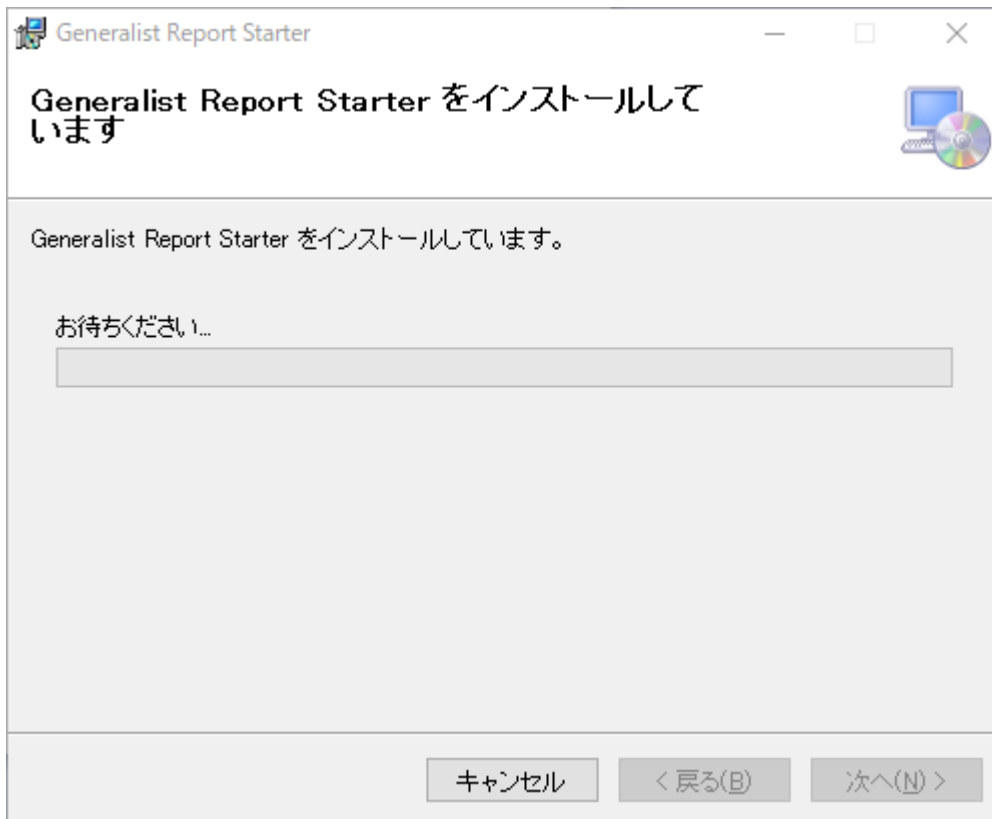
Generalist 帳票起動ツールをダウンロードして保存したところです。保存したらダブルクリックして実行してください。



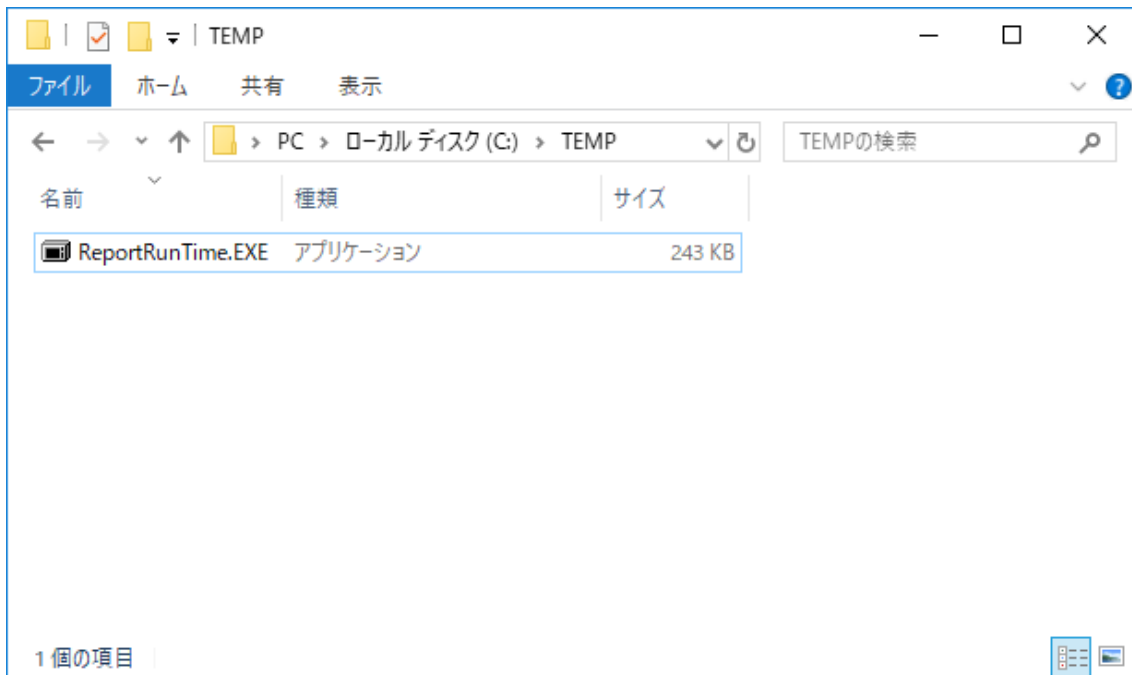
セットアップ ウィザードの指示に沿って、インストールを行ってください。



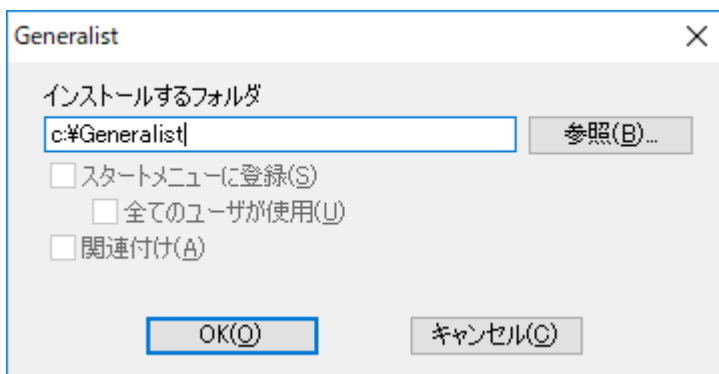




ReportRuntime.exe をダウンロードして保存したところでは、保存したらダブルクリックして実行してください。



インストールするフォルダを指定します。例としてここでは「C:\Generalist」を指定します。フォルダを指定したらOKボタンをクリックします。



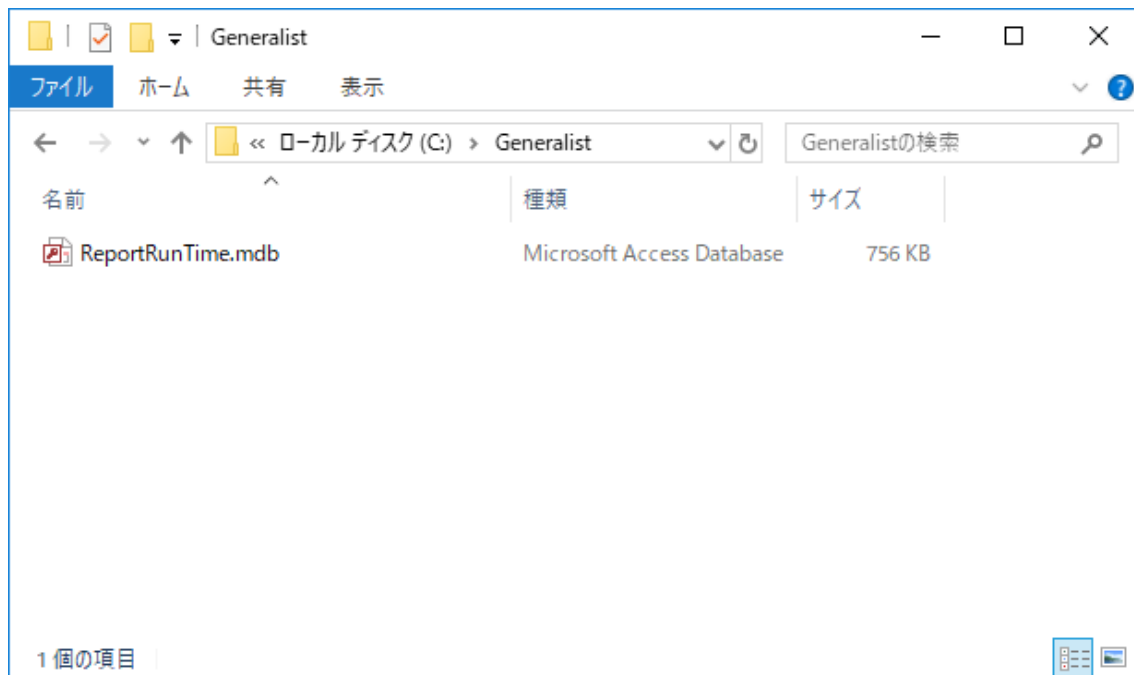
 <重要>

- インストールするフォルダが存在する場合、フォルダ内に存在するファイルは削除されます。
- インストールするフォルダには、書き込みや更新が制限されているフォルダ以外のフォルダを指定してください。

【書き込みや更新が制限されているフォルダ】

- C:\
- C:\Program Files
- C:\Program Files (x86)
- C:\Windows

Access のファイル ReportRuntime.mdb がインストールされました。これでインストールは終了です。
「6.3 帳票初回印刷時の設定」で、インストールされた ReportRuntime.mdb を指定する必要がある
ので、どのフォルダにインストールしたか覚えておいてください(この例では”C:¥Generalist”)。



6.3 帳票初回印刷時の設定

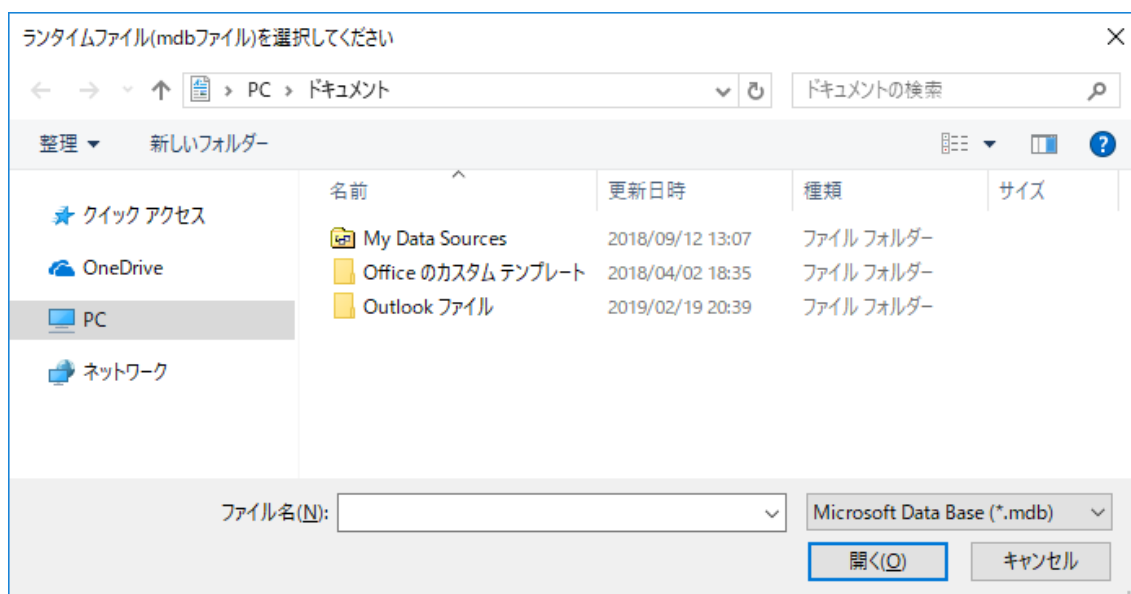
クライアントセットアップ後に初めて Access 形式の帳票を印刷すると、grpf ファイルをどのプログラムで開くか選択する画面が表示されます。6.2 Access 帳票出力セットアップ手順 でインストールした Generalist 帳票起動ツールを指定してください。



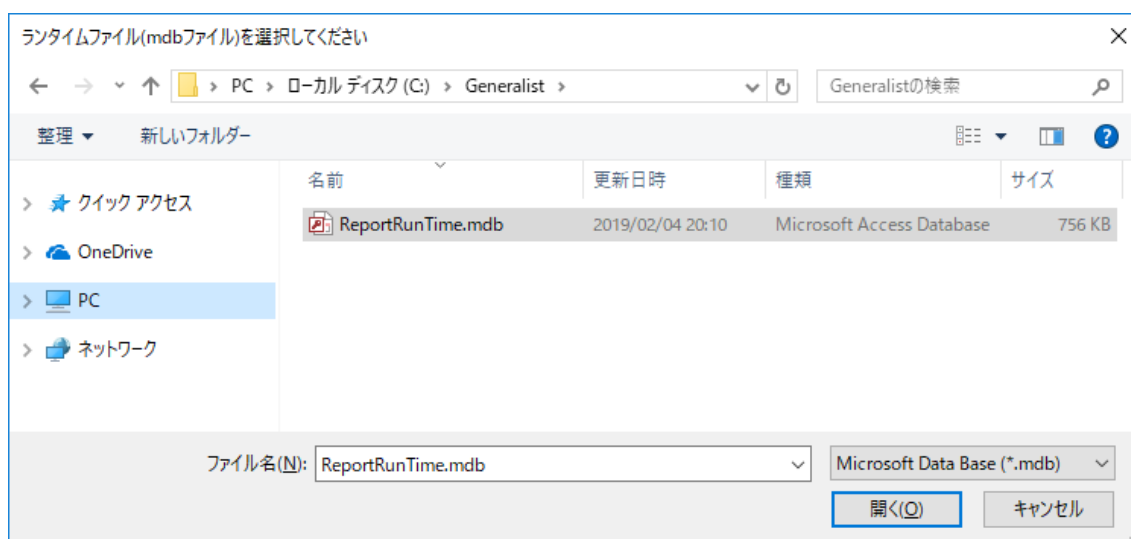
<重要>

- grpf ファイルの関連付けは必ず Generalist 帳票起動ツールをインストールしてから行ってください。

Generalist 帳票起動ツールを指定すると次に、ランタイムファイル(ReportRuntime.mdb ファイル)の選択を要求するダイアログが表示されます。6.2 Access 帳票出力セットアップ手順 でインストールした ReportRuntime.mdb ファイルを指定してください。



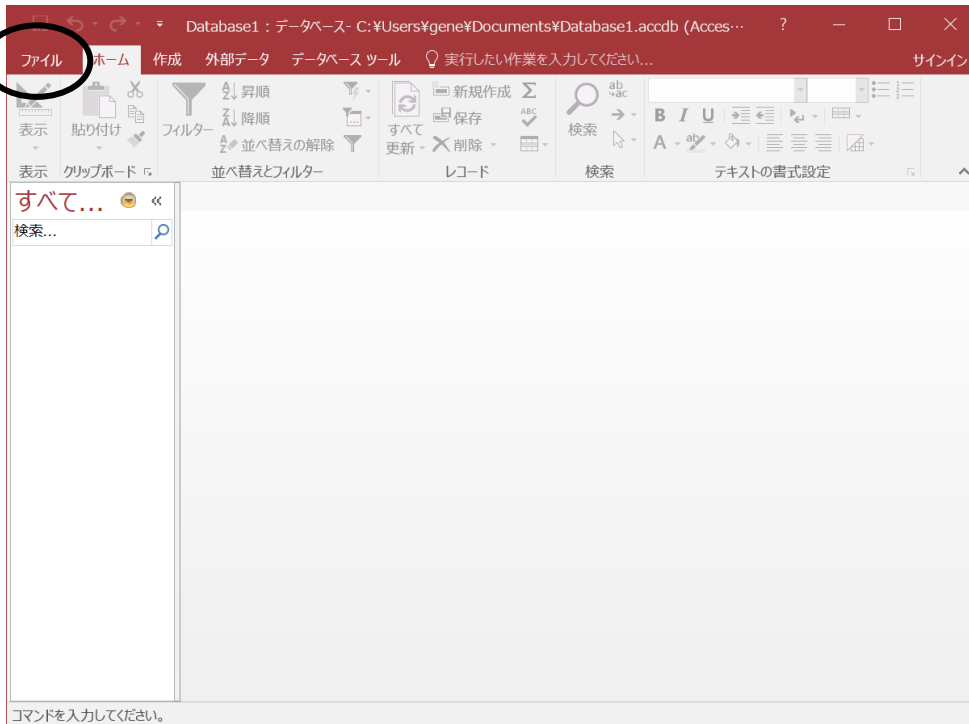
6.2.2 の例では「C:\¥Generalist」に mdb ファイルを保存したので、このフォルダにある ReportRuntime.mdb を選択して「開く」ボタンをクリックします。



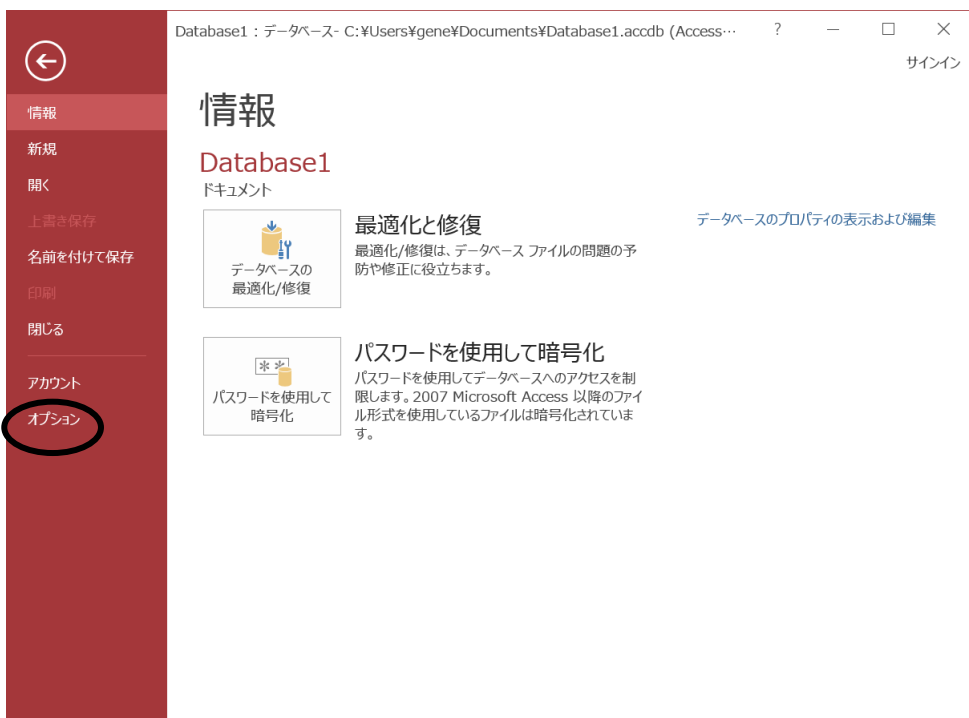


<重要>

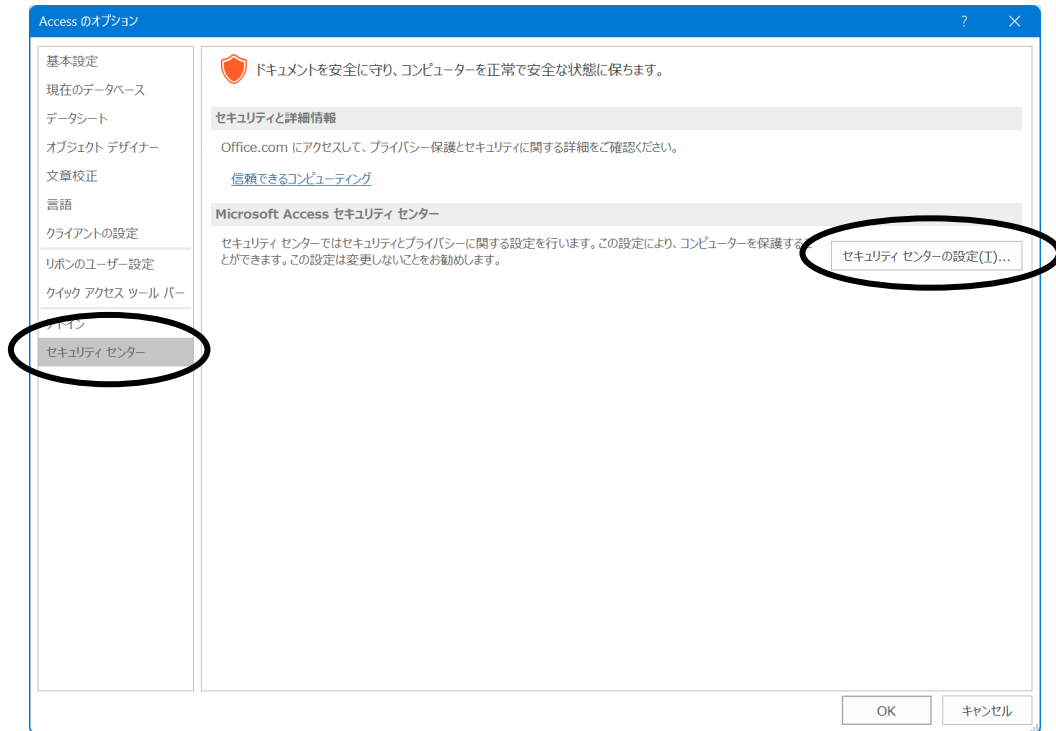
- Microsoft Access 2016、2019、2021、365 をご利用の場合、以下の手順に従い、マクロセキュリティの設定をしてください。
 - マクロセキュリティの設定
(※一旦、空のデスクトップ データベースの作成が必要となります。設定が終わったら作成した空のデスクトップ データベースは不要なため削除してください。)
- (1) [ファイル]を押下し、



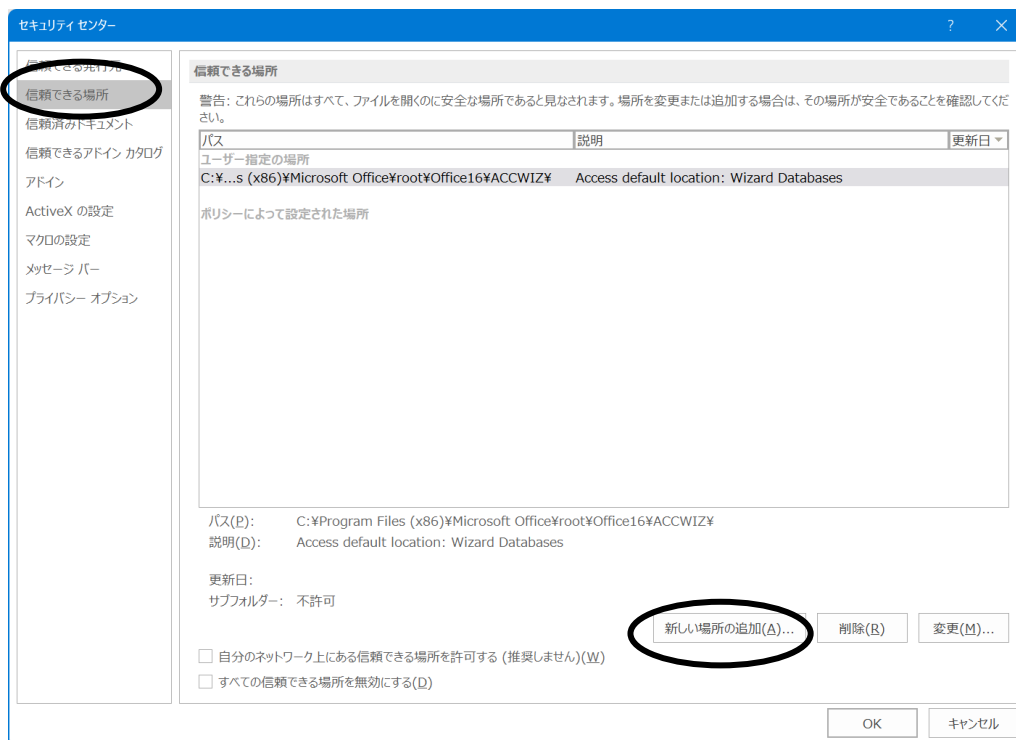
[オプション]を押下します。



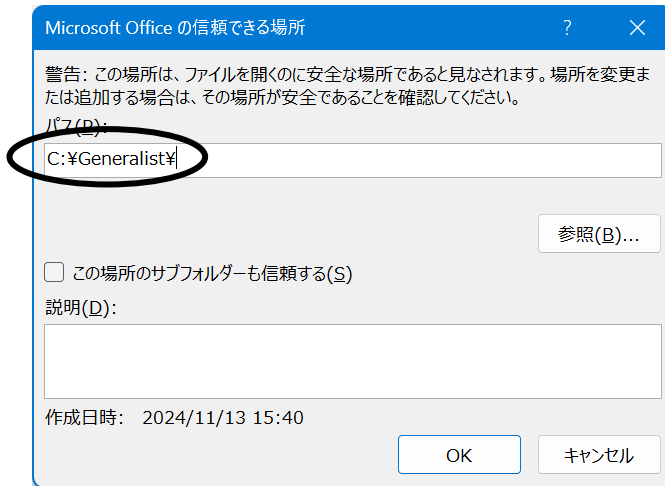
- (2) 表示された Access のオプション画面のメニューから[セキュリティセンター]を選択し、[セキュリティセンターの設定(T)]を押下します。※バージョンによっては、「セキュリティセンター」ではなく、「トラストセンター」になります。



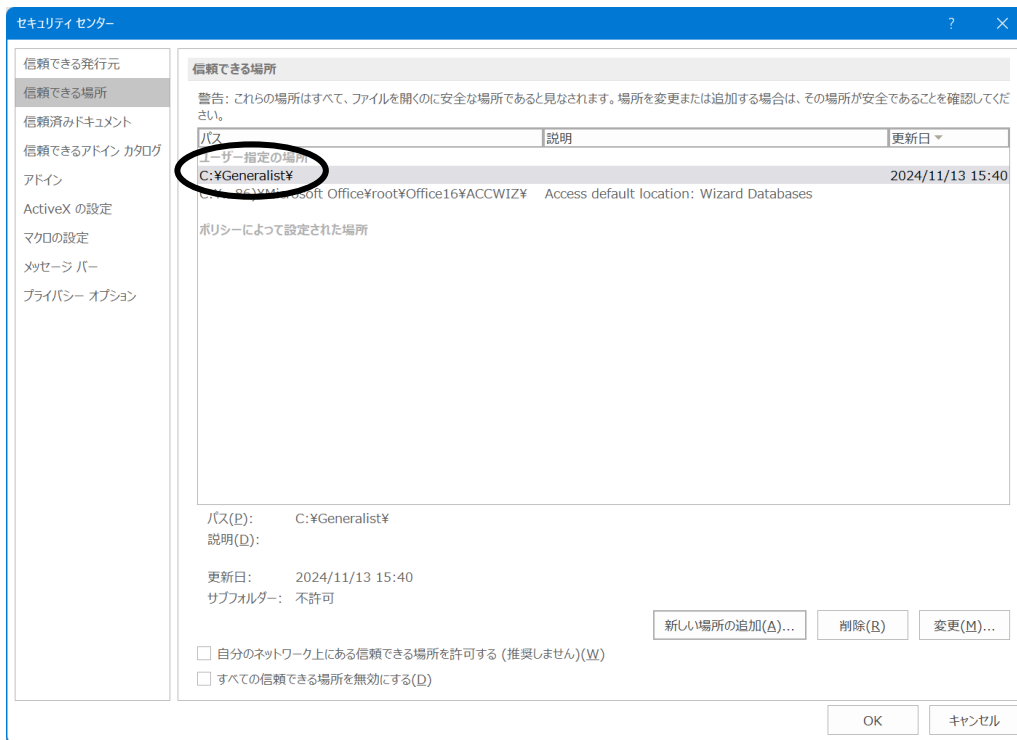
- (3) 表示されたセキュリティセンターまたはトラストセンター画面のメニューから[信頼できる場所]を選択し、[新しい場所の追加(A)]を押下します。



- (4) パスに ReportRuntime.mdb モジュールを格納したフォルダを指定し、[OK]を押下します。



- (5) 信頼できる場所に指定したフォルダが追加されたことを確認してください。



6.4 クライアントのアンインストール

6.4.1 6.2.2 でインストールした ReportRuntime.mdb および Generalist 帳票起動ツールのアンインストール

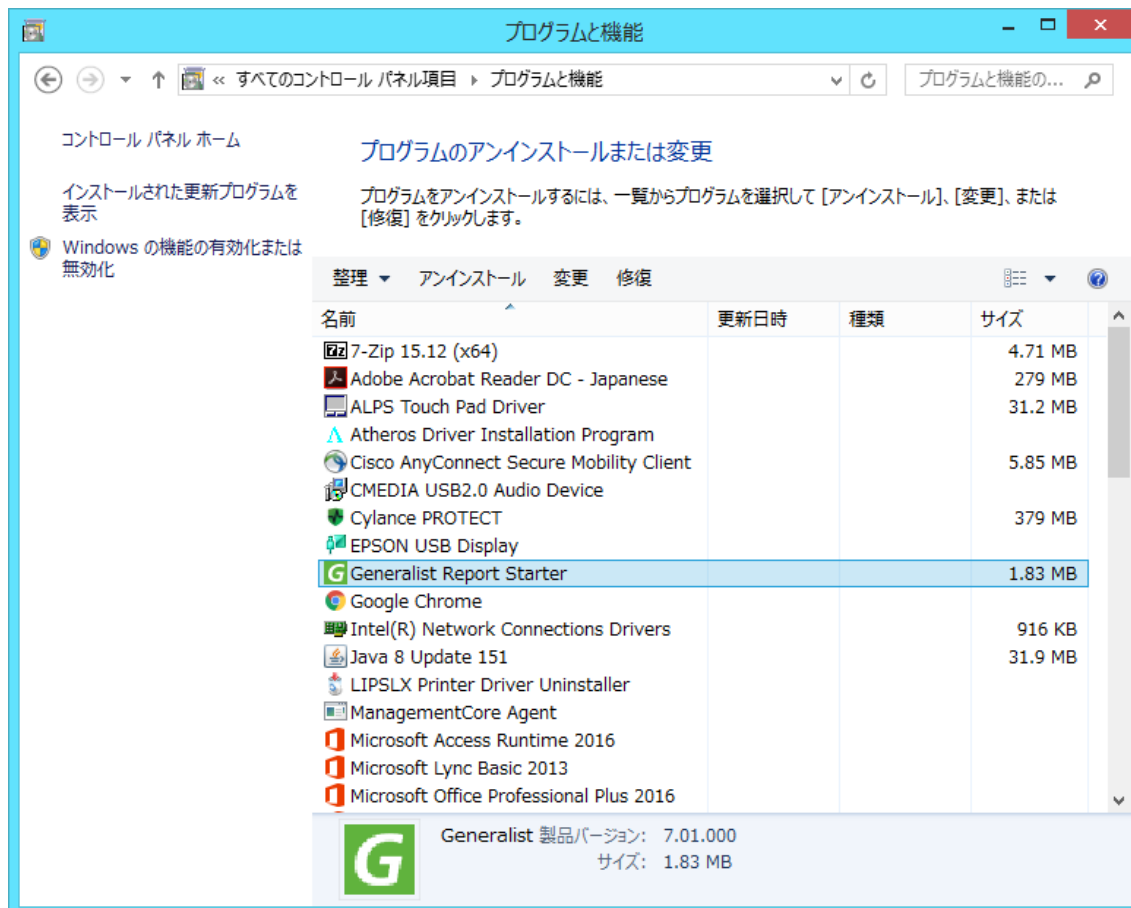
6.2.2 でインストールした ReportRuntime.mdb をアンインストールします。6.2.2 の例では C:\¥Generalist にインストールしたので、そのまま ReportRuntime.mdb を削除してください。

6.2.2 で Generalist 帳票起動ツールをインストールした場合のアンインストール方法を説明します。

スタートメニューからコントロールパネルを開きます。「プログラムと機能」アイコンをダブルクリックします。



ダイアログが表示されるので、「Generalist Report Starter」を選択して削除ボタンを押します。これで Generalist 帳票起動ツールが削除されます。



第7章 マイナンバーシステムの設定

7.1 概要

マイナンバーシステムをご利用の場合、Generalist/HR/PR をインストール後にマイナンバーシステムの設定を行う必要があります。設定の手順はマイナンバーシステムの構成毎に異なります。

同一システムの場合

「7.3.1 マイナンバーシステムの設定(同一システム)」の手順にそって、マイナンバーシステムの設定を行ってください。

サービス連携の場合

「7.3.2 マイナンバーシステムの設定(サービス連携)」の手順にそって、マイナンバーシステムの設定を行ってください。

※サービス連携の場合、マイナンバーシステムを別途インストールする必要があります。

別システムの場合

「7.3.3 マイナンバーシステムの設定(別システム)」の手順にそって、マイナンバーシステムの設定を行ってください。

※別システムの場合、マイナンバーシステムを別途インストールする必要があります。

別システム(電子申請のみサービス連携)の場合

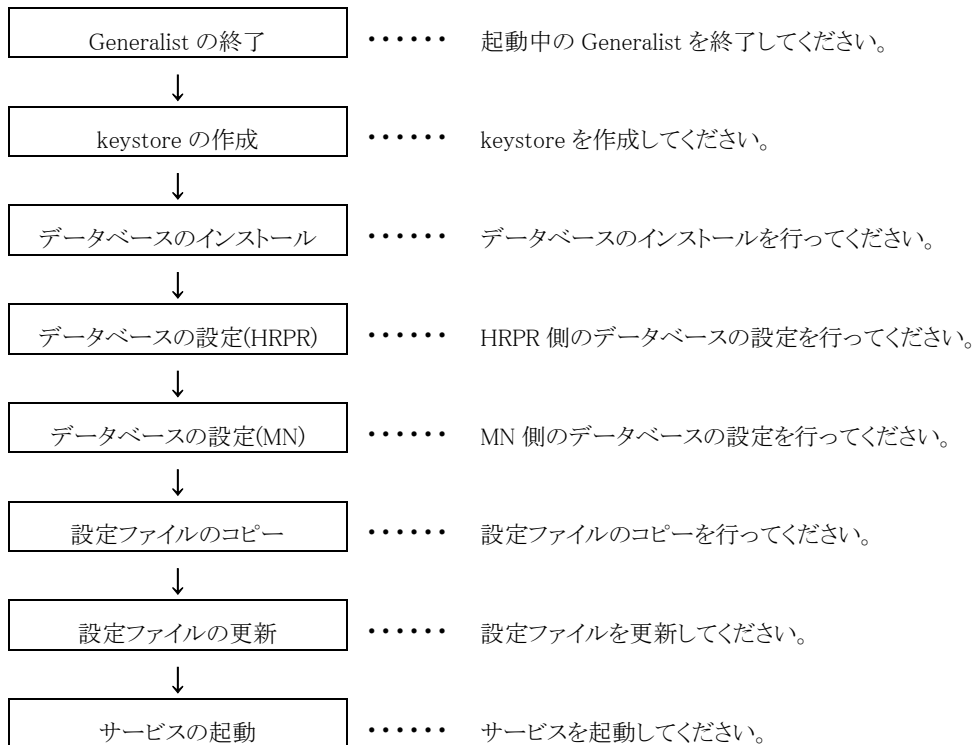
「7.3.4 マイナンバーシステムの設定(別システム 電子申請のみサービス連携)」の手順にそって、マイナンバーシステムの設定を行ってください。

※別システムの場合、マイナンバーシステムを別途インストールする必要があります。

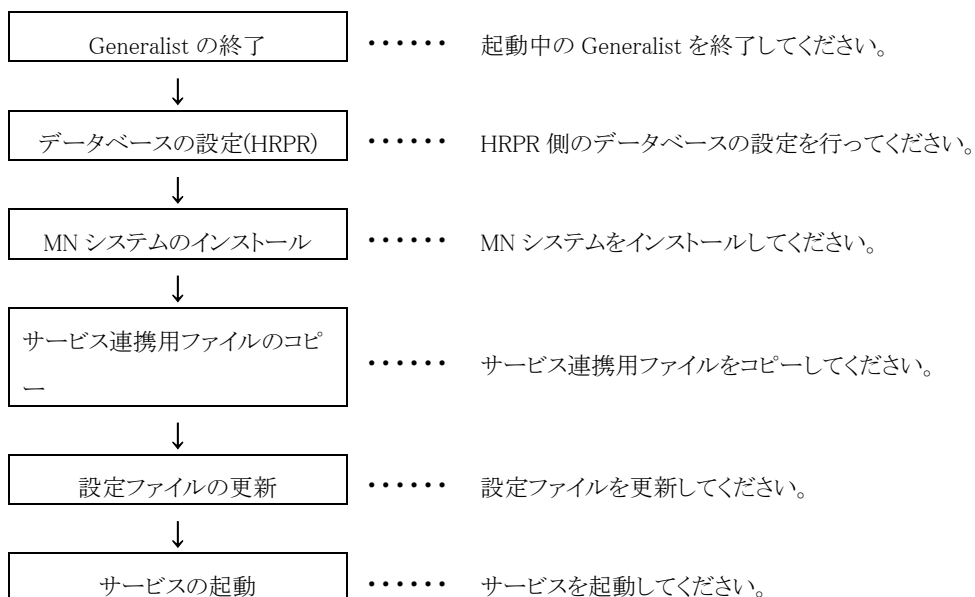
7.2 セットアップの手順

マイナンバーシステムのセットアップを行う手順を記載します。

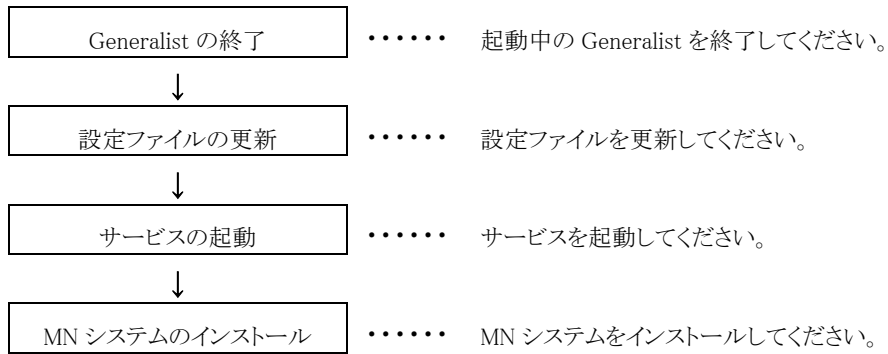
同一システムの場合



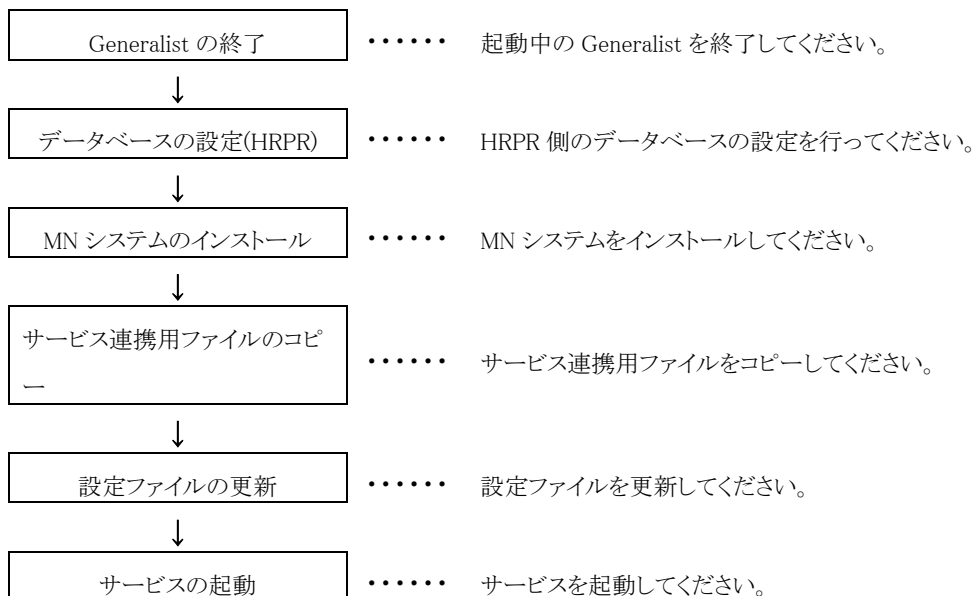
サービス連携の場合



別システムの場合



別システム(電子申請のみサービス連携)の場合



Generalist/MN のインストールにあたり、事前に決定しておくべき事項を示します。

項目	例	お客様ご記入欄
Generalist/HR/PR 環境に接続するためのユーザ名/パスワード	GRSYS/GRSYS C# #GRSYS/C##GRSYS (Oracle12c/19c 共通ユーザの場合)	
Generalist/HR/PR のデータベースの接続文字列	GENEDB	
Generalist/MN のデータベースの SYS ユーザ/パスワード	SYS/SYS	
Generalist/MN 環境に接続するためのユーザ名/パスワード	MNSYS/MNSYS C##MNSYS/C##MNSYS (Oracle12c/19c 共通ユーザの場合)	
Generalist/MN のデータベースの接続文字列	MNDB	
デフォルトテーブルスペース名	USERS	
INDEX テーブルスペース名	INDX	
テンポラリテーブルスペース名	TEMP	
MN システムコード	Generalist	
MN システム名称	Generalist	
MN システムパスワード		
キーストアのファイル名	GeneMNKeyStore.keystore	
キーストアに格納するキーの名称	GeneMNKey	
キーストアのパスワード		
PDB インスタンス名	GR(Oracle12c/19c ローカルユーザの場合)	

7.3 マイナンバーシステムの設定

7.3.1 マイナンバーシステムの設定(同一システム)

以下の手順にそって、マイナンバーシステムの設定を行います。

【7.3.1(1) Generalist の終了】

起動している Generalist をすべて終了させてください。またアプリケーションサーバのサービスを停止してください。既に停止している場合、本手順は不要です。

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
<ユーザ名> :Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
<パスワード> :Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ④ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『Generalist』のチェックボックスをクリックし、『停止』ボタンをクリックします。
- ⑤ 状態に『SHUTDOWN』が表示されればサーバーの停止は完了です。
- ⑥ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
<ユーザ名> :WebCube Management Server の管理者のユーザ名
<パスワード> :WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ④ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑤ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。停止するアプリケーションの『停止』をクリックします。
- ⑥ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、停止までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたらタブの『削除』をクリックしてください。
- ⑦ 削除画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。削除するアプリケーショ

ンの『削除』をクリックします。

- ⑧ 運用管理ポータル画面から『論理サーバの起動／停止』をクリックします。
- ⑨ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑩ 『一括停止』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

【7.3.1(2) keystore の作成】



<重要>

- ・ 本処理は JDK1.8 以上がインストールされたマシン上で行ってください。
- ・ ①で任意のフォルダに「KeyStoreTool」をコピーする場合、コピー先のフォルダ(フルパス)は「.(ドット)」、「 (スペース)」を含まない箇所にしてください。正しくファイルが生成されない可能性があります。

① モジュールのコピーと展開

インストールメディアにある以下のフォルダを任意のフォルダへコピーしてください。

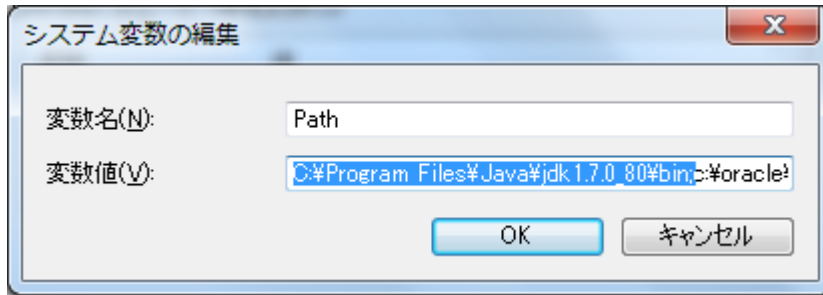
ファイル格納場所:

<インストールメディア>¥Utility¥M.02 Keystore 生成ツール¥KeyStoreTool

② 環境変数の設定

Path に JDK がインストールされているフォルダの bin フォルダまでのパスを指定してください。

例) `C:\Program Files\Java\jdk1.7.0_80\bin`



③ keystoretool.bat の設定

KeyStoreTool\keystoretool.bat の設定を実行環境に合わせて変更します。

JDK がインストールされているフォルダを指定してください。

```
REM JAVA_HOME を設定してください。  
JAVA_HOME="C:\Program Files\Java\jdk1.7.0_80"
```

④ keystoretool.bat をダブルクリックし実行します。

keystoretool.bat を実行すると、以下の 3 点が質問されます。

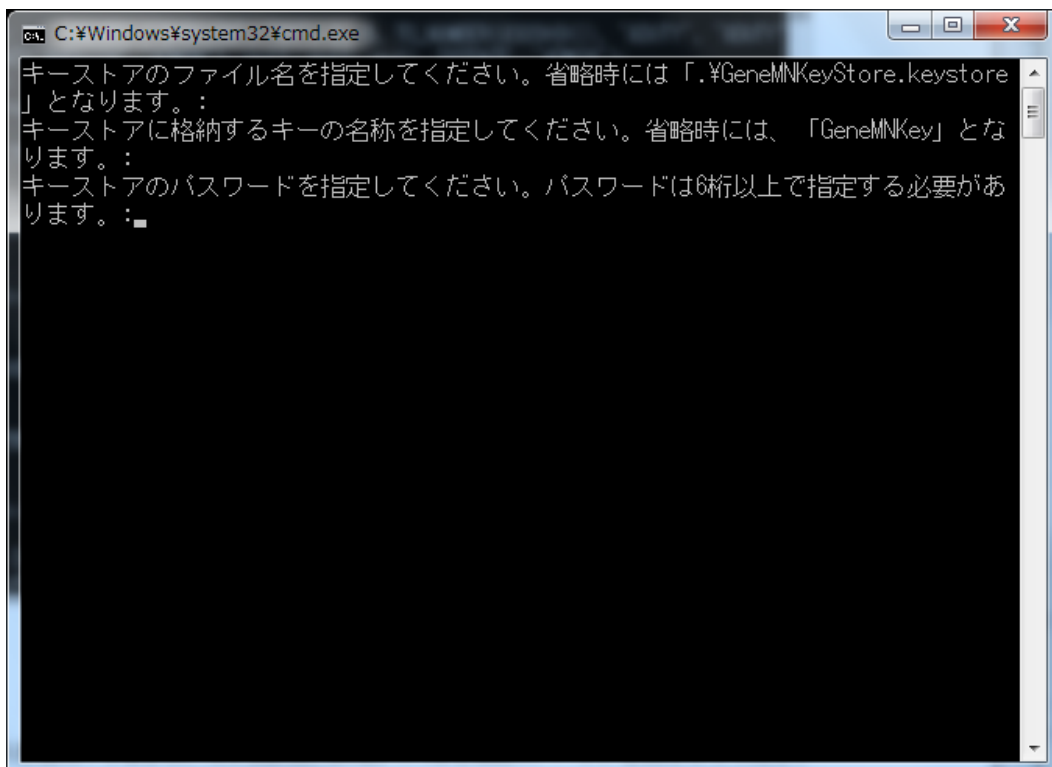
キーストアのファイル名

キーストアに格納するキーの名称

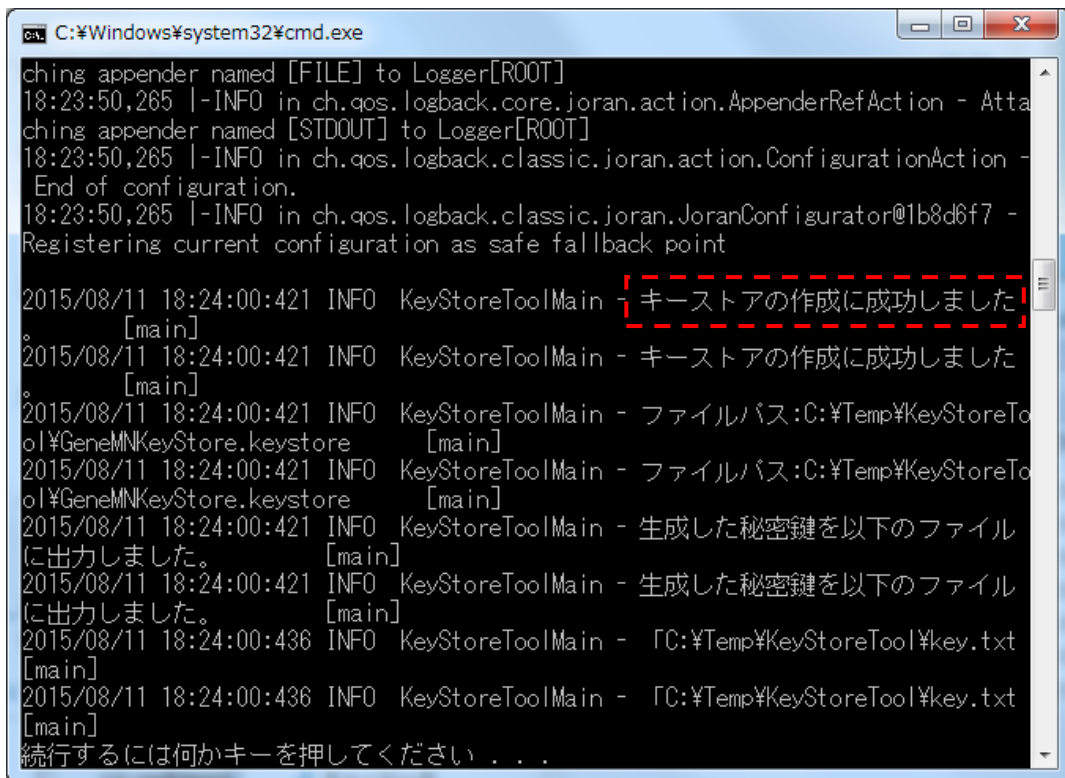
キーストアのパスワード

※それぞれ「7.2 セットアップの手順」にて、決定した値を入力してください。

各項目を入力し、Enter キーを押します。



「キーストアの作成に成功しました。」と表示されることを確認し、Enter キーを押します。



```
C:\Windows\system32\cmd.exe
ching appender named [FILE] to Logger[ROOT]
18:23:50,265 |-INFO in ch.qos.logback.core.joran.action.AppenderRefAction - Attaching appender named [STDOUT] to Logger[ROOT]
18:23:50,265 |-INFO in ch.qos.logback.classic.joran.action.ConfigurationAction - End of configuration.
18:23:50,265 |-INFO in ch.qos.logback.classic.joran.JoranConfigurator@1b8d6f7 - Registering current configuration as safe fallback point

2015/08/11 18:24:00:421 INFO KeyStoreToolMain - キーストアの作成に成功しました
[main]
2015/08/11 18:24:00:421 INFO KeyStoreToolMain - キーストアの作成に成功しました
[main]
2015/08/11 18:24:00:421 INFO KeyStoreToolMain - ファイルパス:C:\Temp\KeyStoreTool\GeneMNKeyStore.keystore [main]
2015/08/11 18:24:00:421 INFO KeyStoreToolMain - ファイルパス:C:\Temp\KeyStoreTool\GeneMNKeyStore.keystore [main]
2015/08/11 18:24:00:421 INFO KeyStoreToolMain - 生成した秘密鍵を以下のファイルに出力しました。 [main]
2015/08/11 18:24:00:421 INFO KeyStoreToolMain - 生成した秘密鍵を以下のファイルに出力しました。 [main]
2015/08/11 18:24:00:436 INFO KeyStoreToolMain - 「C:\Temp\KeyStoreTool\key.txt [main]
2015/08/11 18:24:00:436 INFO KeyStoreToolMain - 「C:\Temp\KeyStoreTool\key.txt [main]
続行するには何かキーを押してください . . .
```

KeyStoreTool フォルダに以下のファイルが作成されていることを確認してください。

- GeneMNKeyStore.keystore
- key.txt

GeneMNKeyStore.keystore はアプリケーションサーバ上の任意のフォルダにコピーしてください。key.txt は GeneMNKeyStore.keystore に関する情報のバックアップです。大切に保管してください。

⑤ 環境変数の設定

手順②で追加した JDK のインストールフォルダのパスを削除し、元に戻してください。

【7.3.1(3) データベースのインストール】

① ファイルの解凍

インストールメディアにある以下のフォルダの DatabaseServer.zip を管理用クライアントのハードディスクにコピーし DatabaseServer.zip を展開します。ここでは c:\temp 以下に DatabaseServer フォルダをコピーし、展開したものとします。

ファイル格納場所:

<インストールメディア>\DatabaseServer\GeneMN\DatabaseServer.zip

② データベース管理ユーザの作成と権限の付与

データベース管理ユーザを作成してください。Generalist/HR/PR のデータベースと同一スキ

ーマに Generalist/MN のデータベースをインストールする場合、本手順は不要です。
管理用クライアントのコンソールを使用し、実行してください。



Oracle Database 12c/Oracle Database 19c ローカルユーザの場合(推奨)

コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行し SYS ユーザで SQL*PLUS を起動してください。

```
C:¥>cd C:¥temp¥DatabaseServer  
C:¥temp¥DatabaseServer>sqlplus "sys/<パスワード>@GENEDB as sysdba"
```

SQL*PLUS の画面より、以下のコマンドでユーザの作成を行ってください。

```
SQL>@others¥createuser_local.sql
```

• スクリプトを実行すると、以下の 6 点が質問されます。

- PDB の名前
- ユーザ名
- パスワード
- デフォルト表領域
- INDEX 表領域
- テンポラリ表領域

※それぞれ「事前に設定しておくべき事項」にて、決定した値を入力してください。

③ データベースオブジェクトの作成

以下の手順にしたがって、データベースオブジェクトを作成してください。

データベースオブジェクトの作成を行います。コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行してください。

```
C:¥temp¥DatabaseServer>ins.bat MNSYS/MNSYS@MNDB
```

コマンドを実行したフォルダにログファイル(ins.log)が出力されます。テキストエディタ(メモ帳など)でログファイルを参照しエラーが発生していないことを確認してください。

以下のスタアドプロシージャのコンパイル・エラーについては、全て再コンパイルされるため問題ありません。

警告: パッケージ本体が作成されましたが、コンパイル・エラーがあります。



<注意>

- 以下のエラーは処理が継続されている場合、問題ありません。

日本語メッセージ

ORA-00942: 表またはビューが存在しません。

ORA-02289: 順序が存在しません。

ORA-01418: 指定した索引は存在しません。

英語メッセージ

ORA-00942: table or view does not exist

ORA-02289: sequence does not exist

ORA-01418: specified index does not exist

【7.3.1(4) データベースの設定(HRPR)】

① システムコードの設定

マイナンバーシステムと連携するためのシステムコードを設定します。

インストールメディアにある以下のフォルダを任意のフォルダへコピーしてください。ここでは c:\temp 以下に C.18 設定スクリプトフォルダをコピーしたものとします。

ファイル格納場所:

<インストールメディア>\Utility\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定

コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行し Generalist/HR/PR ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
C:\>cd C:\temp\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定
C:\temp\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定>sqlplus "GRSYS/
GRSYS@GENEDB"
```

SQL*PLUS の画面より、以下のスクリプトを実行します。

```
SQL>@ SET_MN_SYSTEM_PARAM.sql
```

スクリプトを実行すると、以下が質問されます。

MN システムパスワード

※「事前に設定しておくべき事項」にて、決定した値を入力してください。

【7.3.1(5) データベースの設定(MN)】

① 対象システムの設定

インストールメディアにある以下のフォルダを任意のフォルダへコピーしてください。ここでは c:\temp 以下に M.03 設定スクリプトフォルダをコピーしたものとします。

ファイル格納場所:

<インストールメディア>\Utility\M.03 設定スクリプト\初期データ\スクリプト

 Generalist/HR/PR と Generalist/MN の DB が同一スキーマにある場合

コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行し Generalist/HR/PR ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
C:\>cd C:\temp\M.03 設定スクリプト\初期データ\スクリプト
C:\temp\M.03 設定スクリプト\初期データ\スクリプト>sqlplus "GRSYS/GRSYS@GENEDB"
```

SQL*Plus の画面より、以下のスクリプトを実行します。

```
法人データ登録_同スキーマ用.sql
対象システム登録_Generalist 登録.sql
全システム全法人公開.sql
ファイル変換パラメータ権限追加.sql
```



<重要>

- 対象システム登録_Generalist 登録.sql 実行時にパスワードを聞かれます。【6.3.1(4) データベースの設定(HRPR)】で設定した MN システムパスワードと同じ値を入力してください。



Generalist/HR/PR と Generalist/MN の DB が別スキーマにある場合

コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行し Generalist/HR/PR ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
C:\>cd C:\temp\Utility\M.03 設定スクリプト\初期データ\スクリプト
C:\temp\Utility\M.03 設定スクリプト\初期データ\スクリプト>sqlplus "GRSYS/ GRSYS@G
ENEDB"
```

SQL*PLUS の画面より、以下のスクリプトを実行します。

```
SQL>@法人データ抽出.sql
```

コマンドを実行したフォルダに法人データ登録.sql が作成されていることを確認してください。



<注意>

- 法人データ抽出.sql は、Generalist/HR/PR ユーザで DB に接続して実行してください。

SQL*Plus を閉じ、Generalist/MN ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
SQL>exit;
C:\temp\Utility\M.03 設定スクリプト\初期データ\スクリプト>sqlplus "MNSYS/ MNSYS@
MNDB"
```

SQL*Plus の画面より、以下のスクリプトを実行します。

```
法人データ登録.sql
対象システム登録_Generalist 登録.sql
全システム全法人公開.sql
ファイル変換パラメータ権限追加.sql
```



<重要>

- 対象システム登録_Generalist_登録.sql 実行時にパスワードを聞かれます。【6.3.1(4) データベースの設定(HRPR)】で設定した MN システムパスワードと同じ値を入力してください。

② システムパラメータの設定

マイナンバーシステムのシステムパラメータの設定を行います。

インストールメディアにある以下のファイルを任意のフォルダへコピーしてください。

ファイル格納場所:<インストールメディア>\Utility\M.03 設定スクリプト\初期データ\システムパラメータ設定.xlsx

システムパラメータ設定.xlsx ファイルを開き、各パラメータコードに対し設定値(1列)を入力します。各システムパラメータの詳細はマニュアル「16.2.3 システムパラメータ一覧」を参照してください。

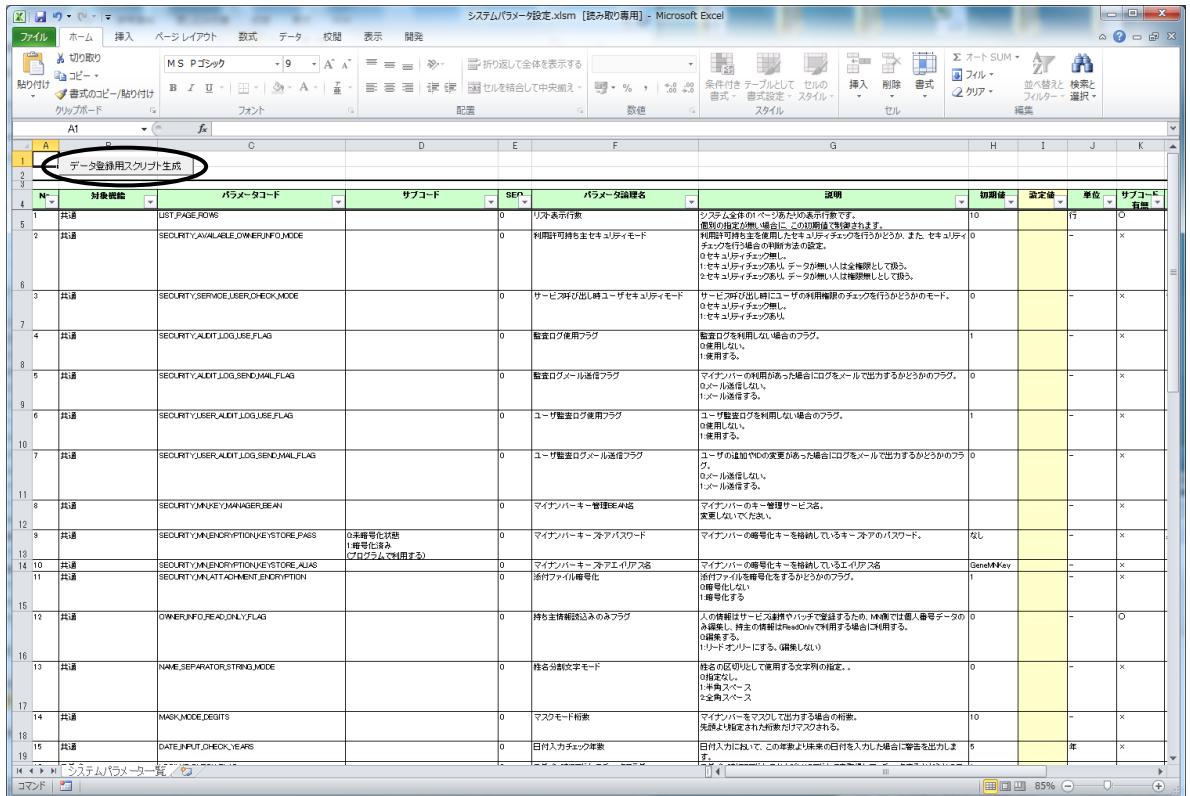


<重要>

- SECURITY_MN_ENCRYPTION_KEYSTORE_PASS は必ず入力してください。
- 以下のパラメータは【7.3.1(2) keystore の作成】で設定したキーストアのパスワード、キーストアに格納するキーの名称と同じ値を入力してください。

SECURITY_MN_ENCRYPTION_KEYSTORE_PASS
SECURITY_MN_ENCRYPTION_KEYSTORE_ALIAS

入力を終わったら、データ登録用スクリプト生成ボタンを押下してください。システムパラメータ.sql
1が作成されていることを確認してください。



Generalist/MN ユーザで SQL*Plus を起動し、SQL*Plus の画面より、システムパラメータ.sql を実行します。

```
C:\>cd C:\temp\Utility\M.03 設定スクリプト\初期データ
C:\temp\Utility\M.03 設定スクリプト\初期データ>sqlplus "MNSYS/ MNSYS@MNDB"
SQL>>システムパラメータ.sql
```

【7.3.1(6) 設定ファイルのコピー】

マイナンバーシステムの設定ファイルを Generalist/HR/PR のアプリケーションサーバ上にコピーします。以下の手順に従い、設定ファイルを適用してください。

① ファイルの解凍

〈インストールメディア〉¥ApplicationServer¥GeneMN¥同一システムモジュールフォルダに存在する「WEB-INF.zip」ファイルを解凍します。

ファイル格納場所:

〈インストールメディア〉¥ApplicationServer¥GeneMN¥同一システムモジュール¥WEB-INF.zip

② ファイルのコピー

〈解凍フォルダ〉¥WEB-INF 以下のフォルダおよびファイル全てを以下へコピーします。

ファイル格納場所:

〈解凍フォルダ〉¥WEB-INF

コピー先:

〈Generalist インストールフォルダ〉¥WEB-INF



＜注意＞

- コピー対象は WEB-INF フォルダ以下のフォルダおよびファイルです。
- ファイルはすべて上書きしてください。

【7.3.1(7) 設定ファイルの更新】

マイナンバーシステムを利用するための設定ファイルを編集します。

① mynumber_hrpr.properties の設定

〈Generalist インストールフォルダ〉¥WEB-INF¥classes¥properties¥mynumber_hrpr.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
#####  
# MyNumber_hrpr Config  
#####  
  
#0:Do not use the MyNumberSystem/1:Use the MyNumberSystem/2:Use the MyNumberSystem only for electronic application  
mynumber.display.flg=0
```

6 行目 :mynumber.display.flg =1

※同一システムの場合は 1 を設定してください。



<重要>

- ・ 本設定は必ず行ってください。

② mynumber-api.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%mynumber-api.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
#####  
# setting of mynumber-api.jar  
#####  
  
# one system flg (1:one system 0:two system) #  
web.server.sameflg=1  
  
# https or http flg (1:https 0:http) #  
web.https.flg=0  
  
# MN system URL #  
mynumber.web.url=http://geneias:80/GeneralistMN/  
  
# MN system host #  
mynumber.web.host=geneias  
  
# MN system port #  
mynumber.web.port=80  
  
# SSLProtocol #  
ssl.protocol=TLSv1  
  
# directory of keystore file (case of https) #  
client.key.store.path=C:/Generalist/keystore/sslclientkeys.keystore  
  
# password of keystore (case of https) #  
client.key.store.password=123456  
  
# directory of truststore file (case of https) #  
client.trust.key.store.path=C:/ Generalist/keystore/sslclienttrust.keystore  
  
# password of truststore (case of https) #  
client.trust.key.store.password=123456
```

```
# httpclient connection timeout #
connection.timeout=60000

# httpclient socket timeout #
socket.timeout=60000

# read file size #
buffer.size=4096
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

6 行目: web.server.sameflg=1

※同一システムの場合は 1 を設定してください。

36 行目: connection.timeout=<httpclient のタイムアウト時間 (ms)>

39 行目: socket.timeout=<socket のタイムアウト時間 (ms)>

42 行目: buffer.size=<ファイルストリームを読み取るサイズ(Byte)>



<重要>

- ・ web.server.sameflg の設定は必ず行ってください。

③ mnsystem.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%mnsystem.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
## temp directory of request parse, file download, file conversion##
temp_file_dir=C:/GeneralistMN/temp/

## memory size of request parse ##
memory_size=10240

## max size of all upload file ##
upload_max_size=15000000

## max size of one upload file ##
file_max_size=5000000

## read file size ##
buffer_size=5120

## keystore path ##
keystore_path=C:/GeneralistMN/keystore/GeneMNKeyStore.keystore
```

```

## file Data delimiter 1:Tab 0:comma##
file_delimiter=0

## file Data doubleQuotes 1:use 0:not use##
file_doubleQuotes=0

## the base url of help page ##
help_baseUrl=http://GeneMN/help/manualfiles/

## the extension of help file ##
help_extension=.html

## the file name of help index ##
help_filename_index=index

## access_base_url ##
access_base_url=http://geneias/GeneMN/

## keystore alias ##
gene.key.store.alias=tokenkeypair

## store type key ##
gene.key.store.storetype=JKS

## store password ##
gene.key.store.storepass=123456

## keystore file path ##
gene.key.store.filepath=tokenkeystore.jks

```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

2 行目:temp_file_dir=<リクエスト解析用一時フォルダ>

※フォルダが存在している必要があります。

5 行目:memory_size=<リクエスト解析用メモリ最大サイズ(Byte)>

8 行目:upload_max_size=<全てのアップロードファイルの最大サイズ(Byte)>

11 行目:file_max_size=<一つのアップロードファイルの最大サイズ(Byte)>

14 行目:buffer_size=<ファイルストリームを読み取るサイズ(Byte)>

17 行目:keystore_path=<暗号化、復号化用の keystore ファイルのパス>

【6.3.1(2) keystore の作成】で作成した keystore を指定してください。

20 行目:file_delimiter=<ファイル出力内容>

1:区切りコード、1 以外:コンマ

23 行目:file_doubleQuotes=<ファイル出力内容>

1: ダブルクォーテーションを利用する 1 以外: ダブルクォーテーションを利用しない
ヘルプページを利用するために以下の設定が必要です。

26 行目: help_baseUrl=<ヘルプページの URL>

29 行目: help_extension=<ヘルプファイルの拡張子>



<重要>

- ・ keystore_path の設定は必ず行ってください。
- ・ keystore_path のパスには「¥」は使用しないでください。

④ beans-datasources.xml の設定

データベース接続の設定を行います。

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥beans-datasources.xml ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
<bean id="mnDataSource"
  class="org.springframework.jdbc.datasource.DriverManagerDataSource">
  <property name="driverClassName">
    <value>oracle.jdbc.driver.OracleDriver</value>
  </property>
  <property name="url">
    <value>jdbc:oracle:thin:@dbgene:1521/geneSID</value>
  </property>
  <property name="username">
    <value>MNSYS</value>
  </property>
  <property name="password">
    <value>MNSYS</value>
  </property>
</bean>
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

19 行目: jdbc:oracle:thin:@<データベースサーバのホスト名>:<ポート番号>/<SID>

22 行目: <GeneralistMN データベースユーザ>

25 行目: <GeneralistMN データベースユーザパスワード>



<重要>

- ・ 本設定は必ず行ってください。

⑤ logback.xml の設定

ログは、Generalist/HR/PR と同じログファイルに出力されます。

出力先を変更したい場合は、「3.4.9(1) ログ設定ファイルの編集」を参照してください。

⑥ fileconversion.service.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥jp¥co¥toshiba_sol¥generalist¥mn¥bl ¥fileconversion¥fileconversion.service.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
batchinsert_max_size=1000
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

68 行目:batchinsert_max_size =<DB に一括登録する件数>



<注意>

- 以下のパラメータはシステム固定値です。変更しないでください。

pdf_font_dir

font_1_name~font_10_name

font_1_value~font_10_value

font_default_value

⑦ mndatabatchimp.service.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥jp¥co¥toshiba_sol¥generalist¥mn¥bl ¥mndatabatchimp¥mndatabatchimp.service.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
batchinsert_max_size=1000
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

6 行目:value=<DB に一括登録する件数>

⑧ mnmanageservices.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥jp¥co¥toshiba_sol¥generalist¥mn¥bl ¥mnmanage¥mnmanageservices.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
# history ins date
```

```
historyInfo_ins_date=20151001
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

31 行目:value=<MN 過去履歴情報テーブルのカラム「取得年月日」のデフォルト値>

【7.3.1(8) サービスの起動】

以下の操作を行い、サービスの起動を行ってください。

Oracle WebLogic Server の場合

- ① Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動
- ② Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ③ Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ④ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『デプロイメント』をクリックし、デプロイメントのサマリー画面にデプロイメントの一覧が表示されます。一覧から『Generalist』のチェックボックスをクリックし、『更新』ボタンをクリックします。
- ⑤ アプリケーションの更新アシスタント画面で『終了』をクリックします。なお、更新に時間がかかる場合があります。実行結果がデプロイメントのサマリー画面で『選択したデプロイメントが更新されました。』が表示されたら更新とキャッシュの削除が完了です。(※この操作でキャッシュが自動的に削除されます)
- ⑥ ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ⑦ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『Generalist』のチェックボックスをクリックし、『起動』ボタンをクリックします。
- ⑧ 状態に『RUNNING』が表示されればサーバーの起動は完了です。
- ⑨ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : WebCube Management Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。『論理サーバーの起動/停止』をクリックします。
- ④ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑤ 『一括起動』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑥ 運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ⑦ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑧ タブの『ディレクトリインポート』をクリックします。アプリケーションディレクトリにデプロイするモジュールのディレクトリパスを入力し、『実行』ボタンをクリックします。実行結果が『成功』になった

ら、タブの『開始/停止』をクリックします。

- ⑨ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。開始するアプリケーションの『開始』をクリックします。
- ⑩ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、開始までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたら『戻る』をクリックしてください。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

7.3.2 マイナンバーシステムの設定(サービス連携)

以下の手順にそって、マイナンバーシステムの設定を行います。

【7.3.2(1) Generalist の終了】

起動している Generalist をすべて終了させてください。またアプリケーションサーバのサービスを停止してください。既に停止している場合、本手順は不要です。

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ④ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『停止』ボタンをクリックします。
- ⑤ 状態に『SHUTDOWN』が表示されればサーバーの停止は完了です。
- ⑥ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : WebCube Management Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ④ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑤ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。停止するアプリケーションの『停止』をクリックします。
- ⑥ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、停止までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたらタブの『削除』をクリックしてください。
- ⑦ 削除画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。削除するアプリケーションの『削除』をクリックします。
- ⑧ 運用管理ポータル画面から『論理サーバの起動/停止』をクリックします。

- ⑨ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑩ 『一括停止』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

【7.3.2(2) データベースの設定(HRPR)】

① システムコードの設定

マイナンバーシステムと連携するためのシステムコードを設定します。
インストールメディアにある以下のフォルダを任意のフォルダへコピーしてください。ここでは c:\%temp 以下に C.18 設定スクリプトフォルダをコピーしたものとします。

ファイル格納場所:

<インストールメディア>%Utility\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定

コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行し Generalist/HR/PR ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
C:\>cd C:\%temp\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定
C:\%temp\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定>sqlplus "GRSYS/ GRSYS@GEN
EDB"
```

SQL*PLUS の画面より、以下のスクリプトを実行します。

```
SQL>@ SET_MN_SYSTEM_PARAM.sql
```

スクリプトを実行すると、以下が質問されます。

MN システムパスワード

※「事前に設定しておくべき事項」にて、決定した値を入力してください。

【7.3.2(3) MN システムのインストール】

「MN インストール手順書」を参照し、マイナンバーシステムのインストールを行ってください。

【7.3.2(4) 設定ファイルの更新】

マイナンバーシステム利用するための設定ファイルを編集します。

① mynumber_hrpr.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF\classes\properties\mynumber_hrpr.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
#####
# MyNumber_hrpr Config
```

```
#####
```

```
#0:Do not use the MyNumberSystem/1:Use the MyNumberSystem/2:Use the MyNumberSystem only for electronic application  
mynumber.display.flg=0
```

6 行目 :mynumber.display.flg =1

※サービス連携の場合は 1 を設定してください。



<重要>

- ・ 本設定は必ず行ってください。

② mynumber-api.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%mynumber-api.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
#####  
# setting of mynumber-api.jar  
#####  
  
# one system flg (1:one system 0:two system) #  
web.server.sameflg=0  
  
# https or http flg (1:https 0:http) #  
web.https.flg=0  
  
# MN system URL #  
mynumber.web.url=http://geneias:80/GeneralistMN/  
  
# MN system host #  
mynumber.web.host=geneias  
  
# MN system port #  
mynumber.web.port=80  
  
# SSLProtocol #  
ssl.protocol=TLSv1  
  
# directory of keystore file (case of https) #  
client.key.store.path=C:/Generalist/keystore/sslclientkeys.keystore  
  
# password of keystore (case of https) #  
client.key.store.password=123456  
  
# directory of truststore file (case of https) #  
client.trust.key.store.path=C:/Generalist/keystore/sslclienttrust.keystore  
  
# password of truststore (case of https) #  
client.trust.key.store.password=123456  
  
# httpclient connection timeout #  
connection.timeout=60000
```

```
# httpclient socket timeout #
socket.timeout=60000

# read file size #
buffer.size=4096
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

21、24、27、30、33 行目の設定は https の場合に必要な設定です。

6 行目: web.server.sameflg=0

※サービス連携の場合は 0 を設定してください。

9 行目: web.https.flg=<HTTP/HTTPS 区分>

0:HTTP、1:HTTPS

12 行目: mynumber.web.url=<MN システムの URL>

15 行目: mynumber.web.host=<MN システムの HOST>

18 行目: mynumber.web.port=<MN システムのポート番号>

21 行目: ssl.protocol=TLSv1=<SSLProtocol>

24 行目: client.key.store.path=<クライアント側の keystore ファイルのパス>

27 行目: client.key.store.password=<クライアント側の keystore ファイルのパスワード>

30 行目: client.trust.key.store.path=<信頼される keystore の path>

33 行目: client.trust.key.store.password=<信頼される keystore のパスワード>

36 行目: connection.timeout=<httpClient のタイムアウト時間 (ms)>

39 行目: socket.timeout=<socket のタイムアウト時間 (ms)>

42 行目: buffer.size=<ファイルストリームを読み取るサイズ(Byte)>



<重要>

- 以下の設定項目の設定は必ず行ってください。
 - web.server.sameflg
 - mynumber.web.url
 - mynumber.web.host
 - mynumber.web.port
- mynumber.web.url、mynumber.web.host、mynumber.web.port は【7.3.2(3) MN システムのインストール】でインストールしたマイナンバーシステムの情報を設定します。
- mynumber.web.url で設定する MN システムの URL は以下のように設定してください。

```
http://<アプリケーションサーバの URL>:<ポート番号>/<アプリケーション名>
```

※<アプリケーションサーバの URL>はアプリケーションサーバに接続するための URL を入力します。

【7.3.2(5) サービスの起動】

以下の操作を行い、サービスの起動を行ってください。

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『デプロイメント』をクリックし、デプロイメントのサマリー画面にデプロイメントの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『更新』ボタンをクリックします。
- ④ アプリケーションの更新アシスタント画面で『終了』をクリックします。なお、更新に時間がかかる場合があります。実行結果がデプロイメントのサマリー画面で『選択したデプロイメントが更新されました。』が表示されたら更新とキャッシュの削除が完了です。（※この操作でキャッシュが自動的に削除されます）
- ⑤ ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ⑥ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『起動』ボタンをクリックします。
- ⑦ 状態に『RUNNING』が表示されればサーバーの起動は完了です。
- ⑧ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : WebCube Management Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。『論理サーバーの起動/停止』をクリックします。
- ④ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑤ 『一括起動』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑥ 運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ⑦ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑧ タブの『ディレクトリインポート』をクリックします。アプリケーションディレクトリにデプロイするモジュールのディレクトリパスを入力し、『実行』ボタンをクリックします。実行結果が『成功』になった

ら、タブの『開始/停止』をクリックします。

- ⑨ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。開始するアプリケーションの『開始』をクリックします。
- ⑩ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、開始までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたら『戻る』をクリックしてください。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

7.3.3 マイナンバーシステムの設定(別システム)

以下の手順にそって、マイナンバーシステムの設定を行ってください。

【7.3.3 (1) Generalist の終了】

起動している Generalist をすべて終了させてください。またアプリケーションサーバのサービスを停止してください。既に停止している場合、本手順は不要です。

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ④ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『停止』ボタンをクリックします。
- ⑤ 状態に『SHUTDOWN』が表示されればサーバーの停止は完了です。
- ⑥ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : WebCube Management Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ④ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑤ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。停止するアプリケーションの『停止』をクリックします。
- ⑥ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、停止までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたらタブの『削除』をクリックしてください。
- ⑦ 削除画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。削除するアプリケーションの『削除』をクリックします。
- ⑧ 運用管理ポータル画面から『論理サーバの起動/停止』をクリックします。

- ⑨ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑩ 『一括停止』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

【7.3.3 (2) 設定ファイルの更新】

マイナンバーシステム利用するための設定ファイルを編集します。

- ① mynumber_hrpr.properties の設定
<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%mynumber_hrpr.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
#####
# MyNumber_hrpr Config
#####

#0:Do not use the MyNumberSystem/1:Use the MyNumberSystem/2:Use the MyNumberSystem only for electronic application
mynumber.display.flg=0
```

6 行目 : mynumber.display.flg =0

※別システムの場合は 0 を設定してください。



<重要>

- ・ 本設定は必ず行ってください。

【7.3.3 (3) MN システムのインストール】

「MN インストール手順書」を参照し、MN システムのインストールを行ってください。

【7.3.3 (4) サービスの起動】

以下の操作を行い、サービスの起動を行ってください。

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
<ユーザ名> : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
<パスワード> : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『デプロイメント』をクリックし、デプロイメントのサマリー画面にデプロイメントの一覧が表示されます。一覧から『Generalist』のチェックボックス

をクリックし、『更新』ボタンをクリックします。

- ④ アプリケーションの更新アシスタント画面で『終了』をクリックします。なお、更新に時間がかかる場合があります。実行結果がデプロイメントのサマリー画面で『選択したデプロイメントが更新されました。』が表示されたら更新とキャッシュの削除が完了です。（※この操作でキャッシュが自動的に削除されます）
- ⑤ ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ⑥ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『起動』ボタンをクリックします。
- ⑦ 状態に『RUNNING』が表示されればサーバーの起動は完了です。
- ⑧ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : WebCube Management Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。『論理サーバーの起動/停止』をクリックします。
- ④ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑤ 『一括起動』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑥ 運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ⑦ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑧ タブの『ディレクトリインポート』をクリックします。アプリケーションディレクトリにデプロイするモジュールのディレクトリパスを入力し、『実行』ボタンをクリックします。実行結果が『成功』になったら、タブの『開始/停止』をクリックします。
- ⑨ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。開始するアプリケーションの『開始』をクリックします。
- ⑩ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、開始までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたら『戻る』をクリックしてください。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

7.3.4 マイナンバーシステムの設定(別システム 電子申請のみサービス連携)

以下の手順にそって、マイナンバーシステムの設定を行います。

【7.3.4 (1) Generalist の終了】

起動している Generalist をすべて終了させてください。またアプリケーションサーバのサービスを停止してください。既に停止している場合、本手順は不要です。

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
- ③ <ユーザ名> : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
- ④ <パスワード> : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ⑤ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ⑥ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『停止』ボタンをクリックします。
- ⑦ 状態に『SHUTDOWN』が表示されればサーバーの停止は完了です。
- ⑧ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
<ユーザ名> : WebCube Management Server の管理者のユーザ名
<パスワード> : WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ④ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑤ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。停止するアプリケーションの『停止』をクリックします。
- ⑥ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、停止までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたらタブの『削除』をクリックしてください。
- ⑦ 削除画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。削除するアプリケーションの『削除』をクリックします。
- ⑧ 運用管理ポータル画面から『論理サーバの起動/停止』をクリックします。

- ⑨ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑩ 『一括停止』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

【7.3.4 (2) データベースの設定(HRPR)】

① システムコードの設定

マイナンバーシステムと連携するためのシステムコードを設定します。
インストールメディアにある以下のフォルダを任意のフォルダへコピーしてください。ここでは c:\%temp 以下に C.18 設定スクリプトフォルダをコピーしたものとします。

ファイル格納場所:

<インストールメディア>%Utility\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定

コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行し Generalist/HR/PR ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
C:\>cd C:\%temp\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定
C:\%temp\C.18 設定スクリプト\MN 接続パラメータ設定>sqlplus "GRSYS/ GRSYS@GEN
EDB"
```

SQL*PLUS の画面より、以下のスクリプトを実行します。

```
SQL>@ SET_MN_SYSTEM_PARAM.sql
```

スクリプトを実行すると、以下が質問されます。

MN システムパスワード

※「事前に設定しておくべき事項」にて、決定した値を入力してください。

【7.3.4 (3) MN システムのインストール】

「MN インストール手順書」を参照し、マイナンバーシステムのインストールを行ってください。

【7.3.4 (4) 設定ファイルの更新】

マイナンバーシステム利用するための設定ファイルを編集します。

① mynumber_hrpr.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF\classes\properties\mynumber_hrpr.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
#####
# MyNumber_hrpr Config
```

```
#####
```

```
#0:Do not use the MyNumberSystem/1:Use the MyNumberSystem/2:Use the MyNumberSystem only for electronic application
```

```
mynumber.display.flg=0
```

6 行目 :mynumber.display.flg =2

※電子申請のみサービス連携の場合は 2 を設定してください。



<重要>

- ・ 本設定は必ず行ってください。

③ mynumber-api.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%mynumber-api.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

```
#####  
# setting of mynumber-api.jar  
#####  
  
# one system flg (1:one system 0:two system) #  
web.server.sameflg=0  
  
# https or http flg (1:https 0:http) #  
web.https.flg=0  
  
# MN system URL #  
mynumber.web.url=http://geneias:80/GeneralistMN/  
  
# MN system host #  
mynumber.web.host=geneias  
  
# MN system port #  
mynumber.web.port=80  
  
# SSLProtocol #  
ssl.protocol=TLSv1  
  
# directory of keystore file (case of https) #  
client.key.store.path=C:/Generalist/keystore/sslclientkeys.keystore  
  
# password of keystore (case of https) #  
client.key.store.password=123456  
  
# directory of truststore file (case of https) #  
client.trust.key.store.path=C:/Generalist/keystore/sslclienttrust.keystore  
  
# password of truststore (case of https) #  
client.trust.key.store.password=123456  
  
# httpclient connection timeout #  
connection.timeout=60000
```

```
# httpClient socket timeout #
socket.timeout=60000

# read file size #
buffer.size=4096
```

設定が必要な各行に設定する内容は以下です。

21、24、27、30、33 行目の設定は https の場合に必要な設定です。

6 行目: web.server.sameflg=0

※サービス連携の場合は 0 を設定してください。

9 行目: web.https.flg=<HTTP/HTTPS 区分>

0:HTTP、1:HTTPS

12 行目: mynumber.web.url=<MN システムの URL>

15 行目: mynumber.web.host=<MN システムの HOST>

18 行目: mynumber.web.port=<MN システムのポート番号>

21 行目: ssl.protocol=TLSv1=<SSLProtocol>

24 行目: client.key.store.path=<クライアント側の keystore ファイルのパス>

27 行目: client.key.store.password=<クライアント側の keystore ファイルのパスワード>

30 行目: client.trust.key.store.path=<信頼される keystore の path>

33 行目: client.trust.key.store.password=<信頼される keystore のパスワード>

36 行目: connection.timeout=<httpClient のタイムアウト時間 (ms)>

39 行目: socket.timeout=<socket のタイムアウト時間 (ms)>

42 行目: buffer.size=<ファイルストリームを読み取るサイズ(Byte)>



<重要>

- 以下の設定項目の設定は必ず行ってください。

web.server.sameflg

mynumber.web.url

mynumber.web.host

mynumber.web.port

- mynumber.web.url、mynumber.web.host、mynumber.web.port は【7.3.4 (3) MN システムのインストール】
- でインストールしたマイナンバーシステムの情報を設定します。
- mynumber.web.url で設定する MN システムの URL は以下のように設定してください。

```
http://<アプリケーションサーバの URL>:<ポート番号>/<アプリケーション名>
```

※<アプリケーションサーバの URL>はアプリケーションサーバに接続するための URL を入力します。

【7.3.4 (5) サービスの起動】

以下の操作を行い、サービスの起動を行ってください。

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『デプロイメント』をクリックし、デプロイメントのサマリー画面にデプロイメントの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『更新』ボタンをクリックします。
- ④ アプリケーションの更新アシスタント画面で『終了』をクリックします。なお、更新に時間がかかる場合があります。実行結果がデプロイメントのサマリー画面で『選択したデプロイメントが更新されました。』が表示されたら更新とキャッシュの削除が完了です。(※この操作でキャッシュが自動的に削除されます)
- ⑤ ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ⑥ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『起動』ボタンをクリックします。
- ⑦ 状態に『RUNNING』が表示されればサーバーの起動は完了です。
- ⑧ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
〈ユーザ名〉 : WebCube Management Server の管理者のユーザ名
〈パスワード〉 : WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。『論理サーバーの起動/停止』をクリックします。
- ④ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑤ 『一括起動』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑥ 運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ⑦ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑧ タブの『ディレクトリインポート』をクリックします。アプリケーションディレクトリにデプロイするモジュールのディレクトリパスを入力し、『実行』ボタンをクリックします。実行結果が『成功』になった

ら、タブの『開始/停止』をクリックします。

- ⑨ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。開始するアプリケーションの『開始』をクリックします。
- ⑩ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、開始までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたら『戻る』をクリックしてください。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

付録

付録 A ハードディスクの必要容量

本システムを導入・稼動するに当たりハードディスクには以下の空き容量が必要です。一応の目安として参考にしてください。

【データベースサーバ】

データベース容量——詳細については、領域確保時の「算出ツール.xls」で算出してください。

※「算出ツール.xls」ファイルは、<インストールメディア>¥Utility の下にあります。

人事システム		給与システム	
5,000 人	約 0.6GB	5,000 人	約 1.0GB
10,000 人	約 1.3GB	10,000 人	約 2.0GB
20,000 人	約 2.8GB	20,000 人	約 4.0GB
算出条件		算出条件	
履歴	10 件 / 1 人	基本情報系	5 年分 / 1 人
家族構成	3 人 / 1 人	履歴	2%異動 / 1 年間
給与明細	30 項目×3 年 / 1 人		

【アプリケーションサーバ】

ミドルウェア製品で必要な容量

Oracle WebLogic Server	約 3.6GB
------------------------	---------

プログラム容量

Generalist 人財管理ソリューション	約 250MB
------------------------	---------

【クライアント】

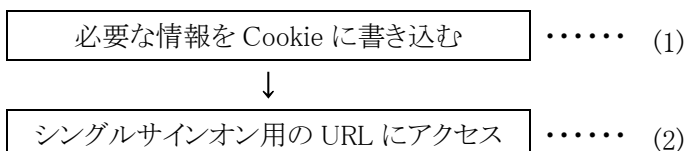
Microsoft Office	約 200MB
Adobe Acrobat Reader	約 150MB

付録 B シングルサインオンの設定について

ここでは Generalist でシングルサインオンをご利用いただくために必要なアプリケーションサーバの設定手順を説明します。

● Generalist でシングルサインオンをご利用になる場合の設定手順の流れ

シングルサインオンを利用するには、必要な情報を Cookie に書き込み、シングルサインオン用の URL にアクセスする必要があります。

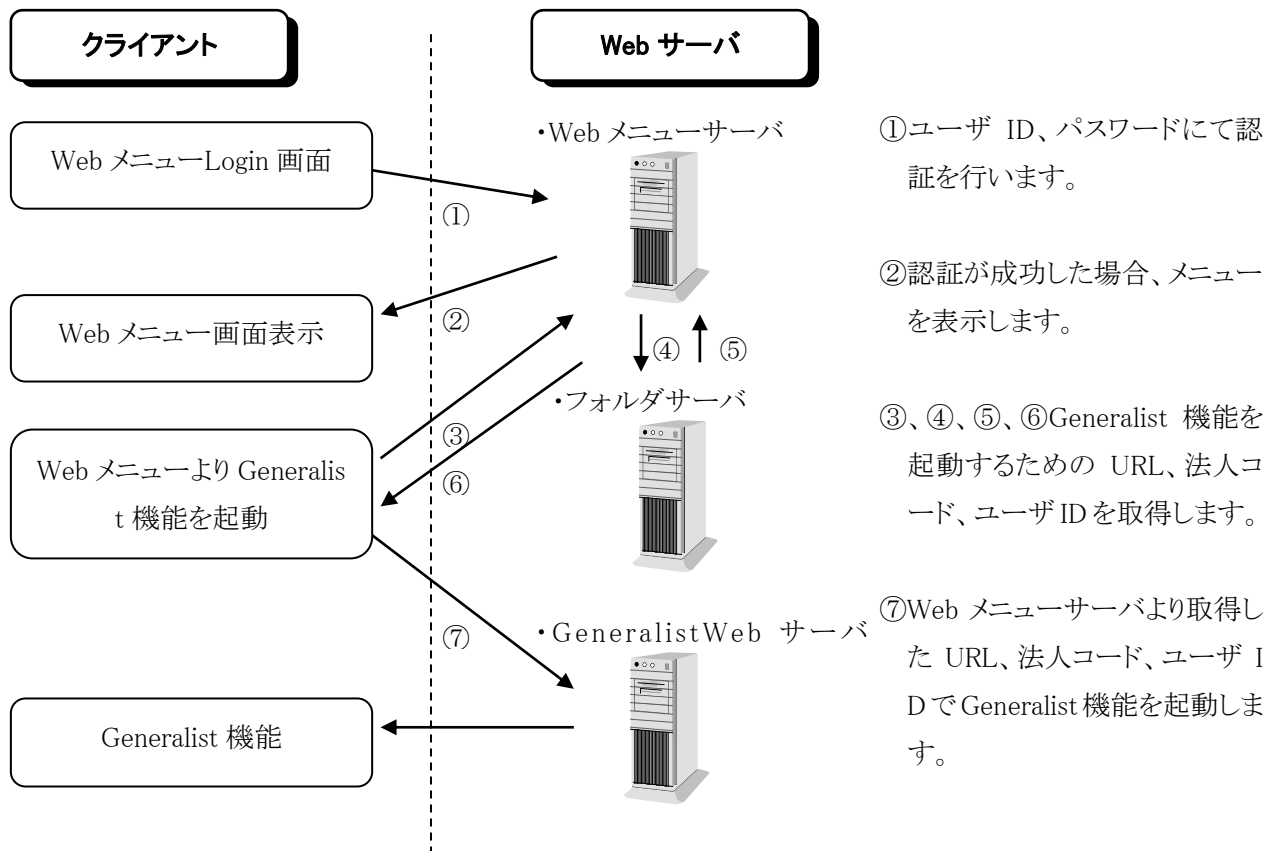


<重要>

1. シングルサインオンの設定の前に「第3章 アプリケーションサーバのセットアップ (Oracle WebLogic Server)」が終了している必要があります。
2. Cookie の有効期限は期限無しの状態にて設定を行って下さい。
Cookie の書き込みの際、期限付きにて書き込みを行うと、Generalist のユーザ名、パスワード等、セキュリティに関する情報がクライアントマシン上のファイルに書き込まれてしまいます。
3. Cookie の書込方法に関しては書き込みに使用する言語のリファレンスを参照してください。

● シングルサインオンの概要

Genralist のシングルサインオンでは Cookie を使用する方式でシングルサインオンを実現しています。以下の図はシングルサインオンを利用して Genralist を起動するまでの流れを表しています。



※ 次頁以降の設定は上記図⑦の処理にてユーザ情報を Cookie を使用して引き渡す為の設定となります。

(1) 必要な情報を Cookie に書き込む

お客様のシステムにあわせて設定してください。

以下は JavaScript を利用した場合の Cookie へ書き込み方法です。

```

loginkbn = "0"
uid = "ADMIN@@@"
pass = "ADMIN@@@"
hcode="@@@"
roleid = " ADMIN@@@"
funcid = ""

cookiewrite("loginkbn", loginkbn);
cookiewrite("uid",uid);
cookiewrite("pass",pass);
cookiewrite("hcode", hcode);
cookiewrite("roleid", roleid);
  
```

```

cookiewrite("funcid", funcid);

function cookiewrite(key, val) {
    work = key + "=" + escape(val) + ";";
    work += "path=/Generalist/;";
    document.cookie = work;
}

```

以下は Cookie のキーに対するパラメータの説明です。

キー項目	設定項目
loginkbn	ログイン区分(0:業務ログイン、1:個人利用者)を指定します。
uid	ログインユーザを設定します。 ※Generalist のログイン ID または、個人利用者 ID を設定してください。
pass	ログインユーザに対するパスワードを設定します。 ※Generalist のログイン ID または、個人利用者 ID に対するパスワードを設定してください。
hcode	ログインする法人コードを設定します。
roleid	ログインするユーザのロールIDを設定します。 (個人利用者でのログイン時には設定不要です。)
funcid	起動するモジュールを設定します。 ※何も設定しない場合はホームメニューが表示されます。必要な場合のみ設定してください。



<ポイント>

- シングルサインオン機能を利用する場合、ログイン画面からの承認処理時に行われるパスワードの入力ミス回数による利用者 ID のロックアウト処理は行われません。必要に応じて、外部フォルダサーバ等にロックアウト処理を行うよう、追加の設定等を行ってください。

(2) シングルサインオン用の URL にアクセス

お客様のシステムにあわせて設定してください。

以下は JavaScript を利用した場合のアクセス方法です。

```

function showpage(){
    var attr = "toolbar=no,";
    attr = attr + "location=no.directories=no,";
    attr = attr + "menubar=no,";
    attr = attr + "scrollbars=no,";
    attr = attr + "resizable=yes,";
    attr = attr + "top=1,left=1,";
    attr = attr + "status=yes,";
}

```

```
attr = attr + "width=1000,height=700";

var strSvName = "components/app/login/gene-sso-login.html";
var childWin = window.open(strSvName, "_blank", attr);
(window.open("", "_top").opener=top).close();
}
```

(3) デフォルトロール ID 自動設定機能の利用設定

以下の設定をおこなうことで、Cookie にロール ID が設定されていない場合に、デフォルトロール ID を自動で Cookie に設定することが可能です。



- 上記機能を利用しない場合には、本設定は不要です。

以下のファイルをテキストエディタで開き、以下の部分を編集します。

- Oracle WebLogic Server をご利用の場合には以下のファイルです。
<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥web.xml

各フォルダに関しては、3.4.3 モジュールのコピーと展開 (Oracle WebLogic Server) を参照してください。

128、137 行目のコメントアウトを削除してください。

```
128 <!--
129 <filter>
130     <filter-name>GeneSSODefaultRoleFilter</filter-name>
131     <filter-class>jp.co.toshiba_sol.generalist.common.filter.GeneSSODefaultRoleFilter
132     </filter-class>
133 </filter>
134 <filter-mapping>
135     <filter-name>GeneSSODefaultRoleFilter</filter-name>
136     <url-pattern>/faces/jsp/menu/login/singleSignOn.jsp</url-pattern>
137 </filter-mapping>
138 -->
```



- 上記以外のパラメータはシステムで固定のパラメータです。変更しないでください。
- ファイル変更時には文字コードは『UTF-8』で保存してください。コメント等に日本語を入力しない場合には文字コードの指定は不要です。

付録 C 帳票 Web 配信の設定について

ここでは Generalist システムで、帳票 Web 配信 (給与・賞与明細書、源泉徴収票、年末調整申告書、ユーザ帳票) をご利用いただくための設定手順を説明します。

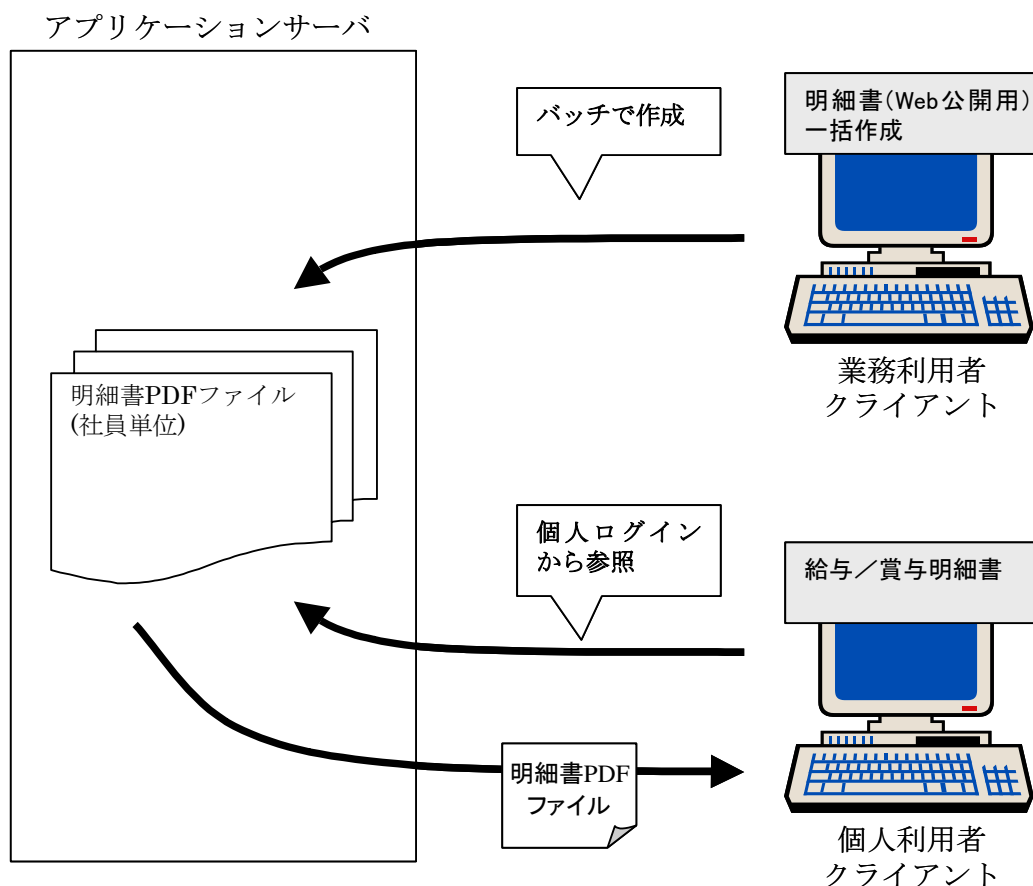
● 帳票 Web 配信の概要

帳票 Web 配信は、あらかじめバッチ処理でアプリケーションサーバ上に PDF ファイルを作成しておき、Web 経由でログインした個人利用者が各自の PDF ファイルを取得する機能です。

PDF ファイルは、アプリケーションサーバ上に作成またはデータベースのテーブルに保存することができます。ファイル保存先は、システムパラメータ (共通システム設定) のシステムパラメータコード「SYS_AP_FILE_SAVE_MODE」で設定します。設定の詳細は、[システムパラメータ一覧](#)でご確認ください。

以下の図に、帳票 Web 配信機能の概要を示します。

《記載例はアプリケーションサーバ上に作成した場合》



<ポイント>

- 給与・賞与明細書メール送信 (機能) および源泉徴収票メール送信 (機能) にて、支給明細書 (Web 公開用) 一括作成 (機能) で作成した明細書 PDF ファイルまたは源泉徴収票 (Web 公開用) 一括作成 (機能) で作成した源泉徴収票 PDF ファイルをメールに添付して各社員へ送信することができます。設定方法は「付録 C 帳票 Web 配信の設定について」の「**メールサーバの設定 (stavaware-mail-config.xml の設定)**」を参照してください。

●帳票 Web 配信の設定手順

帳票の一括作成を実行するために、アプリケーションサーバ上で以下に示す手順で設定を行う必要があります。

設定手順概要

帳票 Web 配信をご利用いただくための設定手順の概要を以下に示します。

事前に決定しておく事項

明細書 Web 配信の設定を行う前に決定しておく必要のある項目を以下に示します。

項目	説明
公開用帳票保存フォルダ	PDF ファイルを保存するフォルダです。アプリケーションサーバ上のフォルダを指定します。 ※データベースのテーブルに保存する場合も設定が必要です。設定しても該当フォルダにファイルは作成されません。
PDF テンプレートフォルダ	PDF ファイル作成に必要な PDF テンプレートファイルを保存するフォルダです。 <Generalist インストールフォルダ>%tools%pdf_template フォルダを指定します。

webmeisai.properties の設定

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%webmeisai.properties をテキストエディタで開き、以下のパラメータを設定してください。

※「webmeisai.properties」が格納されているフォルダはインストール時の設定により異なります。

パラメータ名	内容
pdf_dir	PDF を出力するフォルダを指定します。 事前に決めておいた《公開用帳票保存フォルダ》を指定します。
pdf_define_dir	PDF テンプレートファイルを保存する場所です。 《Generalist インストールフォルダフォルダ》%tools%pdf_template を指定します。



<重要>

- 上記の設定以外はシステム固定の値です。変更しないでください。
- 《pdf_dir》は短いパス名を指定してください。
(c:%Webmeisai 等)
長いパスを指定すると帳票が出力されない場合があります。

「webmeisai.properties」修正後、下記手順に従い再デプロイを行ってください。

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

1. Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
2. Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザー名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザー名とパスワードを入力し、『ログイン』ボタンをクリックします。
 <ユーザー名> : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザー名
 <パスワード> : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
3. 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『デプロイメント』をクリックし、デプロイメントのサマリー画面にアプリケーション名の一覧が表示されます。
4. 画面の左側のチェンジ・センター欄に『ロックして編集』ボタンが表示されている場合、『ロックして編集』ボタンをクリックします。
5. 一覧から『geneserver』のチェックボックスをクリックし、『削除』ボタンをクリックします。
6. 削除が完了するとデプロイメントのサマリー画面へ戻り、上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。
7. 画面の左側のチェンジ・センター欄に『変更のアクティブ化』ボタンが表示されている場合、『変更のアクティブ化』ボタンをクリックして変更を確定します。上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。
8. キャッシュ保存フォルダを削除してください。キャッシュ保存フォルダ以下に存在するすべてのフォルダおよびファイルを削除してください。キャッシュ保存フォルダが存在しない場合は、本手順は不要です。キャッシュ保存フォルダは下記2つとなります。
 - <ORACLE_HOME>%user_projects%domains%base_domain%servers%<サーバ名>%tmp%_WL_user%<アプリケーション名>%<ランダム of 文字列>%jsp_servlet 直下のフォルダおよびファイル
 - <ORACLE_HOME>%user_projects%domains%base_domain%servers%<サーバ名>%tmp%_WL_user%<アプリケーション名>%<ランダム of 文字列>%war%WEB-INF%lib 直下のフォルダおよびファイル
9. 画面の左側のチェンジ・センター欄に『ロックして編集』ボタンが表示されている場合、『ロックして編集』ボタンをクリックします。
10. デプロイメントのサマリー画面の『インストール』ボタンをクリックします。
11. デプロイメントの選択画面の一覧から『Generalist』を選択し、『次』ボタンをクリックします。
12. 『このデプロイメントをアプリケーションとしてインストールする』が選択されていることを確認し、『次』ボタンをクリックします。
13. 『geneserver』を選択し、『次』ボタンをクリックします。
14. 『デプロイメントを次の場所からアクセス可能にする』を選択します。内容を確認し、『次』をクリックします。
15. 『追加構成』で『いいえ、後で構成を確認します。』を選択し、『終了』をクリックします。
16. インストールが完了するとデプロイメントのサマリー画面へ戻り、上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。

17. 画面の左側のチェンジ・センター欄に『変更のアクティブ化』ボタンが表示されている場合、『変更のアクティブ化』ボタンをクリックして変更を確認します。上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。
18. ドメイン構造から『環境』>『サーバー』をクリックします。
19. サーバーのサマリー画面が開き、アプリケーションサーバの一覧が表示されます。『制御』タブをクリックします。
20. 一覧から『geneserver』のチェックボックスをクリックし、『起動』ボタンをクリックします。状態に『RUNNING』が表示されればサーバーの起動は完了です。
21. ドメイン構造から『デプロイメント』をクリックし、デプロイメントのサマリー画面にアプリケーション名の一覧が表示されます。『Generalist』にチェックを入れ、『起動』ボタンをクリックし、『すべてのリクエストを処理』を選択してください。状態が『アクティブ』になりましたら、再デプロイメントは完了です。
22. Web ブラウザを終了します。

■	WebCube Application Server の場合
---	--------------------------------

「webmeisai.properties」修正後、下記手順に従い再デプロイを行ってください。

1. Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
2. WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
 <ユーザ名> :WebCube Management Server の管理者のユーザ名
 <パスワード> :WebCube Management Server の管理者のパスワード
3. 管理コンソールが起動されます。運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
4. J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
5. J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。停止するアプリケーションの『停止』をクリックします。
6. 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、停止までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたらタブの『削除』をクリックしてください。
7. 削除画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。削除するアプリケーションの『削除』をクリックします。
8. 運用管理ポータル画面から『論理サーバの起動/停止』をクリックします。
9. サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
 ※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
10. 『一括停止』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
11. 停止完了後、『一括起動』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
12. 運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
13. J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
14. タブの『ディレクトリインポート』をクリックします。アプリケーションディレクトリにデプロイするモジ

ユーザのディレクトリパスを入力し、『実行』ボタンをクリックします。実行結果が『成功』になったら、タブの『開始/停止』をクリックします。

15. J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。開始するアプリケーションの『開始』をクリックします。
16. 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、開始までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたら『戻る』をクリックしてください。
17. Web ブラウザを終了します。

外字出力を使用する場合の設定

外字を出力する場合、各帳票定義 xml の修正が必要です。

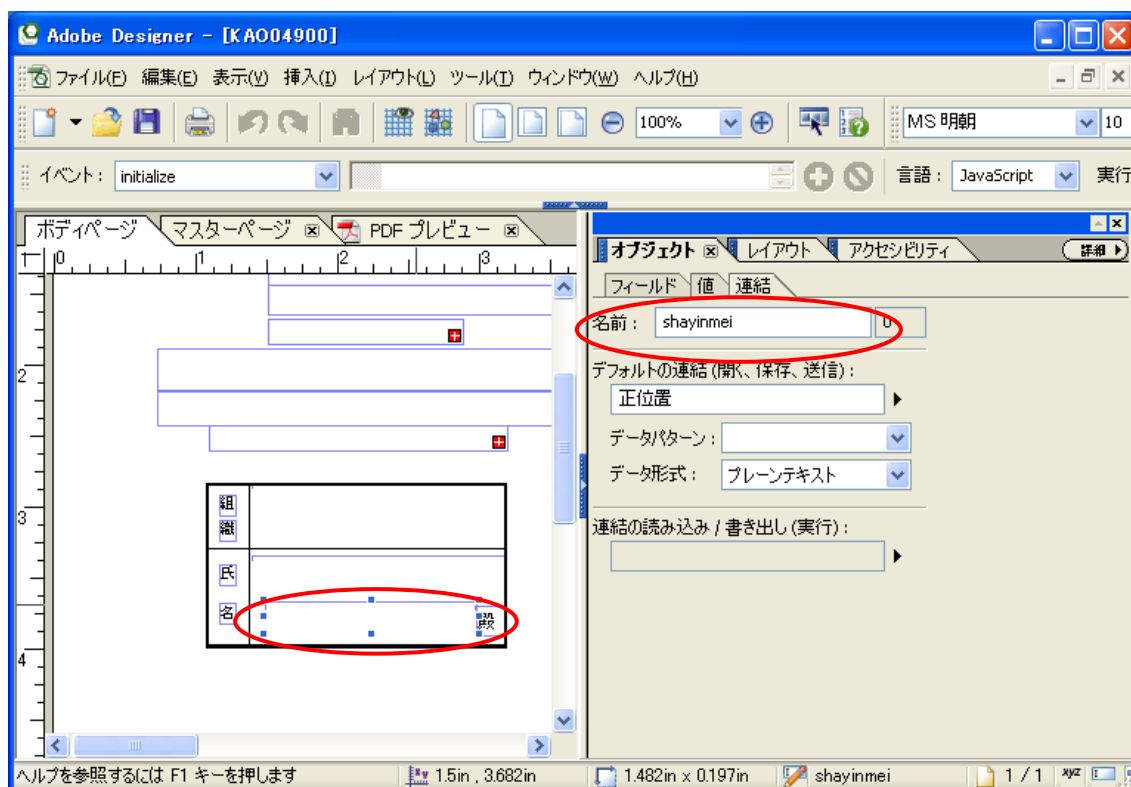
外字で出力したい項目フィールド(Field)の「GaijiFlag」を 1 に設定し、「GaijiFontFile」を指定します。

以下では、支給明細書の社員名称を外字で出力する場合の設定を例に記載します。

PDF テンプレートファイルを Adobe Acrobat Pro で開き、外字で出力したい項目のフィールド名を調べます。

支給明細書の場合、テンプレートファイルは以下です。

《Generalist インストールフォルダ》¥tools¥pdf_template¥KAO04900.pdf



外字で出力したい項目を選択すると、「オブジェクト」-「名前」にフィールドの名称が表示されます。

帳票定義 XML をテキストエディタで開き、上記フィールド名の項目を修正します。

支給明細書の場合、帳票定義 XML ファイルは以下です。

《Generalist インストールフォルダ》¥tools¥pdf_template¥KAO04900.xml

588 行目:

<Field>

<FieldNo>29</FieldNo>

<FieldName>shayinmei</FieldName>

<FieldName>が「shayinmei」となっている項目を修正

```

    <SQLFieldName>社員名</SQLFieldName>
    <KeyFlag1></KeyFlag1>
    <KeyFlag2></KeyFlag2>
    <GaijiFlag>1</GaijiFlag>
    <GaijiFontFile>EUDC.ttf</GaijiFontFile>
</Field>

```

<GaijiFlag>を 1 に修正
 <GaijiFontFile>に外字が登録されているフォントファイルを指定

メールサーバの設定(staveware-mail-config.xml の設定)

給与・賞与明細書メール送信(機能)および源泉徴収票メール送信(機能)を利用するにはメールサーバの設定が必要です。

環境に合わせて staveware-mail-config.xml ファイルを編集してください。

変更ファイル:<Generalist インストールフォルダ>\WEB-INF\classes\staveware-mail-config.xml

変更対象:<smtp-info>タグ中の設定値

タグ	設定内容
<authentication trigger>	SMTP サーバ認証が必要な場合には”true”を設定します
<username>	SMTP サーバ認証に必要なユーザ名を設定します。
<password>	SMTP サーバ認証に必要なパスワードを設定します。
<server-url>	SMTP サーバ名称を設定します。
<nickname>	メール送信の際の送信者名を設定します。※日本語は設定できません。
<from>	メールの送信元メールアドレスを設定します。

下線部の箇所を変更してください。

```

    <smtp-info>
      <sender-engine>JavaMail</sender-engine>
      <account>
        <authentication trigger="true">
          <username><ユーザ名></username>
          <password><パスワード></password>
        </authentication>
        <server-url><smtp サーバ名称></server-url>
        <nickname><送信者名></nickname>
        <from><送信元メールアドレス></from>
      </account>
    </smtp-info>

```

設定例:

```

    <smtp-info>
      <sender-engine>JavaMail</sender-engine>
      <account>
        <authentication trigger="true">

```

```
        <username>username</username>
        <password>password</password>
    </authentication>
    <server-url>smtp.server.com</server-url>
    <nickname>nickname</nickname>
    <from>username@smtp.server.com</from>
</account>
</smtp-info>
```



<制限事項>

- メール送信時のポートは 25 固定となります。変更することはできません。

付録 D 非同期処理実行サービスの設定

Generalist の非同期処理実行サービスの設定は以下の手順で実施します。

(以下の説明で△はスペースを表します。)

1. 基本設定

実行する環境にて以下の環境変数を指定します。

変数名	設定する内容
GENE_INSTALL_PATH	Generalist がインストールされる場所を示すパスです。
GENE_EXT_LIB_PATH	サービス起動用の追加ライブラリの場所を示すパスです。「4.5.15 アプリケーションサーバへのインストール」の「(7) 『拡張パラメタ』の設定を行います。」にてデータベースサーバよりコピーした JDBC ライブラリが存在するパスを入力します。
JDK_INSTALL_PATH	JDK1.8 がインストールされる場所を示すパスです。
WLS_INSTALL_PATH	Oracle WebLogic Server 12cR2 または Oracle WebLogic Server 14c がインストールされる場所を示すパスです。
WEBCUBE_INSTALL_PATH	WebCube Application Server V11.1、V11.2 または V11.4 がインストールされる場所を示すパスです。

2. バッチ起動による実行

「<インストールメディア>¥Utility¥C.19 起動スクリプト¥非同期処理バッチ起動」フォルダにサンプルファイルが格納されています。

【Windows の場合】

非同期処理実行サービスをバックグラウンドで起動するようにバッチファイルを作成します。作成したバッチファイルを実行すると非同期処理実行サービスが起動します。

- Oracle WebLogic Server 12cR2 の場合「runbatch_weblogic_12cR2.bat」を実行してください。
- Oracle WebLogic Server 14c の場合「runbatch_weblogic_14c.bat」を実行してください。
- WebCube Application Server V11.1、V11.2 または V11.4 の場合「runbatch_webcube11.bat」を実行してください。



<重要>

- java.exe が JRE1.3.1 以降の場合、Java の実行環境の仕様により、OS 上で Windows のログオフ操作を行うとタスクが内部で終了してしまい、以降の非同期処理が行われなくなります。上記問題点を回避するためにバッチファイルを編集し-classpath の前に-Xrs を追加してください。

3. コマンドラインからの即時実行

「2 バッチ起動による実行」の手順について、1つ目の引数に一括実行IDを指定することで、コマンドラインから即時実行することができます。一括実行IDは「一括実行マスタ設定」機能で確認してください。

2つ目以降の引数には起動変数を指定することができます。なおサンプルファイルでは2つ目から5つ目まで4つの起動変数が指定できます。サンプルファイルを編集していただくことで、6つ目以降の起動変数を指定することもできます。

実行例)

【Windows の場合】

- Oracle WebLogic Server 12cR2 の場合
CMD>runbatch_weblogic_12cR2.bat IKKATSU001 20080401
- Oracle WebLogic Server 14c の場合
CMD>runbatch_weblogic_14c.bat IKKATSU001 20080401
- WebCube Application Server V11.1、V11.2 または V11.4 の場合
CMD> runbatch_webcube11.bat IKKATSU001 20080401

付録 E マルチ AP サーバ環境の設定

負荷分散や多重化のためにアプリケーションサーバを複数台構築する際には通常のインストール手順によるアプリケーションサーバの構築後に追加で設定を行う必要があります。

ここでは、複数のアプリケーションサーバを利用するために必要な設定について記載しています。

<OracleWebLogic 環境>

ここに示す手順は、以下のような環境を想定しています。

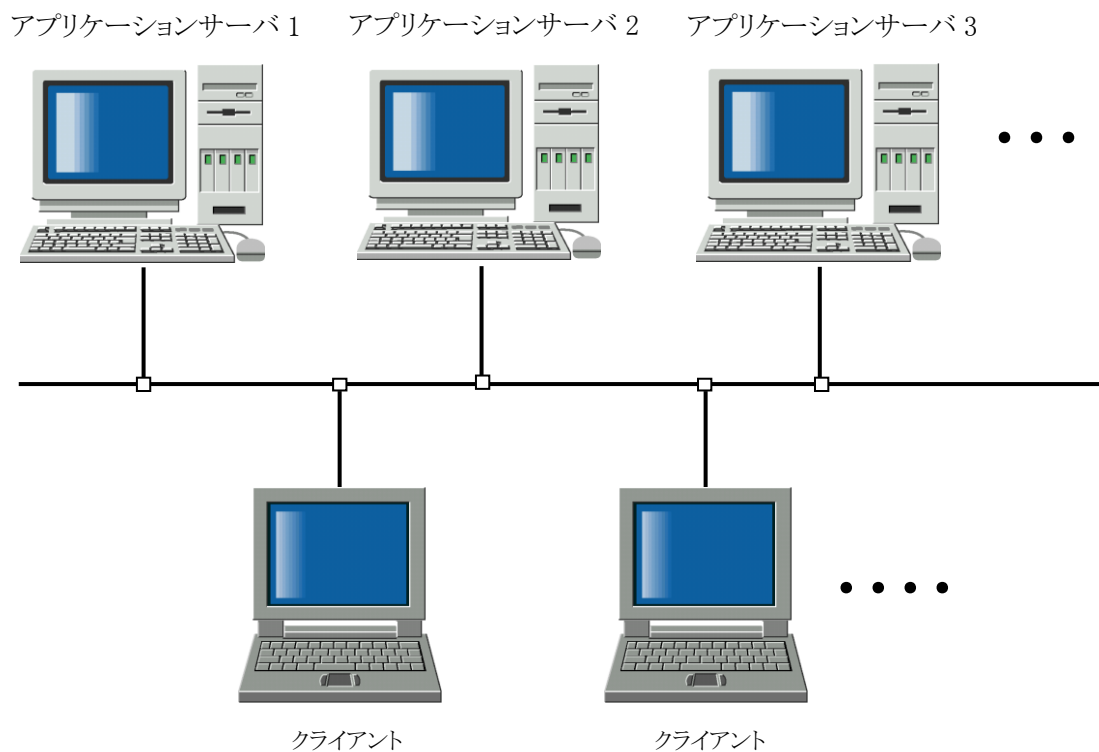
インストール先などを変更した場合は適宜読み替えてください。

- Oracle 製品のインストール先(WebLogic) C:¥Oracle¥wls12c
- アプリケーションサーバ 1 のホスト名 geneiasA
- アプリケーションサーバ 2 のホスト名 geneiasB
- アプリケーションサーバ 3 のホスト名 geneiasC
- Generalist インストールフォルダ <WebLogic のインストール先(WebLogic)>¥webapps¥Generalist¥Generalist.war

本インストール手順書に従った場合

C:¥Oracle¥wls12c¥webapps¥Generalist¥Generalist.war

となります。



1. 共有フォルダの設定

各アプリケーションサーバの以下の①～⑤のフォルダを共有フォルダに設定します。

- ① 画面自由編集の画面定義情報(2箇所)
- ② 添付ファイル保存フォルダ(イベント機能で利用) (※1)
- ③ 一時ファイル保存フォルダ(非同期処理利用する一時フォルダのパス) (※2)
- ④ 帳票 WEB 配信機能で利用するフォルダ (※3)
- ⑤ <Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF

表1 : 共有フォルダの設定例

AP サーバ		フォルダ	共有名
アプリケーション サーバ 1 (geneiasA)		<Generalist インストールフォルダ>¥jsp¥viewedit¥input	asA_jsp_input
	①	<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥properties¥viewedit¥input	asA_xml_input
	②	C:¥Generalist	asA_Generalist
	③		
	④	C:¥webprint	asA_webprint
	⑤	<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF	asA_WEB-INF
アプリケーション サーバ 2 (geneiasB)		<Generalist インストールフォルダ>¥jsp¥viewedit¥input	asB_jsp_input
	①	<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥properties¥viewedit¥input	asB_xml_input
アプリケーション サーバ 3 (geneiasC)		<Generalist インストールフォルダ>¥jsp¥viewedit¥input	asC_jsp_input
	①	<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥properties¥viewedit¥input	asC_xml_input
⋮	⋮	⋮	⋮

(※1) 設定内容の詳細は イベント機能 (インストールマニュアル 3.4.5 メニューパラメータの設定) を参照してください。

(※2) 設定内容の詳細は 非同期処理 (インストールマニュアル 3.4.7 非同期処理の設定) を参照してください。

(※3) 帳票WEB配信機能を利用している場合は設定が必要です。設定内容の詳細は 付録C 帳票 Web 配信の設定について を参照してください。



<重要>

- すべての共有フォルダに、アプリケーションサーバのサービス(OracleWebLogicProcessManager)を起動しているユーザに対して、書き込み権限が設定されている必要があります。

2. アプリケーションサーバの停止

現在 Generalist を運用中の場合は、すべてのアプリケーションサーバのサービスを停止してください。

3. reportedit.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%reportedit.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

ただし、全てのサーバで同じ設定にする必要があります。

1	System_root= <u>//geneiasA/WEB-INF/webdav/store/content/reports</u>
2	definition_root=/reportdef/
3	result_root=/result/
4	access_import=1
5	temporary_root=/temp/
6	history_root=/history/
7	base_url=http://geneiasA
8	reportApplet_url=/Generalist/applet
9	excel_export_pdf=false
10	multi_server_list=

- geneiasA はアプリケーションサーバ 1 のホスト名を設定してください。
- WEB-INF は「1 共有フォルダの設定」で設定したアプリケーションサーバ 1(geneiasA)の WEB-INF(⑤)の共有名を設定してください。

4. batchexecute.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>%WEB-INF%classes%properties%batchexecute.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

ただし、全てのサーバで同じ設定にする必要があります。

1	# Bach Execute Container Property
2	
3	# Temporary Files Folder
4	FILE_TMP_DIR= <u>//geneiasA/Generalist/batch_exe/file_upload/</u>
5	
6	# Output Files Folder
7	FILE_OUT_DIR=
8	

9	# Run History Save Days
10	HISTORY_SAVE_DAYS= <u>365</u>
11	
12	# Max Thread Count
13	MAX_THREAD_COUNT= <u>5</u>
14	
15	# Ikkatu Max Thread Count
16	IKKATU_MAX_THREAD_COUNT=5
17	
18	# Wait Time(secound)
19	WAIT_TIME=10
20	
21	# faces-config.xml FILES
22	FACES_CONFIG_FILES=faces-config-common.xml,faces-config-hr.xml,faces-config-menu.xml,faces-config-pr.xml,faces-config-reportedit.xml,faces-config-tool.xml,faces-config-viewedit.xml
23	
24	# Java VM options
25	JVM_OPTION=-Xmx512m -Djavax.xml.parsers.DocumentBuilderFactory=com.sun.org.apache.xerces.internal.jaxp.DocumentBuilderFactoryImpl
26	
27	# CLASS_PATH options
28	CLASS_PATH=
29	
30	# LOVS CONFIG FILES
31	LOVS_CONFIG_FILES=gene-config-lov.xml,gene-config-lov-addon.xml
32	
33	# UPLOAD TMP THRESHOLD
34	UPLOAD_TMP_THRESHOLD= <u>100000000</u>

- geneiasA はアプリケーションサーバ 1 のホスト名を設定してください。
- Generalist は「1 共有フォルダの設定」で設定した、イベントで使用する添付ファイルのパス(②)の共有名を設定してください。



<重要>

- 『FILE_TMP_DIR』、『FILE_OUT_DIR』の設定の最後には、『/』(スラッシュ)が必要です。ファイルのパスには日本語は使用できません。英字のフォルダを指定してください。
- バッチはアプリケーションサーバのうち、1 台のみで起動してください。

5. menu.properties ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥properties¥menu.properties ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を環境に合わせて修正してください。

ただし、全てのサーバで同じ設定にする必要があります。

1	#V4,CS,MO,WF
2	menu_V4Host= <u>http://geneias</u> /geneservlets/Web_Single_Sign_On?con=generalist
3	menu_CSHost= <u>http://GeneralistCS</u> /pages/common/Menu.do?SSO=true
4	menu_MOHost= <u>http://GeneralistMO</u> /pages/common/Menu.do?SSO=true
5	menu_WFHost= <u>http://GeneralistWF</u> /action_login.do?SSO=true
6	
7	#HelpFile
8	menu_HelpPathDefault= <u>http://GeneAS</u> /Generalist/help/manualfiles/
9	menu_HelpKakuchoshi=.html
10	
11	# FileUpload,Download
12	FILEPATH= <u>//geneiasA/Generalist/attachment/</u>
13	
14	# Logout(only SingleSignOn) 1:CloseWindow 0:MoveLogin
15	SsoLogoutCloseFlg= <u>1</u>
16	
17	# SSO PassCheck(only SingleSignOn) 1:Check 0:NoCheck
18	SsoPassCheck= <u>1</u>
19	
20	# PasswordUpdateFlg 1:PassUpdate 0:NoPassUpdate
21	passwordUpdateFlg= <u>1</u>
22	
23	# Error message(default:3)
24	defauslt_dispMsgCnt=3
25	
26	# V6 Host
27	menu_V6Host= <u>http://GeneralistV6</u> (以降、省略)

- geneiasA はアプリケーションサーバ 1 のホスト名を設定してください。
- Generalist は「1 共有フォルダの設定」で設定した、非同期処理で利用する一時フォルダのパス(③)の共有名を設定してください。



<重要>

- 『FILEPATH』の設定の最後には、『/』(スラッシュ)が必要です。ファイルのパスには日本語は使用できません。英字のフォルダを指定してください。

6. VEMultiserverList.xml ファイルの編集

<Generalist インストールフォルダ>¥WEB-INF¥classes¥properties¥viewedit¥VEMultiserverList.xml ファイルを開きます。

下記の設定の下線部分を変更します。(geneiasA での設定例)

<server name>から</server name>(※)をアプリケーションサーバの台数分、コピーして、それぞれのアプリケーションサーバに対する設定をしてください。

```

<?xml version ="1.0" encoding="Shift_JIS" ?>

<multiserver_list>
  <!--
  <server_name>
    <input_folder>¥¥¥¥geneiasB¥¥asB_xml_input</input_folder>
    <jsp_folder>¥¥¥¥geneiasB¥¥asB_jsp_input</jsp_folder>
  </server_name>
  -->
  <server_name>
    <input_folder>¥¥¥¥geneiasC¥¥asC_xml_input</input_folder>
    <jsp_folder>¥¥¥¥geneiasC¥¥asC_jsp_input</jsp_folder>
  </server_name>
</multiserver_list>

```

(※)
 アプリケーションサーバの台数分を
 コピーし、それぞれ設定します。

- <input_folder>には、「1 共有フォルダの設定」で設定した、他サーバの xml_input (①) の共有名を、以下のように設定してください。

¥¥¥¥<サーバのホスト名>¥¥<xml_input の共有名>

- <jsp_folder>には、「1 共有フォルダの設定」で設定した、他サーバの xml_input (①) の共有名を、以下のように設定してください。

¥¥¥¥<サーバのホスト名>¥¥<jsp_input の共有名>



<重要>

- <input_folder>、<jsp_folder>にフォルダを指定する場合に、「¥」は「¥¥」のように2つ設定するようにしてください。

例) 実際のフォルダのパス : ¥¥<サーバのホスト名>¥¥<xml_input の共有名>

設定する値 : ¥¥¥¥<サーバのホスト名>¥¥<xml_input の共有名>

7. webmeisai.properties ファイルの編集

帳票 WEB 配信機能を利用している場合のみ設定してください。

<Generalist インストールフォルダ>\WEB-INF\classes\properties\webmeisai.properties ファイルを開きます。

以下の各フォルダの設定を「1 共有フォルダの設定」で設定した共有名(④)に設定してください。

パラメータ名	内容
pdf_dir	PDF を出力するフォルダを指定します。 事前に決めておいた《公開用帳票保存フォルダ》を指定します。 例) pdf_dir=¥¥¥¥<サーバのホスト名>¥¥<共有名(④)>



<重要>

- 『pdf_dir』にフォルダを設定する場合に、「¥」は「¥¥」のように2つ設定するようにしてください。
例) 実際のフォルダのパス : ¥¥<サーバのホスト名>¥¥<共有名(④)>
設定する値 : ¥¥¥¥<サーバのホスト名>¥¥<共有名(④)>
- PDF ファイルをデータベースのテーブルに保存する場合、このフォルダパスをキーにして保存します。全てのアプリケーションサーバに対して、同じフォルダパスを設定してください。

8. Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用するための設定

全てのアプリケーションサーバに対して、「付録 H Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用するための設定」を実施してください。

9. 電子申請の設定

電子申請をご利用の場合は、全てのアプリケーションサーバに対して、下記を参照し、電子申請の設定を実施してください。

Oracle WebLogic Server をご利用の場合は、「3.4.14 電子申請の設定」を参照ください。

WebCube Application Server をご利用の場合は、「4.5.14 電子申請の設定」を参照ください。

10. アプリケーションサーバの起動

全てのアプリケーションサーバのサービスを起動してください。

付録 F 社員検索ダイアログの設定について

ここでは Generalist で社員検索ダイアログをご利用いただくために必要なデータベースサーバの設定手順を説明します。

●社員検索ダイアログの設定の種類

社員検索ダイアログの設定は、以下に示す4つがあります。

- セキュリティチェックなし(デフォルト)
全社員を表示します。社員を選択した際にセキュリティチェックを行います。
デフォルトではこの設定になっています。
- セキュリティチェックあり(性能改善版)
セキュリティチェックを行い社員検索ダイアログに社員を表示します。
検索条件に合う社員のうち、先頭から表示最大件数(初期値は500件)の社員に対し、セキュリティチェックを行います。そのため、条件によっては表示最大件数まで表示されません。
- セキュリティチェックあり
セキュリティチェックを行い社員検索ダイアログに社員を表示します。
検索条件に合う社員全員に対しセキュリティチェックを行い、表示最大件数になるまで処理します。そのため、表示件数は表示最大件数まで表示されますが、表示まで時間がかかります。
- セキュリティチェックあり(バッチ版)
事前にセキュリティチェックを行い、結果をデータベースに保存します。
社員検索ダイアログは保存された結果を表示します。

●社員検索ダイアログの設定の変更

以下の手順にしたがって社員検索ダイアログの設定を行ってください。

コマンドプロンプトより、以下のコマンドを実行しデータベース管理ユーザで SQL*Plus を起動してください。

```
C:\%temp >SQLPLUS GRSYS/GRSYS@PDBGENE
```

SQL*Plus の画面より、以下のコマンドを入力してください。

```
• 社員検索ダイアログの設定データがあるか確認します。  
SQL>SELECT 数値1  
SQL> FROM システムパラメータ  
SQL> WHERE 法人コード = '設定する法人の法人コード'  
SQL> AND パラメータコード = 'shain_lov_mode';
```

- 設定データがある場合
SQL>UPDATE システムパラメータ SET 数値1 = <設定する値>
SQL> WHERE 法人コード = '<設定する法人の法人コード>'
SQL> AND パラメータコード = 'shain_lov_mode';
- 設定データがない場合
SQL>INSERT INTO システムパラメータ(法人コード,
SQL> パラメータコード,
SQL> 数値1)
SQL> VALUES('<設定する法人の法人コード>','
SQL> 'shain_lov_mode',
SQL> <設定する値>);

<変更する値>に設定する値は以下の通りです。

- 1: セキュリティチェックなし
- 2: セキュリティチェックあり(性能改善版)
- 3: セキュリティチェックあり(バッチ版)
- 3: セキュリティチェックあり

●セキュリティチェックあり(バッチ版)の設定

セキュリティチェックあり(バッチ版)を使用する場合は以下の手順にしたがってバッチファイルの設定を行ってください。

「<インストールメディア>\Utility\C.19 起動スクリプト\社員検索ダイアログ」フォルダにある「makeshaindlg.sql」を「C:\temp」フォルダにコピーします。

ファイル中のパラメータを以下の通り変更してください。人事用と給与用で2箇所を変更してください。

- 1つ目のパラメータ: 起動年月日 (システム日付など)
- 2つ目のパラメータ: 起動番号 (1 など適当な値でかまいません)
- 3つ目のパラメータ: ロールID (省略可能)
- 4つ目のパラメータ: 法人コード (省略可能)
- 5つ目のパラメータ: 実行ID (更新者に設定される値です)

上記変更を行った「makeshaindlg.sql」をタスクスケジューラ等に設定し、SQL*Plus からデータベース管理ユーザで実行されるように設定をしてください。

付録 G OracleDatabase12c について

OracleDatabase12c において新たにサポートされたマルチテナント・アーキテクチャについてご説明します。

マルチテナント・コンテナ・データベース

OracleDatabase12c ではデータベースとして新たに「マルチテナント・コンテナ・データベース」という新しいデータベース構成がサポートされました。

それに伴い新たに 2 つのデータベース領域と 2 つのユーザータイプが設定されました。

詳細については Oracle Database 概要 12c リリース 2 (12.2)を参照してください。

【関連 HP】(2018 年 2 月 23 日時点)

https://docs.oracle.com/cd/E82638_01/CNCPT/overview-of-the-multitenant-architecture.htm

◆データベース領域について

データベース領域	特徴
CDB(マルチテナント・コンテナ・データベース)	CDB 領域と PDB 領域の両方にアクセス可能 この領域に存在するユーザは SYS、SYSTEM 権限を持ちます。
PDB(プラグブル・データベース)	PDB 領域のみアクセス可能 PDB 領域が複数存在する場合、各 PDB 間はアクセスできません。

◆ユーザータイプについて

ユーザの種類	DB 領域	特徴
ローカルユーザ(推奨)	PDB	ユーザが存在する PDB のみアクセス権を持ちます。Generalist の推奨ユーザータイプです。
共通ユーザ	CDB	SYS、SYSTEM 権限を持つユーザです。 ユーザが独自に作成する場合、ユーザ名に接頭辞(C##,c##)が必要です。



<重要>

- Generalist ではセキュリティの観点からローカルユーザの作成を推奨しています。

付録 H Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用するための設定

ここでは Google Chrome/Microsoft Edge で外字を使用するために必要なアプリケーションサーバの設定手順を説明します。

●概要

Google Chrome/Microsoft Edge で外字を入力するには、Web フォントを使用します。Generalist/HR/PR に Web フォントを設定することで、Google Chrome/Microsoft Edge で外字の入力・表示ができるようになります。

●設定方法

1. Web フォントの作成

利用したい外字の woff(Web Open Font Format)形式のフォントを作成してください。
ファイル名は必ず「EUDC.woff」としてください。

2. Web フォントの設定

作成した woff 形式のフォントファイルを以下のフォルダにコピーしてください。
コピー先:<Generalist のインストールフォルダ>%fonts

3. 外字が使用できることを確認

Generalist/HR/PR にログインし、外字が入力・表示できることを確認してください。

4. 外字が使用できなかった場合

Web フォントを設定しても外字が使えない場合は、まず、ブラウザのキャッシュ削除とブラウザの再起動をしてください。キャッシュは以下の手順で削除してください。

キャッシュの削除

以下の手順に従ってブラウザのキャッシュを削除してください。

Google Chrome の場合

Google Chrome の設定ボタン - 「その他のツール」 - 「閲覧履歴を消去」を選択します。
「基本設定」 - 「期間」 - 「全期間」を選択し、「基本設定」 - 「キャッシュされた画像とファイル」をチェックします。「データを削除」ボタンを押します。



<注意>

- 「Cookie と他のサイトデータ」がチェックされている場合はチェックを外してください。チェックした状態で「データを削除」ボタンを押した場合、クライアント ID の情報も削除されてしまい次回ログイン時にクライアント ID の発番が必要になります。

Microsoft Edge の場合

Microsoft Edge の「設定など」(…アイコン) - 「設定」 - 「プライバシー、検索、サービス」を選択します。

閲覧データをクリアの「クリアするデータの選択」ボタンを押します。

時間の範囲を「すべての期間」に変更し、「今すぐクリア」ボタンを押します。



<注意>

・「Cookie およびその他サイトデータ」がチェックされている場合はチェックを外してください。
チェックした状態で「今すぐクリア」ボタンを押した場合、クライアント ID の情報も削除されてしまい次回ログイン時にクライアント ID の発番が必要になります。
ブラウザのキャッシュ削除と再起動をしても外字が使用できない場合、アプリケーションサーバの再起動をしてください。

【Generalist の終了】

起動している Generalist をすべて終了させてください。

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
<ユーザ名> : Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
<パスワード> : Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ④ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『Generalist』のチェックボックスをクリックし、『停止』ボタンをクリックします。
- ⑤ 状態に『SHUTDOWN』が表示されればサーバーの停止は完了です。
- ⑥ Web ブラウザを終了します。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
<ユーザ名> : WebCube Management Server の管理者のユーザ名
<パスワード> : WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。

- ④ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑤ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。停止するアプリケーションの『停止』をクリックします。
- ⑥ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、停止までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたらタブの『削除』をクリックしてください。
- ⑦ 削除画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。削除するアプリケーションの『削除』をクリックします。
- ⑧ 運用管理ポータル画面から『論理サーバの起動/停止』をクリックします。
- ⑨ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑩ 『一括停止』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

【Generalist の起動】

Oracle WebLogic Server の場合

Oracle WebLogic Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:7001/console」と入力します。
- ② Oracle WebLogic Server 管理コンソールのユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
 <ユーザ名>:Oracle WebLogic Server の管理者のユーザ名
 <パスワード>:Oracle WebLogic Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。ドメイン構造から『デプロイメント』をクリックし、デプロイメントのサマリー画面にデプロイメントの一覧が表示されます。
- ④ 画面の左側のチェンジ・センター欄に『ロックして編集』ボタンが表示されている場合、『ロックして編集』ボタンをクリックします。
- ⑤ 一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『削除』ボタンをクリックします。
- ⑥ 削除が完了すると『デプロイメントのサマリー』画面へ戻り、上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。
- ⑦ 画面の左側のチェンジ・センター欄に『変更のアクティブ化』ボタンが表示されている場合、『変更のアクティブ化』ボタンをクリックして変更を確定します。上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。
- ⑧ 画面の左側のチェンジ・センター欄に『ロックして編集』ボタンが表示されている場合、『ロックして編集』ボタンをクリックします。
- ⑨ デプロイメントのサマリー画面の『インストール』ボタンをクリックします。
- ⑩ デプロイメントの選択画面の一覧から『**Generalist**』を選択し、『次』ボタンをクリックします。
- ⑪ 『このデプロイメントをアプリケーションとしてインストールする』が選択されていることを確認し、『次』ボタンをクリックします。
- ⑫ 『**Generalist**』を選択し、『次』ボタンをクリックします。
- ⑬ 『デプロイメントを次の場所からアクセス可能にする』を選択します。内容を確認し、『次』をクリックします。

- ⑭ 『追加構成』で『いいえ、後で構成を確認します。』を選択し、『終了』をクリックします。
- ⑮ インストールが完了すると『デプロイメントのサマリー』画面へ戻り、上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください
- ⑯ 画面の左側のチェンジ・センター欄に『変更のアクティブ化』ボタンが表示されている場合、『変更のアクティブ化』ボタンをクリックして変更を確認します。上部にメッセージが表示されます。エラーが発生していないことを確認してください。
- ⑰ ドメイン構造から『サーバー』をクリックし、サーバーのサマリー画面で『制御』タブをクリックします。
- ⑱ アプリケーションサーバの一覧が表示されます。一覧から『**Generalist**』のチェックボックスをクリックし、『起動』ボタンをクリックします。状態に『RUNNING』が表示されればサーバーの起動は完了です。
- ⑲ ドメイン構造から『デプロイメント』をクリックし、デプロイメントのサマリー画面にデプロイメントの一覧が表示されます。作成したデプロイメントにチェックを入れ、『起動』ボタンをクリックし、『すべてのリクエストを処理』を選択してください。状態が『アクティブ』になりましたら、再デプロイメントは完了です。
- ⑳ Web ブラウザを終了します。



<注意>

- 『ロックして編集』ボタン、『変更のアクティブ化』ボタンはサーバの設定によって表示されないことがあります。表示されない場合は、ボタンをクリックする必要はありません。
- Oracle の設定によりバージョンアップ/レビジョンアップの過程で削除されたテーブルが「ごみ箱(recycle bin)」に退避した状態となることがあります。ごみ箱の内容をすべて消去する、または、ある表領域内のごみ箱に入っているオブジェクトを消去することも可能です。詳しくは Oracle マニュアル『Oracle Database SQL Reference』の PURGE 文の項目をご参照ください。

WebCube Application Server の場合

WebCube Application Server 管理コンソールの起動

- ① Web ブラウザを起動し、アドレスに「http://<アプリケーションサーバ名>:28080/mngsvr/」と入力します。
- ② WebCube Management Server のユーザ名とパスワード入力画面が表示されます。ユーザ名とパスワードを入力し、『OK』ボタンをクリックします。
 <ユーザ名> :WebCube Management Server の管理者のユーザ名
 <パスワード> :WebCube Management Server の管理者のパスワード
- ③ 管理コンソールが起動されます。『論理サーバーの起動/停止』をクリックします。
- ④ サーバビューから『<運用管理ドメイン名※>』をクリックします。
 ※運用管理ドメインのデフォルト名は DefaultDomain です。
- ⑤ 『一括起動』をクリックし、『実行』ボタンをクリックします。
- ⑥ 運用管理ポータル画面から『論理サーバのアプリケーション管理』を選択します。
- ⑦ J2EE サーバ『アプリケーション』を選択します。
- ⑧ タブの『ディレクトリインポート』をクリックします。アプリケーションディレクトリにデプロイする

モジュールのディレクトリパスを入力し、『実行』ボタンをクリックします。実行結果が『成功』になったら、タブの『開始/停止』をクリックします。

- ⑨ J2EE アプリケーションの開始/停止画面にインポート J2EE アプリケーション一覧が表示されます。開始するアプリケーションの『開始』をクリックします。
- ⑩ 確認画面で『はい』ボタンをクリックします。なお、開始までに時間がかかる場合があります。実行結果が『成功』が表示されたら『戻る』をクリックしてください。
- ⑪ Web ブラウザを終了します。

トラブルシューティング

ここでは Generalist のインストールにおけるよくある問題とその解決方法について記載します。ご参考にしてください。

現象	想定される原因／解決法
アプリケーションサーバが起動しない	<ul style="list-style-type: none"> 各種設定ファイルが正しく設定されていない。 log4j.xml 等の文字コードが正しく無い。
Generalist が起動しない	<ul style="list-style-type: none"> サービスが起動していない。
接続先に正しく接続できない	<ul style="list-style-type: none"> datasource.properties が正しく設定されていない。
帳票を出力できない	<ul style="list-style-type: none"> reportedit.properties が正しく設定されていない。
対象人数が少ない場合には帳票出力できるが、多くするとエラーが発生する。	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバの Timeout の設定が正しく行われているか確認してください。 (Excel 帳票の場合)
画面自由編集機能で作成された画面が起動しない。	<ul style="list-style-type: none"> common-location-gene-install-folder が正しく設定されていない。
IMPORT で作成した環境にログインできない。	<ul style="list-style-type: none"> create_context.sql を実行してください。
OutOfMemoryError が発生する。	<ul style="list-style-type: none"> 起動オプション「-Xmx」で指定するメモリの使用量を増やしてください。 起動オプション「-XX:MaxMetaspaceSize」で指定するメモリの使用量を増やしてください。
JS エラーが発生する。	<ul style="list-style-type: none"> JSP のキャッシュファイル Oracle WebLogic Server の場合 <code><WebLogic インストール先>\user_projects\domains\base_domain\servers\<サーバ名>\tmp*_WL_user\<アプリケーション名>\<ランダム
の文字列>\jsp_servlet\</code>以下のファイルを削除してください。 WebCube Application Server の場合 <code><WebCube インストールフォルダ>\CC\server\repository\<論理 J2EE サーバ名>\web\<アプリケーション名>\jsp\</code>以下のファイルを削除してください。
社員検索で表示されない。	<ul style="list-style-type: none"> システムパラメータの「shain_lov_mode」を確認してください。 shain_lov_mode が 3 の場合に、データ作成バッチを実行しているか確認してください。

現象	想定される原因／解決法
Internal server error が発生する。	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバの Timeout の設定が正しく行われているか確認してください。
機能画面で[リスト]ボタン押下後、IME の切替ができない。	<ul style="list-style-type: none"> 「第 6 章 クライアントのセットアップ」の<ポイント>の通り、詳細なテキストサービスをオフにしてください。

Generalist® インストール手順書

平成 30 年 4 月 1 日

初版発行

令和 7 年 9 月 1 日

第 16 版発行

発 行

東芝デジタルソリューションズ株式会社

〒212-8585

川崎市幸区堀川町72番地34

(C) 2025 Toshiba Digital Solutions Corporation.

無断複製及び転載を禁ず